

平成25年度 地(知)の拠点整備事業

成果報告書

(地域連携活動報告書)

地域と大学の共育・共創・共生に向けた 縁結びプラットフォーム ENMUSUBI PLATFORM



はじめに

島根県立大学は、大学憲章で、「地域のニーズに応え、地域と協働し、地域に信頼される大学」を目指すことを明らかにしています。文部科学省補助事業「地（知）の拠点整備事業」に、「地域と大学の共育・共創・共生に向けた縁結びプラットフォーム」を主題として応募し、採択されたのも、「全組織をあげて地域を志向し、地域の再生・活性化に貢献する大学を支援する」という事業の趣旨が本学の理念に合致しているからです。事業初年度である平成25年度は実質6ヶ月という短い事業期間になりましたが、この間、昨年10月には、キックオフ・ミーティングを開催し本事業の開始を宣言すると共に、地域主体と大学とで構成し事業実施の中心となる「縁結びプラットフォーム運営委員会」を設立して、事業の推進体制を整えました。また、平成25年度事業として取り組んだ研究活動の成果を報告する「全域フォーラム」を開催し、有識者や関係者と意見交換を行いました。さらに、第三者の視点から事業を評価して頂く「事業評価委員会」を設置し、事業評価の準備を進めました。

ところで、本学の地域志向は、教育面では新入生全員が地域に赴き、地域から学ぶ姿勢を養い、各演習でも地域活性化をテーマとした種々の取組を続けています。研究面では自治体や企業との共同研究等により地域課題解決に向けた提言を行っており、各キャンパスの専門性を活かした地域貢献を積み重ねてきています。学生活動では「キャンパス・マイレージ事業」を実施し、学生ボランティアを支援するとともに、地域住民の方々を会員とした「キャンパスサポーター制度」を導入し、大学全体として地域貢献活動を推進しています。

島根県では、人口減少、少子高齢化、過疎化等が深刻化しており、その解決には行政区域を越えた継続的な対応と担い手となる人材の育成・確保が必要です。本学での人材育成の取組としては、松江キャンパスでは、現場専門職者と大学教員が過疎地域の課題解決に向けて研鑽し合う専門職者向け履修証明プログラム「地域共生専門コース」を開設することとし、平成25年度はその活動を担う「しまね地域共生センター」の設立準備を進めました。また、出雲キャンパスでは、これまで多くの看護職者を地域へ輩出するとともに、今後さらに地域とともに歩む看護専門職を育成する拠点として、「しまね看護交流センター」を設立しました。浜田キャンパスでは総合政策学の学びと実践のもと、「地域連携推進センター」が中心となり、地域事情に精通し、地域を繋ぎコーディネートしながら課題解決に取り組む実践力のある専門人材を育成しています。この取組をより組織的に実施し、その実践力を保証する制度として「地域マイスター」の認証制度を新設することとしています。

地域と連携した各キャンパスにおけるこれらの取組をさらに発展させ、地域と大学が連携した「縁むすびプラットフォーム」を基盤として地域課題を解決し、我々が目指している「持続可能な共生社会」を実現したいと考えています。地域の関係者の皆様のご支援、ご協力を心よりお願い申し上げます。

公立大学法人島根県立大学

理事長・学長 本田 雄一

目次

はじめに	1
I. 縁結びプラットフォーム事業	
1. 事業概要	5
島根県立大学・島根県立大学短期大学部共通	
2. 事業背景	6
①島根県立大学	
1) 「地域」の課題	
2) 複雑な課題へ対応するために	
②島根県立大学短期大学部	
1) 「地域」の課題	
2) 複雑な課題へ対応するために	
3. 「縁結びプラットフォーム」とは	10
島根県立大学・島根県立大学短期大学部共通	
1) 地域課題を解決するための「縁結びプラットフォーム」	
2) 縁結びプラットフォームの構造	
4. 学びのプラットフォームとは	11
島根県立大学短期大学部	
1) 少子高齢化集落コミュニティの共生（支えあい）を支援する学びのプラットフォーム設立	
2) 履修証明プログラム「地域共生専門コース」講習群	
3) 大学の改革にどう繋げるか	
5. 事業の具体的取組	14
①島根県立大学	
1) 共育（教育）	
2) 共創（研究等）	
3) 共生（社会貢献）	
②島根県立大学短期大学部	
1) 共育（教育）	
2) 共創（研究等）	
3) 共生（社会貢献）	
6. 事業の実施と評価	19
①実施体制	
②評価体制	
II. トピックス	
1. 東日本大震災に伴う災害ボランティア活動2013記録	25
2. 島根県西部における大雨災害ボランティア活動2013記録	43
III. 3キャンパス合同事業	
1. 「地（知）の拠点整備事業」平成25年度全域プラットフォームの実施状況	47
1) 「地（知）の拠点整備事業」キックオフ・ミーティング	
2) 縁結びプラットフォーム運営委員会設立総会	
3) 第1回全域フォーラム	

- 4) 本学との連携に係るアンケート調査結果
- 5) しまね地域マイスター認定制度
- 6) しまね地域共育・共創研究助成の研究成果
- 2. 3キャンパス合同学生ボランティア研修会123
- 3. 3キャンパス合同学生ボランティア交流会124

IV. 各キャンパスの活動

- 1. 浜田キャンパス.....127
 - 1) 学生の地域貢献活動
 - (1) 学生ボランティア活動（震災ボランティア以外）
 - (2) ボランティア・ポイント抽選会
 - (3) 第5～8回 地連café OPEN！
 - (4) オロリタイムズNo. 9～10
 - 2) 地域に関する教育・研究活動
 - (1) 地域振興に関する提言を含む優秀卒業研究・論文発表会の取り組み
 - (2) 浜田市と島根県立大学の共同研究成果報告会
 - (3) 益田市と島根県立大学の共同研究成果報告会
 - (4) 「地方航空ネットワークの維持と地域の役割を考えるシンポジウム」の開催
 - (5) 受託研究プロジェクト「高速道路整備と救急医療活動の関係について」の実施
 - (6) 2013年度北海道学生研究会（SCAN）への参加
 - (7) 山陰地域フィールド体験学習—弥栄の農林業と暮らし
 - (8) 蔚山大学校との合同ゼミフィールドワーク
 - 3) 地域から/地域への応援・情報発信
 - (1) 島根県立大学浜田キャンパス公開講座等の開催
 - (2) 学生研究発表会
 - (3) 2013年オープンキャンパス
 - (4) はまだ灯2013
 - (5) 島根中央高等学校学習支援
 - (6) 島根カタリバ
 - (7) 「はまだ・絵本～ご当地活性化事業～」絵本制作第二弾『さいじょうかきえもん』
 - (8) 「3.11チャリティー・コーラスinはまだ3」開催
 - (9) きっかけバス47報告ならびに意見交換会
 - (10) きっかけバス47学内報告ならびに意見交換会
 - (11) 弥栄産業まつり出展と里山テイスティング
 - (12) 全初年次生が地域に出かける「フレッシュマン・フィールド・セミナー」
 - (13) 島根県立大学産業コンテスト「MAKE DREAM 2013」開催
 - (14) 高大連携の取り組み
 - (15) 大学生による小中学校学習支援事業の取り組み
 - (16) 無料映画上映会「名作映画鑑賞オロリン座」
 - (17) NEARセンター市民研究員制度
 - (18) 講演会講師等・審査会委員等
- 2. 出雲キャンパス.....185
 - 1) 出雲キャンパスプラットフォーム会議
 - 2) 研究に関する取り組み
 - 3) 地域連携活動報告
 - (1) 活動の概要
 - ① 地域との連携推進に関すること

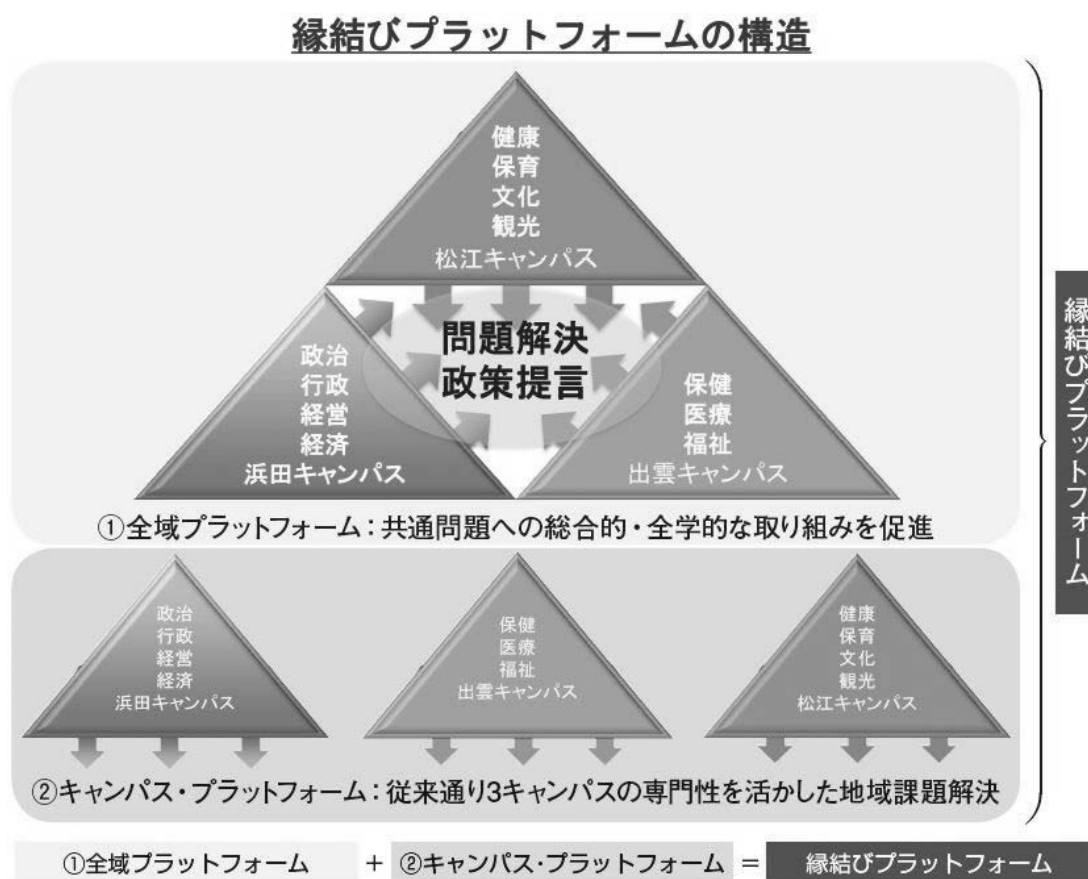
②地域貢献に関すること	
③地域からの要望・相談対応窓口に関すること	
④公開講座等の生涯学習の実施に関すること	
⑤産公学連携に関すること	
⑥広報活動に関する取り組み	
⑦今後の課題	
(2)活動の実績	
①公開講座等に関する取り組み	
②出前講座に関する取り組み	
③ぎんざんテレビ出前講座に関する取り組み	
④地域交流事業	
・出雲キャンパスモニター制度に関する取り組み	
・学生ボランティアマイレージに関する取り組み	
・出雲キャンパスタウンミーティングに関する取り組み	
・産公学連携に関する取り組み	
⑤視察・見学・体験学習	
・シニア版キャンパスツアー	
・ジュニア版キャンパスツアー	
⑥受託共同事業	
・平成25年度島根県がん相談員等資質向上事業	
・平成25年度出雲市杵築地区介護予防教室事業（白うさぎの会）	
・平成25年度出雲市児童虐待防止推進研修事業	
3. 松江キャンパス	207
1) 地域連携推進委員会の活動	
2) 地域に関する教育・研究活動	
3) 公開講座等の開催	
4) 地域活性化支援	
(1)企業・団体・NPO法人等との連携	
(2)自治体等との連携	
5) 学生による地域貢献活動	
6) 教育機関等との連携－保・幼・小・中・高・大の教育連携	
7) 教育課程のための地域の施設・機関との連携	
8) おはなしレストランライブラリーの地域連携活動	
V. その他の地域活動	
1. 地域貢献プロジェクト助成事業	257
2. 島根県との連携	258
おわりに	261
参考	
1. 大学憲章	263
2. 自治体・学校との協定・覚書	264

I. 縁結びプラットフォーム事業

1. 事業概要

島根県立大学・島根県立大学短期大学部共通

公立大学法人島根県立大学は、総合政策学部（浜田市）、看護学部（出雲市）、短期大学部（松江市）の3キャンパスを有し、各キャンパスの専門分野を活かした地域貢献に取り組んでいます。本事業では、島根県の人口減少、少子高齢化、過疎化という地域共通問題へ対応するため、地域ニーズと大学シーズのマッチングを図る「縁結びプラットフォーム」という「場」を構築します。



教育・研究・社会貢献活動での3キャンパスの連携事業を発展強化させ、全学の専門性と総合力を存分に活かした効果的な課題対応等を展開していきます。

地域課題に接近しつつ教育では、過疎先進地島根県で高い専門性と実践力を有する人材を育成するために「しまね地域マイスター」認定制度（島根県立大学）、「履修証明プログラム」（島根県立大学短期大学部）を新設します。各学部で実施されてきた教育・研究・社会貢献活動を段階的に整理し、その目標・成果を全学で体系化するとともに、共通問題を多角的に研究し、市民や学生の地域活動を支援して、地域に開かれた大学として、地域社会へ貢献しています。

島根県と島根県内の連携自治体の人口と財政力指数

都道府県・市区町村	H22国勢調査人口	財政力指数 (H21～H23平均)
島根県	717,397	0.22
松江市	208,615	0.55
浜田市	61,713	0.43
出雲市	171,485	0.48
益田市	50,015	0.41
大田市	37,996	0.28
安来市	41,836	0.38
江津市	25,697	0.34
雲南市	41,917	0.25
奥出雲町	14,456	0.17
飯南町	5,534	0.14
川本町	3,900	0.16
美郷町	5,351	0.14
邑南町	11,959	0.18
津和野町	8,427	0.17
吉賀町	6,810	0.16
海士町	2,374	0.09
西ノ島町	3,136	0.13
知夫村	657	0.07
隠岐の島町	15,521	0.18

2) 複雑な課題へ対応するために

● 「島根県総合発展計画 (H24.4～H28.3)」における現状と課題

島根県の現状と課題を踏まえ設定されている「島根県総合発展計画」の基本目標では、「Ⅰ 活力あるしまね」、「Ⅱ 安心して暮らせるしまね」、「Ⅲ 心豊かなしまね」を挙げています。単純な原因特定と課題設定が難しい広域・共通の地域問題へ対応をするために、県の基本目標を大枠とし、3キャンパスが相互に連携し、総合的に対応することが肝要です。

地域活力のためには、農林水産業、ものづくり、観光等の各種産業の振興、および地域の医療・福祉等の充実によるコミュニティづくりを図り、雇用、定住を進めることで、産業基盤を維持・整備することが必要です。その前提として産業振興やコミュニティづくりの担い手となり、産業・地域振興を推進する人材の確保と育成が求められています。また、安心して暮らし、心豊かに生きることは、保健・医療・福祉面を通じた最終的な目標といえます。島根県の過疎化が慢性化し医療従事者が不足する状況においては、地域社会全体で医療を支えるネットワークづくりが急務です。看護職者には地域の保健・医療・福祉の課題について理解を深め、訪問看護等の取組に向け、地域でより一層活躍することが期待されています。

以上の地域問題は複雑で一側面からの対応だけでは不十分であるので、解決には行政区域を超越した取組が必要です。また課題解決へ向けた取組主体および産業、コミュニティの担い手を確保することが重要です。短期的即効的な対策ではなく、県内複数地域に共通する課題に対して連携した継続的対応策の模索とその担い手確保・育成が、島根県および県内各地域における課題です。

● 3キャンパスの連携

島根県内に見られる典型的な人口減少・少子高齢化・過疎化問題は、広域かつ長期的継続的な対応策を要する問題です。こうした島根県が抱える課題への対応は、各キャンパス・自治体・地元企業・NPO等団体による多様な主体の継続的相互連携なくしては解決できない性質を有しています。

これまで、3キャンパスの専門分野をもって地域課題へ対応しながら、教育・研究活動を行ってきました。しかし、地域に関わる教育・研究・地域振興・学生活動において、対象地域・テーマ・活動期間等の接近方法にばらつきがあり、現在は全学的かつ効果的な地域課題への接近手法を模索している段階です。よって、3キャンパスにおける地域での諸活動の体系化、地域連携の目的・成果の整理が必要で、同時に県内の共通問題へ対応するため、本学だけでなく自治体や地域社会とともに全域で連携することが必須です。したがって3キャンパスの連携により体系的な地域連携活動を行い、また、従来とは異なる手法で地域課題へアプローチするためには、本学が全域連携を推進し地と知の拠点となることが重要です。

● 本学が地と知の拠点となることで果たされる機能

3キャンパスが連携し地域の拠点となることで果たされる機能は次のとおりです。

① 地域人材育成機能

地域課題の解決へ向けた取組を、大学教育に組み込むことで、当該地域に精通した人材を育成し、地域へ輩出する。

② 学生による連携交流開拓機能

ボランティア活動は広範な地域・分野に渡る活動実績があり、学生は地域の境界なく縦横無尽に活動を展開しています。学生活動は一種の連携の橋渡しの機能、連携の基礎交流的土壌を醸成する重要な要素を有しています。学生を必要とし連携意志を持つ地域は多く、学生による連携開拓・連携土壌の醸成機能があることも本学が拠点となりうる重要な側面といえます。

③ 機会・知見・課題・成果の総合窓口機能

3キャンパスは県の東西に立地するため県内全域における連携面で立地的優位性があります。3キャンパスが連携することで、課題・成果等の人と情報の窓口としての役割を担います。

④ 研究成果還元および専門知見集積機能

地域課題解決に向けこれまで培った研究成果・専門的知見を活用するとともに、新たに得られる成果・知見を集積することができます。

⑤ 地域間の情報発信・共有機能

特定地域の実績や成果は、他の自治体へも適用可能である場合があり、機会・知見・課題・成果の共有の場を提供する役割を担います。

⑥ 伝統文化歴史の維持・発展機能

当該地域は厳しい状況を抱えながらも、そこには厳然として人々の暮らしや、豊かな歴史・文化があり、それを守っていく必要があります。大学を拠点として学生（若者）が地域へ出向き、世代間交流しながら文化・歴史を継承できる機会を作る役割を果たすことができます。

②島根県立大学短期大学部

1)「地域」の課題

●島根県における全 19 市町村の「過疎地域」指定と高齢化

本申請事業で連携する「島根県」は、全人口 717,397 人 (H22 国勢調査) のうち、過半数 (53.0%) の人口 380,100 人が松江市と出雲市の 2 市に集中しており、残りの 17 市町村は、過疎地域自立促進特別措置法上の「過疎地域」あるいは「みなし過疎地域」の指定を受けています。松江市と出雲市の 2 市も、一部が過疎地域の指定を受けており、全 19 市町村が「過疎地域」指定対象となっています。

「島根県過疎地域自立促進方針―平成 22 年度～平成 27 年度―」において、島根県は基本的な課題解決方針として、A：産業振興、B：交通通信体系整備、C：生活環境整備、D：高齢者等施策拡充・強化、E：医療確保、F：教育文化振興、G：集落維持活性化、の 7 項目を挙げていますが、現状の最大課題は、人口減少に伴う高齢者比率の増大です。平成 24 年の島根県全域高齢者比率 (65 歳以上の人口比率) は、29.9%であり、これは全国 3 位です。市町村別に高齢者比率をみると、30%未満は松江市と出雲市のみであり、他の 17 市町村はいずれも人口の 30%～50%の割合で高齢者を抱えています。これらの住民が自ら A：産業振興や B：交通通信体系整備を担う時代は過ぎており、いわゆる「小規模高齢化集落」での D：高齢者等施策拡充と G：集落維持活性化、が求められています。

●島根県における全 19 市町村の「過疎地域」指定と少子化

「島根県過疎地域自立促進方針―平成 22 年度～平成 27 年度―」では、「島根県次世代育成支援行動計画」とあわせて「少子化対策」が取り上げられており、上記の通り過疎地域自立方針として、F：教育文化振興、が挙げられています。平成 24 年度島根県全域の小学校 1 年生人口は 5,631 人ですが、同年度 6 年生人口は 6,432 人であり、6 年間に 801 人減少しています。小学校 1 校平均の小学 1 年生の児童数は、島根県全体で 24.6 人であり、1 クラス未満の人数となっています。1 校平均小学 1 年生の児童数が 30 人を超えるのは、松江市と出雲市のみであり、6 町村では 10 人未満になるなど、今後も小学校の統廃合が進み、過疎がさらに進行する現状がうかがわれます。「子育て支援」と、B：交通通信体系整備、F：教育文化振興が、コミュニティ存続の喫緊の課題となっています。

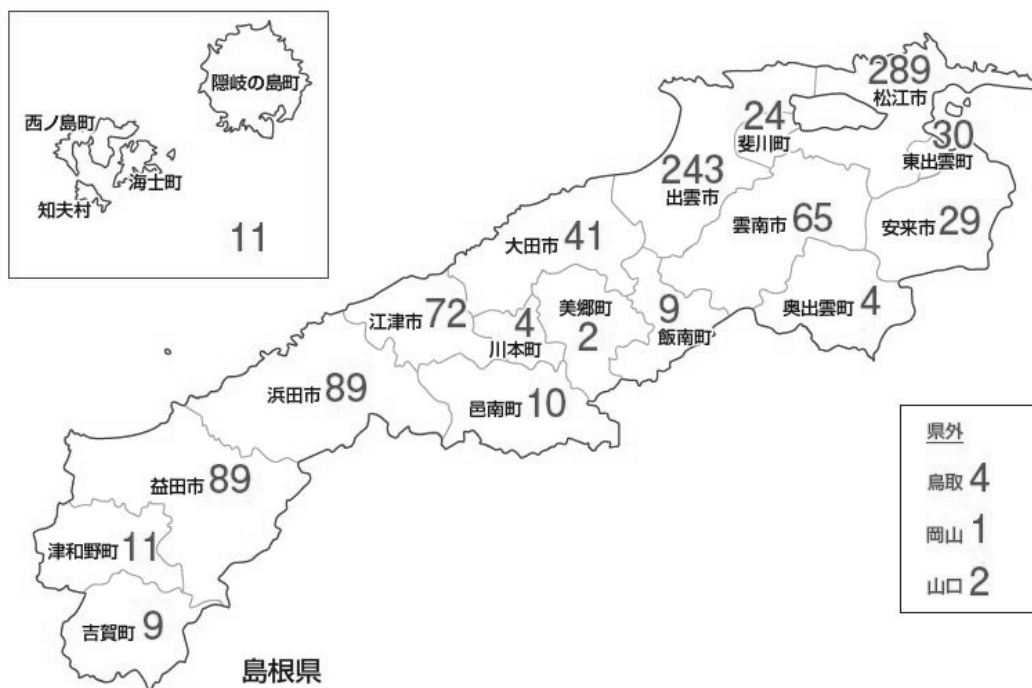
2) 複雑な課題へ対応するために

●コミュニティ存続のための現場専門職者支援

本法人は県立大学であり、島根県の地域課題解決については大学設立上の任務としていますが、本学は、島根県健康福祉部、松江市・出雲市・浜田市・多領域職能団体と連携して、平成 19 年度～平成 21 年度の文部科学省委託「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」事業に採択され、県内外「子育て支援」専門職者研修を実施した実績をもっています。この事業によって、島根県内の、特に中山間地域と離島の専門職の、強い再教育ニーズを証明しました。また、その後平成 22 年度には「現場専門職の研修のあり方」について修了者と協議を実施し、現在も、島根県栄養士会等の地域職能団体に協力した多くの研修を担当しています。これらの実績を踏まえ、現在、上述の地域課題、すなわち人口減少・少子高齢化・過疎化に直面している現場の専門職者と協力し、この地域課題を共同して解決する責務があります。さらに、多忙な現場専門職者の教育アクセスを可能にするための、ICT・通信教育環境をこの事業で整備し、地域の研究研修拠点として、さらに現場支援を深める必要があります。

また、上記少子高齢化集落の中には、隠岐郡・津和野町等々、資源開発への可能性を持つ地域も多く含まれています。これらの文化発掘と観光振興、特産品等の食品開発領域でも、本学は連携実績があり、今後の文化発掘と観光振興、特産品等の開発に向けて、さらに現場支援の拠点となる必要があります。

「社会人の学び直し」事業(H19-H21)
基礎課程修了者 実人数1,038人



3. 「縁結びプラットフォーム」とは

島根県立大学・島根県立大学短期大学部共通

1) 地域課題を解決するための「縁結びプラットフォーム」

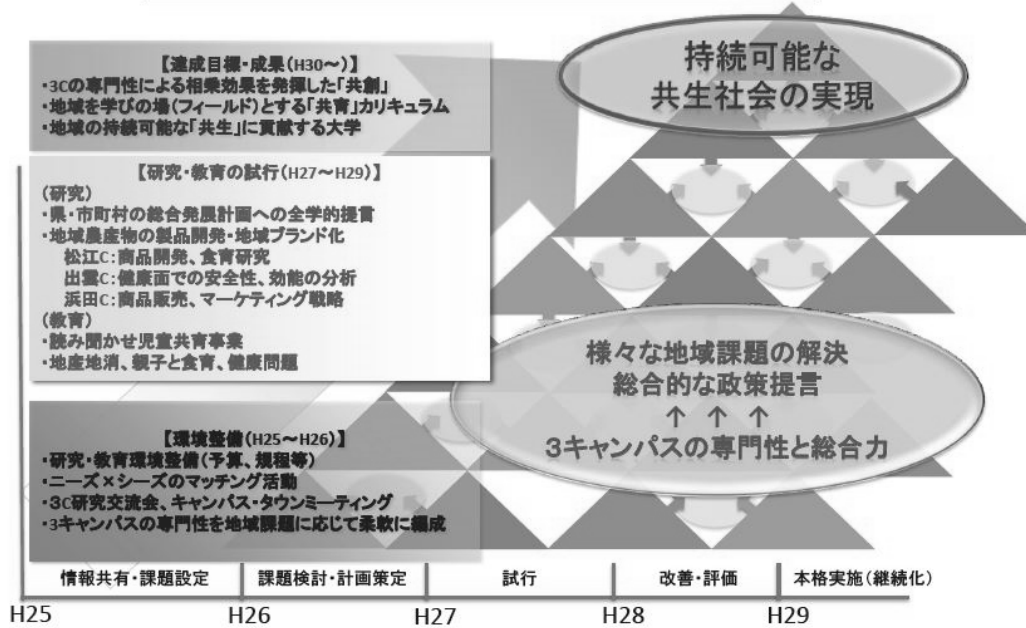
従来から本学は、人口減少・少子高齢化・過疎化という地域の共通問題に対して、3キャンパスの地域連携推進センターを通じて、地域ニーズと学内シーズとのマッチングを図ってきました。しかし、今日の地域課題の要因は相互に関連性を深め複雑化しています。つまり、従来のような学部ごとの専門性に頼ったアプローチは、問題の一側面しか捉えることができません。今後は、こうした個別の取組を一つずつ積み上げることにより、各取組から得られる知見のシナジー効果（相乗効果）を発揮させる必要があります。

そのためには、地域や専門分野を超越し、なおかつ継続的に取り組む必要があります。本事業では、キャンパス間のみならず、自治体やNPO、関係団体と協同して地域連携を図る「場」を構築し、それを「縁結びプラットフォーム」と名付けます。その目的は、以下3点です。

目的

- | |
|--|
| ① 共育：地域とともに人材を育む
→地域で活躍できる人材を継続的に輩出できる |
| ② 共創：知見を集積し、住みよい地域の姿を創造する
→本学の総合力をもとに課題解決にあたる |
| ③ 共生：地域の良さを活かし、持続的・自律的に発展する
→持続可能な共生社会の実現 |

「縁結びプラットフォーム」事業の年次計画



2) 縁結びプラットフォームの構造

縁結びプラットフォームは次の2層構造となっています。

- ・各キャンパスの「キャンパス・プラットフォーム」
 各キャンパスが従来から担ってきた、地域ニーズとシーズのマッチング機能、および成果の還元機能を強化します。そのため各キャンパスの地域連携推進センターを発展的に改組します。
- ・3キャンパス共通の「全域プラットフォーム」
 広域問題および複数の専門分野に関連する地域共通問題へ対応するプラットフォームです。3キャンパスが連携することで、多様な専門性と総合力を活かした教育、研究、社会貢献活動を促進します。

4. 学びのプラットフォームとは

島根県立大学短期大学部

1) 少子高齢化集落コミュニティの共生(支えあい)を支援する学びのプラットフォーム設立

地域課題解決に向けて、すでに実施している活動を集約・発展させる形で各キャンパスの専門性を活かしたセンター(キャンパス・プラットフォーム)を整備します。さらに、3キャンパスの連携を強化し、地域および複数専門分野を横断する課題に総合的・全学的に対応するため「全域プラットフォーム」を整備します。なお、キャンパス・プラットフォームおよび全域プラットフォームを合わせて「縁結びプラットフォーム」と称します。

全域プラットフォームでは、連携する島根県・市町村・NPO・産業界といった地域主体と専任教員・事務スタッフが一堂に会する場を設けます。また、年度単位で全学全地域として示される統一テーマを設定し、それに従って、具体的な活動に取り組みます。

本学は、第2期中期計画での地域志向の位置づけに合わせて、「健康・保育・文化・観光」

の専門分野を活かしたキャンパス・プラットフォーム「しまね地域共生センター」を設立します。この「しまね地域共生センター」を拠点として、1) 全キャンパス共通基礎科目「しまね地域共生学入門」の開設と「地域志向」専門教育推進、2) 本学学生の自主活動と卒業研究における「地域活動」「地域課題への取り組み」推進、3) 専任教員と少子高齢化集落の課題解決を目指す地域専門職者との共同研究促進、4) その共同研究成果を含む履修証明プログラム「地域共生専門コース」の開発と研修、を実施します。過疎の現場で必要な新たな知見・技術を学修するためのコースを「地域共生専門コース」8分野とし、「しまね地域共生センター」での、ICT・通信教育システムの利用も含めた、これらの領域の共同研究開発と研修をもって、少子高齢化集落での新たな人材力強化・ブラッシュアップに貢献します。

「しまね地域共生センター」の対象とする「地域共生専門コース」8分野と、対応する現場専門職は次の(1)から(8)のとおりです。センターにおいて、各分野の行政担当者との共同研究も推進します。

「しまね地域共生センター」の対象とする「地域共生専門コース」8分野

地域専門職との連携	共同研究および研修の8分野 (新規科目開発→現場で活かす「履修証明プログラム」へ)	
(1)管理栄養士	低栄養高齢者の栄養改善指導のための研究と研修	個別相談者として支援できる職能
(2)栄養教諭・管理栄養士・栄養士	各地域の年齢別食育・地産地消のための研究と研修	
(3)保育士・幼稚園教諭・小学校教諭・特別支援学校教諭	各地域の医療体制・教育体制にあわせた病児・障害児保育と相談支援体制の研究と研修	
(4)保育士・幼稚園教諭・指導員	地域全体で子どもを育むための多様な地域支援体制の研究と研修	地域基盤・人材ネットワークの構築力
(5)図書館司書・学校司書・司書教諭	地域で支える生涯学習・教育基盤の研究と研修	
(6)郷土研究者・NPO法人・市民団体	地域文化資源の掘り起こし・評価・活用の研究と研修	地域の資源(シーズ)を知り開発できる人材
(7)NPO法人・企業・市民団体	豊かな自然・歴史や文化を活用した観光開発の研究と研修	
(8)企業・団体	特色ある地域特産品・食品開発の研究と研修	

平成29年度の本事業最終段階で、これらの領域の共同研究と研修体制が軌道に乗り、大学教育において過疎の現場で役立つ「地域志向」科目と通信教育システムが整備され、少子高齢化集落の専門職が「地域共生専門コース」履修証明プログラムを活用することで課題解決が進み、現在のコミュニティが存続あるいは活性化することを目指して、基盤としての「しまね地域共生センター」を設立します。地域専門教育カリキュラムの改革として、「教育」「研究等」「社会貢献」において、本学が独自に計画する社会人向け「地域共生専門コース」を中心に、全体計画、組織的取組みを明らかにし、事業全体の中での位置づけを明確にします。

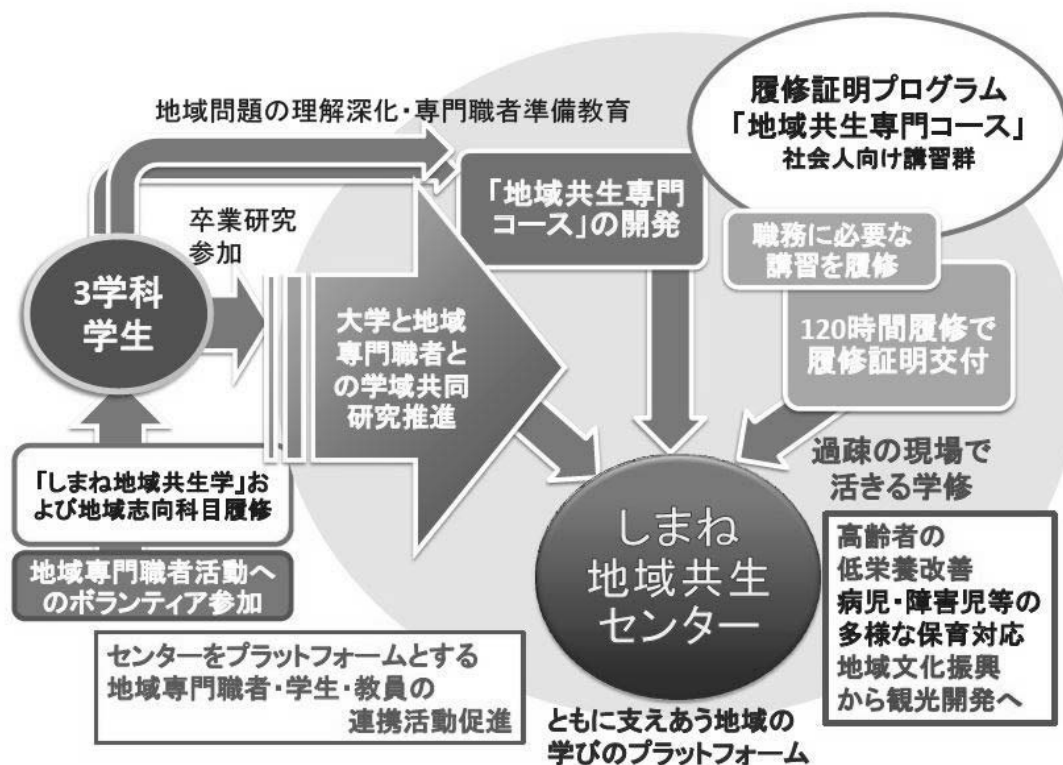
2) 履修証明プログラム「地域共生専門コース」講習群

本事業で目指す履修証明プログラム「地域共生専門コース」は、学校教育法第105条で

定められた特別な課程であり、極めて実践的かつ具体的個別的課題の解決に結びつく知見と技術の集積としてのプログラムです。少子高齢化集落の職務に必要な講習の履修、ならびに 120 時間コース履修による履修証明の交付を行います。

すでに大学および短期大学で専門教育課程を終えた現場の専門職者のための応用的プログラムであり、現場専門職者の評価フィードバックによって、「地域共生専門コース」の学域開発研究を進めます。

本学学生は、基礎科目で全キャンパス共通「しまね地域共生学入門」を履修し、専門科目で3学科それぞれの専門性を深め、さらに、自由参加で地域専門職者向けの「履修証明プログラム」を受講することが可能となります。単位取得を含まない参加の中で、地域の専門職者と連携し、問題意識の深化を目指すことができます。



3) 大学の改革にどう繋げるか

本学は地域の専門職人材養成機関として、大きな転換を迫られています。短期大学としてのカリキュラムについては、平成 23 年度認証評価後の改善策として、卒業認定単位数削減とキャップ制を求められており、免許・資格の位置づけ、ニーズの変化に対応した課程の在り方を検討すべき段階となっています。島根県において、上述(1)から(8)の分野の研究研修を担うことのできる唯一の高等教育機関として、本学は本事業の成果としての少子高齢化集落に必要な「地域共生専門コース」を確立し、次の時代への転換後の、「選ばれる公立大学」「役に立つ公立大学」「支援し続ける公立大学」としての新たな授業科目に活用することを目指します。

さらに、第 1 期中期計画期間中に、法人評価委員会および認証評価機関から高い評価を得てきた、公開講座「椿の道アカデミー」の運営と、幼保・小・中学校、高校との授業協力、読み聞かせ実践、ボランティア活動等の、教育連携活動について、「しまね地域共生センター」をプラットフォームとして、地域と学生、教職員の連携を推進し、人的、物的に安定的な基盤を構築します。

5. 事業の具体的取組

①島根県立大学

1) 共育（教育）

本事業では、人材育成の方針を次のように定め、学部間で共有し、それに対応したカリキュラムの再編を行い、人材を育成します。

人材育成の目標

島根県における地域問題に対して様々な取組を通じて、①地域事情に精通し、②地域主体を繋げるコーディネータ力のある人材を育成し、③熱意をもち課題解決に取り組める実践力を持った人材を育成する。

具体的な取組内容は以下のとおりです。

(1)「しまね地域マイスター」認定制度の創設

- ・本学の独自基準に基づく必要単位を修得した学生に認定
- ・地域について実践的に学んだ学生の質確保

(2)3キャンパス共通必修科目「しまね地域共生学入門」の設置

- ・島根県が抱える課題の概論的教授

(3)集中実践科目の新設

- ・複数キャンパスの学生による合同フィールド学習である集中実践科目の新設
- ・看護職養成のための臨地実習を活かした教育課程の組立

(4)「地域共生演習」の指定（浜田キャンパス）

- ・「しまね地域マイスター」認定要件の地域課題について専門的に研究・学習する総合演習の提供

(5)学生の地域ボランティアの促進

- ・地域活動を通じて、地域課題を発見する視点の養成

(6)「COC²-Net(3キャンパスと地域を結ぶ本学独自のICT情報共有ネットワーク)の整備」

- ・COC²-Netを活用した共通科目の遠隔講義や各キャンパスをまたいだフィールドワークの円滑な実施

2) 共創（研究等）

本事業では、研究等について以下に掲げる内容を目標として取り組みます。

- ①「縁結びプラットフォーム」を通じて、学内の教員同士、地域と大学との連携を強化する。
- ②広域的、分野横断的な地域研究の実施を促進する。
- ③域内での研究成果の共有化を図る。

具体的な取組内容は以下のとおりです。

(1)研究交流の場の構築

- ・「縁結びプラットフォーム」での3キャンパス研究交流会の開催
- ・「縁結びプラットフォーム」上でのディスカッションペーパーの発行

(2)地域研究費の拡充

- ・「しまね地域共育・共創研究助成金」の創設

3) 共生（社会貢献）

本学では、これまで積極的に地域連携活動を行ってきており、その実績は大学基準協会による外部認証評価で高く評価されました。しかし、これまでの地域連携活動は各キャンパス独自で実施しているものがほとんどです。そこで、本事業では、島根県内に分散立地する各キャンパスを拠点とし、社会貢献の目標を以下のとおり掲げています。

①生涯学習機能の拡充、②ボランティアの広域的対応、に取り組む。

具体的な取組内容は以下のとおりです。

(1)生涯学習機能の充実

- ・COC²-Net を活用した遠隔講義の実施を通じた市民の受講機会の拡大

(2)ボランティア活動の広域化

- ・ボランティア活動情報の共有化による広域的な社会貢献活動の促進

(3)教育機関との連携強化

- ・教育機関との連携強化を通じた教育現場ニーズに対応した環境整備

その他

(1)全域フォーラムの開催

全域プラットフォームでの教育、研究、社会貢献活動の成果発表の場、情報共有の場、次年度の大学と地域の連携活動のマッチングの場として、自治体、NPO 等団体組織、企業を集めて、全学的なフォーラムを実施します。

- ・開催時期 毎年度2月

(1) COC²-Net の整備

COC²Net (Cross Over Campuses & Communities Network) とは、e-ラーニング学習支援システム「Moodle」とTV会議システムの両機能を持たせた本学独自のICT情報教育システムです。遠隔での会議や共通科目の遠隔講義や各キャンパスをまたいだフィールドワークを円滑に実施できるよう、地域の各拠点と各センターを中継できるシステムを整備します。

②島根県立大学短期大学部

1) 共育（教育）

(1)「しまね地域共生学入門」について

本事業により、全キャンパス共通科目「しまね地域共生学入門」による少子高齢化集落の課題解決への基礎教育を行います。「しまね地域共生学入門」による人材育成方針については、「人口減少・少子高齢化・過疎化の進む島根県における地域課題に対して様々なレベルで取り組む過程を通じて、①地域事情に精通した知識、②課題対応スキルを身につけるだけでなく、③様々な地域内の主体を繋げるコーディネート力のある人材の育成を目指す。」ことにあります。

さらに、これまで「地域」に関する学修を行っている授業科目群について、「しまね地域共生センター」での活動を含めて、内容、達成目標、科目関係性を見直し、ディプロマポリシーの観点から、全学での「地域志向」科目群の位置づけを見直します。

また、履修証明プログラム「地域共生専門コース」への学修機会を開き、地域課題に関

心を持つ学生に対して専門職準備教育を行います。本学の学生は授業科目以外の地域活動へ多く参加し、そこでの地域体験を学修につなげています。これは地域課題への学生の強い関心を示すものと思われます。さらに、卒業研究等の発展的な科目では、「しまね地域共生センター」での共同研究へ、学生が一部研究（実験等）分担者として参加する機会を開きます。

以上の3点をまとめると、本学学生に対する「地域志向」教育改善は以下のとおりとなります。

- ① 「しまね地域共生学入門」と「地域志向」科目による地域課題への基礎教育構築
- ② 地域共生専門コース」履修証明プログラムの選択履修による問題意識の深化
- ③ 卒業研究における「しまね地域共生センター」研究への一部参加による課題解決への展望

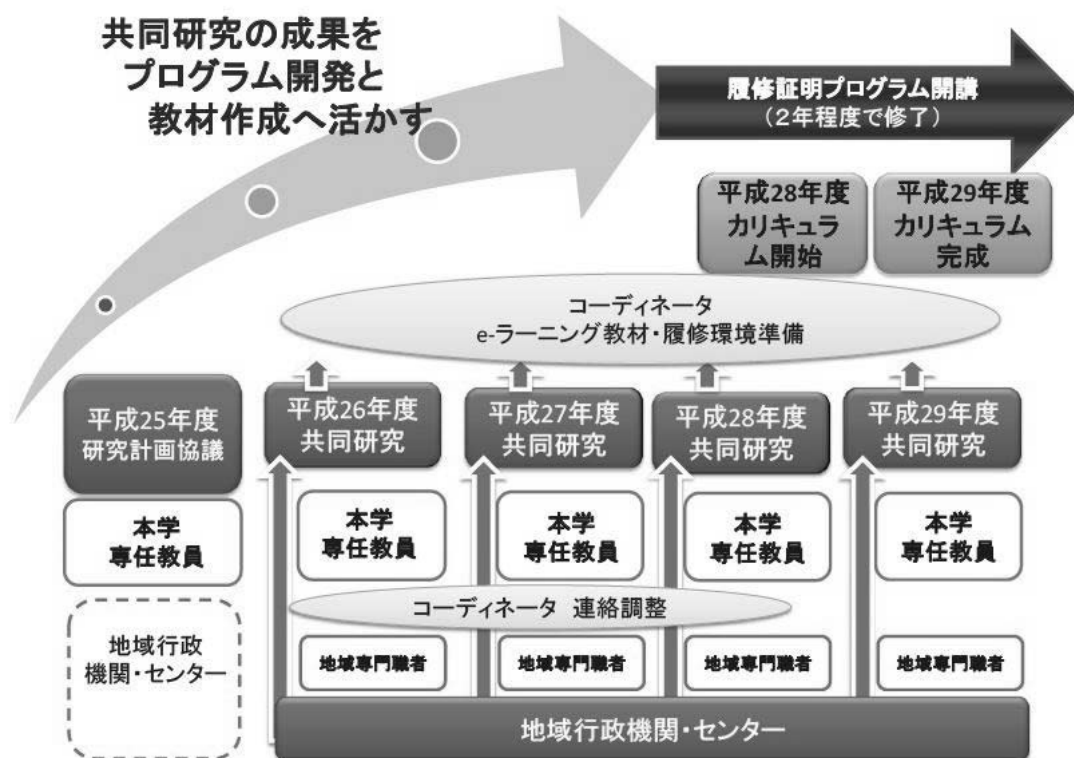
(2) 現場専門職者向け「履修証明プログラム」開設

現場専門職の社会人向け「地域共生専門コース」については、前述 P12 の(1)～(8)の8分野ごとに履修証明を交付することを目指して、各コース 120 時間以上の履修を可能にするカリキュラム開設を行います。

2) 共創（研究等）

(1) 「しまね地域共生センター」における共同研究の推進

本学における、キャンパス・プラットフォーム「しまね地域共生センター」では、次の図に示す通り、地域専門職者と共同研究を実施しつつ、8分野における人口減少・少子高齢化・過疎化の地域共通課題の解決に向けて研究と研修を実施します。各分野の行政担当者も、共同研究の連携対象となります。



前述 P12 の(1)～(8)「地域共生専門コース」8分野でそれぞれ120時間以上の講習を履修した社会人に履修証明を交付するために、各分野で120時間のプログラムを開発します。この「地域共生専門コース」開発を目的として、特定する8分野において、過疎の現場で先進的な活動実績を持つ専門職者（地域行政機関・センター職員）と専任教員との開発的共同研究を推進します。専任教員による現時点での原案を、現場専門職者との共同研究により、より少子高齢化集落の実情に合った内容に向けて修正開発します。これらの地域専門職者（地域行政機関・センター職員）については、県・市町村、関係団体からの協力を求めます。

基本的に平成25年度の計画協議を踏まえて、平成26年度から平成28年度までの3年間で、少子高齢化集落で履修可能な形態に向けて、段階的にカリキュラム開発（e-ラーニング教材開発を含む）を行います。平成27年度から一部科目の試行を含む修正開発を行い、平成28年度には、一部の科目で履修を可能にします。平成28年度には、各分野のe-ラーニング教科書（テキストシリーズ）発行を行い、最終年度にカリキュラムを完成させ、事業終了後の安定的な研修体制を構築します。基本的に、これらの修正開発を3学科で分担するためのコーディネータ（3学科対応の資格専門職を含む）を期間中採用し、専任教員と学外専門職者（地域行政機関・センター職員）の連絡調整、e-ラーニング環境整備を行います。また、これらの共同研究と研修、ならびに学生の「地域志向」学修・自主活動の支援を行う「しまね地域共生センター」に職員を配置します。

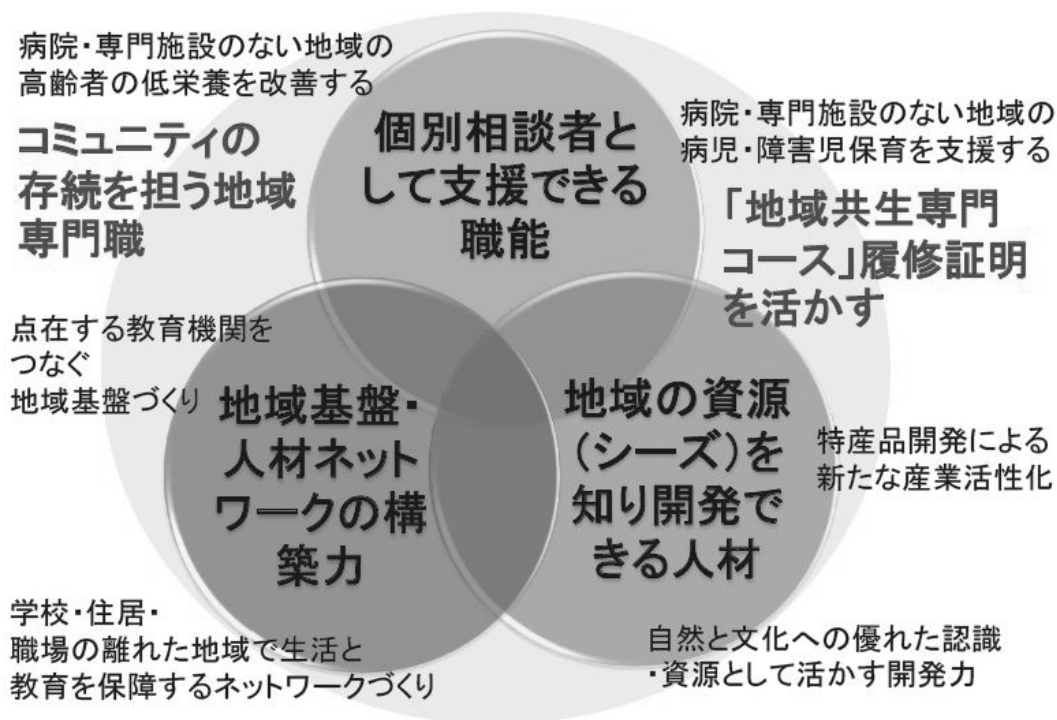
(2)センター紀要の発行

「しまね地域共生センター」の実施する8分野からの地域共通問題解決研究について、成果のまとまったものを地域に還元する目的で年1回「センター紀要」を発行します。このセンター紀要では、地域専門職者と大学研究者の共同研究あるいは個人研究に対して、他県の大学等のコメンテータの記事も記載し、島根県の地域共通課題における8分野の共同研究の、全国的な規模での検証を行います。また、前述のとおり、本事業の4年目平成28年度には共同研究のまとめと履修証明プログラム実施の成果から、「地域共生専門コース」テキストシリーズを発行し、最終平成29年度に見直しを実施して、事業終了後の安定的な研修体制を構築します。事業終了後も、過疎の現場の履修証明プログラム修了者およびその他先進的取り組みを行う専門職者と専任教員の共同研究等を推進し、研究紀要の発行を続行します。

3) 共生（社会貢献）

(1)社会人向け「地域共生専門コース」での人材育成

履修証明プログラム「地域共生専門コース」の8つの分野の学修は、人口減少・少子高齢化・過疎化の進む地域での具体的な課題解決を目的としています。(1)低栄養高齢者の栄養改善、(2)各地域の食育・地産地消、(3)各地域の病児・障害児保育・相談支援体制、は主に「個別相談者」として「アセスメント」から「指導計画立案」までを担当する専門職者の職能育成に関係しています。(4)子育ての地域支援体制、(5)地域で支える生涯学習・教育基盤、は「地域基盤・人材ネットワーク」の構築に携わる専門職の職能育成に関係しています。(6)地域文化資源の掘り起こし、(7)観光開発、(8)特産品・食品開発、は「地域の資源（シーズ）を活かし、産業振興に結びつける開発力ある人材」の育成に関係しています。



これらの「人材育成」成果が地域の現場で輻辳的に課題解決に活かされるよう、同一地域に長期的に複数のプログラム修了者を輩出することを目指します。履修証明の活用等、これらの成果検証を含めて、「しまね地域共生センター」の任務とします。

(2)社会人向け「地域共生専門コース」のカリキュラム原案

- ①低栄養高齢者の栄養改善－120 時間（10 講習）
- ②食育・地産地消－120 時間（8 講習）
- ③病児・障害児保育・相談支援体制－120 時間（6 講習）
- ④子育ての地域支援体制－120 時間（6 講習）
- ⑤生涯学習・教育基盤－120 時間（9 講習）
- ⑥地域文化資源の掘り起こし－120 時間（8 講習）
- ⑦観光開発－120 時間（9 講習）
- ⑧特産品・食品開発－120 時間（8 講習）

(3)計画の実現に向けて

島根県全域を対象とした「履修証明プログラム」開設の場合、東西に 200 km以上の広範囲の市町村を対象とし、現場専門職者のための講習である限り、大学に集まった講習ではなく、各地域にできるだけ近い位置で受講可能となるよう、通信教育の環境整備を行う必要があります。そのうえで、対面式通信教育に参加できなかった受講者向けの e-ラーニングを代替受講として認めることが必要となります。これらの ICT・通信教育システムについては、「COC²-Net」を活用し実施します。

「履修証明」の地域における活用についても、「しまね地域共生センター」で開発研究を行います。今後、地域で展開する必要のある新たな専門職任務を学修したりカレントの証明として、「履修証明」を有効に利用することが考えられます。島根県および各市町村と連携して、この「地域共生専門コース」履修者の修了者名簿を作成するなど、コミュニティ存続を担う新たな人材育成に向けて「履修証明」の活用を目指します。

6. 事業の実施と評価

①実施体制

推進体制

本学の COC 事業推進体制は、以下の「縁結びプラットフォーム運営委員会」、「学内推進委員会」、「実行委員会」の3層構造をとる。

<縁結びプラットフォーム運営委員会>

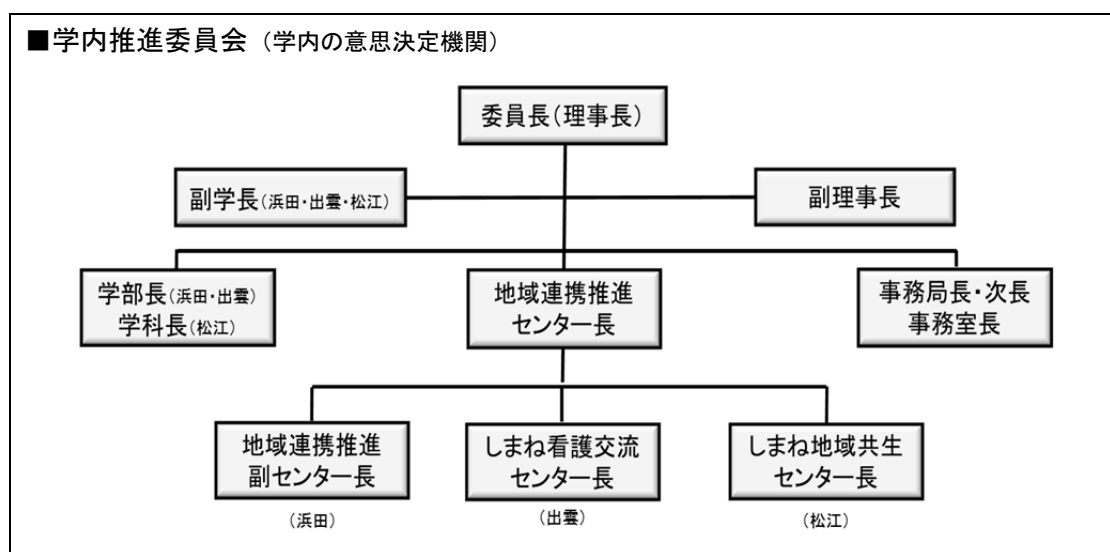
- ・副申を得た島根県内 11 自治体、これまで本学と協力関係にあった機関・団体及び本学関係者を構成員とする運営委員会を組織し、地域課題解決に向けた取組を推進する。
- ・会長は、公立大学法人島根県立大学理事長を充てる。
- ・年1回、総会を開催し、年度計画や年度報告、年度業務評価に関することを審議、決定する。

【運営委員会の構成員】

自治体 (12)	島根県、松江市、浜田市、出雲市、益田市、大田市、江津市 川本町、美郷町、邑南町、津和野町
機関・団体 (9)	しまね産業振興財団、ふるさと島根定住財団、島根県商工会連合会 島根県看護協会、今井書店、島根県栄養士会、島根県保育協議会 てごねっと石見、松江ツーリズム研究会
本学関係者 (18)	学長、副学長、学部長・学科長、地連センター長・副センター長 副理事長、事務局長、事務局次長、事務室長

〔補助期間の連携事業を通じ、各自治体の個別、共通問題へ3キャンパスで対応していく。この他の自治体とも、今後事業の推進によって、逐次、連携協力体制を整備していく。〕

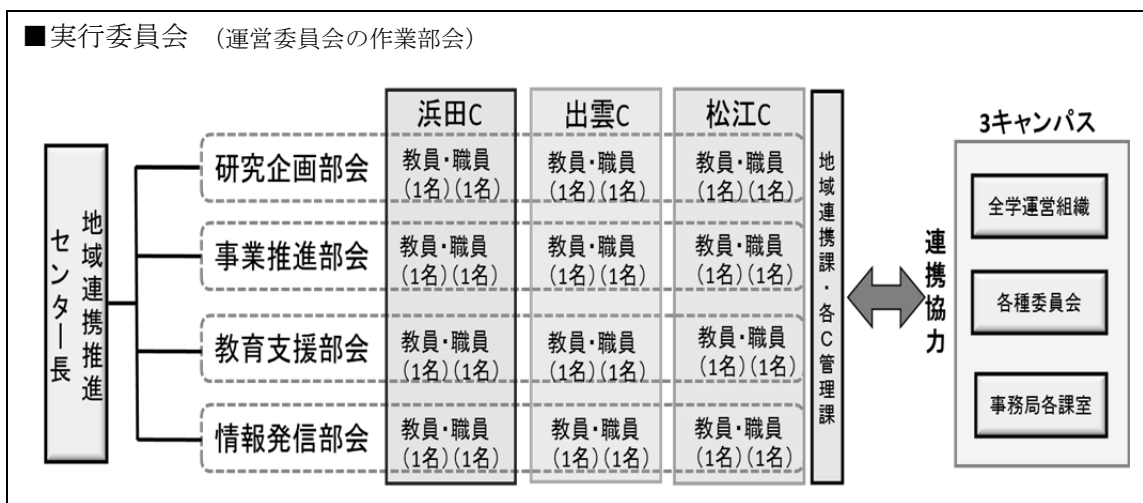
<学内推進委員会>



- ・運営委員会の円滑な運営を図るため、学内推進委員会を置く。委員会は、運営委員会の構成員のうち大学関係教職員をもって構成する。運営委員会会長（理事長）が委員長となり、委員会を運営する。委員会は、事業の執行に必要な事項を協議し処理する。
- ・運営委員会会長（理事長）は、総会を招集する時間的余裕がないときは、学内推進委員会に諮った上で、専決処分をすることができる。
- ・学内推進委員会で決定された事項は、学内規定で定められた「各組織が所掌する事務」に基づき、全学運営組織・各キャンパス各種委員会等・事務局各課室が事務を分担する。

<実行委員会>

- ・運営委員会（学内推進委員会）の各種作業を担うため、学内教職員で構成する実行委員会を設け、4つの作業部会（研究企画部会、事業推進部会、教育支援部会、情報発信部会）を附置する。
- ・部会に属すべき者は、運営委員会会長（理事長）が学内教職員の中から委嘱する。
- ・実行委員会の責任者は地域連携推進センター長とし、各作業部会には3キャンパスから教員・職員各1名が参加する。
- ・3キャンパスの横ぐしは、全学運営組織である地域連携推進センターが通し、地域連携推進センターが基盤となる。



<4部会体制>

- ・基本方針（原案）を作成する部会であり、本格実施の体制は各委員会・各課・各室との協力連携を依頼し全学的な実施体制とする。
- ・各キャンパスの各作業部会の構成員については、それぞれのキャンパスに任せる。
- ・教育支援部会については、部会開始段階から教務委員会と教務学生課との連携を図

る。

- ・研究企画部会と情報発信部会については、必要に応じて企画調整室との連携を図る。

4 部会の担当業務

事業推進部会	<ul style="list-style-type: none">・キックオフ・ミーティングの開催・運営委員会の運営・全域フォーラムの運営・ボランティア活動成果報告会の運営・年度業務評価（自己評価）・外部事業評価委員会の運営	等
研究企画部会	<ul style="list-style-type: none">・3 キャンパス研究交流会の開催・優先的課題の設定・広域的課題に関するニーズとシーズのマッチング・しまね地域競争基盤研究費の配分	等
教育支援部会	<ul style="list-style-type: none">・しまね地域マイスター認定制度における対象科目の設定・共通科目「しまね地域共生学入門」の担当教員と講義内容等の調整・高大連携事業検討会の開催・学生ボランティア活動検討会の開催	等
情報発信部会	<ul style="list-style-type: none">・COC²-Net の設備備品の購入、稼働・COC²-Net による公開講座の開催、遠隔地との試験的運用・ボランティア情報と外部研究資金情報の発信・ディスカッション・ペーパーの発行	等

②評価体制

縁結びプラットフォーム事業の年度事業評価実施要領

平成 26 年 4 月 30 日

縁結びプラットフォーム運営委員会会長決裁

1. 趣旨

事業評価委員会（以下「評価委員会」という。）が行う縁結びプラットフォーム事業（以下「大学 COC 事業」という。）における年度事業評価を適切に行うため、評価の実施に関し必要な事項を定める。

2. 評価の目的

評価委員会が行う評価は、大学 COC 事業の自主的な事業運営の見直し、改善を促し、もって当該事業の質の向上、事業運営の効率化及び透明性の確保に資することを目的として行う。

3. 評価の基本方針

事業評価は、次の基本方針により行うものとする。

- (1) 事業評価は、5 箇年の事業実施計画の達成に向けた業務の進捗状況を確認する観点から行う。
- (2) 事業評価は、縁結びプラットフォーム運営委員会（以下「運営委員会」という。）の自己評価に基づくものとする。

4. 事業評価の実施方法

事業評価は、運営委員会の自己評価に基づき作成する事業評価報告書により実施する。

(1) 運営委員会の自己評価

ア 事業評価報告書を記載するにあたっての留意事項

運営委員会は、次の事項に留意し、年度計画における実施計画の項目ごとに、業務の進捗状況等について事業評価報告書に記載する。

- (ア) できる限り客観的な情報・データを用いて具体的に記載するよう留意する。
- (イ) 当該事業の取組の実績が年度計画で定めた計画どおり進められていない場合は、その理由及び次年度以降の取組見通しを併せて記載する。
- (ウ) 特筆すべき事項等があれば次により記載する。
 - a 年度計画には記載していないが、力を入れて取り組んでいるもの
 - b その他、評価委員会に報告すべき状況など
- (エ) 必要に応じて、関連資料を添付する。なお、評価委員会が評価を行ううえで、必要と認めた資料について、追加資料の提出を求めることがある。

イ 項目別評価

運営委員会は、年度計画の記載事項ごとに、業務の進捗状況を次の5段階で自己評価するとともに、できるだけ客観的なデータに基づき、その業務を行ったことによる成果も踏まえ、業務の実施状況及び自己評価の判断理由を記載する。

また、運営委員会の判断により年度計画の記載項目を複数まとめて自己評価することができるものとする。

評点	年度計画の項目別評価の評価基準
5	年度計画を上回って実施している。(計画の内容をすべて達成、かつ特筆すべき成果がある)
4	年度計画を十分に実施している。(計画の内容の達成状況が9割以上)
3	年度計画を概ね実施している。(計画の内容の達成状況が7割以上)
2	年度計画を十分には実施していない。(計画の内容の達成状況が5割以上7割未満)
1	年度計画を大幅に下回っている。(計画の内容の達成状況が5割未満)

ウ 全体評価

運営委員会は、年度計画の項目別評価を踏まえ、事業全体における目標の達成状況、進捗状況を総合的に評価する。

(2) 評価委員会による評価

ア 運営委員会の自己評価の検証

評価委員会は、運営委員会会長の諮問により、運営委員会が作成した事業評価報告書及び必要に応じて求める追加資料に基づき、業務の実績等を確認のうえ、運営委員会の自己評価を検証する。

イ 評価

(ア) 項目別評価

運営委員会の自己評価の検証を踏まえ、年度計画の記載事項ごとに、業務の進捗状況を先の年度計画の項目別評価の評価基準に基づき5段階で評価する。

なお、運営委員会の自己評価と評価が異なる場合は、その理由を付記する。

(イ) 全体評価

年度計画の項目別評価を踏まえ、事業全体における目標の達成状況、進捗状況を総合的に評価する。

また、改善すべき事項があれば付記する。

5. 事業評価結果の答申

評価委員会は、事業評価結果を運営委員会に答申する。

6. その他

本実施要領については、事業評価の実施結果等を踏まえ、必要に応じ、評価委員会の協議を経て見直すことができるものとする。

○事業評価委員会評価委員

委員氏名	所属・役職
泉 紳一郎	独立行政法人科学技術振興機構 社会技術研究開発センター長
高橋 康夫	株式会社山陰経済経営研究所 代表取締役社長
寺本 恵子	邑南町教育委員
松永 桂子	大阪市立大学大学院 創造都市研究科 准教授
家中 茂	鳥取大学 地域学部 准教授

(五十音順、敬称略)

○第1回事業評価委員会次第

- ・日時：平成26年5月15日（木）14:30～16:30
- ・会場：島根県立大学 浜田キャンパス 本部棟特別応接室

II. トピックス

1. 東日本大震災に伴う災害ボランティア活動2013記録

- (1) 5月・6月に、島根県社協主催の「島根県災害ボランティア隊」が計2クール南三陸町へ派遣され学生教職員が参加した。
- (2) 8～9月に、島根県社協主催により「いわてGINGA-NETプロジェクト」に計2クール派遣。県内他大学等の学生とともに参加した。
- (3) 12月に、島根県社協主催の「島根県災害ボランティア隊」が南三陸町に派遣され、学生が参加した。
- (4) 2月に、公益社団法人助け合いジャパン主催の47都道府県大学生対象「きっかけバス47」が東北に派遣され、学生が参加した。



(2)
気仙郡住田

(1)および
(3)および
(4)

区分	活動期間	全参加者数	3キャンパスの学生計	浜田Cの学生	松江Cの学生	出雲Cの学生	備考
(1) 南三陸町「島根県災害ボランティア隊」 (島根県社協主催：一般県民を対象)		51	23	21	2	0	男13女10
活動場所：宮城県南三陸町	5月22日(水) 第1クール～26日(日)	25	7	6	1	0	
活動内容：がれき撤去、被災家屋の片付け等	5月29日(水) 第2クール～6月2日(日)	26	16	15	1	0	

◇島根県社会福祉協議会 島根県ボランティア隊 第1クール(5月22日(水)～26日(日))

キャンパス	学年	氏名	フリガナ	性別	備考	
1	浜田	3	藤本 みのり	フジモト ミノリ	女	リーダー
2	浜田	1	水木 尚志	ミスキ タカシ	男	
3	浜田	2	出口 さつき	デグチ サツキ	女	
4	松江	2	藤原 生葉	フジハラ イクハ	女	総合文化学科
5	浜田	3	十川 ちひろ	ソガワ チヒロ	女	サブリーダー
6	浜田	1	杉本 繁純	スギモト シズミ	男	
7	浜田	2	黒木 大輔	クロキ ダイスケ	男	

◇島根県社会福祉協議会 島根県ボランティア隊 第2クール(5月29日(水)～6月2日(日))

キャンパス	学年	氏名	フリガナ	性別	備考	
1	浜田	3	土江 美来	ツチエ ミキ	女	リーダー
2	浜田	3	奥原 有希恵	オクハラ ユキエ	女	サブリーダー
3	浜田	3	笠根 純平	カサネ ジュンペイ	男	
4	浜田	3	岡 のぞみ	オカ ノゾミ	女	
5	浜田	2	藤原 克真	フジハラ カツマ	男	
6	浜田	2	川寄 弘貴	カワサキ ヒロキ	男	
7	浜田	3	井上 雄斗	イノウエ ユウト	男	
8	浜田	3	山口 達也	ヤマグチ タツヤ	男	
9	浜田	2	落合 敬和	オチアイ ヒロカズ	男	
10	浜田	1	橋口 奈々	ハシグチ ナナ	女	
11	浜田	1	谷川 奈都美	タニガワ ナツミ	女	
12	松江	1	畠山 さち子	ハタケヤマ サチコ	女	総合文化学科
13	浜田	3	橘 有輝	タチバナ ユウキ	男	
14	浜田	2	余村 考輔	ヨムラ コウスケ	男	
15	浜田	3	平野 健人	ヒラノ ケント	男	
16	浜田	2	安田 義大	ヤスダ アキヒロ	男	

区分	活動期間	全参加者数	3キャンパスの学生計	浜田Cの学生	松江Cの学生	出雲Cの学生	備考
(2) 住田町他「島根県災害ボランティア隊」(いわてGINGA-NET) (島根県社協主催：学生を対象)		43	14	8	1	5	男2女12 ほかに職員1
活動場所：岩手県内被災市町 (大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市、住田町ほか)	8月20日(火) 第1クール～27日(火)	19	4	2	1	1	
活動内容：仮設住宅でのサロン活動、子供向け学習支援活動等	8月27日(火) 第2クール～9月3日(火)	24	10	6	0	4	ほかに職員1

◇島根県社会福祉協議会 島根県ボランティア隊 第1クール(8月20日(火)~27日(火))

	キャンパス	学年	氏名	フリガナ	性別	備考
1	浜田	1	馬場 愛美	ババ アイミ	女	
2	浜田	1	恩田 麻有	オンダ マユ	女	
3	出雲	1	鉄森 友梨	テツモリ ユウリ	女	
4	松江	1	畠山 さち子	ハタケヤマ サチコ	女	

◇島根県社会福祉協議会 島根県ボランティア隊 第2クール(8月27日(火)~9月3日(火))

	キャンパス	学年	氏名	フリガナ	性別	備考
1	浜田	1	青木 美奈子	アオキ ミナコ	女	
2	浜田	2	森山 大地	モリヤマ ダイチ	男	
3	浜田	1	眞田 知歩	サナダ チホ	女	
4	浜田	3	十川 ちひろ	ソガワ チヒロ	女	
5	浜田	2	高木 千郷	タカギ チサト	男	
6	浜田	1	橋口 菜々	ハシグチ ナナ	女	
7	出雲	1	熱田 あかね	アツタ アカネ	女	
8	出雲	1	北川 千夏	キタガワ チナツ	女	
9	出雲	1	川上 夏樹	カワカミ ナツキ	女	
10	出雲	1	紅花 有紀	コウカ ユウキ	女	

区分	活動期間	全参加者数	3キャンパスの学生計	浜田Cの学生	松江Cの学生	出雲Cの学生	備考
(3) 南三陸町「島根県災害ボランティア隊」 (島根県社協主催:一般県民を対象)		42	3	1	2	0	男2女1
活動場所: 福島県南相馬市	12月21日(土) ~12月25日(水)	42	3	1	2	0	
活動内容: がれき撤去、被災家屋の片付け等							

	キャンパス	学籍番号	学年	氏名	フリガナ	性別	備考
1	浜田	5012093	2	齋藤 大介	サイトウ ダイスケ	男	
2	松江	7213144	1	無替 輝	ムカエ テル	男	
3	松江	7213104	1	新田 朱音	ニッタ アカネ	女	

区分	活動期間	全参加者数	3キャンパスの学生計	浜田Cの学生	松江Cの学生	出雲Cの学生	備考
(4) 「きっかけバス47」 (公益社団法人助け合いジャパン主催:47都道府県大学生対象)		40	8	6	2	0	女8
活動場所: 宮城県南三陸町	2月19日(水) ~22日(土)	40	8	6	2	0	
活動内容: がれき撤去、被災家屋の片付け等							

第1クール

	キャンパス	学籍番号	学年	氏名	フリガナ	性別	備考
1	浜田	5010014	4	石川 世菜	イシカワ セナ	女	
2	浜田	5010034	4	上治 陽香	ウエジ ハルカ	女	
3	浜田	5013169	1	原 奈津美	ハラ ナツミ	女	
4	浜田	5013186	1	松浦 夏美	マツウラ ナツミ	女	
5	浜田	5013030	1	岩永 実樹	イワナガ ミキ	女	
6	浜田	5013204	1	村上 さやか	ムラカミ サヤカ	女	
7	松江	7212102	2	深津 知里	フカツ チサト	女	
8	松江	7213042	1	河村 彩美	カワムラ アヤミ	女	

	全参加者数	3キャンパスの学生計	浜田Cの学生	松江Cの学生	出雲Cの学生	備考
平成25年 合計	176	48	36	7	5	男17女31 ほかに職員1
(参考)平成24年 合計	163	68	49	5	14	男39女43 ほかに教職員3

○「東北でのボランティアを経験して」

総合政策学部 3年生 十川 ちひろ

あれからもう3年の月日が流れるのかと、時の経つ早さには本当に驚かされる。

毎年3月11日、メディアによって被災地の現状が一斉に報道される中で、「復興が順調に進んでいるなんて、この状況を見ても言えるのか」と被災地で言われた言葉を思い出す。そして、テレビに映る光景に東北での思い出が鮮明に蘇る。

私が初めて東北を訪れたのは、震災から一年ほど経った時だった。それから何度かボランティアとして東北に足を運んだが、その度に自分の気持ちが変わっていったのを覚えている。いつからか被災地でしかなかった場所が、私にとっていろんなことを教えてくれる特別な場所となっていった。

本当に大切な人を失った時の喪失感や、誰かを救えなかった罪悪感と後悔。これからは見えない不安や行き場のない憤り。そこには私の知らないものがたくさんあった。東北でのボランティア活動中体育館の冷たい床で寝袋にくるまって眠る夜、突然強い地震が襲った。全身の鳥肌が立って、真っ先に家族の顔が頭に浮かんだ。いつまた地震が起こるか分からない。そんな不安を感じながら生活することが、どれだけ怖くてストレスがかかることなのか、少しだけ身を持ってわかったような気がした。

学習支援で子供と接した際には『家に帰りたくない』と居場所をなくした子供たちの叫びを直に感じた。わがままを言わず、まるで大人のように聞き分けよく振る舞う子供たちに「子供らしさ」を感じるなどなかった。ここにいないような、すぐに消えていなくなってしまうような、そんなもろさを感じて胸が苦しくなったのを覚えている。

初めは「何ができるか」。それだけしか考えていなかった。だから、一日の決まった活動内容が終わって、バスに乗り込む際には『来た時と少しも変わってないじゃないか』と活動場所を振り返って、何とも言えない申し訳なさや無力さを感じた。だけど、初めて仮設住宅や営業を再開したお店を訪ねた時、直接被災地の方とお話できる機会があった。あるパン屋さんにお邪魔した時、お店のパパさんが時間を割いて自らの経験を話してくれた。本当は自分が生き残ってしまったことに後悔していたこと。ボランティアの方々がしてくれていたことが正直苦痛になっていたこと。本当はこんなこと言っちゃいけないんだろうけどね。と、笑いながら話すにはとても残酷で重い話だったけれど、場が暗くならないように明るく振る舞うパパさんには、不思議と初めて会ったような気がしなかった。言葉の一つ一つが力強くて、話していくうちに自然と自分の中でずっと引っかかっていたものが、すつとどこかに追いやられたような気がして、『今まで何をそんなに悩むことがあったのか』と少し前の自分が可笑しくなった。今でもあの泣いてばかりいた子は元気にしてるのかと気にかけてくれる優しいパパさんが私は大好きだ。

そのときをきっかけに、私は自分がボランティアに行く意味とか何ができるかを考えるのをやめた。被災地から会いたい人が待っててくれる場所が変わった。だから、恋しくな

ったり元気が欲しくなった時お世話になった人たちに、東北の人たちに、「帰ってきたよ」と言える場所であって欲しいと願う。

また、東北へのボランティアを経験して私は初めて地域防災というものの存在について強く意識するようになった。近いうちに来ると予測されている南海トラフ地震。この地震が起これば、間違いなく私の故郷は無くなってしまいうだろう。できることなら起こってほしくなんかない。最悪の事態を想像したくもないけれど、それでも覚悟をしなければならぬ時が来ているのだと思う。もしもの時に自分は何ができるのか。今何をすべきなのか。

私は地域防災というものについて、今一度見直しそのあるべき姿とはどのようなものなのかという問題に今後取り組んでいきたいと思っている。東日本大震災を決して忘れないために、また、この出来事を決して無駄にしないために。そして、もちろん東北への支援も継続して行っていきたいと思っている。



平成 25 年 8 月 28 日～9 月 2 日

いわて GINGA-NET 第 2 期 パンカフェにて

「復興とは何か」そう聞かれてドキッとする自分がいた。復興という言葉の意味も考えないままこれまで「東北復興のために」という言葉を容易に使っていた自分が恥ずかしく、情けなく思った。震災からもうすぐ 3 年が経過するが私たちが訪れた陸前高田、南三陸、気仙沼はまだ復興には程遠い場所である。これから活動した内容と自分自身が見て学んで感じたことを、拙い言葉ではあるが書いていきたい。

活動 1 日目、陸前高田を訪れ最初に目にしたのが奇跡の 1 本松であった。この松を覆い隠すように重機が立ち並んでおり、この光景を見た時、復興は進んでいるように思えた。しかし、家という人々の財産はまだ還っていなかった。町の中を少し見て回った後の詮索作業では、結果より過程が大切であると学んだ。「探せなかった」ではなく、「探した」。これらの過程の積み重ねが、遺族にとって少しでも心の支えとなって欲しいと願った。作業の途中、交通安全の標識や生活用品、様々なものが土の中から出てきて動揺した。そして、人々の生活があった場所に私が立っているとは到底思えなかった。復興にはまだ何十年も時間がかかる。だから 3 年目にして風化を懸念することに対し、危機感を覚えた。

この日の夕食は復興屋台村・気仙沼横丁にて、マグロの三色丼をいただいた。大将には震災当時のことは勇気がなく聞けなかったが、震災後、俳優の渡辺謙さんが復興屋台村を訪れた時の話を伺った。次の日に行ったリアス・アーク美術館では、こんな言葉があった。「非日常に非日常を足しても日常には戻らない」。確かにそうだなと納得したが、その大将が大切にしている渡辺謙さんとの写真を思い出すと、人がその地を訪れエールを送ることは意味のあることであるように思えた。また是非まぐろ丼を食べに気仙沼を訪れたい。今までに食べたマグロで一番美味しかった。きっと同じ東北のためという思いを持った仲間と食べたからだと思う。

2 日目、午前中は語り部、釘子明さんのお話を伺った。釘子さんは震災直後、陸前高田市立第一中学校で避難所を立ち上げた。震災当時の話や防災について、これまで 6500 名以上の人に伝える活動を続けている。私は釘子さんの、危機的状況の中でリーダーシップを発揮し、人々をまとめた姿勢に大変感銘を受けた。一番心に残っている場面がある。それまで流していた動画を止め、私たち自身の防災意識について問いを投げかけたところだ。もし、自分が災害にあったとき、避難場所はどこにあるか、そしてその避難場所にはどのくらいの備蓄品があるか、私は全く知らなかった。東日本大震災からもう 3 年も経つがそんなことすら知らない自分に驚いた。そして「今回の震災を教訓としたい」と言ったことがあるのを思い出した。人に対しては立派そうに話していたのに対し、震災を自分のことに置き換えて考えていなかったことに気がついた。思い出すと辛いお話を釘子さんは私たちに伝えて下さった。「被害に合うのは私たちで十分です」。この訴えに涙し、釘子さんの熱い思いを島根でも必ず伝えたいと思った。伝えることで感謝の気持ちをお返ししたい。もし自分だったら、もし自分の町で災害があったら、とまず自分の意識から変えたい。そし

て伝えたい、誰もが自分は災害にあわないと思ひ込みをしていることを。

沢山の涙を流した後、私たちはリアス・アーク美術館を訪れた。写真や被災物それぞれが震災の恐ろしさを訴えていた。最も印象的であった写真はまぐろが腐ってヘドロのようになっていたものである。写真は匂いを発するものでないが、その写真を見ると臭いと感じた。震災直後、友人から漁業周辺の清掃を担当した話を聞いたことがあった。メディアから東北を見た時には匂いなんか伝わらない、目に見えるものでないから。同じ目に見えない人の心も伝わっていないのだなと考えた。実際に現地を訪れ自分の目で見て話を聞いて感じることの多さに戸惑った。メモを取ったノートを見返すと、字がそのときの感情を表現しているようにぐちゃぐちゃになっていた。

その後移動して「南三陸さんさん商店街」を訪れ、友人の上治さんの再会に付き添った。東北に行く前から商店街にご縁があることを聞いており、再会の場に立ちあえたことが、まるで自分のことのように嬉しかった。昼食後、元消防職員の佐藤富俊さんのお話を伺った。佐藤さんの話から1日目にガイドの小泉さんがおっしゃっていた「つなみてんでんこ」・「自分の命は自分で守る」という言葉を思い出させた。また、その言葉に少し違和感を覚えた。消防職員には人を助けるという使命や正義がある。また、防災庁舎で亡くなった方もそうだ。最後まで市民のことを考え災害放送を続け、命を落とした。なんだか、つなみてんでんこの言葉と行動が矛盾しているように思えて仕方なかった。どうすればより多くの命が救えるのだろうかと何度も考えた。「災害は忘れたところにやってくる」という言葉がある。日ごろの備えがどれだけ大切であるか、ここでもまた考えさせられた。

最終日は福島の除染プラザを訪れ、放射線について学んだ。私の母親はとても心配性で、震災直後福島の野菜は危ないなどと避けていた。私もそうだ。メディアが大げさに取り上げていると思ひながらも、警戒していた。なぜこのような行動をしてしまったのか。きっと正しい知識がないまま、ただ危ない、危ないと言っていたからだ。目で見えないものであるから、余計にうわさを信じてしまう。帰ったらまず母親に伝えたい、過剰反応は風評被害のもとであることを。

プラザに入ると最初に目に飛び込んできたのが、地域別の除染作業の実施状況であった。福島市はほぼ除染が完了しているのに対し、福島第一原子力発電所から近い地域では全く計画すら立っていなかった。また、汚染された土壌の仮置場も、地域によって数にばらつきがあり、除染が進まない原因の1つであるようだ。ここで疑問に思ったことが住民の同意を得て仮置場が作られているかということだ。危険なものは皆自分の周りに置きたくない。この仮置場、中間施設、最終処分場の負担は福島だけで解決するべきではないし、もっと考えるべきことである。最終処分場については何の案もなく、20年後にまる投げ状態。今から国民が真剣に考えるべき問題である。

4日間を終えた今、私が今後取り組みたいことを挙げていく。まずはより多くの人に「伝える」ことである。家族はもちろん友人に対し東北の今や防災意識について伝えたい。大切な人たちだからこそ、伝えたいし、もしもの時の災害で失いたくない。またイベントな

どを計画し、市民の方に対して伝えたい。ご支援に対する感謝の気持ちを常に忘れず企画、運営をしようと考えている。

次に「調べる」。避難場所にはどれだけの備蓄品があるかを自分の足を使って調べたい。「あなたの避難場所にはどれくらいの備蓄品がありますか」と聞かれたとき、答えられる人はほとんどいないだろう。市に対して卒業までに防災意識を改める提言がしたい。そのために、もう一度浜田市の防災マップに改善点がないか、災害情報の発信に改善点がないかを調べたい。

そして、最後に「継続」させる。伝える活動や今回で出会った仲間の輪大切にし、いつまでもそのご縁を大切にしたい。これらの活動が風化なんて言葉を無くしてしまうパワーがある。

最後になりますが、きっかけバスにご支援いただいた皆さま、今回出会えた皆様に心から感謝致します。ありがとうございました。社会人になっても東北を思い続けることを忘れません。また、今後ともよろしくお願い致します。

○きっかけバス47に参加して

総合政策学部 4年生 上治 陽香

○はじめに

きっかけバス47とは、公益社団法人「たすけあいジャパン」主催のもと47都道府県の学生を東北に連れて行くボランティアバスプロジェクトである。3.11から3年経とうとしている現在も東北の人々は「風化」「風評」に苦しんでいる。メディアや生活の中で東北について震災について触れられることが少なくなってしまう今、もう一度東北について話すきっかけを。もう一度東北に行くきっかけを。もう一度復興に関わるきっかけを。もう一度3.11の教訓を学び、次の防災につながるきっかけを。

復興も3年目、もう一度東北とのきっかけを作るためたくさんの人の想いととも全国に学生、合計2000人が現地に派遣されている。きっかけバス島根は島根県内の学生40人を乗せ、2月19日から22日までの4日間東北3県（岩手・宮城・福島）を訪れ、現地での活動を行った。活動の中での出会いから新しく芽生えた感情、今後への決意。

たくさんの想いが東北から帰って来た私の中には存在しているが、今回の報告書では私が4日間の活動の中で一番印象に残っている3日目の釘子明さんによる講演「震災と防災」を中心にまとめていきたい。

○釘子明さんの講演「震災と防災」

釘子さんのお話を聞いて私の中での一番変化は、震災を他人事ではなく自分事だと思えるようになったことである。

私はこれまで2度東北を訪れたことがあった。しかし、初めて訪れたのが震災から1年経った頃だったこと、被災者の方から話を聞く機会が少なかったことからボランティア作業をしてもそこに人々の生活があったことを実はあまりイメージできていなかった。心のどこかで「東北＝被災地」と勝手に決めつけ、いつの間にか自分の住む世界との間に線を引いていたのかもしれない。

このことに気づかせてくれ、私の考え方を180度変えてくれたのは、活動3日目の釘子明さんの「震災と防災」の講演であった。釘子さん自身も被災され、避難した陸前高田市立第一中学校に避難所を立ち上げられた。現在までに6500人を超える人々に語り部として3.11の記憶を後世に伝えておられる。

講演ではどのように避難所を立ち上げ、その際何が重要なのかなどたくさんの貴重なお話を聞くことができ、中でも私が一番印象に残っているのは陸前高田市の被災前の姿を残した1本のスライドショーであった。

そこには、陸前高田の海岸で海水浴を楽しむ人々の姿、私が今住む浜田市とほとんど変わらない普通の生活風景が写されており、今は何もない場所だけれどもたくさんの人々の生活がここには存在し、震災は他人事ではなく私たちの住む場所でも起こりうることなの

だと気づかされた。そしてここでやっとなぜ防災意識が大切なのか理解出来た。

今回のきっかけバス4日間のプログラムの中では釘子さん以外にもたくさんの人に震災当時のことを聞く機会があった。いくら震災から3年経つとはいえ、震災当時のことを思い出すのは私たちが考える以上につらいことだと思う。しかし2度と同じ事が起こらぬよう語り手の人々は当時のことを私たちに涙ながらに語ってくださった。

私は彼らの想いを無駄にしたくない。

○今後の活動

私はきっかけバスを通してたくさんの方々の被災者の方々からの想いを受け取った。この想いに答えるためにも私たちに被災地で見たと感じたことを今住んでいる場所に持ち帰り伝える責任がある。そのために具体的に何ができるのか。

私は4日間の報告を地域の人々に伝えるとともに今住んでいる地域の防災マニュアルを作ることにした。きっかけバスに参加するまで私が被災地のことを他人事だと思っていたように、未だ大勢の人々が被災地について、防災についてよく知らず他人事ととらえてしまっているのが現状だ。このままではもし今地震が起きてしまったら、3.11と同じ事が起こらないとも限らない。

そうならないためにも、まずは自分が住む地域の中で防災意識を高め、災害が起きた時に何を持ち、どこに行き、何をしたらいいのか常に最悪の状況を想定し危機管理の気持ちを持っておくことが、防災には一番重要なのではないかと私は考えた。

私は現在大学4年生で大学生活も残り1カ月と少ない。少ないからこそ、この1カ月の間に4日間で得た情報をまとめ文章化して、4年間お世話になった浜田市民の皆様に広め恩返しが出来れば良いと考えている。

そして社会人になってからも東北の人々、支援者の方々の想いを無駄にしないよう自分にできる活動が続けていく。

○さいごに

きっかけバスの運行は皆様のご支援とご理解無くしてはできなかったことである。きっかけバス運行にあたり、支援してくださいました大学職員・島根県市民のみなさまにこの場をお借りして御礼申し上げます。これからもきっかけバス島根・きっかけバス47の活動は続いていきますので今後ともご支援のほどよろしくお願い致します。

○東北を訪れてみて

総合政策学部 1年生 岩永 実樹

私は2月19日から22日にきっかけバスで岩手県、宮城県、福島県の3県に行ってきました。私はボランティアに参加したのも東北に行ったのも初めてでしたが、東北について考え、自分がこれからできることはなにかを真剣に考えることができる4日間でした。

最初に岩手県の陸前高田市で遺留品を探す作業を行い、バスの中で語り部さんの話をお伺いしました。

津波によって海と沼が1つになってしまった場所での作業でしたが、水が少し凍っている程でとても寒く、『こんな寒さの中で何日も助けを待った人たちも沢山おられた』など当たり前のことかもしれませんが改めて思いました。他にも現在の東北の状況、津波がどのくらいの高さまで来たのか、被災者や語り部さんの話を実際にその地で聞くことにより、ようやく現実のものとして感じる事ができたと思います。

特に印象に残っているものの1つとして、語り部の方がおっしゃった「被災者の気持ちをわかったふりをしない」という言葉です。

確かに私はあの震災を経験したわけではありませんので、経験された方の気持ちがどのようなものか、言い方は悪いですが『わかるはずはない』と思いました。

しかし、分かったふりをせずに被災者の方の気持ちに寄り添い、何ができるのか考えていくことが大切なことだと感じました。

次に宮城県に移動し、語り部の釘子さんのお話をお伺いさせていただきました。リアス・アーク美術館、南三陸のさんさん商店街、戸倉中学校、防災庁舎などにも訪問しました。

語り部の釘子さんの話に「自分の住んでいるところの避難場所を知り、そこが安全か、さらにその避難場所にはどのくらいの備蓄があるかを知って備えておくことが亡くなった方の供養にもなる」という言葉がありました。私は島根県でも地元でも避難場所さえ知りませんでした。いつ自分の身に起こることかをどのくらい想定し、それがどれだけ大事なことになるのかを感じました。

リアス・アーク美術館では、家が跡形もなく無くなっている様子や、屋根に車が乗っている様子など、普通では考えられない状況の写真が多く展示してあり、とても衝撃的でした。

また、福島県の除染プラザでは放射線について勉強しました。除染プラザでは知らないことは怖いことだと感じました。風評などで人を傷つけたりすることもあるからです。放射能についても正しい知識を持つことが大事だと感じました。

私は、『きっかけバス』に参加するまでは、どこか東北について無関心で、また正しい知識もありませんでした。だからこそ実際に行って学んだことは多かったと思っています。

今回たくさんの方の話を伺うことが出来ましたが、共通しておっしゃっていたのは「東北大震災のことを忘れないでほしい」「伝えていってほしい」ということでした。自分自身こ

れからやっていかないといけないことは風化させないことと伝えていくことだと強く感じました。

テレビなどでも以前ほど東北の事について報道されることが少なくなっているように感じます。だからこそ自分の目で実際に見た人が伝えていく必要があると思います。

私の周りにはきっかけバスに参加する以前の私のように、東北に関してあまり関心もない人が多くいます。そのような人に少しでも関心をもって東北について考えてもらえるように話していきたいと考えています。

他にも感じたことはたくさんあり、言葉にすることは難しいことだと思いますが東北について感じたことを家族・友達・他の多くの人に伝えていけたらと思います。そして少しでも多くの人に東北について考え、足を運んでもらえたら良いと思います。行ってみて初めて感じることも多いと思います。

私の場合、関心を持つことから始まった、『きっかけバス』に参加したことにより多くのことを感じる事ができこれから自分にできることも多少なり見つけることが出来たような気がします。またいつか東北を訪れようと思いました。本当に参加してよかったです。

この『きっかけバス』は多くの方からの支援があっはじめて成功できた事業です。

ご支援下さいました皆様方に深く感謝しています。

ありがとうございました。

○初めて東北を訪れてみて

総合政策学部 1年生 原 奈津美

わたしは今回の「きっかけバス」で、初めて東北に行かせていただきました。

初めて訪れる東北での4日間により、自分の中で変わったと思う部分があります。それは、東北を訪れる前まで、震災は写真や映像、メディアを通してしか知ることがなかったので、「とても辛い出来事だけど、わたしにはきっと震災は起こらないからなあ」、と正直とても他人事でした。震災というものがあまりに現実離れしていて、本当に同じ日本で起こっている出来事なのか、受け入れることができていませんでした。

しかし、この4日間、お話を聞いて、被災地を自分の足で歩き自分の目で実際に見ることにより、自分の周りで起こることを想定して置き換えることができました。テレビで津波の高さを伝えられても想像がつかせませんでした。実際に津波の被害にあった中学校を訪れ、自分の居る場所からの高さを見て、どれほどの高さで津波がきたのかリアルに感じました。わたしは今、決して他人事ではないと思っています。自分の「大丈夫」という思い込みをこのまま持っていては、東日本大震災で何も学べていないと思います。

わたしたちは、この震災で多くのことを学んだと思います。特にわたしは自分の防災意識の低さを改めて実感しました。だから、わたしは自分を含め、より多くの人に防災意識を高めてほしいと思います。そのために、わたしは今回のきっかけバスに参加して得たたくさんの方のことを伝えたいです。それを自分の身近な人だけに知ってもらいたいのではなく、その身近な人の身近な人にもまた、伝えてほしいと思っています。

そのためには、わたし自身がいかにかリアルに、正確に伝えられるかが課題になると思います。伝えたいこととしては、たくさんありますが、一番に「避難場所の確認」です。わたしの実家は海にとっても近い所に位置しています。しかし、周りの人から「島根はめったに地震ないよ、津波もこないみたいだよ」と言われていて、恥ずかしながら避難場所の確認はしたことが一度もありませんでした。

わたしは東北から帰ってきてから、家族と避難場所について話し合いました。しかし、世間一般には、『東北に行く前のわたし』のような考えの人はまだまだたくさんいると思います。だから、思い込みの怖さ、想定外のことも起こるということ、避難場所の確認の重要性を伝えたいです。

もうひとつ、福島県にある除染プラザを訪ねたとき、福島の人々は、“福島に住んでいる”、それだけでイジメにあい、“福島で作られたもの”、それだけで不買が起きる、その事実を実際に体験した方々から聞いて、わたしはとても悔しい気持ちになりました。本当は、安心して安全にもかかわらず、福島県＝原発、という概念が人々の中で出来上がってしまっているが故に、悲しい思いをする人がいることがとても悔しいです。だから、この間違った認識を取り払うために、福島の食べ物や観光に良い場所の紹介もしたいです。そうすることで、福島県＝原発、ではなく、福島県＝訪れたい場所、にしたいです。

わたしは、今回のきっかけバスで学んだたくさんの方のことを多くの人に伝えたいです。

○初めて東北に行って

総合政策学部 1年生 松浦 夏実

初めて東北に行かせていただき、行く前と行った後で、自分の中で気持ちの変化がありました。行く前は『もう東日本大震災が起こってから3年が経とうとしているので、少しは復興が進んでいるのではないのか』と思っていました。実際に行ってみると、周りを見渡しても何もありませんでした。津波がくる前の写真をみせてもらいましたが、私はその写真を見ても、理解ができませんでした。写真の中の風景が普通だと思っていたので、とても衝撃が大きかったです。ここに家が建っており、生活をしているという雰囲気は全くなく、感じる事が出来ませんでした。

東北に行き、被災した場所を目の当たりにしたときに、『津波の高さがここまで来た』というラインが引いてありました。その高さは想像より遥かに高く、誰にも予想できないように思いました。避難所になった坂の上にある学校にも実際に行きましたが、そこまで津波がくるなんて思えませんし、『実際にここまで津波が来た』と聞いても、まだ信じる事が出来ませんでした。防災庁舎に行き、助かった方がどのようにして助かったのか、というお話を伺いました。『津波が凄い勢いで押し寄せてきて、必死にその辺にある「鉄の棒みたいなもの」につかまり、何度も離しそうになりながらもしがみついた』というお話を聞きました。鉄の棒が曲がっていたので凄まじい水の力であったのだ、ということが分かりました。被災物を見るのはとても辛かったです。

また、遺族の方のお話を聞かせていただきました。そこで『被災物を残すのか、残さないのか』という議論が、遺族のなかで問題になっていると聞きました。私はお話を聞く前までは、残すべきだと思っていました。今後も残してそれ(被災物)は東日本大震災のことを知らない世代にも知ってもらったほうが良いと思っていました。しかし、遺族の中には『早く取り壊してほしい』という意見もあるそうです。それは、その被災物を見るたびに東日本大震災のことを思い出すから、というものでした。私はそんなことも知らずに残したほうが良いと思っていました。ですが、今回実際に東北に行ってみて、今回質問をされたときには『わかりません』と答えてしまうと思います。

東北に実際に行ってみて、自分の知識の無さを知りました。こんなにも他人事のように考えていたことが、日本で起こっていました。『自分には関係ない』なんて思っていたのは間違いでした。また嘘の噂も信じてしまっていました。実際に行ってみて、とても学ぶことが多かったです。今回学んだことを周りの方々に伝えて、防災について考えていく必要があると思いました。今ではニュースなどであまり取り上げられることも少なくなっているため、他人事のように考えている人もいます。私も、今回東北に行かなかったら、多分『私には関係ない』と思っていたと思います。本当に行くことができよかったと思います。

○私が見た東北

総合政策学部 1年生 村上 さやか

今回きっかけバスに参加して、人生の中でも本当に濃い4日間を過ごさせていただきました。1日目はほとんど移動で終わったのですが、2日目に陸前高田市を訪れました。そこから見た景色は想像とまったく違っていました。奇跡の1本松の前には重機やベルトコンベアがきていて、1本松がどこにあるかすぐに見つけられないくらい、奥にひっそりと立っていました。元陸前高田駅前には更地が広がっていて、本当に何もありませんでした。建物がほとんど建っていないので、すごく遠くの方の道路を走る車まで見えました。砂埃をたくさんかぶった道路と歩道だけがあり、3年間でここまで何も進んでいないのかと思いました。一般の車両などほとんど通らず、通るのはすごく大きいトラックばかりでした。3年たった今も、まだまだ復興途中であることを強く感じました。

津波の高さが書いてある建物を見たとき、本当に驚きました。津波が凄まじいものだったことは知っていましたが、自分の身長と直に比べてみて、その大きさにぞっとしました。

陸前高田市の景色を見たとき、言葉も出ませんでした。本当にここに町があったのか、あったとしてどんな町が広がっていたのか、全く想像がつかない、という状態でした。

今回のボランティアは、『ふるいかけ』という工事現場の人が集めてくれた砂の中から、遺骨などを見つける作業でした。作業を行いながら、今の私たちにできることはこれであり、また見つかる、見つからないが問題ではなく、この作業がすごく大事だと思いました。時間のかかる作業ですが、埋め立てられたら2度と掘り起こせなくなります。被災者の方たちが掘り起こしたくても、自分たちの生活や、復旧のための工事を進めていかなければなりません。だからこそ、ボランティアとして派遣される大学生などの私たちが力を発揮できる、お役に立てると思います。見つかる、見つからないが問題ではなく、この作業を一生懸命することが、亡くなった方への供養になるそうです。私達ボランティアが今の被災地にできることは限られていますが、そのできることをしっかり、丁寧にすることが大事だと思いました。

最後に、バスに戻ってから、ボランティアセンターの方から聞いた話の中でも、家が流された人と流されなかった人の間の『心の壁』の話が印象深いです。流された人は物資がもらえたそうですが、流されなかった人はもらえなかったそうです。そうしたことから、復興を進めている今でも、市内で分裂が続いているようで、とても根深い問題となっているようです。

その後、ホテルに移動してダイアログを行いました。島根だけに限らず、徳島県や京都府の方とも交流ができ、異なる活動をしてきた方から違った角度の話も聞くことが出来ました。

このダイアログを通して、考え方は1つではなく、人がいる分それだけの数の考え方があるのだと思いました。ほかの人の意見を聞いて改めて考えたり、新しいことに気付くことができたので、ここで多くの人とダイアログできたのは、自分にとって大きな意味があ

りました。私は、自分の考えをほかの人に伝えるのは苦手ですが、みなさんが熱心に聞いてくれるので、非常に話しやすかったです。

3日目、朝に高田第一中学校の避難所をまとめていた釘子さんの話を聞きました。ここでは、津波の悲惨さもたくさん学びましたが、それと同時に避難所のことをたくさん学びました。

釘子さんが強く仰っていたのは、「自分の地域の避難場所を帰ったら、確認してください!!!」ということでした。これが亡くなった方にとって1番の供養になると仰っていたのが、忘れられません。「人はみんな、自分は災害に合わないと思い込んでいる、がそれは違う。」と話されました。私もそう思いこんでいて、災害に対する対策を今まで何も考えていませんでした。しかし、釘子さんの話を聞いて、自分の考えを改め、『もっと災害について知っておかなければならない』と思いました。

そのあとに被災地でのことを話してくださる語り部の佐藤さんにバスに乗ってもらって南三陸を回りました。その時に、高い丘の上にある中学校を訪れたのですが、驚いたことにその高さまで津波が襲ってきたそうです。これは、本当に信じられませんでした。なかなかその事実を受け入れられませんでした。人間この高さまで、避難していればまず大丈夫と思うような高さですが、校舎の横から津波が現れ、駐車場で車の中にいた人が車ごと波にさらわれたそうです。中学生たちは、幸い校長先生のとっさの判断でさらに上に避難していたため大丈夫だったそうです。

防災庁舎を訪れた時も、衝撃でした。高さ3階建てのビルの骨組みだけが残っているのですが、見上げてもすごく高さのある建物でした。そのビルの屋上まで波が来たそうです。全く想像がつかみませんし、信じられませんでした。ここまで上でもダメなのか...と固まってしまいました。佐藤さんの娘さんのご主人がここで働いていたそうです。もっと手すりが頑丈にできていれば流されなかったかもしれない...と少し涙ぐみながら話してくださいました。43名もの方がここで流されたそうです。津波があつてから、3年間この辛い思い出したくもないような話をボランティアの方が来るたびにずっと話してくださっているのかと思うと心が痛いです。3年たった今でも、涙ぐんでしまうほどの話を、何回も何回もしなければならぬほど辛いことはないと思います。

今回の佐藤さんのように、誰かが教えてくれなければ、知ることが出来ませんし、後々にこのことを伝えていくことが出来ません。釘子さんの話も含めて、聞いて思うのは、やはり現地のひとにとってはあのころのまま思いが全く風化していない、ということでした。

きっかけバスを終えて、今まで自分がいかに東北を知ろうとしていなかったか、テレビの情報で上辺だけでわかったつもりになっていたかを痛感しました。

私は四日間のきっかけバスを終えて島根に帰ってきましたが、東北では今回見てきた現状が今もずっと続いていて、少しずつ復興に向けて進んでいる途中であるということ、今回見てきた東北のことを忘れないこと、これからも東北に対して関心を向け続けること、そして、少しでも多くの人たちに東北のことを伝えることが大事だと思いました。

行く前は、行ったら終わりで自分が学ぶことしか考えていませんでしたが、そうではなく、東北という遠いところで起こったことを島根まで持って帰って伝えることが大事だと思いました。

また、震災のことを学んで、自分たちの住む地域の防災についても考えるきっかけとなりました。震災のことを知ろうとするばかりで、防災には、あまり関心を持っていませんでしたが、東北を訪れて、語り部の佐藤さんや釘子さんなどいろいろな方々の話から、みなさんには同じ思いをしてほしくない・災害はなくならないが、被災者は減らせるなど強いメッセージをたくさんいただいて、浜田の防災のことをあまりに何も知らないのですごく不安になりました。

浜田のことを知ることも重要だと思いました。

○遠くを近くに。他人事を自分事に。

総合政策学部 2年生 森山 大地

東日本大震災から 2 年半が経過した昨年夏、私は初めて被災地を訪れた。メディアでもとりあがることが少なくなり、遠い島根ではますます復興状況がわからない状態で参加した「いわて GINGA-NET プロジェクト夏銀河 2013」は私にとって有意義な 1 週間であった。島根県から活動拠点である岩手県釜石市との距離はおよそ 1500km、片道 22 時間の長旅だった。あの津波に飲み込まれた町並みはすっかり雑草で広がっており、あちらこちらに家の基礎となっていたコンクリートが目立っていた。学生スタッフとして参加していた盛岡大学の友人は「あの津波がなかったら、この家には帰る人がいてそれを迎え入れる家族が待っていて、「おかえり」「ただいま」のような、ありふれた温かい日常が今でも続いていたと思うとやりきれない。」と視察中に話してくれた。普段の生活のありがたみを実感した。津波は 7m の大型堤防を軽々と越えて釜石市の町を襲った。私は、まさにその現場、釜石港で漁師さんの昆布漁の手伝いをした。地域の方のニーズに沿った支援を参加した学生達が実行しているこのボランティアは、瓦礫撤去のような成果が目に見える支援とは違い、結果がなかなか見えず悩んでいた。だが、漁師さんをはじめ、地域の方からの感謝の言葉、若い学生が来てくれるだけで嬉しいと話してくださった。震災後、ボランティアに求められていた瓦礫撤去等の体を張る支援から 2 年半が経過して、求められているのは心の支援ではないか。

1 週間という短い期間であったが、岩手県が身近な場所になった。見たもの、聞いたもの感じたものを、自分が住んでいる島根県に帰って活かしたい。岩手県で過ごした経験や思いを次に繋げるべく、3 月 10 日に共に活動してきた島根大学、島根県立大学出雲キャンパスの学生との合同イベント「東日本大震災から 3 年。～遠くから近くに。他人事を自分ごとにしよう～」を開催した。「遠くを近くに。他人事を自分事に」というテーマで東北から距離のある島根県でもう一度、東日本大震災を見つめ直す契機としていただくことを目的として、活動報告や、参加者全体で意見交換、情報共有のできるワークショップを行った。震災、復興支援を知り、他人事を自分事に近づけ、二度と同じ悲劇を繰り返さないために、自分の地域で地震に備える。そのために、3 月 11 日の教訓をいかに生活に活かすことが必要だ。私は、「いつてきます」「ただいま」という日常がいかに幸せであるのか、地域コミュニティの必要性など、震災に向き合うことで今後の生活を見直すきっかけになった。

夏に体験した GINGA-NET プロジェクトから半年経過したが、格別な気持ちで 3 月 11 日を向かえることができた。私は、今後も体験したことを伝え、情報共有、他人事を自分事にして自分の地域で考える場を継続して創り出していきたい。

【GINGA - NET 報告会】

日 時：平成 26 年 3 月 10 日（月）13：30～17：30

会 場：島根大学 教育学部棟 35 番教室（島根県松江市西川津町 1060）

参加者：島根大学、島根県立大学の学生 15 名

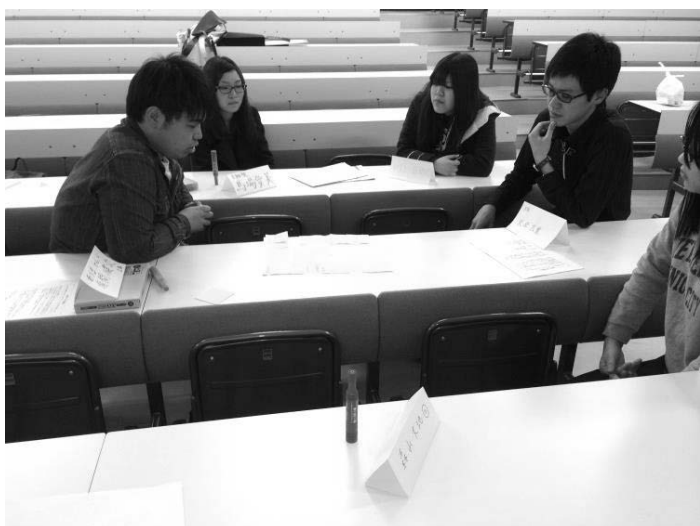
内 容：〔第 1 部〕現地紹介

〔第 2 部〕6 班より GINGA - NET 活動報告

〔第 3 部〕意見交換ワークショップ



報告会の参加学生



ワークショップの様子

2. 島根県西部における大雨災害ボランティア活動2013記録

○ボランティアに参加するということ

総合政策学部 2年生 井上 洲

私は今までボランティアに参加すること、これに一步を踏み出すことができていなかった。大学入学時には、ボランティア活動にできるだけ参加する、という目標を立てていたのだが、大学生活をしていくにつれ、違う興味も出てきて、いつしか考え方が変わっていた。東日本大震災では、大学からたくさんの学生がボランティアのために、東北に行って活動する中、私はそれができずにいた。スケジュールが合わなかったこともあるが、どこかで「自分が現地に行ったところで何か変わるのか」という思いがあった。そんな時、2013年の夏、島根県の一部地域が大雨により大きな被害を受けた。そのとき私は異文化理解研修で中国にいて、このことはネットのニュースで知った。この時は、あまり内容を知らず、自分であり大きなことは起こっていないと判断した。日本に帰ってきて、浜田市内は水没したところがあったと聞いたくらいで、そのほかの地域の実情はあまり知らなかった。そんな時、知人から「一緒に浜田市災害ボランティアに参加しないか」と誘いを受けた。そこでいい機会だと思い、参加を決めた。このボランティアに参加したことで、今までとは違う視点から物事を見ることができるようになった。参加することが大事なことを学んだ体験でもあった。

参加することで、今まで見えていなかったものが見えるようになった。災害ボランティアの大変さだ。これは体験しないとわからないことだろう。私たちは浜田市有福という地域でボランティア活動を行った。川の近くの家の床下の泥出し作業であったが、想像していたものとは全く違うものであった。床下は天井が低く、真っ暗なため腰を曲げてライトで照らしながらの作業になったのだが、泥が少し乾いて固まっており外に運び出すのも重労働になった。さらにこの日は雨が降っており、少し肌寒く体力も奪われるスピードが速かった。このような過酷な環境ですらにつらいことをするのは、容易なことではないだろう。しかし、このボランティア活動の中で印象深い出来事がある。それは、地域の人とのつながりだ。ひと段落ついて休憩に入ったとき、私はお昼ご飯を忘れてきてしまった。そのとき、私が泥出し作業をしていた家主のおばあちゃんがおにぎりをくださった。そして「わざわざありがとね。ほんと助かるよ」と言ってくくださった。私は思った。この一言にボランティアをすることの意義がすべて含まれているのではないかと。どんなにつらく大変な作業にも必死で頑張れるのは、このような言葉の支えがあるからではないだろうか。この活動には全国をボランティアしながら回っておられる方もいらっしゃった。この人の気持ちが少しわかったような気もした。人と人が支えあうボランティア活動ができたことに私はとても考えさせられた。

今まで自己完結していたボランティアに対する考え方は、この活動を通じて変わった。

自分が何かやったところで現状打破はできないが、人とのつながりができ、その人に対して何かしら届けることができる。今回は、気持ちのつながりという面でボランティア活動ができたのではないだろうか。たしかに、一回活動しただけでは泥もすべて出し切ることはできなかったし、この家だけが災害にあっているわけではない。今回も島根県立大学からは 7 名の学生しか参加がなかった。まだまだ改善していくこともみつかった。これらは今回参加することで見えてきたものだ。今までの自分から何か変わることができるきっかけにもなったと思う。これからは、まず参加して問題点を見つけ、自分が何か役立つことに力をいれていきたいと思う。

○「浜田市災害ボランティアに参加して」

総合政策学部 2年生 小暮 里奈

私は東日本大震災の被災者である。私の地元は栃木県にあり、当時は高校2年生だった。ちょうど下校前の掃除の時間にそれは起こった。校舎の壁の一部分は崩れ、私たちは校庭に避難した。交通は大混乱になり、家へ帰るのにも長い間待たされた。やっとの思いで家に帰ってみると、物は落下して散乱し、テレビではしきりに警報音が鳴り続いた。それからしばらく学校が休みになり、自宅待機が続いたが、私たちを苦しめたのは計画停電だった。夕方から夜にかけて電気が使えないのが一番辛かった。読書をしようとしても暗くて字が読めなかった。じっとしていてもただ寒いだけなので、見えないピアノの鍵盤を懸命に弾いた。

時は過ぎ大学2年生の夏、浜田市を豪雨が襲った。私の住んでいるアパートの目の前の川は幸い氾濫せずに済んだが、数か所の地域では氾濫した川に大損害を被った。私は東日本大震災の復興に協力できないでいたので、今回は参加しないわけにはいかなかった。多くの被災者が私たちの助けを待っていると思うと、無視はできなかった。

いざ災害ボランティアとして現地に行ってみると、家の軒下には川によって流れてきた泥や枝がたくさん入ってしまっていて、悪臭が漂っていた。家の壁には枝が絡まっており、当時の川の水位の高さを物語っていた。私たちにできることは、軒下に入った泥を大きなシャベルで掬っては袋に詰めるという作業を繰り返していくことだけだった。狭くて腰をかがめての作業と酸素が少ない環境のせい、作業を始めてからすぐに疲れてしまった。泥は水を含んで重くなり、かなりの力が必要だった。いつの間にか皆の顔からは笑みがなくなっていた。途中で何度も休憩を挟みながら、自分のペースで作業を進めていった。

現場では、様々な光景が見られた。そこからたくさんのことを学び取った。まず、グループのリーダーになった人は、メンバー全員に分担して役割を与えなければ、効率が悪くなってしまうということである。私たちは初め、何をしていたかわからず、黙々と一人で作業を進めてしまうリーダーをただ見ているしかできなかった。つまり、現場を知らない初心者は、邪魔者になってしまうことがありうるということだ。また、途中から合流することになったもう一つの社会人グループが加わると、あっという間に泥が片付いていったことから、チームワークや経験の差は顕著に表れるということが分かった。自分ひとりの力の無力さを思い知った。一方、一緒に活動したグループには、ボランティアのために遠方からひとり駆けつけて来たという男性がいた。その男性はボランティアに必要な機材を寄付し、全国をまわっていると言った。この方からは豆知識をたくさん教えていただいた。例えば、肌を擦りきって傷つけてしまったときは、すぐに消毒するということだ。これは、川の泥は細菌が繁殖しているため、普段以上に注意しなければならないからである。

このように、ボランティアは様々な人々との交流で成り立っている。同じ志を持って活動する仲間がたくさんでき、次もまたやろう、という気にさせてくれる。これは一度体験

してみないと分からないものだと思う。「困っている人のために協力したい」というその想いが、人々の心に届き、広がっていく。

人はひとりでは生きられない。人々と関わることの大切さを感じることができるボランティア。私たち大学生はまだまだ地域に求められている。皆が問題意識を持ち、地域のために行動できる風潮が広まってほしい。

Ⅲ. 3キャンパス合同事業

1. 「地(知)の拠点整備事業(大学 COC 事業)」平成25年度全域プラットフォームの実施状況

1) 「地(知)の拠点整備事業(大学 COC 事業)」キックオフ・ミーティング



平成 25 年年 10 月 29 日(火)、島根県立大学 交流センター コンベンションホールにて文部科学省 平成 25 年度「地(知)の拠点整備事業(大学 COC 事業)」『地域と大学の共育・共創・共生に向けた縁結びプラットフォーム』キックオフ・ミーティングを開催しました。

島根県をはじめ、副申を頂いた自治体や関係団体のみなさまにお越し頂き、事業概要について説明を行いました。事業期間は平成 25 年～平成 29 年の 5 年間です。

公立大学法人島根県立大学 本田雄一理事長のあいさつ、地域連携推進センター 林秀司センター長、島根県立大学短期大学部 山下由紀恵副学長の事業説明に続き、各キャンパスによる地域活動の取り組みについての発表を行いました。

また、キャンパス・プラットフォームの取り組みについては、しまね看護交流センター 齋藤茂子センター長が、縁結びプラットフォームでの事業展開のイメージについては、島根県立大学 山下一也副学長がエゴマを例に発表を行いました。



島根県立大学憲章前文にもある「地域のニーズに応え、地域と協働し、地域に信頼される大学」を実現するために、地域と一丸となって事業に取り組んでいきたいと思えます。

2) 縁結びプラットフォーム運営委員会設立総会

縁結びプラットフォーム運営委員会設立総会次第

日時：平成 26 年 2 月 21 日（金）

10:00～11:30

会場：島根県立大学 浜田キャンパス
交流センター研修室

1 開会

2 あいさつ

3 事業概要の説明

・本学 COC 事業「地域と大学の共育・共創・共生に向けたプラットフォーム」

①島根県立大学の事業概要

島根県立大学地域連携推進センター長 林 秀司 教授

②島根県立大学短期大学部の事業概要

島根県立大学短期大学部副学長 山下由紀恵 教授

4 議事

【第 1 号議案】 規約（案）について

【第 2 号議案】 体制と役員（案）について

5 その他

・縁結びプラットフォーム運営委員会に係る今後の活動スケジュール

6 閉会

【議案第 1 号】

縁結びプラットフォーム運営委員会規約（案）

（名称）

第 1 条 本委員会は、縁結びプラットフォーム運営委員会（以下「運営委員会」という。）と称する。

（目的）

第 2 条 運営委員会は、地域と共に将来を担う人材を共育し、住み良い地域を共創し、持続可能な共生社会の実現を目指す「縁結びプラットフォーム」において、地域課題解決に向けた取組を推進することを目的とする。

（事業）

第 3 条 運営委員会は、その目的を達成するため、次の事業を実施する。

- (1) 縁結びプラットフォームにおける「共育」「共創」「共生」の各事業の実施に関する事
- (2) その他前条の目的を達成するために必要な事項

（事務局）

第 4 条 運営委員会は、事務局を浜田キャンパス地域連携課内に置く。

（構成）

第 5 条 運営委員会は、副申提出自治体、経済団体、NPO 法人及び公立大学法人島根県立大学（以下「大学法人」という。）等から選出された委員をもって構成する。

（委員の任期）

第 6 条 委員の任期は、2 年とする。ただし、再任を妨げない。

2 補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

（役員）

第 7 条 運営委員会に、次の役員を置く。

(1) 会長 1 名

(2) 副会長 3 名以内

2 会長は、大学法人理事長を充てる。

3 副会長は、会長が委員の中から選任する。

（役員の仕事）

第 8 条 会長は、運営委員会を代表し、会務を総理する。

2 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき、又は会長が欠けたと

きは、会長があらかじめ指定した順序により、その会務を代理する。

(顧問)

第9条 第7条に定めるもののほか、運営委員会に顧問を置くことができる。

2 顧問は、総会の承認を得て、会長が選任する。

3 顧問は、会長の要請に応じて運営委員会の運営に関し必要な助言を行う。

(総会)

第10条 総会は、年1回開催する。ただし、会長が必要と認めるときは、別に定める学内推進委員会に諮ったうえで、臨時総会を開催することができる。

2 総会は、次の事項について審議し、議決する。

(1) 年度計画に関すること

(2) 年度報告に関すること

(3) 年度事業評価に関すること

(4) 規約の制定、改廃に関すること

(5) その他運営委員会の運営及び目的達成に必要な事項に関すること

3 総会は、会長が招集し、会長がその議長となる。

4 総会は、委員の過半数が出席しなければ、開くことができない。

5 総会の議事は、出席した委員の過半数をもって決する。ただし、可否同数のときは、議長の決するところによる。

6 やむを得ない理由により総会に出席することができない委員は、あらかじめ通知された事項について書面をもって表決し、又は他の委員を代理人として定め、表決を委任することができる。この場合における前2項の規定の適用については、当該委員は出席したものとみなす。

7 会長は、必要に応じて委員以外の者を総会に出席させることができる。

8 顧問は、総会に出席し、意見を述べることができる。

(専決処分)

第11条 会長は、総会を招集する時間的余裕がないときは、学内推進委員会に諮ったうえで、総会において議決すべき事項を処分すること(以下「専決処分」という。)ができる。

2 前項の規定により専決処分をしたときは、会長はこれを次の総会に報告し、その承認を求めなければならない。

(総会の公開)

第12条 総会は、公開する。ただし、出席した委員の3分の2以上が認めたときは、非公開とすることができる。

(事業評価委員会)

第 13 条 運営委員会で取り組む事業に「地域の声」、「外部の声」を反映させるため、運営委員会に、第三者で構成する事業評価委員会を置く。

2 事業評価委員会は、5名の評価委員で組織する。

3 評価委員は、運営委員会の構成団体以外から会長が選任する。

4 事業評価委員会に評価委員長を置き、評価委員の互選によりこれを定める。

(事業評価委員会の職務)

第 14 条 評価委員長は、事業評価委員会を代表し、会務を総理する。

2 事業評価委員会は、会長の諮問により、年度計画及び年度業務評価結果等の事項について審議し、その結果を会長へ答申する。

3 事業評価委員会に関する必要な事項は、会長が別に定める。

(評価委員の任期)

第 15 条 評価委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

2 補欠評価委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(経費)

第 16 条 運営委員会の経費は、大学法人が負担するものとする。

(事業年度)

第 17 条 事業年度は、4月1日から翌年3月31日までとする。

(解散)

第 18 条 運営委員会は、事業完了の日をもって解散するものとする。

(その他)

第 19 条 この規約に定めるもののほか、運営委員会の運営に関し必要な事項については、会長が別に定める。

附 則

1 この規約は、平成 年 月 日から施行する。

2 第 6 条第 1 項及び第 15 条第 1 項の規定にかかわらず、規約施行後、初めての任期は平成 27 年 3 月 31 日までとする。

3 第 17 条の規定にかかわらず、この規約の施行の日（以下「施行日」という。）の属する年度の事業年度は、施行日から平成 26 年 3 月 31 日までとする。

【議案第 2 号】

体制と役員（案）

1 縁結びプラットフォーム運営委員会の体制

1-1 所管

島根県立大学地域連携推進センター

1-2 役員

会長 1 名、副会長 3 名以内

1-3 委員

現行

構成：自治体（12）、機関・団体（9）、本学関係（18）

委員名簿をご参照ください。

1-4 推進体制

COC 事業推進体制は、「縁結びプラットフォーム運営委員会」、「学内推進委員会」、「実行委員会」の 3 層構造をとります。

1-5 事務局

事務局は島根県立大学浜田キャンパス地域連携課内に置く。

2 役員

役名	所属名	職名	氏名
会長	公立大学法人島根県立大学	理事長	本田雄一
副会長	島根県	政策企画局長	藤原孝行
	(公社) 島根県看護協会	会長	春日順子
	NPO 法人松江ツーリズム研究会	理事長	山本素久

3) 第1回全域フォーラム

次第

日時：平成26年2月21日(金) 13:00~17:30

会場：島根県立大学 浜田キャンパス講堂

第I部

開会のあいさつ

公立大学法人島根県立大学 理事長 本田 雄一

基調講演 「産学連携から社会連携へーグローバルな潮流からCOCを捉え直すー」

公立はこだて未来大学 社会連携センター教授 田柳 恵美子

しまね地域共育・共創研究の成果報告

「地域資源を保育教育課程に生かす『ふるさと教育』研究」

島根県立大学短期大学部 副学長/教授 山下 由紀恵 (松江キャンパス)

「エゴマの化粧品オイルとしての6次産業化の可能性

ー邑智郡川本町特産品エゴマオイルの開発ー」

島根県立大学 副学長/教授 山下 一也 (出雲キャンパス)

「島根県の森林価値の再評価：CO₂オフセットビジネスについて」

島根県立大学 講師 豊田 知世 (浜田キャンパス)

島根県立大学 准教授 林田 吉恵 (浜田キャンパス)

第II部

パネルディスカッション

「島根県立大学3キャンパスの総合力と地域課題ー共通課題への対応と大学の役割ー」

○パネリスト

益田市市民活動推進協議会 会長

吉田 篤志

株式会社オーサン 代表取締役会長

島田 義仁

島根県浜田保健所 総務保健部長

榎 伸夫

島根県立大学短期大学部 副学長/教授

山下 由紀恵 (松江キャンパス)

島根県立大学 副学長/教授

山下 一也 (出雲キャンパス)

島根県立大学 講師

豊田 知世 (浜田キャンパス)

○コメンテーター

公立はこだて未来大学 社会連携センター教授

田柳 恵美子

○コーディネーター

公立大学法人島根県立大学 理事長

本田 雄一

質疑応答

アンケート調査結果報告

島根県立大学 地域連携推進センター 副センター長/准教授 田中 恭子 (浜田キャンパス)

閉会あいさつ 島根県立大学 地域連携推進センター長/教授 林 秀司 (浜田キャンパス)

ポスターセッション

しまね地域共育・共創研究の成果報告

「石州左官の故郷である大田市および江津市の『鏝絵マップ』制作」

井上 厚史 教授 (浜田キャンパス)

「産業観光の推進による観光振興の可能性」 久保田 典男 准教授 (浜田キャンパス)

「学生が作る学生のための公共交通の利用促進を目的とした情報誌の制作」

松田 善臣 准教授 ゼミ (浜田キャンパス)

第 I 部

開会あいさつ

公立大学法人島根県立大学 理事長 本田 雄一

皆さん、こんにちは。ご紹介頂きました島根県立大学の本田でございます。「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業） 第 1 回全域フォーラム」の開会に当たり、一言、ご挨拶を申し上げます。

本日は、ご多用中のところ、基調講演の講師として、公立はこだて未来大学 社会連携センター教授田柳恵美子先生に、遠路、本学までお出で頂いております。先生には、この後、「産学連携から社会連携へグローバルな潮流から COC を捉え直す」と題して、本日のフォーラムでの基調講演をして頂くことになって居ります。田柳先生には、年度末で、何かとご多用中にもかかわらず、本学の「COC 事業第 1 回全域フォーラム」にお出で頂きまして、誠に有難うございます。



また、本日は、COC 事業の関係者の皆さんのみならず、中国地域を中心として、全国から、自治体関係者、大学関係者、高校、保育所関係者、企業の皆さん、そして、本学のキャンパスサポーターの皆さん等、合わせて、180 名を超える皆さんにご参加頂いております。島根県立大学を代表しまして、ご参加頂きました皆様を心から歓迎し、厚く御礼申し上げます。

島根県立大学は、大学憲章で、「地域のニーズに応え、地域と協働し、地域に信頼される大学」を目指すことを明らかにしています。文部科学省が実施する地域を志向し、地域の再生・活性化に貢献する大学を支援するという「地（知）の拠点整備事業」に、「地域と大学の共育・共創・共生に向けた縁結びプラットフォーム」を主題として応募したのも、本学の理念が事業の趣旨に合致しているからです。

本学の地域志向は、教育面では新入生全員が地域に赴き、地域から学ぶ姿勢を養い、各演習でも地域活性化をテーマとした種々の取組を続けています。研究面では自治体や企業との共同研究等により地域課題解決に向けた提言を行っており、各キャンパスの専門性を活かした地域貢献を積み重ねています。学生活動では「キャンパス・マイレージ事業」を実施し学生ボランティアを支援するとともに、地域の皆様を会員とした「キャンパスサポーター制度」を導入し、大学全体として地域貢献活動を推進しています。

島根県では、人口減少、少子高齢化、過疎化等が深刻化しており、その解決には行政区域を越えた継続的な対応と担い手となる人材の育成・確保が必要です。本学での人材育成の取組としては、松江キャンパスでは、現場専門職者と大学教員が過疎地域の課題解決に向けて研鑽し合う専門職者向け履修証明プログラム「地域共生専門コース」を開設します。出雲キャンパスでは、これまで多くの看護職者を地域へ輩出するとともに、今後さらに「地域とともに歩む看護・福祉の専門職」を育成します。浜田キャンパスでは総合政策学の学びと実践のもと、地域事情に精通し、地域を繋ぎコーディネートしながら課題解決に取り組む「実践力のある専門人材」を育成しています。この取組をより組織的に実施し、その実践力を保証する制度として「しまね地域マイスター」の認証制度を新設します。

これらの地域での取組をさらに発展させ、「縁むすびプラットフォーム」を基盤として地域課題を解決し、我々が目指している「持続可能な共生社会」を実現したいと考えています。

本日は、島根県立大学の3キャンパス・プラットフォームが協力し、一体となって、「大学COC事業」第1回全域フォーラムを開催します。

第Ⅰ部では、田柳先生による冒頭の「基調講演」に引き続き、「しまね地域共育・共創研究の成果発表」が行われます。本学の教員と地域の皆さんが協力して進めている共同研究の中から、「地域資源を保育教育課程に生かす『ふるさと教育』研究」や、「エゴマの化粧品オイルとしての6次産業化の可能性」、そして、「島根県の森林価値の再評価：CO₂オフセットビジネスについて」という3本の研究成果を本学の教員が発表致します。

第Ⅱ部では、パネルディスカッション「島根県立大学3キャンパスの総合力と地域課題—共通課題への対応と大学の役割—」をテーマとして、地域の関係者の皆さんと大学の担当者、さらに、基調講演をお願いした田柳先生にもご参加頂き、島根県が直面している過疎、高齢化という地域の共通課題の解決に向けたと取組における大学の役割について、ご討論をお願いしたいと考えています。

フロアからのご意見も頂きながら、地域の再生・活性化という共通課題の解決に向けて、大学が関係する自治体や団体等の間を繋ぎ合わせる接着剤の役割を果たすことができると願っています。

本日は最後まで、どうぞよろしくお願い致します。

基調講演

「産学連携から社会連携へ—グローバルな潮流から COC を捉え直す—」

公立はこだて未来大学 社会連携センター教授 田柳 恵美子

ハブ機能を強化、多機能型社会連携で地域を豊かに



講演タイトルを「産学連携から社会連携へ—COC をグローバルな潮流から捉え直す—」と大きく立てさせていただいた。本日の講演が地域のお役に立てるかどうか、皆さんと一緒に考えてみたいと思う。

■産学連携から社会連携への流れ

2000 年代前半、私はヨーロッパや日本国内の地域産学連携を視察して歩いていた。当時は日本でも産学連携が本格的なブームとなりはじめた時期で、それからこの 10 年余りの間に

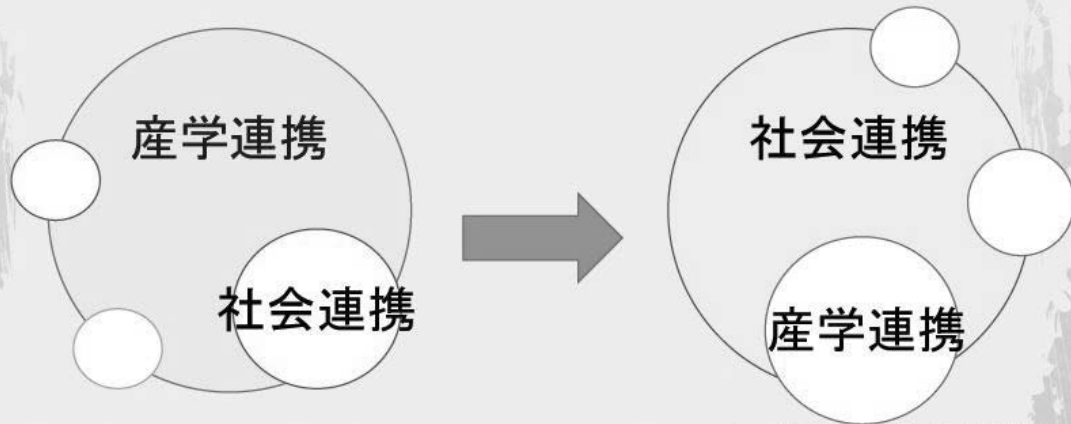
大きな変化があった。それ以前にも 1980 年代のテクノポリス政策、1990 年代の頭脳立地政策など、産学連携ブームを予感させる政策があり、その後 2000 年代に入って、産業と大学を結びつける知的クラスターや産業クラスターなどの政策が打ち出された。そしてここに来て、COC 事業が出て来た。5 年、10 年単位で政策が変わってきたのだが、この動きを私たちはどう捉えればよいのか。

1990 年代以降の産学連携ブームについては、特に理工系の大学が近くにない地域の方々には、なかなか実感的には分からないところがあるだろうが、今日はまず実際に産学連携ブームが、どこから、どう起き、どう鎮静化したか、今どういう状況にあるのかという点を理解いただいた上で、今日の COC 事業はどのような違いがあるのか、産学連携や社会連携といったコンセプトを、COC 事業においてどう捉えるべきなのかを、グローバルな潮流から見直し整理したいと考えている。

1990 年代から 2000 年代初頭にかけて、産学連携は欧米でも日本でもアジアでも非常に盛り上がり、産学官を超えて地域の人脈やネットワークをつくるという機運が盛り上がっていた。しかし振り返ると、そこでは短期的、中期的な視点で技術移転や産学共同研究に取り組み、それらの取り組み件数、特許申請件数、実際の売上げといった、直接的な数字の結果を追いかける志向があった。こうしたブームがいつのまにか収束し、日本では 3 年前くらいから、産学連携という言葉あまり前面に押し出さず、社会連携をベースとして産学連携はその一部であるという表現に移行する動きが出てきている。

私は 2008 年から公立はこだて未来大学の共同研究センターという組織に所属してきたが、2000 年代の変化、特にヨーロッパの動向を見て、「もう共同研究ではない、社会連携だ」と学内に宣言して、現在の社会連携センターに名称を変更した。ふと周りを見ると、早稲田大学や東京大学なども社会連携という言葉を使うようになり、より広い視野から産学連携を位置づけるという流れが出てきた。私はこの背景に、じつは世界的な潮流があると捉えている。

地域における産学官民連携 従来モデルと新しいモデル



従来: 短中期的な視点での産学連携を志向する社会連携(産学官人的ネットワーク)の形成

2000年代～: 社会連携(学習と協働)の土壌を肥やし、長期的視点で産学連携の種を育成

COCの核となる社会連携とは？

- 1) 社会連携の土壌から、産学連携をはじめ多様な連携活動が派生し、持続的に発展する
- 2) 異なるセクター間の関係者同士に、壁を超えた信頼関係あるいは拮抗関係が生まれる
- 3) 目的はいわゆる「産学連携」ではない
- 4) 短期的には、結果よりもプロセス/協働体験の蓄積を重視する
- 5) 長期的には「成就」「派生」のサイクルを半永久的に回し続ける、ゴール(終わり)はない

田柳恵美子(2014) 第1回 全域フォーラム 基調講演「産学連携から社会連携へ」から転載

■産学連携はシリコンバレーが火付け役

まず、産学連携ブームの源流について振り返っておきたい。日本やヨーロッパが1990年代以降急速に取り入れた産学連携・技術移転・知財戦略の三つ巴の政策の動きは、明らかにシリコンバレーで起きた、産学連携のネットワークをベースとしたイノベティブな共同研究や起業などの活発な現象が火付け役となった。

1980年代にシリコンバレーで産業立地が停滞した時期があり、スタンフォード大学の工学部の教員有志らが民間に働きかけるなどして、いわゆる産学連携のインフォーマルなネットワークを作り上げ、そこに生まれた革新的な風土に引かれて企業が集積し、産学連携をベースにした経済発展が起きるといった現象があった。このモデルが、1990年代以降の世界の産学連携ブームのモデルになった。しかし現実には、シリコンバレーですら、地域振興という観点では思ったようには進んでいなかった。1990年代のシリコンバレーの地域政策の変化については、あまり広く紹介されていないのではないかと思う。

■初期シリコンバレーモデルの限界

シリコンバレーが注目された1980年代以降、当地のネットワークは絶えることなく続いていると思うが、このネットワークは研究者、起業家、投資家などの専門家には開かれていても、それ以外の市民セクター、公共セクターに対しては閉じた、私的な関係が中心だった。すなわち、地域の教育や文化や福祉、地場経済全体の振興には決してつながらなかった。さらに、当時の不況が追い打ちをかけ、広域シリコンバレーの地域経済は苦境に陥っていた。そこで、スタンフォード大学の幹部や教員たち、地元サンノゼ市長や若手企業家たちの有志が「地域の経済や産業、教育水準を改善するために、みんなで社会的に動かなくてはだめだ」と立ち上がった。地域のための社会事業を手がける産官学民を横断する組織として、1993年にスマートバレー公社を立ち上げ、従来のシリコンバレーモデルとは違う、公共に貢献する、地域づくりに貢献するという、社会連携型の事業に力が入られるようになった。

サンノゼ市長のスーザン・ハマー、シリコングラフィックスのエド・マクラッケン社長が、共同議長として強力なリーダーシップを発揮し、その下に上院議員や行政官僚や企業人も含め、多様なメンバーで構成される組織を作った。さらにヒューレットパッカートのジョン・ヤング社長、スタンフォード大学のウィリアム・ミラー副学長などが強力な背後支援で支えた。ゴア副大統領など連邦政府へのロビー活動が展開され、連邦政府から多額の公共投資を取り付けることに成功した。

■社会事業を目指したスマートバレー公社

スマートバレー公社では、主に10項目の社会事業を計画・実施した。①各自治体と共同での企業のビジネスソリューションの支援事業、②自治体公共事業のプロセス評価によるコストパフォーマンス改善、③最も力を入れられたのが、カリフォルニア全域にわたる初等・中等教育の改善プログラム・チャレンジ2000の主導、④ビジネス・インキュベーションに必要な専門家の組織化、⑤重点分野での地域技術開発コンソーシアムの推進、⑥全米ディスプレイ協会の誘致、⑦地域企業の福利厚生の健全性向上のための憲章の制定、⑧各種ネット・コミュニティ、情報プラットフォームの構築、⑨地域企業の海外事業展開の支援、⑩地域企業のための税制優遇措置、である。

こうしてみると、技術移転や起業支援などは一部で、教育、文化、福祉、行政改革、地場産業や雇用確保の支援など、じつに幅広い社会事業を射程に置いていたことが分かる。いずれも、従来の狭い意味でのシリコンバレーではケアされていなかった部分だ。

■大きな時代の流れの中で転換する政策

このように1980年代の産学連携のシリコンバレーから、1990年代の社会連携のシリコンバレーへの方向転換は、その後の世界の動向を先取りしていた。2003年頃から、ヨーロッパ各都市でも、産学連携から社会連携への転換が強く志向されるようになってきた。個人的には、日本のCOC事業もまた、この流れをキャッチアップしたものと捉えるべきだと

思っている。そのように理解しないと、「COC 事業って、昔からの大学の地域貢献志向とか、地域コミュニティとの連携と、何が違うのか」という話になってしまう。

アメリカとヨーロッパでは、地域産業や経済のありようは大きく違う。ヨーロッパでは各都市に伝統と歴史があり、それぞれの風土、文化があり、中小企業、伝統産業の多様な集積がある。その意味で、じつはアメリカよりもヨーロッパの方が、日本にとって参考になると思っている。

2001～02年にドイツ、フランス、イタリアなどを視察に回った時には、関係者は口を揃えて、時代の要請に従い、アメリカ型の産学連携と技術移転と知財戦略で地域経済を発展させるのだと話していた。ドイツのデュッセルドルフでもアーヘンでも、南フランスのソフィアアンティポリスでも、イタリアのボローニャでもミラノでも同様だった。しかし、彼らは大きな歴史の中の一現象としてこのブームを捉えていた。特にドイツのルール地方のある商工会議所を訪ねて驚いたのは、「われわれはアングロサクソンではない、ゲルマンである。経営と所有の分離もやむなく取り組んでいる。ゲルマンの辞書に経営と所有の分離などという概念はない」という言葉を聞いたことだった。2000年代にこのような話を聞くとは思っていなかったが、「たまたま今、アメリカのシリコンバレーなどのやり方がうまく行って、これに乗っていかないと資本主義の中でやっていけないので仕方なくやっている」という深い自覚があって、新たな政策に取り組んでいる姿勢には感服した。

■大学のシーズを吸収できない地場企業

その後2000年代も半ばに入ってくると、ヨーロッパの有力工科大学の学長や産学連携センターのセンター長などが口をそろえて「今の産学連携ブームは地域に貢献できない」と言い始めるようになった。結局、産学連携の恩恵は、地域をまたいで活動する大企業や多国籍企業に行ってしまう、地場産業の振興には落とすことができていないという事実がどんどん顕在化していった。このことが産学連携から社会連携へとコンセプトが移っていくことの、1つの契機になっていった。

有力大学の関係者の一番の悩みは、大学の先端的なシーズを移転できるような技術許容力のある企業が地場にはないことだった。OECDの統計でも技術許容力のある企業は多くても全体の5%しかない。別の統計では3%以下というデータもある。一方ではEU統合によって西側先進都市の産業空洞化も進み、ミラノなどでは製造業が空洞化し、ミラノ工科大学の教員たちは真っ青になった。2004年にミラノ工科大学を訪問した時には、「以前のように大手企業のコンソーシアムからお金をもらって潤っていた時代はもう終わった。自分たちの足で地場企業を回るしかない」と、教授が地域の企業に足しげく通って注文を取りに行くという「以前のミラノ工科大学では考えられないようなことをやっている」と話していた。私は日本の状況とも比較しながら調査してきたが、このような大学と地場産業との間のギャップは、東京一極集中が進む日本ではさらに深刻で、東京の多摩地域ですら産学連携がうまくいっているとは言い難い状況がある。

2009年に来日したトリノ工科大学学長と話す機会があったが、「ヨーロッパが抱える最大の矛盾はアカデミックな知識と地域の産業とのギャップだ。大学のレベルが高ければ高いほど地場の企業に移転できない」と話していた。こうした認識はヨーロッパでは広く共有されるようになり、新しい社会連携の取り組みが広く各都市で出てきている状況だった。

■研究志向と社会連携

こうした大学の動きは、2005年ごろからから2つの志向に分かれて進んだ。日本では文科省の政策もあって、東大や京大、東北大などの研究志向大学と、都市集積に貢献する社会連携型大学と二極化する方向のようにも見えた。この二極化の動きはヨーロッパでもはっきりと出てきた。しかし、スイス、フランスの工科大学（ポリテクニック）では研究志向に特化する大学が多いが、イタリアや北欧などでは、むしろ研究志向と社会連携の両極を同時に志向する大学が多い。今回のCOC事業で京都大学が応募してきたのも、同様の背景があるように思われる。やはり伝統のある大学は、地域との関係も深く、地域への貢献

を大切にしたいという思いが強くなる。文科省にも迷いがあって、大学の機能分化だと言っていたが、実際にはそうではない。多くの大学で両方の志向が重複してくる。それが今回のCOC事業の特徴といえる。この点は理解しておいた方がいいと思う。

■産学連携と地域貢献の狭間

産学連携か社会連携か——アメリカもヨーロッパも日本も、レベルに違いはあっても、大学は共通して同じような悩みを抱えていると思われる。日本の場合も、地域との関係が薄くグローバル企業や無国籍企業が大勢を占め、公共にその恩恵が落ちていかないプライベートな関係で閉じてしまっている大学は少なくないが、大学にとっては地域との関係も重要である。

大学にとって産学連携で外部資金の確保を追求したいという思いと、地域貢献をしたいという思いが、うまく結びつかないことが悩みになっている。そこで二股を掛けようということになる。社会連携を志向して、短期的な経済効果ではなく、教育、文化、社会福祉、コミュニティービジネスの振興など、目に見えるもの、見えないもの両方含めて長期的に多様な社会連携に取り組んでいくことが、2010年代以降の大学の役割として考えられるようになってきている。

ヨーロッパでも、大学のキャンパスに大企業との連携プロジェクトの拠点となる産学連携センターを新設する動きは相変わらず活発である。しかし以前は地域の生活者や学生たちが気軽に入っていくような場所ではなかったのが、今はできるだけオープンにして、市民が入れるようなレストランを設置し、学生が気軽に立ち寄れるような施設があり、リサーチパークでありながら市民も集うセンターでもあるといった場所に変化している。産学連携という言葉だけでなく、「知識集積」「学習共同体」といった言葉を積極的に使う大学や自治体が増えてきている。

大学は産学連携のカウンターパートということだけでなく、多様な社会連携を促進するためのハブ機能を果たす存在へ変化しているということの意味している。民間の幅広い分野の専門家、市民、行政の人たち、そして企業人や研究者を結び付けていく。教育もあり、福祉もあり、文化、学芸もある、多機能型の連携を結び付けていくのが大学の新しい役割ということが強調されるようになってきた。

■市民に開かれた「リビング・ラボ」

新しい話ではないが、5、6年前にMITのマイケル・ジョロフ教授が、欧米から始まってシンガポール、香港、韓国などアジアにも飛び火している、大学がハブとなった新しい都市集積形成の動向を「新世紀都市」と呼んだ。

例えば、トリノ工科大学は、大学の隣接地にあった工場跡地17万㎡に企業との共同研究拠点となる新たなサイエンスパークを造り「チネチッタ・サイエンスパーク」という名前を付けた。学長は「閉ざされた産学連携の場所ではなく、町の日常生活に統合され、学生に新しい文化的刺激を与える場所として新たに開発していく」と話されていた。

フィンランドのアアルト大学は、ヘルシンキ工科大学とヘルシンキ工芸大学が統合して2010年にできたが、そのねらいはずばり、多機能連携で地域のイノベーションを果たし、国の経済発展に貢献する役割を担っていくことだ。アアルト大学が設立される以前から、ヘルシンキ工科大学と市民セクターを中心に行われてきたのが、研究を街に出すプロジェクトだ。「リサーチ・ラボからリビング・ラボへ」という旗印の下、市民4,000人をメンバーに、ユーザ参加型の社会実証実験「リビング・ラボ」を立ち上げた。

複数のプロジェクトを組織化して、実証実験の中で新しいアイデアを持った製品、デザインを持った商品を使いながら開発していくという試みだ。ヘルシンキでは、ICタグやモバイルのプロジェクトなど情報技術を駆使していることや、EUの強みを生かして国外から有力な多国籍企業を集めたりしているのが特徴だ。

■技術のプッシュから市場のプルへ

フィンランド政府も「技術のプッシュではなく、市場のプルへ」を産業政策の旗印に掲

げている。ユーザは何を求めているのか？ 高齢社会、少子化社会の中で新しい安心できる暮らしを作るには何をすればいいのか？ という、社会の要請、ユーザの要請の方から技術開発を牽引するという発想だ。アアルト大学の国際イノベーションセンターのセンター長は、「街や都市や市民に開かれていく、大学と地域との関係がこれからのイノベーションには不可欠」と話していた。

スペインのバルセロナでもこうした政策を強力に推進している。バルセロナの経済が急進したのは港湾都市としての復興を強力に推進したからだ。スペイン経済が沈滞し、港湾機能も衰退していたが、一気に力を入れて都市開発をして復興させた。安い労働力をバネにして製造拠点を誘致するなど、複合的な戦略で取り組んできた。その延長として 21 世紀都市的な取り組みをしており、「知識基盤社会の構築」をはっきりとうたっている。工場跡地を使った新しいセンターの機能は、都市のイノベーション、経済のイノベーション、社会のイノベーションを 3 本柱にしている。バルセロナ大学、カタルーニャ工科大学など、地元の大学が関わっており、ビジネス支援もするが、普通の市民が英語を学びに集まるとか、コミュニティービジネスの起こし方を学ぶために集まって来るとか、そうした機能も複合的に入っている。

■多機能化する社会連携

大きな話をしてきたが、詰まるところ COC 事業の背景にあるのは、「これからは多様な機能を持った社会連携で地域を豊かにしていく」という大きな流れだと考える。

函館市の例を紹介する。函館市の人口は約 28 万人、松江市とだいたい同じくらいの規模だ。以前の 30 万都市から減ってしまったが、隣接の北斗市などにスプロールしていることにも要因がある。2000 年に開学した公立はこだて未来大学は、函館市、北斗市、七飯町の 2 市 1 町により設置されている広域函館圏の大学である。函館市の現在の役割は道南圏の首都のような位置づけで、後背地には江差、松前などの歴史的に栄えた都市を擁している。

大学では社会連携の多様な取り組みを以前から行っている。1 つはデジタルアーカイブだ。函館には水産と海運で栄えた歴史があり、栄華を極めたお金持ちが多数いて、お宝もたくさん残されている。そのお宝、文化財は博物館や図書館などの倉庫に保管されているが、なかなか日の目を見る機会もなく、このままではもったいないと、画像認識を専門とする教員が高精細画像でのデジタル化に取り組むと同時に、地元の学芸員や図書館司書の方々を巻き込んで、地域のお宝をデジタルアーカイブ化していくことの意味と意義を一緒に考えていくという取り組みを延々とやっている。また、2009 年からは、本学の教員が主導し、地域の理科教員や理工系の大学教員、行政や教育委員会などを巻き込んで、「はこだて国際科学祭」という日本初の都市型科学フェスティバルを開催し、今年の夏には第 6 回を迎える。こうした取り組みはこれまで教員個人の主導で進められてきたが、最近はあまりに多様になってきて、社会連携センターが組織的に支援するようにもなっている。

函館地域では産学連携の取り組みにおいても、「がごめ昆布」という非常に粘りの強い昆布の商品化に 2003 年から取り組んできた。地域産品を高機能商品にするのが目的である。この事業で強調したいのは、文科省の都市エリア事業から知的クラスター事業へ、さらにその後の自律的な取り組みへと、長い年月をかけて成果を焦らず続けてきていることだ。これまでの取り組みを通じて、産学連携は簡単には成就しないということを、地域の関係者は学んできた。

商品化してもマーケットに認知されるまでには相当な年月が必要だ。2003 年から進めてきて、2009 年からは民間主導のコンソーシアムに移行している。企業 28 社が参加し、大学に依存しないで民間でやろうという動きがある。スーパーブランド化と称する活動を展開し、オリジナルのロゴを作り、サプリメントや化粧品など様々な高機能商品を開発し、地域の人々に親しんでもらうためのフードラリーなども実施している。この粘り強い取り組みを支えているのが、地元の土木建設コンサルタント会社の 50 代前半の社長さんだ。この会社では現在、土木建設と食品事業を 2 本柱にして展開している。いわば中小企業の第二創業という感じだが、この社長さんが自分のライフワークのように情熱を傾けて頑張っ

ている。こういう粘り強く、しつこい人がいないと事業は成就しない。こうした産学連携からの展開は、5年ごとくらいに大学が主導する時期、民間が主導する時期、それがまた大学に戻ってくる時期といった具合に、フェーズが変わっていく。近くでこうした経緯を目の当たりにしていると、変化にも腰を据えてかかわれる根気が必要で、短期的に何かを成就させようとする、不毛な結果を呼ぶだけかもしれないと思う。

■地域独自の資産と若いパワーを生かして

浜田港振興会のホームページの地図を見て、浜田は函館からこんなにも遠いのかと思った。朝鮮半島からの距離の近さも改めて感じた。昨日は出雲空港から日本海沿いを移動し、石見銀山の麓の温泉津温泉に泊まらせていただいた。今日は、北前船の寄港地など、車窓から見るだけでも昔の栄華の様子が分かった。街は廃れていても、歴史的・文化的な蓄積は決して廃れない。函館も同様だが、こうした地域独自の文化的資産が、一番強い財産ではないだろうか。石見銀山は有名だが、石州和紙もユネスコの無形文化遺産であるなど、素晴らしいものがなげなく集まっているのが、石見地域の凄いところではないかと思った。他には簡単に真似のできない伝統や歴史がある。

温泉津温泉の薬師湯にも行ったが、古いたたずまいの中にしゃれたカフェもあった。この辺りは函館ともよく似ている。表面的におしゃれな店がある街はたくさんあるが、それが本物の歴史や文化と調和している。これはやはり他では真似できない。

昨日、薬師湯の素晴らしいラウンジを見学していたら、島根県立大学総合政策学部の学生さんたちと遭遇した。少しの間、話をさせてもらったが、1、2年生にしてはしっかりしていて礼儀正しく、前向きで能動的な学生さんたちだった。こうした若い力は本当に重要だと思う。私たちが誰のために地域振興に取り組むかと言えば、この若い人たちのためにしなくてはいけないと思う。私たちが死んだ後にどうつながるか、これから地域をなんとかしたいと思っている学生たちのために、彼らのパワーを力にさせてもらうということが重要ではないだろうか。

ヨーロッパでも、スウェーデンなどでは学生を積極的に使っている。ヨーテボリでは駅の観光案内所のカウンターで対応してくれるのも、歴史ツアーでノルウェーの戦争の寸劇をやってくれるのも、街中の運河ツアーのガイドも地元の大学の学生だ。学生に依存する姿勢は良くないが、パワーを秘めている人たちを大事にしながら、地域の力にしていくべきだろう。

しまね地域共育・共創研究の成果報告

1. 地域資源を保育教育課程に生かす「ふるさと教育」研究

島根県立大学短期大学部 副学長／教授 山下 由紀恵（松江キャンパス）



本研究は「民話蘇生研究」をテーマとして組み立てた。題材は民話を書き起こした手書きの本「島根県美濃郡匹見町昔話集稿・道川地区」（昭和 50 年）である。これをデジタル版で復刻させて保育教育に生かしていくという意味で「蘇生」とした。

デジタル化作業は本学学生の手を借りて作業したが、この蘇生作業のみの発表では、本日のテーマである「ふるさと教育」の全体像が分からず、位置づけも説明しにくいので、

本日は松江キャンパスの教員が取り組んでいるそのほかの研究も織り交ぜて「ふるさと教育」の全体像の中で本研究を位置づけて報告する。

取り上げる 3 研究は、「言語獲得期における環境要因の影響について―石見地域内における接触地域の差による方言意識」（代表・高橋純）、「地域資源と協同的体験を保育教育課程に生かす「ふるさと教育」の研究―島根県益田市モデル」（代表・山下由紀恵）、「島根県の民話資料の保存と整理」（代表・岩田英作）である。これに私の今回の研究の全体像を加えて報告する。

■言葉を模倣することから方言を獲得する子供たち

まず、「言語獲得期における環境要因の影響について―石見地域内における接触地域の差による方言意識」の研究を取り上げるが、高橋准教授は平成 24 年、本学学生を対象に方言についての予備調査も実施している。松江キャンパスに集まるさまざまな地方からの学生がどのような言葉を使っていたか調査したものだ。また、島根大学名誉教授の田中瑩一先生が、昭和 40 年代から昭和 50 年代までに採取された民話から 15 話をデジタル化した CD がある。これを参考資料とし、昭和 40 年代、昭和 50 年代の方言との比較資料とした。

高橋准教授との共同研究は、東西に長い島根県西部の大田市長久町、大田市温泉津町、江津市渡津町 3 地域で、5 歳、6 歳の保育所の年長の子供たちを対象に方言のデータを集めたものだ。この 3 地域のほかに平成 25 年度中には浜田市国分町、出雲市多伎町の調査結果も加え、データ整理を行っている。

この研究では子供たちに同じ図版を見せ、それぞれの地域の子供が何を話すか録音し、地域差を分析している。大田市長久町と温泉津間は国道沿いで 19.7 km しか離れておらず、大田市温泉津町と江津市渡津町間も 16.8 km しか離れていない。いずれもほぼ車で 20 分以内の距離にあるが、この近距離でも子供たちの言葉の使い方に違いがみられた。

本学学生への予備調査から、方言の違いがあるとしてあらかじめ分かっていたのが「進行」を表す言葉だった。「～している」という言葉は、島根県東部の人たちの中には「～しちょう」とか「～しちよる」という言い方をするが、調査地域の子供たちは実際にこのような言い方をしなかった。現在、分析ができているのは最も東は大田市長久町の調査結果であり、今後、他地域の分析が進めば「～しちょう」の結果が出るかもしれない。

3 地域の中ではっきり差が出たのは理由を表す言葉だった。一般に「～だから」は、予備調査で石見部の東部や安来市、さらに鳥取県西部にかけては「～だけん」とか「～けん」とかという言い方が分かっていたが、石見西部から広がっているのが「～だけん」とか「～

じゃけえ」という言い方だ。今回、大田市長久町の子供たちでは「～だけん」が非常に多いが、西に行くにつれどんどん減り、「～だけえ」は調査地点で最も西寄りの江津市渡津町が多く、逆に大田市温泉津町では少なくなっていく傾向がみられた。

発音の違いもある。「いぬ（犬）」「いす（椅子）」の発音だが、「いぬ」「いす」ではなく「いぬ」「いす」（・部分にアクセント）と子供たちが発音する地域は「～だけん」と「～けん」という地域と重複していた。つまりこれらは石見方言ではなく、出雲方言に近く、文末表現と音韻部分で方言が5歳、6歳の子供にも根強く残っていることが分かった。

これは非常に興味深いことだ。日常生活の中ではテレビ、DVDもあり、子供たちは日常共通語を耳から聞いてたくさん知っている。しかし、日常の会話をする中で共通語を使っているかという点、その地域の方言を使っている。それぞれ15kmから20kmしか離れていない場所だが、5歳、6歳までに獲得している言葉は明らかに接触している人から学んだ言葉になっている。こうした言葉は資料とした昭和40年代、昭和50年代に録音されたCDの方言から世代は4代、5代も変わっているが、継続して引き継がれていることも分かった。これは言語獲得において、直接的に人から聞いた言葉を模倣することがどれほど大事か、ということをも物語っている。実際に耳にする、感覚する、そして模倣してみるという体験の中で子どもは方言を獲得している。

さらに、模倣が起こるには目で見ると聞くだけではなく、人と接触するというソーシャルスペースの近さが重要になってくる。インターネットなどを使って言語教育をしようと考えてもなかなかうまくいかないのは、模倣は人の相互接触とかなり密接に結び付くところがあるからだ。このように考えると言語教育、保育の中で言葉の学習をする環境として保育者、家庭が持っている力がかなり大きいことに気付かされる。

■自然環境を学ぶという体験が重要

次に「地域資源と協同的体験を保育教育に生かす『ふるさと教育』の研究—島根県益田市モデル—」を題材とする。本共同プロジェクトは、0歳から6歳ぐらいの子供や小学校低学年の子供が「感覚すること、体験すること」によって獲得していることの実体験を基に、教育を組み立て直すという発想が必要なのではないか、という視点で進めている。具体的には、保幼少の発達段階での感覚や体験を基盤として、次の小学校教育に繋いでいくカリキュラムの検討ができるのではないかと平成25年度、平成26年度で取り組んでいる。

益田市保育研究会では、幼稚園、保育所から小学校、中学校、高等学校、大学まで繋いでいく「ふるさと教育」が必要であるとして、「食育」のほか、「自然環境での体験的学習」「民話の語り」の3部会で研究を進めている。本共同プロジェクトでは益田市保育研究会と連携して、益田市を流れる高津川流域でどのような教育ができるかということを検討している。参加メンバーと一緒に川バスに乗りながら、流域を学ぶとはどういうことなのか、教育者側から見直してみようという体験もしている。

地域資源を生かして子供が実体験に基づいて感覚から流域を学び、川を学んでいくということは環境教育にもつながる。水がどこからどのように流れて海に行くのか、身を持って体験の中から学んでいる人がその地域にいて初めて産業廃棄物問題が解決できるようになると思う。「ふるさと教育」の中で自然環境を学ぶという体験が、現代社会では重要ではないか。

益田市保育研究会では、小学校の子供たちと保育所年中、年長の子供たちが一緒に川遊びをする体験をカリキュラムとして組み立てている。川と遊ぶ体験が深まり、ステップが進むにつれて子供たちの感覚は変化する。子供たちが描いた児童画を見ると、カタログ的な表現から川のうねりがダイナミックに出てきて、第3ステップでは川で遊んでいる自分たちの周りに仲間がたくさんいるようになる。児童画の中にも実体験を通して川と自分のイメージが変わっていく働きがあるということが分かってきた。

子どもたちが自然での体験を繰り返すことで、小学校で学ぶ生活科とか理科、算数につながっていくような体験があることもわかっている。実体験を踏まえて自分たちなりに考

える体験をしている。こうしたことを基に小学校の理科、算数が組み立てられるべきであるという発想がカリキュラムの中で検討されている。

■文化、環境、人、言葉の多様性が理解できる人材を育成

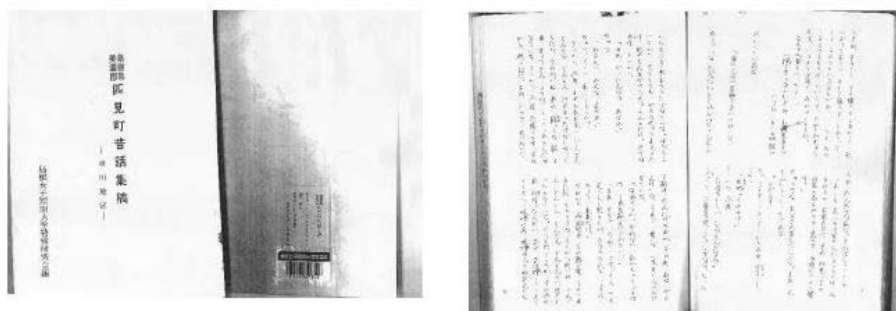
平成 24 年 12 月に同保育研究会民話部会と共に「匹見の民話を聞く集い」を開いた。本学の前身である島根女子短大の第 2 期生が、昭和 50 年に当時の美濃郡匹見町道川地区で聞き取りを行い、録音し、書き起こした民話をまとめた本があり、これを基にして 40 年近く経たのち、地元で民話を蘇らせようと試みた。

島根大学の田中瑩一名誉教授は、昭和時代の民話 6,000 話を収録したテープを保管している。この保存と整理が岩田英作教授が代表を務める研究「島根県の民話資料の保存と整理」である。同教授が平成 25 年度、平成 26 年度の 2 ヶ年で取り組むことになっており、デジタル化して CD に収録する作業が進んでいる。現時点では石見部のデータ 239 本のうち益田、石見町、桜江町のリスト整理が終了している。

民話蘇生研究

平成25年度しまね地域共育・共創研究助成金研究

- 『島根県美濃郡匹見町昔話集稿・道川地区』
の復刻と再生-」 書誌ID=NM10022420 NCID=TU1002242
- 106話収録(昭和50年7月31日～8月2日)・話者17名(明治23年生～昭和21年生)



私の研究は、この 6,000 話の中の匹見町道川地区の民話の復刻と再生だ。道川地区の民話は、本学の卒業生が書き起こして図書館に保管されているが、これもデジタル化する。民話を地元の人たちに戻して今の方言に直してもらい、子供たちに繰り返し聞かせてほしい、とも思っている。

こうした民話の掘り起し作業は、島根県内でも昭和 30 年代から昭和 50 年代にかけて行われており、民俗学的な資料として保管されていたが、高度成長期とバブル時代に忘れ去られてしまっている。このような文化資源を地（知）の宝として大学が掘り起し、その財産を教育資源としていくことが求められているのではないかと考えている。東京発の画一的なテキストではなく、地元の言葉によって育てている子供たちを、地元の言葉によって育てあげていくというボトムアップ的な仕組みに変えていく必要があるのではないかと考えている。

地域の子供たちの直接的な体験と感覚、0 歳から小学校低学年までの発達段階を重視した「ふるさと教育」の過程にこの研究を生かしていきたい。文化、環境、人、言葉の多様性が理解できる人材を育てていくことが重要であり、こうした取り組みにより、地域を自らの力で考えることのできる人材が、次の世代の本物の開発になる力になってくれたら、と考えている。

2. エゴマの化粧品オイルとしての6次産業化の可能性

—邑智郡川本町特産品エゴマオイルの開発—

島根県立大学 副学長／教授 山下 一也（出雲キャンパス）



イヌイットの人には心筋梗塞や脳卒中が少ないという疫学がある。DHA（ドコサヘキサエン酸）、EPA（エイコサペンタエン酸）が血中に多く含まれているからだが、ここから本研究の発想が始まっていると言ってもよい。DHA、EPAは、青魚などに多く含まれている不飽和脂肪酸「オメガ3」とも言われ、他に構造の違いによって「オメガ6」「オメガ9」に分類される。α-リノレン酸も「オメガ3」であり、こ

れらの脂肪酸を活用して生活習慣病を予防しようという動きが盛んになってきている。

「オメガ3」はα-リノレン酸からEPA、DHAに変化して効力を発揮する。炎症を抑えたり、動脈硬化を抑える働きがある。一方、「オメガ6」は炎症を起こし、動脈硬化を促進したりするが、現代の日本人の場合は欧米型に偏った食生活によって「オメガ6」が非常に多い傾向にあり、「オメガ3」が不足気味となっている。

そこで、生活習慣病予防のために「オメガ3」をどれだけ摂取すればいいのか。最近、厚生労働省が1日分の目標摂取量を発表した。それによると魚の場合、マグロが720g、イワシが40g、アジが150gとされたが、これらを実際に毎日の食事で摂取するのは大変だ。しかし、こうした疫学データが発表されたことでDHA、EPAなどの「オメガ3」ブームに火をつける結果となっている。

これらは、脳卒中を低減するとか、血中の中性脂肪を低減させるとか、関節リウマチをよくするなど、その効果が説明されているが、さらに、うつ病の患者を減らすとか、ADHD（注意欠陥・多動性障害）などにも関係しているとされている。また、最近では、脳の中のDHAを活性化させると神経細胞の働きがよくなる、要は認知症、特にアルツハイマー病に非常に効くということが言われるようになった。

年をとると体内からDHA、EPAはだんだん減ってくる。脳の中の「オメガ3」が減っていくということだが、逆に「オメガ3」を多くしていけば認知症が防止できるという仮定も成り立つだろう。

■エゴマ入りの地中海式料理で認知症予防

認知症の一番のリスク・ファクターは年齢で、次に遺伝子だ。この2つは予防することができない。つまり、高齢化社会になると認知症は増えていく。認知症の約8割がアルツハイマー病で、元々防止することはできないとされてきたが、最近の研究成果によってアルツハイマー病は予防できるとされつつある。運動することや、社会的交流を多くすればアルツハイマー病は予防できると報告されているが、特に食事栄養面での予防効果が大きいと指摘されつつある。

食事栄養面の予防効果の中でも、現在、世界で認められつつあるのが地中海式料理だ。これは、日々に身体活動をしたうえで、野菜、ナッツ、魚を食べ、オリーブオイルをかけて、そして肉は少な目、ワインをちょっと飲むという食事療法だが、この地中海式料理のオリーブオイルの代わりにわれわれはエゴマ油に変えてみた。すなわち、エゴマにはα-リノレン酸が非常に多く含まれているので、料理にエゴマ油をかけて認知症を防ぐことが

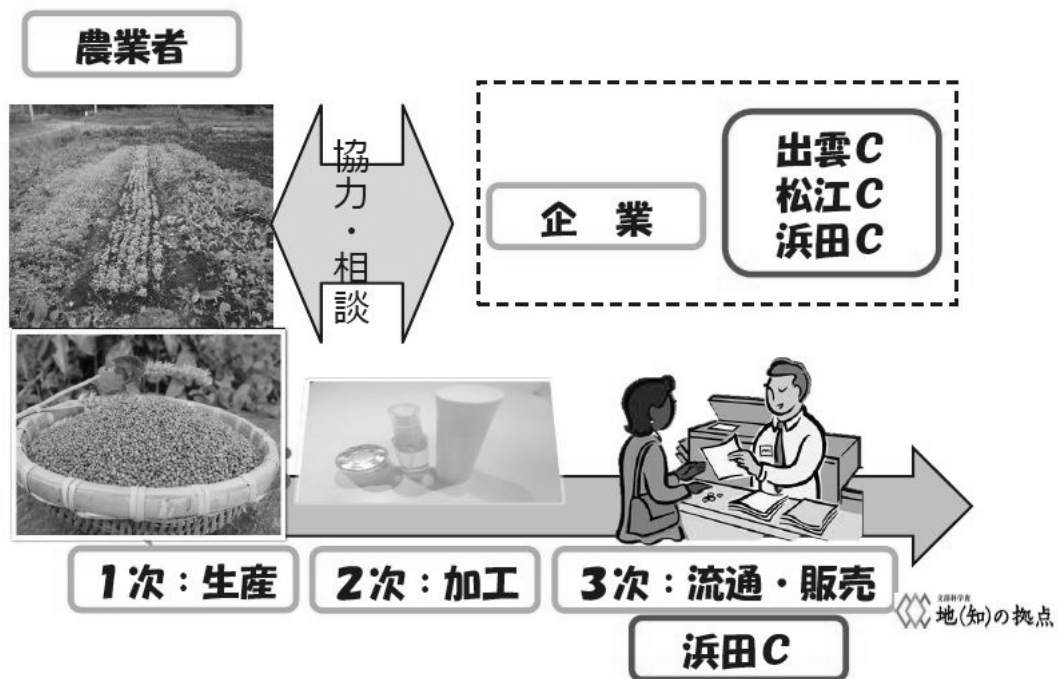
できないかという研究だ。

エゴマはシソ科で、 α -リノレン酸だけでなく、ビタミン、カルシウム、マグネシウムなどが多く含まれている。島根大学の橋本先生らによるラットの実験では、エゴマを入れると記憶や学習の機能が上がることがすでに解明されている。但し、エゴマは普通の油とは違って熱に弱く、料理の仕方に問題があるが、われわれは川本町で2年間にわたってエゴマ入りの地中海式料理によるダイエット研究をさせていただいた。

その一例だが、「エゴマリゾット」を作っていたが、エゴマは熱に弱いので、最後にエゴマ油をかけて食べてもらった。もちろん、家庭でもエゴマ油を使った地中海式料理を作り、食べてもらったところ、認知機能をみるミニメンタルテストや前頭葉検査で得点が上昇した。つまり、認知機能低下の予防効果があるということで、この結果が新聞紙上や週刊誌にも取り上げられ、この1月に出版された本『ボケない「長寿脳」の作り方』の中でもこの話が紹介されている。こうしたことから川本町のエゴマ油の売り上げは右肩上がりとなり、昨年後半には以前の2倍に増えた。エゴマの食べ方は油だけではなく、川本町では葉などを使ったふりかけなどの加工食品のほか、お菓子などありとあらゆるものを作っている。この結果、現在のところ、島根県のエゴマの栽培面積は全国第2位を誇っている。

■「メディカル・グリーンツーリズム」までも視野に

しかし、われわれは次の段階としてエゴマ油の入った化粧品クリームを開発しようと考えている。ラットに1日に1回、エゴマ油入りの化粧品を塗り、血中の α -リノレン酸量を計る実験を行った。その結果、1ヶ月後には血中の α -リノレン酸量が上がることが分かった。つまり、エゴマ油を皮膚に塗ると少しずつ血中に移行することが分かったので、今後、安全性の確認とともに皮膚への影響を人介入試験で行う方法を考えている。



しかし、エゴマ入り化粧品はすでに全国で作られ、販売されているので、これだけではインパクトがなく売れない。そこで、さらに次の段階としてエゴマに加えて海藻、つまり、フコイダンを入れたクリームを今試作している。さらにこれにコラーゲン、ビタミンを入れて検証していく。こうすることにより、皮膚での保湿性が格段に上がっていくと考えられるからである。「大学発の化粧品を作るとは」と言われるそうだが、一昨年からは現地研修

を行っている韓国の大学では、すでに化粧品を作っているし、日本の大学でもいくつかの大学で開発がなされている。そこで、われわれとしてもエゴマの化粧品オイルを6次産業化できないかと考えている。

現在、川本町とわれわれの大学、そして企業を結んで、産官学の連携でこのクリームを商品化しようとしている。特に、島根県は美肌県1位であり、このクリームを作って付加価値を付けて売り出そうと思っている。

さらに、エゴマ油の食事と温泉療法も生活習慣病予防に効果があるとされており、川本町にある社会資源を利用しながら観光面での「メディカル・グリーンツーリズム」も視野に入れている。今後「オメガ3」の新市場に参入するためには、認知症によいとのエビデンスをさらに伝えていくことと、ヘルシー&ビューティー、プレミアムなペットフードの開発なども考えていきたい。

これまで生命科学の発展には農産物が大きな役割を果たしてきた。農産物の中にこそ健康へのヒントがある。われわれは、このCOC事業によって、農産物と健康を結びつけて、さらに地域に貢献したいと考えている。

3. 島根県の森林価値の再評価：CO₂ オフセットビジネスについて

島根県立大学 講師 豊田 知世（浜田キャンパス）
島根県立大学 准教授 林田 吉恵（浜田キャンパス）



本研究は、島根県で新しいビジネスが創出できないかと発想した時、総面積 47 万 ha に及ぶ森林に目を向けて、その価値の再評価を試みるものである。

島根県の現状をみると、産業部門の CO₂（二酸化炭素）排出量は、大規模産業がないことから少ない。一方、森林による 1 年間の CO₂ 吸収量は比較的森林資源があることから確保できている。これらの CO₂ の森林吸収量から排出量を差し引くと、島根県は吸収地として位置づけられる。これをビジネスとして利用できないかというのがテーマである。

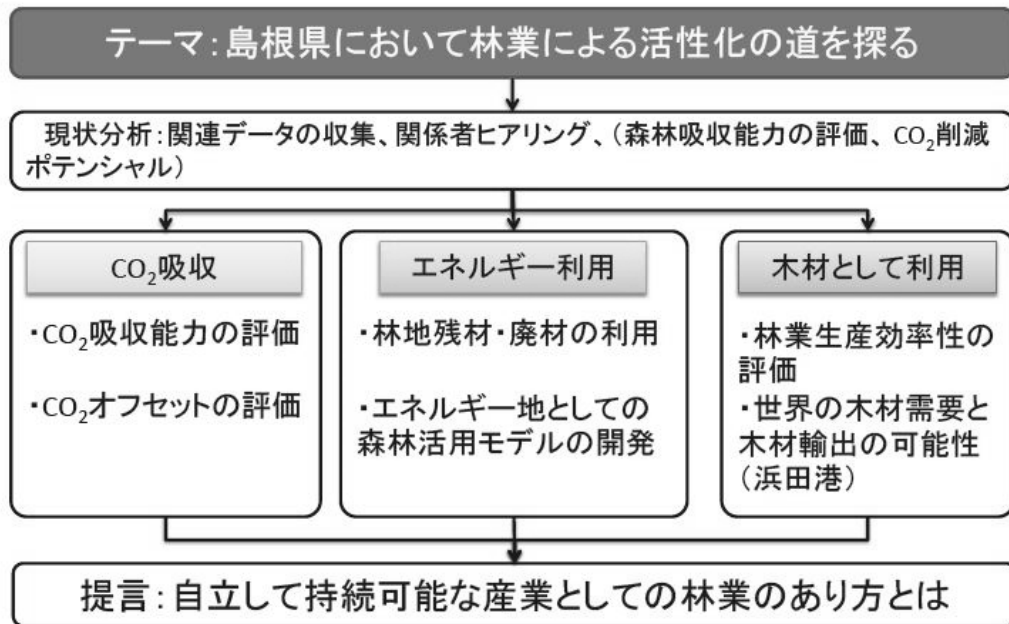
CO₂ の吸収がなぜ重要なのか。その背景は CO₂ の温室効果ガス排出量の増加による地球温暖化変動問題が懸念されているからである。この問題の解決のため、世界レベルで取り組みが行われているが、わが国も 2012 年までの京都議定書に批准し、温室効果ガスの削減義務があった。しかし、2013 年からは京都議定書からはずれ、現在は削減義務がない状態で推移している。

今後、世界の取り決めとして 2020 年からはすべての国が参加する温暖化対策を実施することになっており、わが国も削減義務が発生すると予測されている。

しかし、この場合、さまざまな要因によってどうしても CO₂ を削減できない場合も想定される。そこで、他の部分で削減することによって削減とみなす制度がある。これが「CO₂ オフセット制度」である。森林資源は、CO₂（二酸化炭素）を吸収して O₂（酸素）を排出するので、この「CO₂ オフセット制度」で森林機能が利用できる。

島根県では「島根 CO₂ 吸収認証制度」という独自制度をつくっている。国は「J-クレジット」制度を設けている。これは、植林し、間伐をして森林機能を促進し、CO₂ の吸収部分や化石燃料を節約してバイオマス発電による CO₂ の削減を、クレジットとして認定することができるものである。このクレジットは売ることができる。企業はこのクレジットを買うことで自らの CO₂ 削減量を確保する。このような制度を活用しながら島根県の森林価値を再評価していきたい。

研究の全体像：今後の予定



■「育てる林業から利用する林業」への転換

島根県の森林構成をみると、人工林 18 万 ha のうち間伐が行われているのは、年間わずか 5,000ha でほんの数%にすぎない。林齢別の森林構成をみると、使えるスギやヒノキなどの針葉樹林が使われない状態で残っている。若い木が少なく、「育てる林業から利用する林業」にシフトすべき段階にきていると考えられる。間伐が必要なのは樹木の生長が促進されるからであり、島根県では育てるだけでなく「収穫期の木材を伐採して、植えて育てる」というサイクルを回す必要があるのが現状だ。

研究の前提として「島根県の林業の活性化を探る」をテーマとして3つの柱を立て、分析したい。

1 番目が CO₂ の吸収に関する点、2 番目がエネルギーの利用の側面で木材資源をエネルギーに変える点での評価、3 番目が木材としての利用である。これは、林業の生産性や世界の木材需要を見越した輸出の可能性で、わが国は 2011 年から木材輸出促進を目指して韓国と中国を輸出先としてターゲットにしている。この流れと合わせながら木材の利用を包括的にみていきたい。本日は1 番目、2 番目について報告する。

■人工林の未間伐が多い島根県

「わが国森林事業の効率性分析」の途中経過を報告する。

CO₂ 吸収の効率性を分析したのは、地域の限られた資源を有効に活用して、住民の満足度を最大に高めること、最少の経費で最大の効果を上げることが事業を実施するには重要であるからである。

効率性分析をするにあたって DEA (包絡分析法: Data Envelopment Analysis) と呼ばれる分析手法を用いる。DEA は多入力 (インプット)、多出力 (アウトプット) で事業体の経営活動の効率性を相対的に評価し、効率が低いと判断された場合にはその改善の方向性を示すことができる方法である。経営学から発達した分析方法だが、事業の行政評価を行うためには多面的な尺度で見えていかなくてはならない。自然科学のような絶対的尺度はなく、安全性や将来性、収益性などの尺度によって相対的に評価し、総合的な判断が必要で

ある。その際にネックになるのが変数の単位の違いだが、DEAは各種違う単位の変数を一度に扱うことができるのが特徴だ。なおかつ、最もすぐれたパフォーマンスを示した事業体を基に効率性フロンティアを計測するという分析になる。

今回の分析対象は47都道府県の森林に関するデータで、インプットには、林業労働力、森林面積、労働資本などを入れている。アウトプットは、木材生産量、森林蓄積、さらに木が生長すればCO₂を多く吸収してくれるということで、蓄積増加分を入れている。

わが国の森林事業技術の効率性をDEAによって実際に分析した結果、林業は結構効率的運営ができていているという印象だ。DEAの結果は0から1の間の数値で表される。1に近いほど効率的であり、0に近いほど非効率なのだが、今回の分析では、どれも結果が0.7以上となった。しかしながら、都道府県別にみると島根県は39番目と全国的にみても非効率であることが示された。

この結果の背景には、人工林の間伐がほとんどされていない、または、多くの森林面積があるにもかかわらず手入れをしていないことから、森林蓄積が少ないのがひとつの要因として考えられる。もし、人工林の間伐森林を手入れした場合のCO₂吸収能力の増加分をクレジット換算すると、31.9億円の削減効果があることが推測される。ただし、これらの結果は試算段階であり、インプット、アウトプットなど今後考える必要がある。

■森林資源を燃料資源としての活用で削減効果が期待

2番目の木材のエネルギー利用について報告する。

木材を燃やして発電した場合、島根地域にはどの程度の発電容量があるのかを推計した。この場合、化石燃料の節約が図れ、CO₂削減分をクレジットとして売ることができる利点のほか、地域資源の活用による地域活性化が見込める。また、わが国国内のエネルギー自給率が4%と非常に低いため、エネルギー自給率を上げることができる点、固定電力買い取り制度でバイオマスは比較的高い価格で買い取られるため、経済的な面でメリットが大きいと考えられる。

ここでの分析は、島根県を4つの流域（江の川、斐伊川、隠岐、高津川）に分けて行った。また、発電量推計に当たり、2つのモデルを想定した。

1つ目のモデルが山に捨てられた木材や工場から出る廃材を利用した発電である。この場合、廃材は浜田市三隅町の中国電力三隅火力発電所が行っている「バイオマスの利用可能調査」を参考に木材を設定した。この結果、域内需給率は0.10%から0.25%であり、4流域全体で255世帯分の発電可能量が得られることが分かった。

2つ目のモデルは、森林をエネルギー資源として積極的に活用し、発電するモデルである。これは、島根県には利用可能な森林資源が豊富なこと、適切な間伐は森林の生長を促進すること、材木価格がこの50年間で10分の1に低下している点を考慮して、木材資源を燃料として利用した場合の発電ポテンシャルを推計した。主なシナリオは、植林してから35年の間に30%ずつ間伐をし、さらに樹齢80年になった木は積極的に切って使うこととした。推計結果によると、江の川流域での域内電力自給率は、2013年の8%から2055年には32%になることが分かった。

このような試算の結果、1つ目のモデルの廃材を利用するケースでは、電力固定買い取り制度で年間31.9億円分の発電量、J-クレジットで1.8億円のCO₂削減効果があり、2つ目のモデルの積極的に燃料として利用するケースでは、電力買い取り制度で262億円分の発電量、J-クレジットで52億円のCO₂削減効果が見込まれる。

木質バイオマスを活用するにあたっては、固定買い取り制度やJ-クレジット制度を意識した方向が考えられる。今回は試算であり、機械や運送費など費用などは考慮していない。今後これらを含めた研究が必要になってくる。

今後さらに3つのテーマで島根県における林業の活性化を図る方策を探るが、最終的には自立した持続可能な林業の在り方に対する提言を行えるよう、研究を進めていきたい。

第Ⅱ部

パネルディスカッション

「島根県立大学3キャンパスの総合力と地域課題

—共通課題への対応と大学の役割—



- | | | |
|-------|--------------------|-----------------|
| パネリスト | 益田市市民活動推進協議会 会長 | 吉田 篤志 |
| | 株式会社オーサン 代表取締役会長 | 島田 義仁 |
| | 島根県浜田保健所 総務保健部長 | 梶 伸夫 |
| | 島根県立大学短期大学部 副学長・教授 | 山下由紀恵 (松江キャンパス) |
| | 島根県立大学 副学長・教授 | 山下 一也 (出雲キャンパス) |
| | 島根県立大学 講師 | 豊田 知世 (浜田キャンパス) |

コメンテーター

公立はこだて未来大学 社会連携センター教授 田柳恵美子

コーディネーター

公立大学法人島根県立大学 理事長 本田 雄一

パートナーとして、ローカルの視点で課題を共有

■ 地域課題を見極めることが重要

本田 本ディスカッションでは、「島根県立大学3キャンパスの総合力と地域課題—共通課題への対応と大学の役割—」をテーマに、地域から本学との連携を検討していただけるような議論をしたいと思います。

島根県立大学には3キャンパスがありますが、浜田キャンパスは社会科学系、出雲キャンパスは看護学、松江キャンパスは栄養士、保育士の養成と総合文化学科から成り立っており、専門分野が異なります。3キャン



本田 雄一 理事長

ンパスを総合して地域との連携、地域の再生、活性化に貢献していくうえで、大学はどのような役割を果たすべきか、議論を深めます。

まず、本学との連携の実績と可能性についてコメントをいただきます。地域貢献を果たす大学が取り組みを進めるにあたっては、様々な関係者との連携があってこそ可能です。本学がいかに連携先を求めていけるか、実際に市民活動支援を行っている吉田さんから活動に至る経緯、事業概要についてお話をください。

吉田 益田市市民活動推進協議会は平成 23 年、島根県の新しい公共支援事業の開始にあたって設立されました。公共が行政のものだけではなく、民間がその一翼を担うという思いで、NPO や保育研究会、益田市などがマルチステーク・ホルダー（協働して課題解決にあたる合意形成の枠組み）を組み、益田市の地域課題を解決しようとして事業参加を決めました。取り組みは、テーマコミュニティとエリアコミュニティの融合による新しい支え合いの仕組みづくり、目的を持った団体と課題を持った地域と連携して課題を解決しようという考え方で進めました。当初の主なパートナーは益田市中心部から約 15 km 離れた中山間地の真砂地区でした。同地区は民力が強く、学校、公民館などが協力し、地域の住民が設立した会社も連携して地域活性化を図っている地域でした。

具体的には、平成 23 年度、平成 24 年度には保育研究会が地域の食材を使った保育所給食事業と NPO 法人「アンダンテ 21」が「森に入ろうプログラム」を打ち出して実施しました。また、市内全体のレジ袋を少なくしようという「みんなでエネルギーシフト」事業にも取り組み、市民活動支援センターも開設しました。平成 25 年度は益田市美都地区で地産地消を推進する活動を行っています。

保育研究会の給食事業は、地区の商品価値のない野菜を 2 か所の保育所の給食に供給し、園児と住民の交流も生まれたほか、生産者の生産意欲の向上にも貢献しました。地産地消が進む、顔の見える生産者がつくるものを食べて安心できる、生産者にお金が回る、生産者が子供との交流で笑顔になる—など保育所と生産者お互いにメリットがある事業となりました。今後この実績を踏まえて市内 29 保育所を対象に広げたいと考えています。

本田 自主的な組織が保育所や市民と連携して生産物を供給し、生産者の生きがいを見出ししていく取り組みの好例です。島根県立大学では、平成 19 年度に地域連携を担う組織として「地域連携推進センター」を立ち上げ、地域課題に取り組んでおり、また、平成 25 年 5 月 27 日には益田市との包括連携協定を締結しました。益田市地域とも今後さらに連携を深めたいと考えています。

そこで、益田市民から見た島根県立大学についての期待を伺います。

吉田 個人的感想では、島根県立大学への関心が少しずつ薄くなっているのではないかと感じます。浜田キャンパスは総合政策学部という看板ですが、市民にとっては具体的部分が見えにくいのではないのでしょうか。今後は松江、出雲も含めた 3 キャンパスと連携していきたいと思います。

山下由紀恵教授の「ふるさと教育」研究の展開は、連携を強化する契機になります。われわれと大学が、お互いに目的と成果を認識している点でモデルとなるでしょう。地元の保育研究会がこれまで取り組んできた「ふるさと教育」が、大学のアカデミックな権威で裏付けされ、研究会の大きな成果となっています。ただ、事業の展開にあたっては、初期段階から連携するパートナーと事業展開上の役割、課題、成果を認識して取り組む必要があります。そこでは市民も同じ意識レベルに引き上げられるようにすることが重要です。

私の所属する益田市の「アンダンテ 21」では従来、



吉田 篤志 会長

島根県立大学の先生たちと交流を深めてきました。「森の健康診断」や「ハマグリの稚貝調査」の際は、浜田キャンパスから来ていただきました。私も浜田キャンパスの学生を前に自分の経験を何回かお話しをさせていただいたこともあります。

■価値を地域で共有する

本田 地域課題を見極めて取り組んでいくことの重要性をご指摘いただきました。今回のCOC事業は文科省の補助事業です。事業申請書で島根県の地域課題についての記載では「人口減少、過疎化、少子高齢化」を挙げました。この課題解決には企業があつてこそ、雇用場があつてこそです。中山間地域で事業を行うこと、起業するには努力が必要だと思いますが、島田さんからエゴマ事業に至った経緯と事業概要、事業展開で苦労された点などをお話してください。

島田 元々、私の会社は川本町で建設業を営んでいましたが、昨今の公共工事削減で事業の展望が開けない状態でした。また、高齢化の進行と人口減少で過疎が進み、目立った産業もなく、若い人もいない。そこで新規事業として目新しさのあつたエゴマ事業に取り組むことにしました。

本格的に栽培を始めたのは平成20年からで、従業員のうち4人の農業経験者を担当にあて、加工は地元から雇用、販売は経験者を雇用しました。現在は販売5名で担当し、通常7、8名の体制で取り組んでいます。栽培面積は、有機圃場が5ha、加工場は3か所設けています。出雲キャンパスの山下一也副学長のご協力もあつて売り上げは伸びていますが、まだ、年間売上は5,000万円程度です。損益分岐点は7,000万円程度であり、1億円程度を売り上げないと成功とは言えないと思います。

エゴマは機能性の高い作物であり、われわれは本物を作りたいと思っています。当初から土づくり、除草、害虫・害鳥対策に苦労してきました。品種が確立されていないこともあつて、県などを通じて要請もしています。今後、栽培農家を増やし、島根県を日本一のエゴマ栽培県にしたいと思っています。



島田 義仁 代表取締役会長

本田 このディスカッションのテーマは社会連携における大学の役割ですが、本学や他大学との連携の在り方をどのようにお考えですか。

島田 エゴマの加工品開発については当初から考えていました。これまで島根大学、島根県立大学、島根県産業技術センター、島根県農業技術センターなどからご指導、助成をいただいています。エゴマの葉をマイクロ波乾燥によって粉末化させる技術を産業技術センターに開発してもらい、専売販売をしています。また、島根県立大学出雲キャンパスにご協力をいただき、学生モニターに葉やオイルの人介試験に参加していただいています。マイナーなエゴマを研究によって認知度を上げ、独自化、安定化させることでさらに事業拡大を図りたいと思っています。

本田 エゴマの今後の発展を考えた時、生産、加工、販売で6次産業化が確立されていますが、地域の大学と産業・経済界との連携や大学間連携も深めていくことも重要ではないでしょうか。大学間の連携事業として本学では、「大学間連携共同教育推進事業」を実施しており、島根大学、鳥取環境大学、鳥取短期大学の参加を得ています。学生のボランティア活動でも3月10日に島根大学と本学学生による「東北震災ボランティア」の報告会が予定されています。より一層の進化を考えています。

研究報告にあつた「CO₂ オフセットビジネス」については、地球温暖化を見据えてCO₂排出量を削減し、十分に吸収できる部分についてはオフセットしてクレジット化して売却をするということでした。行政としてどのような取り組みをされてきたのでしょうか。

梶 島根県では地球温暖化対策は環境部局だけでやっているのではなく、農林水産、商工労働、教育委員会など多くの部局が関わっていますが、森林関連では、「森林資源の積極的な活用による森林循環の促進」を重点施策としています。

森林は多くの機能、役割を持っています。きれいな空気をつくり、水を育み、また、持続的・安定的に木材を供給してくれます。地球温暖化対策の側面では、CO₂の吸収部分が注目されます。CO₂の吸収量は、間伐、除伐、新たな植林などによって森林を手入れすることにより高めることができますが、その吸収量に価値を持たせ、それを排出量と相殺することによりビジネスとして成り立たせる仕組みとしてオフセットクレジット制度ができました。

森林資源の燃料としての活用については、木質燃料はカーボンフリーの地球環境に優しい燃料であり、木質燃料を活用した発電は再生可能エネルギーとして固定価格買い取り制度の対象になっています。身近なところでは、ペレットストーブ・薪ストーブの燃料や、炭などとしての活用も含め、改めて森林資源全体の視野で考えていくことが重要だと思います。

ただし、燃料としての活用では、地域経済が成り立つレベルでの需要と供給がないとビジネスとしては成り立たないという課題があります。仮に成り立てばエネルギーの地産地消として、地域経済への波及効果は大きいと思います。安定した森林管理と原料の産出、製品としての加工・販売、需要側の設備更新・導入がエネルギー転換できるような形で成り立っていくことが必要になってきます。ここで重要なのは再生エネルギーとしての価値を地域で認識することだと思います。

本田 森林はもちろん燃料や建築材料として親しんでいます。研究報告のようにビジネスとして活用できる、つまり、森林を大事にしていくことがビジネス、商売になるといった観点です。まだモデルですが、今後の展望はどうでしょうか。

梶 オフセットビジネスは目に見えない CO₂ が対象なので、地域では実感としてはなかなかかわかないでしょうね。森林を整備しないと CO₂ 吸収量は増えませんが、その分（増えた吸収量）にどの程度の価値をもらえるのか、また、本当にお金がもらえるのか—そういう懸念もあります。それを払拭するには、一つの方策ではなく、組み合わせで森林を活用していくことです。

石見地方全体にかかわることですが、人口減少対策や中山間地域対策などで特色を生かした形で連携し、協力したり、支えあったりして魅力ある地域づくりをしていくことが今後ますます重要となります。幸いにも、この地域では三隅火力発電所で木質チップの混焼実験が始まっており、平成 27 年度には、江津市で木質バイオマス発電設備の稼働が予定されています。木質チップの供給体制は整いつつありますので、森林にかかわるビジネスを総合的に検討する下地はできています。

そうすると、森林が持つポテンシャルを地域経済の中でいかに引き出すかが重要であり、環境への貢献度を評価すると同時に、経済的に持続する森林経営につなげていくことが大きなテーマとなります。林業、環境、エネルギーそれぞれで考えるのではなく、地域づくりに様々な観点から森林をどう使っていくのか、総合的な地域づくりの中での森林の位置づけが重要となるのではないのでしょうか。そのためには総合的な分析に基づく提案が重要であり、大学の持つ地域連携や研究機能がその役割を担うと考えています。

豊田 本研究は始まったばかりで、地域にどのような課題があるのか、よく分かりません。今後、地域づくりとして考えていくのが研究の視点だと思います。森林の



梶 伸夫 部長

総合的評価については、今後取り組みたいと思っています。



山下 由紀恵 副学長

■触媒としての大学の役割

山下由 吉田さんから、大学と地域の連携では地域課題を初期の段階から大学が参加して信頼関係を構築していくことが必要との指摘でしたが、同意見です。地域の言葉・文化を資源として生かすこと、エゴマのような地域資源の開発、林業でも、「こちらの方向に向かうとどのような価値があるのか」という方向付け、理論づけ、根拠を持って説明することは大学としてできることだと思います。

しかし、その方向に向かってすべての問題解決をしていくことは大学の任務ではない、と考えます。直接問題を解決するイノベーションを大学は求められている訳ではなく、自己課題を自ら解決するという地域の市民の自己課題を認識する力、エネルギーを持って地域のネットワークの中でそれを進めていく力があつた場合に、そこで大学の役割が初めてスタートする。方向付けや、人と人をつなぐ触媒としての役割が生まれてくるのです。

益田市市民活動推進協議会の「地域資源を活用した環境学習モデル事業」が、平成24年度の島根県委託事業として行われましたが、私の研究は、益田市保育研究会やこれらの活動に触発されてスタートしました。こうした人たちと同じ思い、方向で活動ができるのではないかと考えています。

吉田 大学は知的拠点であり、プレイヤーではない。われわれの活動においてもアドバイザーや、助言の立場で存在していただければありがたい。連携が成功するかどうかのカギは、地元の人をいかに巻き込むか、だと思うのです。

私たちは平成25年度事業として、益田市美都地区で地産地消を推進する勉強会を行いました。島根県立大学松江キャンパスから健康栄養学の先生に来ていただき、ご講演いただきました。講演を通じて、地域の方が地域課題に向きあうことによって声を上げることができたと考えており、これが次のステップのネットワークになります。地域の課題にそれぞれがどの程度関心を持ってもらえるかが必要です。

益田市も保育研究会のふるさと教育の活動を受けて、今後は学校関係者と共に取り組もうとしています。これについても大学が行政、教育委員会と連携しながらやっていただきたい。知を武器にして地域のコーディネーターとしての役割を引き受けていただければありがたい。

■COC事業で新段階に入る社会連携

本田 ここまで3キャンパスの共通課題への対応と役割について議論してきました。皆さんからは大学は大学の目線ではなく、連携するパートナーとして課題を共有し、課題の展開以前にしっかりとすりあわせを行い、信頼関係を構築しながら事業を進めていくこと、地域の再生を目指す産業の振興には産業の6次産業化が重要であることなどをご指摘いただきました。われわれが気付かない資源がこの地域にはあります。これを掘り起し、いかに地域の再生、活性化に生かしていくか。しかもこれらを事業化して地域を活性化していく場合は、より多くの関係者の協力を得て、大学がコーディネート役を果たし、関係者の接着剤としての機能を果たす役割が期待されると思います。

また、田柳先生の講演にもありましたが、学習と協議を通じて地域と信頼関係を構築、醸成して長期的視点で社会連携を進めることが重要だと言えるのではないのでしょうか。

そこで、本学の3つのキャンパスで今後どのような連携が可能か、地域の課題と本学の役割についてご発言をいただきたい。

山下一

出雲キャンパスで行っているもうひとつのCOC事業は、出雲市佐田町で取り組むITを活用した健康教室です。医療は予防医学が重要になっていますが、われわれは出雲市佐田町の吉野地区で、ITで大学と地区を結んで健康教室を継続して開く試みを行っており、この2月でハード整備は終わります。また、休耕地が多い地区で、それを利用して看護学生が農業体験をしながら限界集落の生活を体験する試みもあります。積極的に在宅看護を目指す人材を育成する意味でも、重要な取り組みです。



山下一也 副学長

山下由

社会連携の中で、大学には地域資源の掘り起しや、問題解決のためのコーディネーター役を果たす役割が求められていますが、実施する地域エリアが大きな課題です。従来、松江キャンパスは松江周辺、出雲キャンパスも出雲周辺、浜田は浜田周辺に限定されていました。そこで今回のCOC事業ではCOC²-Netという新しいインターネット上のネットワークを作ろうとしています。松江からも益田、浜田へ、出雲からも隠岐や津和野へと移動ができる。もちろんネット上ですが、話し合いができる。COC事業を通して島根県立大学も地域貢献が次のフェーズに入っていくことができると思います。

豊田

森林資源をテーマにした研究が3キャンパスでどのように展開できるかを考えます。森林資源は様々な視点で見ることができることから、様々な研究分野が参加できればいいと思っています。例えば松江キャンパスでは農業、経済学、あるいはツーリズムなどの専門家がおり、そこをフィールドにして包括的に研究することで中山間地の森林を総合的に見ていくこともできます。今後、島根県中山間地域研究センターや各自自治体とも協力して地域の人を巻き込んでいきたいと思っています。



豊田 知世 講師

本田

3つのキャンパスが一体となって当地域への貢献を進めていくということだと思います。限界集落であればIT技術を利用して、いながらにして健康教室を展開できる、COC²-Netは今回の事業を通じて整備する計画です。これを通じて3キャンパスが一体となって広い地域全体に情報を発信していくことができます。さらに大学だけでなく、中山間地域研究センターとの連携などについても検討すべきとの指摘をいただきました。

最後に本学が取り組もうとしている共通課題の解決に向けた3キャンパス事業を実現させるためのポイントについて、田柳先生にお話しいただきたい。

田柳

どの話も可能性があって興味深かった。従来、似たような試みや課題に取り組んできた連携はあるけれど、以前とは違う時代背景で、社会連携を意識して実施しているのだから、市民も違う目で見ると、参加し育てる姿勢が重要です。

民話のコレクションも従来取り組まれていましたが、時代は変わっても人づいで方言は伝わっていくのですね。

土着の地に織り込まれている知恵には深いものがあり、それを聞き、学んで、生活の知恵を得てきました。これは今なお変わらず、科学技術コミュニケーションの時代でも注目されています。また、報告の中で「教師も学ぶ」という言葉がありました。子供も学ぶが、教師も、地域住民も学ぶ—皆同じ視線で学ぶこと、未来に向けて学び合う、そこが新しい視点で重要です。

エゴマの6次産業化、カーボンオフセットの推進については、極論するとどの地域でも取り組める課題です。そこで気をつけたいのは、地域の物語を強化していくことが重要だと思います。函館のがごめ昆布の例では会社が道南圏全部にわたる食の振興ビジネスにして発展させようと、函館駅の中に数か月前、「フードカン」というアンテナショップを作り、道南圏の食品をすべて売るという取り組みを始め、道南の食卓のイノベーションをうたっています。人々の食べることの関心を掘り起し、その中のがごめ昆布をどう埋め込んでいくかという広い視野から取り組んでいます。



田柳 恵美子 教授

カーボンオフセットの報告は興味深かった。しかしこの種の話では、抽象経済と実態経済の話が混在することが多い。森林を育てることで木質チップがいくら生産されるかという話と、環境貢献を旗印にカーボンオフセットで世界に打って出る話は、次元の違う話であると考えた方がよいでしょう。

地域の物語は、ミクロとかメゾにしか存在しないし、そこに地域の価値やブランドは宿ります。カーボンオフセットの研究は、地域とグローバルを結ぶよい課題であり、その中にどのようなローカルな物語を紡いでいけるかが重要なテーマになります。

地域課題については、地域の自己課題をどう認識するかという力をどう引き出すか、いわば、化学反応をどれだけ起こせるかが大学の役割だと思います。地域の人からも大学の教員はどうしたら喜んでくれるか、ということも少し考えてもらとうれしいと思います。

本田 土着の資源を発掘する重要性和、市民を巻き込むことが成功の鍵であると新鮮なご指摘をいただきました。また、ローカルの物語を紡ぐ視点で事業を進めること、学習と協働を迫及していくことが重要とも指摘していただきました。

本学のCOC事業は平成25年度が初年度であり、始まったばかりです。当地域が直面している過疎、高齢化の進行を止めてこの地域を活性化させていく、再生する課題に大学が接着剤として地域間を結び付け長期的な視点に立って具体的な課題を着実に解決していく取り組みを続けていかななくてはならないことを強く感じました。





平成 25 年度 島根県立大学・島根県立大学短期大学部

しまね地域共育・共創研究 成果報告 ポスターセッション

島根県立大学・島根県立大学短期大学部では、平成 25 年度より、地域を志向した教育・研究・社会貢献を行うために、島根県が直面する地域課題への対応に資する活動を支援する「しまね地域共育・共創研究助成金」を設けました。

今年度は 10 件の研究活動が採択されました。本日のフォーラムのステージでは、そのうち県内の共通課題を対象とする 3 件について成果報告があります。ポスターセッション形式では、以下の 3 件の成果報告をさせていただいております。

《展示研究活動報告》(揭示順)

①地域活動経費

- 「学生が作る学生のための公共交通の利用促進を目的とした情報誌の制作」
松田 善臣 准教授 ゼミ(浜田キャンパス)

②しまね地域共創基盤研究費

- 「石州左官の故郷である大田市および江津市の『鏝絵マップ』制作」
井上 厚史 教授(浜田キャンパス)
- 「産業観光の推進による観光振興の可能性」
久保田 典男 准教授 (浜田キャンパス)

2年 松田ゼミ

学生が作る 学生のための 公共交通の 利用促進を目的とした 情報誌の制作

1

厳しい路線バスの経営

平成23年度収支状況（平成22年10月～平成23年9月）

路線名	一日当 輸送量	収支率
長沢・瀬戸ヶ島線	2.9人	21.8%
市内循環線	12.5人	31.2%
大学線	80.2人	84.9%

資料：浜田市地域公共交通実施計画

収支率
= 経常費用 ÷ 経常収益

浜田市内で最も収支率のよい大学線でも85%。この状態が今後も続けば市内から路線バスが無くなってしまおう？

一定の条件を満たす路線については税金により赤字分を補っている。

4

浜田市の公共交通を取り巻く現状

人口減少が続く浜田市。
モータリゼーションの進展と相まって、公共交通の利用者数は減少の一途をたどる。
高齢化が進めば、公共交通の必要性はさらに高まる。
市内の路線バスはすべて赤字路線。赤字分は税金により補てんされ、運行を続けている。
厳しい財政状況の中、税金により赤字分を補てんし続けることは困難。
このままだと、路線バスを維持することができず、生活の足を失ってしまう人が増える可能性がある。

2

増え続ける公共交通関連支出

浜田市の公共交通関連支出の推移 2億1200万円！

年度	石見交通補助	市生活路線バス	乗合タクシー	スクールバス	合計
H17	166,507				166,507
H18	173,325				173,325
H19	173,714				173,714
H20	195,831				195,831
H21	202,691				202,691
H22	212,141				212,141

資料：浜田市地域公共交通基本計画

5

減少する人口と上昇する高齢化率

国勢調査からみる人口

年度	人口 (人)	高齢化率 (%)
S35	89,472	8.2%
S40		
S45		
S50		
S55		
S60		
H2		
H7		
H12		
H17		
H22	61,713	29.9%

資料：平成24年度 統計はまだ

3

今後減り続けることが予想される浜田の歳入

浜田市予算規模の推移（歳入額）

年度	歳入額 (億円)
H25	440
H26	422
H27	386
H28	359
H29	345
H30	342
H31	326
H32	308

資料：平成25年度中期財政計画

6

私たちにできることは？

浜田市の重要な公共交通である路線バスは、このままでは存続が危ぶまれる。

何かできることはないだろうか？

クルマを利用している人にバスを利用してもらう？
→ 大切なことだけど、ちょっとハードルが高そうだ。

それならクルマを利用していない人に、もっとバスを利用してもらおう！

7

交通の大部分は派生需要なんだから...

もっと多くの人に、たくさん公共交通を利用してもらうには **派生需要の喚起**が必要

「公共交通を利用しましょう！」
と呼びかけるだけでは、あまり利用は増えない？

公共交通に乗ってでも行きたくなるような
目的地に関する**情報提供**が必要なのでは？

10

誰をターゲットにするか

島根県立大学の 新入生のおよそ63% は 学生寮 に入る。

入学生237名中
149名が学生寮
に入寮
平成25年度

寮生はクルマを持つことができない。

新入生の多くはバスを利用する

入学直後の新入生は浜田のことをあまり知らない。

新入生に浜田のことを教えてあげて、もっとバスに乗って出かけてもらおう。そしてバスの生活になれてもらおう！

8

思い込みをぶっ潰せ！

- ・ 浜田には遊ぶところがない
- ・ 浜田には行くところがない
- ・ 浜田はクルマがないとどこにも行けない
- ・ バスはお金がかかる

んなこたない！ 

上記のようなことをよく耳にする。ただ、少なくとも大学周辺に住む私たちには、これはあてはまらない。大学線を利用するだけでも、楽しいところ、おいしいところ、いろんなところに行ける。まずは知ってもらうことが重要だ！

11

本源需要と派生需要

バスや電車に乗ること自体が目的

本源需要

なくはないけど
多くはない

乗り鉄とか？

買い物、通院など、他の目的を達成するために
バスや電車に乗る

派生需要

ほとんどが
コレ

交通の大部分は派生需要！

9

新入生向けの情報誌を作ろう！

- ・ **ターゲット**：26年度の新入生 + その他学生
- ・ **メインテーマ**：大学線を攻略しよう！
 - ・ 県大生にとって、そして寮生にとって、もっとも身近な大学線をさらに利用してもらいたい。大学線沿線だけでも、学生が楽しめるスポットがたくさんあることを知ってもらいたい。
- ・ **その他掲載情報**：公共交通が断然お得！
 - ・ クルマは所有するだけで（乗らなくても）お金がかかることをしってもらおう。ガソリン価格の高騰が続く中、本当にクルマを持つ必要があるかを考えるきっかけにして欲しい。

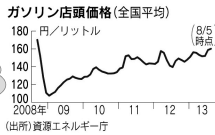
12

例えばどんな内容？

公共交通が断然お得！



ガソリン価格が高騰している現状を知ってもらおう



クルマを持っているだけでかかる費用

自動車購入費、自動車税、重量税、車検費用、自動車保険料、駐車場代、etc.
軽自動車としても、所有するだけで1日あたり1,000円程度必要。

大学線の定期は1ヶ月で3,000円。1日あたり100円!!

13

バスに乗って出かけたい情報は？

どこを紹介すれば、出かけたいかな？
これが意外と難しい...

対象は県大の新入生。年齢も近い僕たちが自信を持って
おススメするところなら、きっと興味を持ってくれるだ
ろう！

↑説得力には欠けますが、私たちゼミ生が厳選した情報
を載せることに意味があると考えています。
=私たちがつまらないと思う情報は載せない！

大学線の運行エリアを3つに分割。
3グループに分かれ、それぞれのエリア情報を徹底的にリサーチ。
その中から選びに選び抜いた情報を掲載する。

16

こんな情報で本当に効果があるの？

どうやら
あるらしい！

詳細は...

藤井聡、西中卓也、北村隆一(2003)自動車免許非保有者に対するコミュニケーション実験。土木計画学研究・論文集、20(4), pp. 1003-1008.

免許を持たない人を対象に、自動車利用についての事実情報を提供
することで、人々の認知が変化し、免許取得行動に変化がでるかど
うかを実験した。

事実情報の提供から6か月後に免許の取得率を調査した結果、コスト
情報(自動車保有にかかるコスト)を提供された人は、
されなかった人に比べ免許取得率が(統計的に有意に)下
回った。

14

簡単だと思ってたけど...

情報誌を作るのって、結構簡単だと思ってましたが、

- ・取材先へのアポイント取り、日程調整
- ・より魅力が伝わるようなコピーや文章
- ・飲食店なら「おいしそうに見える」写真
- ・紙面のレイアウト



取材の様子

はじめてのことばかりで結構大変でした。

いろいろと大変なこともありましたが、なんとか取材も終わりました。

あるゼミ生の感想
今回参考にしたたくさんさんの情報誌。
今まで何とも思わなかったけど、どれも
すごいなぁと気づかされました。

ありがとう
ございました

早く取材に応じていただいたみなさまに、
この場を借りて感謝申し上げます！

17

事実情報の提供で認知・行動が変わる

藤井聡(2003)社会的ジレンマの処方箋—都市・交通・環境問題の
ための心理学、ナカニシヤ出版。によると、

免許取得前の多くの人々は自動車について肯定的信念を抱く一方、否定的
信念を十分に認識しないままに多くの他者が免許を持っているからと
いう事だけを主たる理由として、深く考えずに免許を保有していること
が考えられる。(中略)免許取得前の人々が、自動車利用にとって都合の
よい「思い込み認知」を形成している可能性が考えられる。(中略)

いずれにしても、こうした思い込み認知は、事実情報を提供すること
で「矯正」されるかもしれない。

前述の実験結果について、

事実情報の提供が免許取得を抑制する方向の効果を持ちうる可能性を支持
するものであると言える。

と述べている。

情報提供の
意味はありそうだ！

15

途中経過



来年度の新入生に入学直後に渡せるよう、
現在、鋭意制作中。レイアウトを調整し
たり、文章のチェックを行うなど、最終
段階に入っています！

18

「石州左官の故郷である大田市および江津市の『鏝絵マップ』制作」

井上 厚史 教授（浜田キャンパス）



「石州鏝絵マップ」の製作

島根県立大学総合政策学部
井上厚史ゼミの取り組み
2014年2月21日COC全域フォーラム

③2013年度の取り組み（前半）

4月～ 石見銀山、鏝絵、棚田、有機農業に各班ごとに
分かれて調査

6月～ 大阪商業大学横見ゼミとの石見銀山調査合宿

9月～ 鳥取県琴浦町「光の鏝
絵」調査（夏期キャラバ
ン）



①鏝絵の取組み開始

- 2007年 石見銀山世界遺産登録
- 2007年 ゼミで銀山街道に取り組み始める
- 2011年 『大学生がつくる銀山街道ガイドブック』の製作
- 2012年 新テーマ「鏝絵」に取り組み始める

④2013年度の取り組み（後半）

10月～ 昨年度のHPを引き継ぎ石見銀山、鏝絵、棚
田、有機農業の各班ごとに発信（～2月完成）
鏝絵マップ作成開始

11月～ 馬路・温泉津の鏝絵巡り、全体打ち合わせ

12月～ 第1・2回マップ作成全体会議の実施

1月～ 第3回マップ作成全体会議の実施

2月～ 第4回マップ作成全体会議の実施
鏝絵マップ完成

②『鏝絵資料集』の作成（2012年度）

- 2012年ゼミで鏝絵に取り組み始める
- ホームページでの取り組み
- 夏に鏝絵調査キャラバン実施
大森町～尾道市
- 『鏝絵資料集』の作成



⑤「鏝絵マップ」の作成開始

(1)COC事業への応募

(2)構成案の作成

- A2版裏表に決定
- 表面を6つに分割
- 裏面に地図を配置

(3)役割分担の決定

- ①表紙・アクセス班～森山、土江
- ②文字班～庵野、市山、岡
- ③写真班～石橋、金川、余村
- ④地図班～高木、高橋、毛利



⑥表紙・アクセス班の作成過程

- 10月 表紙デザイン・アクセス作成、決定
- 11月 表紙デザイン(画像切り抜きなど)・アクセス編集
表紙に使用する写真の撮影
- 12月 表紙デザイン(キャッチコピー追加)・アクセス編集
- 1月 表紙デザイン完成・アクセス編集
- 2月 最終調整
馬路での最終確認
入稿

使用したソフト:ペイント
Photo shop
InDesign

⑨文字班の製作過程

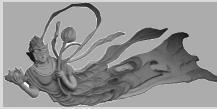
- 10月 パンフレット制作スタート
- 11月 掲載項目決定 馬路、石州左官、松浦満幸さんについての紹介。
- 12月 パンフレットの原稿を作成
打ち合わせ後、松浦さん渡辺さんの指導を受け文章訂正
- 1月 松浦さんのアトリエで取材
- 2月 大田市の図書館にて「馬路歴史」資料集め
先生との文章最終チェック
完成



⑦表紙のデザイン



切り抜き前



切り抜き後

表紙で使用した画像は、馬路にある満行寺の『天人』の鍍絵。
この鍍絵を切り抜いて風景の写真と合成させて作成。

〈苦労した点〉

- 初めてPhotoshopを使用している画像編集、特に切り抜きの作業は細かいところまで切り抜いた点。
- 悪天候が続きなかなかいい写真が撮れなかった点。

〈工夫した点〉

- キャッチコピーに合わせて天人が馬路の街を見守っているような画像に仕上げた点。

⑩取材風景

取材日:1月29日 場所:仁摩町馬路 高山会館
取材内容

- 現在製作中の亀の鍍絵の下塗り作業の見学
- 作業工程について
- 製作にあたっての苦労話
- アトリエにある作品について
- 写真撮影



⑧表紙の製作過程



① 鍍絵の画像を切り抜き、空を飛んでいる様子をイメージしてペイントで作成。



② インターネットにあった青空のサンプル画像を使用していたので、自分たちで撮影した写真に変更。



③ タイトル・キャッチコピーなどの文字を追加し、それに合わせて写真を馬路の風景に変更。

アクセス



- 地図の範囲は仁摩町馬路を中心に中国地方全体図が分かるようにした。
- 交通機関としてJRと国道や県道、高速道路を地図の中に入れた。
- 出雲大社や石見銀山などの観光地の場所を位置づけしてより分かりやすくした。

使用したソフト:ペイント、InDesign

⑪代表的な石州左官について

- パンフレットでは主に4名の代表的な石州左官について取り上げた。
- その中でも、松浦栄吉は「左官の神様」と呼ばれ、この人物の紹介は鍍絵を紹介する上で必須なため、個別に欄を設けた。
- これらは渡辺さんの「鍍なみはいけん」と自分たちの取材を参考に内容を作成した。

馬路について

- 鍍絵についての知識を深めるために、松浦さんへのインタビューやアトリエを見学させていただいて、本には載っていないような写真や見たことのない道具を見ることができた。
- 情報を得るために仁摩図書館へ行き、「馬路教育史」という本から馬路や左官について詳しい情報を調べた。

⑫写真班 製作過程

- 10月 鏝絵マップ写真班始動
(担当: 鏝絵写真、渡辺さん紹介ページ)
- 11月 大森町、馬路の写真撮影
大田市内、仁摩、温泉津の写真撮影
- 12月 渡部さんと美郷町、大田市の写真撮影
渡部さん紹介ページ作成・編集、掲載する写真決定
- 1月 地域ごとに鏝絵を区分する作業
渡部さんの紹介ページ完成
- 2月 写真の配置決定、場所を点で示す作業
鏝絵のコメント作成
鏝絵マップ完成

⑮地図班 製作過程

- 10月 鏝絵マップ地図面作成スタート
図書館よりマップ資料集め
- 11月 鏝絵マップの範囲(大田市～温泉津町)を確定
地図の元データ作り
(国土地理院の地図参照)
- 12月 トレーススタート
トレースの繰り返し
- 1月 地図の色塗り、イラスト
改正案の作成
- 2月 完成版の作成

⑬鏝絵のカリスマ 渡部さんとの出会い



- ・ 以前から井上厚史ゼミの先輩方は渡部さんと交流があった
- ・ 先輩に誘われて鏝絵展に参加し、そこで初めて渡部さんとお出合いした
- ・ 第一印象は若々しく活のある方だった
- ・ 渡部さんにアドバイスをもらいつつ鏝絵調査を開始
- ・ この鏝絵展を機に親交を持つようになった



この出会いから数カ月後 …… 一大プロジェクトの「鏝絵マップ」作成にご尽力いただいた

⑯製作過程



⑭工夫・苦労した点

〈工夫した点〉

- ・ 見る人にとって分かりやすいように場所を6つに分けてグループ化した。
- ・ 鏝絵を写真つきで紹介した点と写真は掲載できなかったが鏝絵が実際にある位置を○と●で区別をした。

〈苦労した点〉

- ・ 数ある鏝絵のうちどれを紹介するべきか迷った。
- ・ 悪天候や写真を撮りにくい場所もあり、肩車をするなど、何回も撮り直した。



⑰工夫した点と苦労した点

〈工夫〉

- ・ 位置関係を正確にしたこと。
- ・ 駅名や観光名所などのイラストを入れて、楽しめるようにしたこと。

〈苦労〉

- ・ 容量の多い地図データを何回もスキャンして貼り合せたこと。
- ・ 打ち合わせの度に修正点があり、最初からのやり直しが多かったこと。

第1回石州左官鑑絵マップ制作全体打ち合わせ報告書 12.4

1.はじめに
この報告書は鑑絵マップを作成するため、12月4日に馬路まちづくりセンターで、関係者が一同に集まる「打ち合わせ会議」について活動報告を述べる。

2.参加者
島根県立大学 井上厚史ゼミ ゼミ生 教員
元大田市職員 渡辺孝幸
江津市左官職人 松浦満幸
大田市馬路まちづくりセンター主事 石橋哲一郎
柏村印刷株式会社 所長 中村哲士

2.目標
・関係者一同の顔合わせ
・スケジュールの確認
・各班調査してきた資料、パンフレット原案を元に、専門家からのアドバイスをいただき、各ページの編集、改訂、マップサイズの検討をする。
・各班、連絡先の交換
・次回の打ち合わせ日の確認

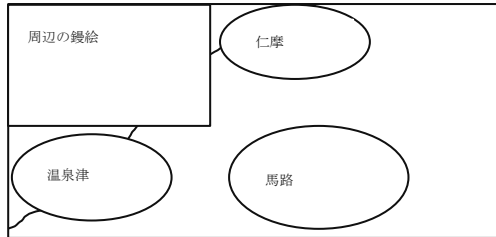
3.内容
・鑑絵の写真だけをマップに載せるのではなく、その建物の全体、背景の写真も取り入れる。目安の建物もあれば良い。(入り組んだ場所に鑑絵がある場合があり、街歩きの際に分かりにくい)
・詳しくすぎるとプライバシーが…許可を得る必要がある。
・鑑絵マップ地域(馬路、仁摩、温泉津)→世界遺産エリアの鑑絵マップ
・訂正版 サイズA2

表 文字情報	裏 地図+鑑絵写真 馬路、仁摩、温泉津 その他の鑑絵
-----------	-------------------------------------

・詳細レイアウト(表) A2 六つ折り

① タイトル+表紙 キャッチコピー「鑑絵とは」	② 馬路～「石州左官の故郷」 鑑絵の神様 松浦栄吉	③ 松浦満幸さんのアトリエ(高山会館) ・プロフィール ・活動
④ ・鑑絵のカルスマ 渡辺さん	⑤ 石州左官の紹介 ・児島喜六 } 顔写真 ・井沼田 } ・三嶋 }	⑥ アクセス(裏表紙) ・世界遺産、大森地区の図示 ・連絡先(大学、渡辺、松浦、まちづくりセンター、柏村印刷) ・製作者、ゼミの紹介

①表紙班(土江、森山)+先生②文章班(庵野、市山、岡)③写真班(石橋、余村、金川)+渡辺さん④文章班(庵野、市山、岡)+松浦さん⑤文章班(庵野、市山、岡)⑥表紙班(土江、森山)+先生
・詳細レイアウト(裏) A2 六つ折り



担当、地図班(高木、高橋、毛利)+渡辺さん
写真は写真班から貰い、渡辺さんと採用する写真を選択し、改めて写真を撮る必要がある場合は写真班が撮影しに出かける。
・各班に分かれ、担当の専門家の方と熟考していく。連絡先の交換。

4.今後の予定
今回の打ち合わせで出た課題をそれぞれの班で編集、補充する。12月18日(水)に第2回打ち合わせ会議を馬路まちづくりセンターにて行い、共に制作活動を重ねていく。

第2回石州左官鑑絵マップ制作全体打ち合わせ報告書 12.18

1.はじめに
この報告書は鑑絵マップを作成するため、12月18日に馬路まちづくりセンターで、関係者が一同に集まる「打ち合わせ会議」について活動報告を述べる。

2.参加者
島根県立大学 井上厚史ゼミ ゼミ生 毛利卓席
町なみ探偵団 渡辺孝幸
大田市左官職人 松浦満幸
大田市馬路まちづくりセンター主事 石橋哲一郎

2.目標
・各班、第一回で研究員の方々からアドバイスをいただき、編集してきたページを全体で披露。そして学生と研究員3名とともに再考案する。
・マップで紹介する写真の選定
・スケジュールの確認
・次回の打ち合わせ日の確認

3.内容
○表紙班
・写真の選択○
・キャッチコピーの必要がある。鑑絵の紹介
・監修の渡辺×渡部○ 編集

○石州左官とは・松浦栄吉
・「左官や大工が多く選ばれた理由」の部分を中心に。
・「石見出身の左官職人集団」→「職人達」としたほうが良い。(集団でやっているわけではない)
・「ルーツが島根県大田市の馬路地方」→「石見地方」に変更。(他地区から苦情がくるおそれ)
・特に馬路では左官職人を多く輩出したとつなげる。
・「かつて石見銀山に深く関わりを持った…」の部分→カット(確かではない)
・「日本の経済にもいい影響を与えた」→「多大な貢献を果たした」
・船乗りから左官へ。銀山の閉山→出稼ぎの原因

・松浦栄吉は人物であるので「とは」という表現より「松浦栄吉は」
・「大阪郵政管理局や福岡医大」→既に存在しない建物。「様々な近代建築を自身が手がけたり、指導した。」

また、彼の人的魅力も評価され、神様と呼ばれた。」
・どちらの写真も平行に撮る。
・レイアウトを再考する。

○渡部さんのページ
・全体的に文字数が多い(現在568文字。文字を削る。言葉の表現)
・「一級建築士の資格を持ち…」一削る(仕事のことは最後に少しくらいで)
・おすめの作品の紹介を再編集(西往幸)
・渡部さんの顔写真を載せる

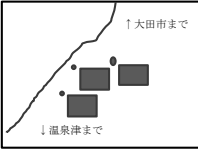
○松浦さんのページ
・「休日の土日で」→「暇を見つながら(毎週ではない)
・池月、池月がモデルの産地は様々…」池月の生まれたとされる…」→順番を入れ替えると良い。
・なぜ池月か馬路との関係
・琴姫、琴姫の紹介になっている。(琴姫の紹介はいらぬ。鳴き砂の特別な伝説、地元にある伝説を作った鑑絵を作成したという文章に。地元の誇りを形にしたのがこの鑑絵である。)



○アクセス
①アクセスの地図の中に島根県の簡単な全体の位置づけ地図を入れる
・交通機関は「松江」の乗用車とJRの距離と時間をいれる
・連絡先、脱字

元大田市職員→町なみ探偵団
江津市左官職人→大田市馬路
清→風沙

○幾絵地図 (A2) 例



- ・A2 サイズであるので、拡大地図は必要ないのでは？(仮の A2 サイズで紙面いっぱい地図を作成してみる。バランスよく)
- ・周りを囲んでいる写真も不要。(アクセスに支障がないように編集し、幾絵のある場所とその幾絵の写真載せる)
- ・海沿いを地図外の周辺にある幾絵紹介に
- ・福光を地図から除き、大田市を少しピックアップ

○幾絵写真 年内にある程度は写真撮影しておく

4.今後のスケジュール

12.26 渡部さん、松浦さんと共に幾絵撮影。(まだ撮っていない幾絵など)

冬休み 各班、アドバイス元ページを再編集

1月中旬 第3回打ち合わせ会議を実施

2月上旬 世界遺産周辺の幾絵マップ、データ完成

柏村印刷へデータ送付

2月下旬 発表会

第3回石州左官幾絵マップ制作全体打ち合わせ報告書 1.29

1.はじめに

この報告書は幾絵マップを作成するため、1月29日に馬路まちづくりセンターで、関係者が一同に集まる「打ち合わせ会議」について活動報告を述べる。

2.参加者

島根県立大学 井上厚史ゼミ 井上厚史 学生
町なみ探偵団 渡辺孝幸
大田市左官職人 松浦満幸
大田市馬路まちづくりセンター主事 石橋哲一郎

3.目標

- ・各班、第二回で研究員の方々から頂いたアドバイスをもとに、編集してきたページを全体で披露。そして学生と研究員3名とともに再考案する。
- ・パンフレットの構成
- ・スケジュールの確認
- ・次回の打ち合わせ日の確認

4.パンフレットの構成

- ・A2 六つ折り ジャバラ開き

5.内容

○表紙紙

- ・背景の写真を変更する必要がある
- ・幾絵が見守る街の後に続くキャッチコピーを載せる

○馬路とは 石州左官とは

- ・文字の表現を変更する(課題だらけの地域、もっと行政機関がピックアップ…)
- ・「現在、馬路ではまちあるきコースも始めている」ということを記載
- ・「馬路教育史」に馬路や石州左官についての歴史が綴られているので、大田市図書館で資料集めをして書き直し。
- ・松浦栄吉の写真などの人物写真のサイズを同じ大きさにトリミング

○左官職人紹介

- ・文章はOK

- ・見嶋喜六は森田家へ養子に行ったので森田喜六という説もある。

○松浦さん紹介 (みつゆきさん)

- ・幾絵に取り組み始めたきっかけは「大森で開かれた幾絵展がきっかけ」
- ・作品紹介は松浦さんの作られた思いを掲載すること。
- ・松浦さん、渡辺さんの紹介ページの下に掲載
- ・全ページ「である調」に統一する

○渡部さん (たかゆきさん)

- ・写真班が作成した文を渡部さんに添削してもらおう。
- ・町なみ探偵団のHPの紹介を提示

○アクセス

- ・地図を広域化する。(馬路を中心に東は鳥取、西は山口、南は広島までを示す)
- ・時間の掲載の部分で到着地点を決める。
- ・時間はおおよそで
- ・連絡先と出版・製本を分ける
- ・JR 山陰本線をつける

○裏面・地図

- ・国土地理院の地図をトレースして、幾絵の写真と合わせてみた
- ・地区の区分けをする(旧大田、仁摩、温泉津)
- ・地図をカラー化
- ・強調したい写真はやや大きめにする
- ・写真のグループ分けをして掲載

6. 次回の打ち合わせ日の確認

2/5に決定

第4回石州左官幾絵マップ制作全体打ち合わせ報告書 2.5

1.はじめに

この報告書は幾絵マップを作成するため、2月5日に馬路まちづくりセンターで、関係者が一同に集まる「打ち合わせ会議」について活動報告を述べる。

2.参加者

島根県立大学 井上厚史ゼミ 井上厚史 学生(欠席者:庵野、市山、高橋 レストのため)
町なみ探偵団 渡辺孝幸
大田市左官職人 松浦満幸
大田市馬路まちづくりセンター主事 石橋哲一郎
柏村印刷 中村哲士

3.目標

- ・各班、第二回で研究員の方々から頂いたアドバイスをもとに、編集してきたページを全体で披露。そして学生と研究員3名とともに完成に向けての最終確認。

4.内容

- 表紙
- ・アクセスの地図について、「9号線やJR山陰本線」など文字をいれる
- ・各ページの誤字脱字の添削
- ・全体的に好評化

○裏面 地図

- ・大森地区(世界遺産)の位置が特定できるように別色で塗る
- ・幾絵の写真のコメントの添削と再考
- ・松浦さんの作品は新しくグループ分けをする
- ・ポスターに紹介されていない作品も黒丸で地図の中に示す。
(右下に「詳しくはこてなみはいけん」と掲載しておく)

⑱今後の展望

・「鏝絵マップ」(10,000部)の配布先

馬路まちづくりセンター	3000
大田市役所	1000
渡部孝幸さん	1000
松浦満幸さん	1000
島根県立大学地域連携推進課	500
井上厚史研究室	3500

※研究室の3500部は、島根県西部や広島県の人目につきやすい場所に、＜無料パンフレット＞として置いてはどうか。



見島喜六 (こしまきく)
大田市で生誕した実業家として生まれ、彫刻に天賦の才を発揮し、芸術性の高いドラマチックな作品を現した。明治18年(1885)仁摩町西住寺の本堂正面小壇にほどこされた「龍」の透彫彫刻はその代表作である。彼は、技法だけでなく人間性にも優れていたとされ、多くの旧家や寺に彼の名前が記されている。大田市西住(こくぶ)町の森田家には、晩年に作ったと思われる「七福神」「唐獅子」などが残っている。仁摩町の見島保仁には、「龍」の石前彫像が、また見島公夫宅には「大黒さん」の焼き物など、若い頃の足跡が残っている。

馬路(まじ)とは…
馬路は鳥取県大田市仁摩(にま)町にある。大田市は、鳴り砂で有名な琴が浜海岸や2007年にユネスコ世界遺産に登録された石見銀山がある。馬路出身の有名人には、元禄時代に「開拓史上、古今を通じた大名人」と言われた本因坊道策(どうさく)の名が思い浮かぶ。彼は仁摩で、大業も厚かったらしい。しかし、いま馬路が注目されるのは、なんといっても「鏝絵」である。石州左官が現した鏝絵のふるさである馬路は、2013年から「鏝絵鑑賞の町歩きコース」も始まっており、いま馬路に熱い視線が集まっている。

石州(せきしゅう)左官とは…
石州左官とは、近代建築に高い技術をもつた鳥取県西部地方(石見(いわみ)出身)の左官職人たちのことである。なぜ鳥取県石見地方に左官や大工の多くがいたのか…それは、かつて鳥取県小倉金沢町で経済活動が盛んで、地域の需要にも関わったため。生きていくために「田舎」が大きなウエイトを占めていた。もっとも有名な田舎職人が左官であつたらしい。「馬路教育史」には「馬路地区は昔ながらの田舎で、農耕面積も少なく、これといった産業もなく、いきおい資本のいらぬで食っていく技術を生かした大工、左官が唯一といっていい生計を立てることでできる職業であつた」と記されている。生きていくための技術で、そこそこ石州左官の技術を全国に高め、高貴な芸術性を獲得した原動力であつた。

<左官の神様> 松浦栄吉(まつらえきち)
松浦栄吉は、安政3年(1858)仁摩町馬路に生まれた左官職人である。彼は日本の伝統的な左官技術ももちろんのこと、上海に派遣された際にイギリスの伝統技術である乾壁(壁と天井の間の隙)の技法も習得した。伝統的な左官技術に加えて、西洋風の装飾や新しい技術を取り入れて次の仕事をこなして、石州左官の名を全国に知らせた。技術だけでなく、多くの左官職人を育て上げた功績により、松浦栄吉は「左官の神様」と呼ばれている。仕事をやって九州の直方県では、印半郎の男がスライと並び、左官の神様と並べられたといわれている。彼の菩提寺である大田市大森町西住寺の経蔵西面には「龍」「牡丹」「菊」の鏝絵が施されているが、これは馬路村の門徒衆によって奉納されたものである。

鏝絵(こてえ)って何?
「鏝絵」は、左官職人が壁を塗る際(こて)を使って民家や土蔵の壁に漆喰(しっくい)で絵を描いたもの。壁面に漆喰を塗り上げて模様を作り、多くは漆喰に色を混ぜた色漆喰によって、色鮮やかになっている。鏝絵の絵柄には、幸せの祈りや魔除けなどの人々の願いが込められている。石州(鳥取県西部地方)は優秀な鏝絵職人のふるさとである。

石州
大学生がつくる鏝絵マップ

鏝絵が見まもる街

鳥取県大田市にある寺院や神社などの伝統的家族には、ただひびくだけではない味がある。石州(せきしゅう)左官とよばれる職人たちが、プライドをかけて熱い思いを表現した「鏝絵」とよばれるレリーフだ。

馬路の風景

<石州左官の伝承者> 松浦満幸さん
松浦満幸(まつらみちゆき)さんは、左官の神様と呼ばれた松浦栄吉と同じ仁摩町馬路の出身。平成2年に大森町で開かれた鏝絵展を見に行ったのがきっかけで、本格的に鏝絵に取り組み始めた。しかし、鏝絵に取り組み始めた当初、鏝絵を作ったことがある職人を探したが、残念ながら鳥取県内で見つけることができなかった。そのため、現存する鏝絵を息に行ったり、松浦さん自身で工夫を凝らしながら、独学で技術を継ぐなど努力を重ねてきた。現在は左官の仕事をしながら、自ら「鏝絵アトリエ」を設けて、そこで鏝絵の作り取りを行っている。アトリエは馬路の「高山会館」内にあり、国道9号線から馬路に入るとすぐに目に入る建物だ。このアトリエで松浦さんは多くの作品を作り続けている。高山会館の外壁に飾ってある「名馬池月」は松浦さんの代表作である。

<琴姫伝説> 平成15年11月製作
馬路の琴ヶ浜会館の外壁に飾られている「琴姫伝説」は、幕末安政7年(1860)に飾られた。琴姫伝説に登場する琴ヶ浜の鳴り砂や琴姫が大黒に描かれている。この作品は彼の目抜き通りであり、多くの人に馬路の鏝絵について知ってもらうことに役立っている。

<鏝絵のカリスマ> 渡部孝幸さん
渡部孝幸(わたなべたかゆき)さんは、工学院大学建築学科を卒業後、1980年から2006年まで大田市役所に勤務。世界遺産の大森町の伝統的町並みが全国重要伝統的建造物群保存地区に選定されて以来、調査から復原修理まで手掛けるなかで鏝絵に出会う。そのあまりの素晴らしさに衝撃を受けたことが鏝絵に関わるきっかけとなった。以来、石州左官や鏝絵の調査研究にのめり込み、「まちなみ探検団」の仲間といっしょに、全国へ足を運んだという。2008年には長年の研究成果をまとめた「鏝絵なはけん」(ワンライオン、2008)を出版。鳥取県内をはじめ、全国の多数の鏝絵と、製作した左官職人の生き様や作品にまつわる話が豊富に掲載されている。渡部さんおススメの作品は、圧倒的な立体感で甦る仁摩町西住寺の「鳳凰、安珍清盛、金毛丸尾の妖狐」や、魔羅にはたく大森町西住寺の「鳳凰」である。これらの活動を支えているそう。現在は、県下でもっとも全国へと活動を展開、建築設計事務所を主宰する現任も、鏝絵への探究心と情熱はとどまることがない。

「まちなみ探検団」のホームページ
http://www.kisenanai.jp/index.html

アクセス

鳥取県 大田市 馬路

馬路までの移動時間

<自動車> 松江市から(90km) 2時間 出雲市から(48km) 1時間
新田市から(40km) 1時間 広島市から(144km) 2時間
<バス> 松江市から(90km) 1時間30分 出雲市から(48km) 2時間30分
新田市から(40km) 1時間30分

<高速バス> 広島-松江(2時間) ~ JR 合計3時間30分

連絡先

まちなみ探検団 渡部孝幸 大田市役所馬路まちづくりセンター 主事
〒694-0041 石橋町一丁目
鳥取県大田市長久町長久イ351-3 鳥取県大田市仁摩町馬路1727-6
TEL.0854-82-5640 TEL.0854-88-9070

大田市馬路左官職人 松浦満幸 鳥取県立大学総合政策学部 片上史朗 准教授
〒695-2304 〒697-0016
鳥取県大田市馬路1372 鳥取県大田市西住町 2433-2
TEL.0854-88-4304 TEL.0855-24-2200 (代表)

片上史朗准教授の紹介
鳥取県大田市三郷町にある宮内庁所蔵の「鏝絵」や、「大学生がつくる鏝絵マップ」ドックアップ(山崎中央新聞社、2011)の制作、石見山(今昔)の調査など、石見地方を中心とした中山間地域活性化を日々研究しています。

掲載・編集
片上史朗 准教授
〒697-0064 鳥取県大田市大田町大田口1059-3
TEL.0854-84-5316

監修 片上史朗
渡部孝幸 松浦満幸 石橋町一丁目

制作に関わった学生
高山 大地 金川 夏美 船野 敬太 石橋 建也 山内 友紀
岡 徹也 高木 千穂 藤原 成美 土江 円 毛利 紗紗
余村 孝輔

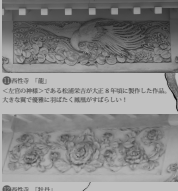
松浦満幸さんの作品



仁孝の作品



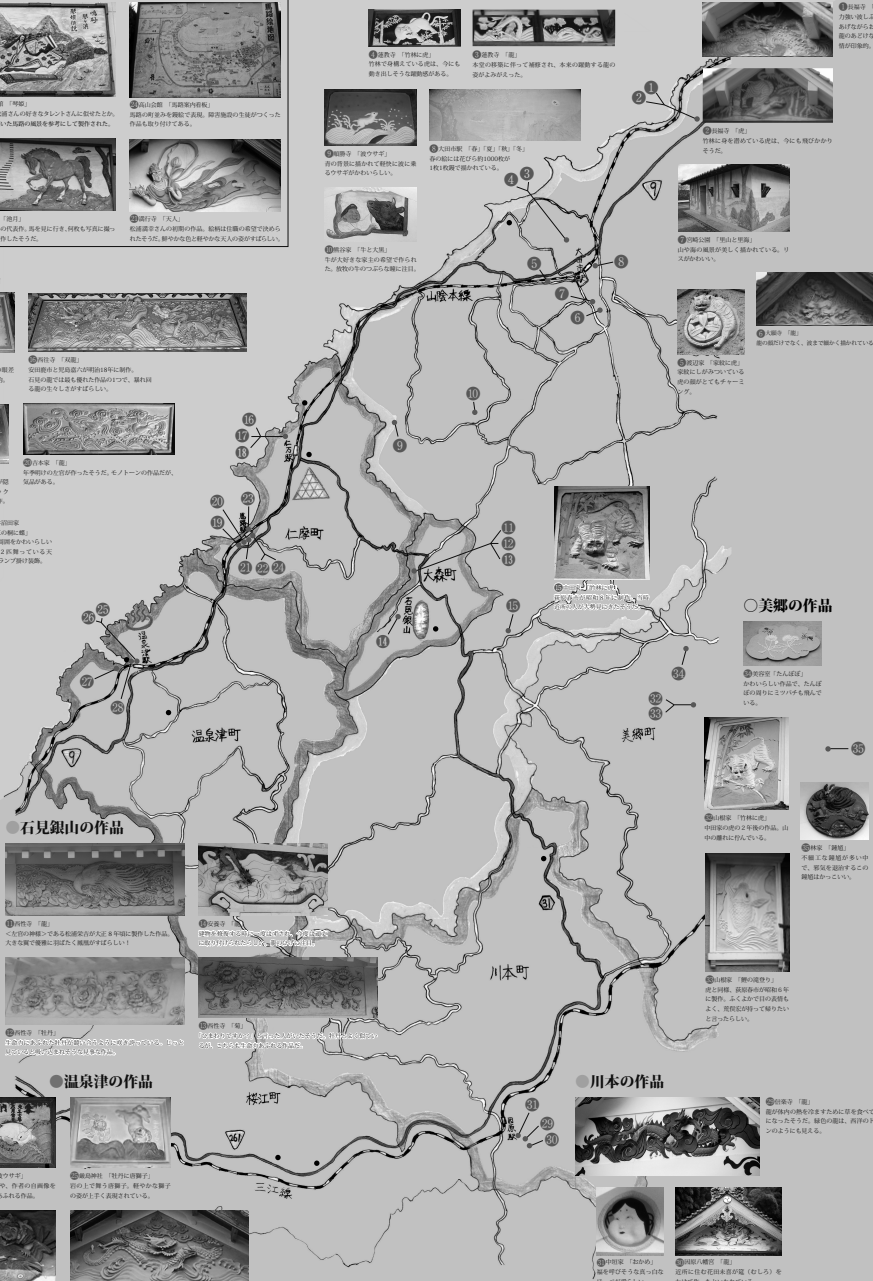
石見銀山の作品



温泉津の作品



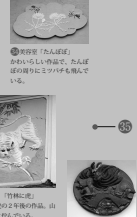
石州鍔絵マップ



大田市内と周辺の作品




美郷の作品



川本の作品



●このマップで取り上げた鍔絵のある場所
●このマップで取り上げていない鍔絵のある場所




 THE UNIVERSITY OF SHIMANE
 公立大学法人 島根県立大学

大学COC事業
 地域と大学の共育・共創・共生に向けた結びプラットフォーム
第1回 全域フォーラム

産業観光の推進による観光振興の可能性

2014年2月21日(金)
 於: 島根県立大学浜田キャンパス講堂

久保田典男 (島根県立大学 総合政策学部)



 THE UNIVERSITY OF SHIMANE
 公立大学法人 島根県立大学

2-2 産業観光の分類

【図表1】産業観光資源に基づく分類方法


- ①産業の歴史を物語る産業文化財(産業遺産)
- ②高度な技術を有する産業現場(工場等)
- ③近代設備を有する産業現場(工場等)
- ④農林水産業の(観光の対象となる)現場(農場、漁業)
- ⑤鑑賞価値のある産業製品(美術工芸品等)

出所: 渡辺寛(2005)「産業観光基本」に基づき作成

【図表2】産業観光推進の目的に基づく分類方法

- ①工場見学型 (ビジネスに直結する取引先や新規顧客への説明、自社製品PRの場として活用)
- ②産地振興型 (幅広い来訪者を受け入れ、産地としてのPRや産地ブランドの継続を目的)
- ③一般観光型 (広く一般顧客を受け入れ、商品や企業のPR、物販・飲食施設による観光事業を展開)
- ④ものづくり人材育成型 (主に小中学生の社会見学等を受け入れ、地元や社会の貢献を目指す)
- ⑤リクルーティング型 (就職を見据える学生を受け入れ、人材を確保することを目的とする)


出所: 中部経済産業局(2006)「中部地域における産業観光インフラ整備に関する調査」に基づき作成



 THE UNIVERSITY OF SHIMANE
 公立大学法人 島根県立大学

1 研究の背景

- 島根県における観光振興による地域産業振興の必要性
【現状の取組み】
 「神々の国しまね」プロジェクト
 ⇒神話などに描かれた「自然」「歴史」「文化」などを活用した地域のブランディング
 “神々”と“ご縁”観光総合事業
 ⇒神楽、神社、縁結びなどを活用した着地型観光の推進
- 産業観光への注目
 これまで観光資源としてあまり認識されてこなかった産業遺産や老舗中小企業等を観光資源と捉える新しいタイプの着地型観光の形態
 ⇒しかし島根県で産業観光が積極的に行われているとはいえない
- 大学が産業観光の研究面、推進面における中心的な役割を担うことで、産学官連携推進の中心的な役割を果たすことが可能
- 産業観光の推進によって
 地域経済においてどのようなメリットがもたらされるのか？
 メリットをもたらすための条件とはどのようなものか？

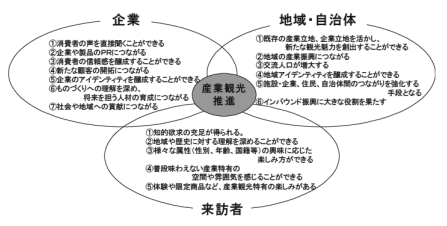


 THE UNIVERSITY OF SHIMANE
 公立大学法人 島根県立大学

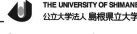
2-3 産業観光の意義

- 企業: 消費者の信頼感の醸成、従業員のモチベーション向上、社会・地域貢献など
- 地域・自治体: 既存の産業立地を活かした新たな観光魅力の創出、地域産業振興
- 来訪者: 地域や歴史に対する理解、個人の興味に応じた楽しみ方など

【図表3】主体別に向けた産業観光の意義と働き



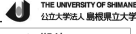
出所: 国土交通省都市・地域整備局大都市圏整備部(2008)「産業観光ガイドライン」



 THE UNIVERSITY OF SHIMANE
 公立大学法人 島根県立大学

2-1 産業観光とは

- 産業観光の定義～「全国産業観光サミットin愛知・名古屋」(2001年)
 歴史的・文化的価値のある産業文化財(古い機械器具、工場遺構などのいわゆる産業遺産)、生産現場(工場、工房等)及び産業製品を観光資源とし、それらを通じてものづくりの心につれられるとともに、人的交流を促進する観光活動
- 産業観光の歴史
 - 世界
 - ・1851年: ロンドンで世界発の「万国博覧会」⇒産業観光の原点
 - ・1950年: フランス経営協会による「TECHNICAL TOURISM」
 - 日本
 - ・1960年代: ワイン醸造業など食品産業から開始
 - ・1990年代: 農林漁業の観光資源としての関心→「農業体験観光」の普及
 - ・2007年: 「観光立国推進基本法」→基本計画に産業観光振興を盛り込み
 - ・2010年: 「新成長戦略」→産業観光の魅力を描く



 THE UNIVERSITY OF SHIMANE
 公立大学法人 島根県立大学

2-3 産業観光の意義

- 企業は本業への効果として自社商品・製品のPRや、企業活動のPRに期待
- 一方で、不安要素として来訪者への対応や人件費などのコスト不安

【図表4】期待される本業への経済的効果・メリット (n=192)

自社商品・製品のPR	67.6%
企業やその活動のPR	57.8%
新たな顧客の獲得	40.1%
来訪者からの情報の収集	36.6%
従業員の意欲・ものづくり意欲の向上	28.5%
歴史・文化資源としての価値の活用	25.0%
人材育成・社社技術の継承	21.5%
その他	5.2%
無回答	10.6%

【図表5】産業観光に取り組みうるうえでの不安 (n=192)

来訪者への対応	50.9%
人件費	47.9%
風評・評判情報の存在	25.0%
企業経営情報の流出	21.5%
その他	5.2%
無回答	10.6%

(注) 調査対象: 東海・北陸地域で産業観光を実施している施設・企業。調査時期: 2006年11月。回収率50.1%
 出所: 中部経済産業局(2006)「中部地域における産業観光インフラ整備に関する調査」に基づき作成

2-4 水産加工業における産業観光化への課題

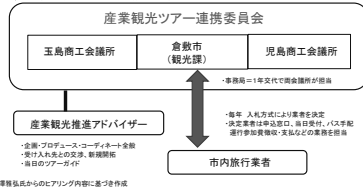
- 中小企業基盤整備機構(2012)
⇒水産練製品製造業における産業観光化の課題を整理
- ①水産練製品製造企業の産業観光推進気運向上が図りにくい
- ②産業観光化におけるビジネスモデル構築の発想がない
- ③「産業観光」資源維持の困難性
 - ・地域資源(原材料)確保の困難性
 - ・食品衛生上の問題、機密保持への対応の困難性
 - ・工場見学施設を保有・管理・活用する企業のコスト負担
 - ・積極的な新製品開発の必要性
- ④人材育成をどう行うのか
- ⑤産業観光についての情報発信をどう行うのか
- ⑥適切な官民連携をどう行うのか
- ⑦広域連携の必要性⇒他の観光資源や産業観光資源同志の連携
- ⑧教育との連携

6

3 産業観光の先進事例～岡山県倉敷市

- ・赤澤氏の産業観光推進アドバイザーの立場は、玉島商工会議所から委嘱を受ける形での独立した存在
- ⇒商工会議所内の組織、地域での力関係に縛られない「自由な立場」
- ・玉島、児島の両商工会議所に倉敷市などが加わって2010年に「産業観光ツアー連携委員会」発足
- ⇒官民連携による産業観光推進により地域商工業の活性化と振興を図る

【図表7】産業観光ツアー連携委員会の概要



出所:赤澤雅弘氏からのヒアリング内容に基づき作成

9

3 産業観光の先進事例～岡山県倉敷市

- ・2005年に玉島商工会議所で初めて「産業観光バスツアー」を開催
- ・当初は玉島、児島の両商工会議所がそれぞれの地域内で企画
- ⇒その後倉敷、玉島、児島の3地域で連携して産業観光を推進
- ・2014年実施の8コースのうち7つは受付初日からキャンセル待ちの状況

【図表8】岡山県倉敷市「産業観光バスツアー」の概要(2014年2～3月)

ツアー名	主なコース、内容	定員(人)	料金(円)
みなと玉島の美味(うまいものづくし)	豆腐、茶焙煎工場見学、風呂おけ、干菓子作り体験	20	3,500
高瀬舟がむすぶ絆、みなと玉島と城下町高梁めぐり	みそしょうゆ工場、酒蔵見学、歴史博物館見学	44	4,000
産業観光でつなぐ海のまち、「児島、玉島」連携コース	ミニ農作り体験、製塩工場見学、アトリエ訪問	44	3,500
早春の瀬戸内、息しの3島のめぐりクルーズ	穴口島、本島、道島	50	4,000
おなじみ、みなと玉島の元氣!企業めぐり	魚作場、酒蔵、ソーイング工場、竹製履作り体験	44	3,500
美味(おいしい)・楽しい!玉島・船穂の魅力満喫コース	青果市場、酒蔵、クリーニング工場、クッキー工場	44	3,000
数珠観音寺見学と水島コンビナート「夜更」クルーズ	数珠観音寺、シーンズショップ、水島港夜更クルーズ	44	4,000
ぐるっと倉敷環状道「児島ものづくり繁盛記」	硝子工場、酒蔵見学、地蔵山、旧野崎家住宅	44	4,500

出所:「産業観光バスツアー」アンケートに基づき作成

7

4 まとめ

産業観光の推進が地域経済にメリットをもたらすための条件とはどのようなものか?



- ① 企業側の理解の獲得
⇒産業観光への取組に伴うコスト吸収
⇒自治体、企業、地域住民の連携が不可欠
- ② 産業観光の魅力を伝えるためのストーリーづくり
⇒熱意をもったコーディネーターの存在
⇒地域を回り観光資源を掘り起こす作業が必要

10

3 産業観光の先進事例～岡山県倉敷市

- ・玉島地区は倉敷地区、児島地区と比較すると観光の素材に乏しい
- ⇒地元コピーライターの赤澤雅弘氏が産業観光推進アドバイザーとして玉島地区の産業観光を推進
- ⇒玉島地区の中小企業者を訪問し、1軒ずつ工場見学の協力を要請
- ⇒現場視察やヒアリング内容等に基づき、自らストーリーを組み立て
- ⇒協力企業は当初の14社から50社に増加

【赤澤雅弘氏と大島研司氏とのディスカッション】

- ・赤澤氏は以下の3点を企業側に依頼
- ①来訪者に現場を見てもらうこと
- ②来訪者に話をしてもらうこと
- ③来訪者に自社製品を販売してもらうこと
- ⇒企業側に産業観光の意義を理解してもらう
- ・来訪者に現場を見せて語りかけることで楽しみながら地域にお金を落としてもらう



8

主要参考文献

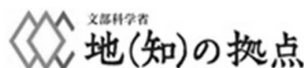
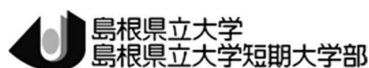
- ・経済産業省観光推進有識者会議(2011)「地域経済波及性・持続性の高い産業観光事業の確立に向けて」
- ・国土交通省都市・地域整備局大都市圏整備課(2008)「産業観光ガイドライン」
- ・須田寛(2005)『産業観光読本』交通新聞社
- ・須田寛(2009)『新産業観光』交通新聞社
- ・中小企業基盤整備機構経営支援情報センター(2012)「水産加工業の復興に向けた課題と展望に関する調査研究～水産練製品製造業の産業観光のあり方～」
- ・中部経済産業局(2006)「中部地域における産業観光インフラ整備に関する調査」
- ・辻本展秀(2010)「注目される産業観光とその動向」『おおいの経済と経営』No.236 pp.1-11
- ・羽田耕治・丁野朗監修(2007)『産業観光への取り組み 基本的考え方と国内外主要事例の紹介』日本交通社
- ・日本観光協会事業推進グループ国内振興チーム(2008)『産業観光とまちづくり・まちづかい』日本観光協会

11

本学との連携に係るアンケート調査 結果報告

地域連携推進センター

島根県立大学



Center of Community

目次

1. 調査概要
2. アンケート結果
 - 1) I 地域振興に関する課題
 - 2) II 島根県立大学との連携の実施状況
 - 3) III 今後の連携について
3. 課題と連携の可能性

1. 調査概要

調査概要

■ 目的

- ・本学3キャンパス全体に対する直接的な連携ニーズを把握する
- ・連携事業の活動指針・企画立案、年度ごとの優先的
地域課題を決定する

■ 対象

22団体 : 副申を頂いた12自治体／企業、NPO等団体組織

■ 調査票の構成

- I 地域振興に関する課題
- II 島根県立大学との連携の実施状況
- III 今後の連携について

■ 回答数 21／22

2. アンケート結果

1) I 地域振興に関する課題

I-1. 中心的に取り組んでいる地域課題

	課題 1	課題 2	課題 3	課題4～ または 順序不明	計
① ものづくり	2	3	1		6
② IT	1				1
③ 産業・中小企業の振興	7	3	1	1	12
④ 観光	2	4	1		7
⑤ 雇用・定住	4	4	1	2	11
⑥ 交通	2	1	3	2	8
⑦ 医療	2		3	2	7
⑧ 福祉		1	2	1	4
⑨ 介護		1	1	1	3
⑩ 保険・健康			2	1	3
⑪ 安全対策	1			1	2
⑫ 子育て支援	3	1	1	1	6
⑬ 教育	1	1		2	4
⑭ 自然、文化、歴史の保全と活用			1	2	3
⑮ 人権尊重				1	1
⑯ その他	1		2	3	6

◆「産業・中小企業の振興」
「雇用・定住」が上位

◆続いて「交通」
「医療」
「ものづくり」
「子育て支援」分野

※課題の具体例は後述

I-2. 地域課題の取組状況

	①	②	③	④	⑤	⑥
	果 継 続 的 に 実 施 し 成 果 が 出 っ て 実 施 し 成	達 しているが、期待にはまだ	だ ば 取 り 組 み を 始 め た 出 っ て 実 施 し 成 果 は	い が 実 行 に 際 し て 課 題	中 接 近 す べ き か 検 討	そ の 他
ものづくり	3	5	1			
IT		1				
産業・中小企業の振興	5	9	1		1	1
観光	2	4	2			
雇用・定住		8	2			
交通		6	1		1	1
医療	2	3	1		1	
福祉	2	2				
介護		2	1			
保険・健康		3				
安全対策		1	1			
子育て支援	1	5				
教育		3			1	
自然、文化、歴史の保全と活用	1	1	1			
人権尊重		1				
その他		2	3		1	
合計	16	56	14		5	2

◆ 「②継続的に実施しているが、期待している成果にはまだ達していない」が最多
↓
「産業・中小企業の振興」「雇用・定住」分野が多い

7

I-3. 本学との連携で希望する取組

	①	②	③	④	⑤	⑥
	ア 活 学 生 による(ゼミ活動)のアイデア、企画提案等	研 究 員 による調査、	発 技 術 相 談 ・ 研 究 開	置 大 学 設 備 ・ 研 究 装	研 修 ・ 人 材 育 成	そ の 他
1	ものづくり	6	3	3	3	
2	IT		1			
3	産業・中小企業の振興	10	7	6	3	4
4	観光	5	4	1	1	1
5	雇用・定住	6	4		1	3
6	交通	6	5	1	1	1
7	医療	3	4	1	2	6
8	福祉	1	3	1	2	3
9	介護	1	2	2	2	2
10	保険・健康	1	2	1	2	3
11	安全対策	1	1	1		
12	子育て支援	4	2		2	2
13	教育	4	3		2	2
14	自然、文化、歴史の保全と活用	3	1			1
15	人権尊重	1	1		1	1
16	その他	6	4		1	1
計	合計	58	46	18	19	33

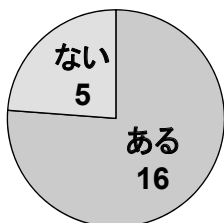
◆ 「産業・中小企業の振興」「雇用・定住」「交通」分野
↓
「①学生による(ゼミ活動)のアイデア、企画提案等」の連携希望が最多
続いて
「教員による調査・研究」

◆ 「医療」分野
↓
「⑤研修・人材育成」への希望が多い

8

2) II 島根県立大学との連携の実施状況

II-1. 本学(3キャンパスのいずれか)との連携



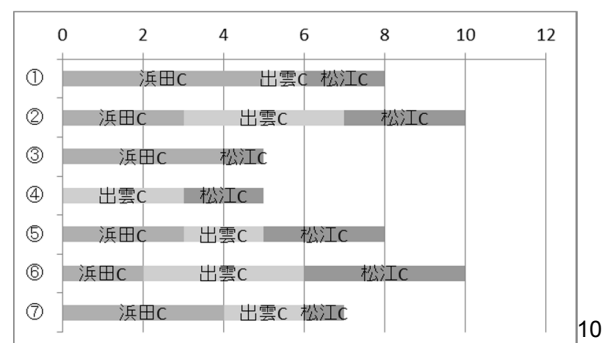
ある	16
ない	5

◆半数以上が本学と過去に連携

(1)「ある」を選択した方へ ⇒ 連携内容について

- ◆浜田C→「学生のゼミ活動」
- ◆出雲C→「教員の調査研究」「研修・人材育成」
- ◆松江C→「研修・人材育成」

		浜田C	出雲C	松江C	計
①	学生による(ゼミ活動)のアイデア、企画提案等	5	1	2	8
②	教員への調査、研究	3	4	3	10
③	地域連携推進センターへの相談	4		1	5
④	技術相談・研究開発		3	2	5
⑤	大学設備・研究装置の利用	3	2	3	8
⑥	研修・人材育成	2	4	4	10
⑦	その他	4	2	1	7
		21	16	16	

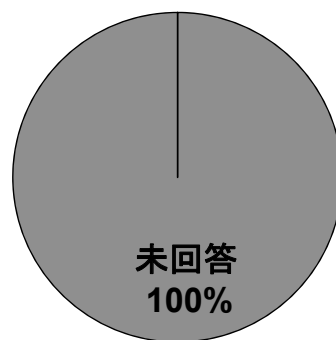


Ⅱ-1. 本学(3キャンパスのいずれか)との連携

(2)「ない」を選択した方へ ⇒ 本学以外の大学等高等教育機関との連携

◆未回答

他大学と連携している	0
他大学等と連携していない	0
未回答	5



11

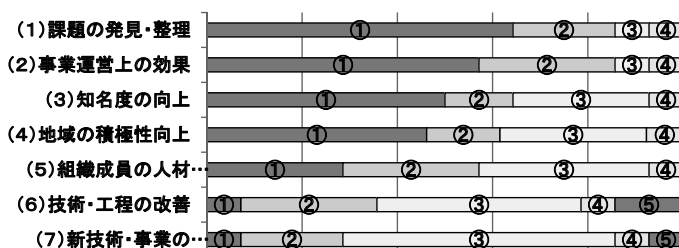
Ⅱ-2. 連携の貢献程度

	① とても 貢献して いる (見込ま れる)	② わずかに 貢献して いる (見込ま れる)	③ どちら ともい えない	④ ほとん ど貢献 してい ない (見込 めない)	⑤ 全く 貢献し ていな い (見込 めない)
(1) 課題の発見・整理	9	3	1	1	
(2) 事業運営上の効果	8	4	1	1	
(3) 知名度の向上	7	2	4	1	
(4) 地域の積極性向上	6	2	4	1	
(5) 組織成員の人材育成	4	4	5	1	
(6) 技術・工程の改善	1	4	6	1	2
(7) 新技術・事業の開発	1	3	8	1	1
合計	36	22	29	7	3

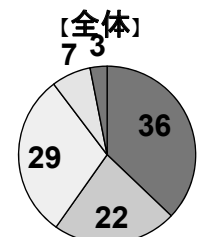
◆「とても貢献している」
が最多だが、

「どちらともいえない」
も次に多い

◆「課題の発見・整理」
「事業運営上の効果」
「知名度の向上」 に貢献



- ①とても貢献している(見込まれる)
- ②わずかに貢献している(見込まれる)
- ③どちらともいえない
- ④ほとんど貢献していない(見込めない)
- ⑤全く貢献していない(見込めない)

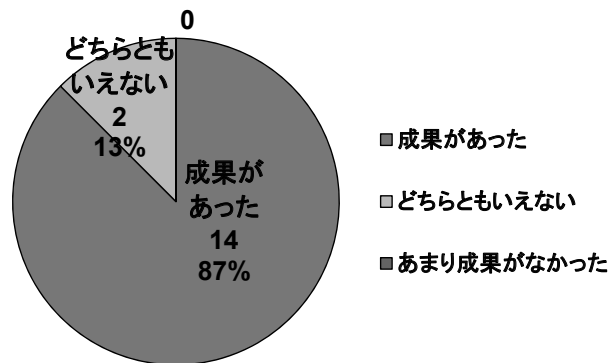


12

II-3. 連携成果の有無とその理由

◆本学との連携においては、おおむね「成果があった」

① 成果があった	14
② どちらともいえない	2
③ あまり成果がなかった	0

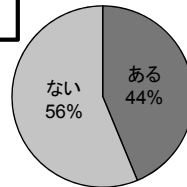


13

II-4. 近隣キャンパス以外の、2つのキャンパスとの連携

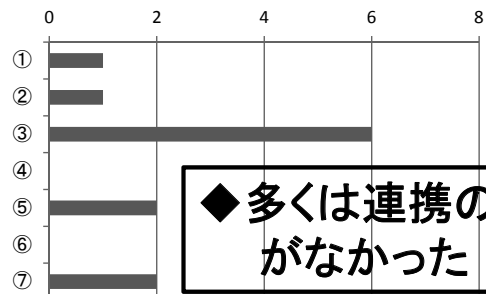
◆他キャンパスとの連携は半数

連携したことがある	7
連携したことがない	9



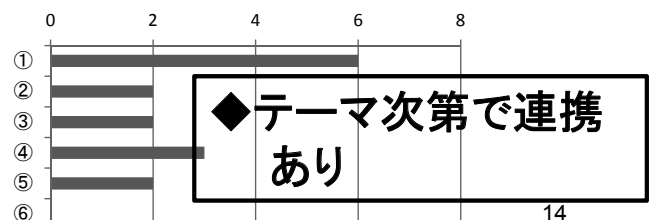
(1)他キャンパスと連携したことがない理由

① テーマが合わなかった	1
② キャンパスの専門がよくわからなかった	1
③ 連携の機会(きっかけ)がなかった	6
④ 連携してみたいが、依頼先がわからない	0
⑤ 移動距離(時間)の問題	2
⑥ 費用や調整の手間が多そうだから(費用対効果が悪そうだから)	0
⑦ その他	2



(2)今後の連携意向

① テーマが合うならば連携したい	6
② 近隣キャンパスを通じて、2キャンパスとの調整が可能なら連携したい	2
③ 連携のきっかけとして活動紹介などの場があれば検討したい	2
④ 当面は近隣キャンパスと連携を深めたい	3
⑤ 移動距離(時間)含む費用や調整コストを考慮すると、現状ではやや難しい	2
⑥ その他	0



3) III 今後の連携について

III-1. 連携において強化・改善してほしい事項

◆「地域課題への学生からの提案」
「学生の地元企業就職率の向上」
の強化・改善が望まれている

※詳細は配布資料「II 本学との連携の実施状況(詳細)」



3. 課題と連携の可能性

I-1. 中心적으로取り組んでいる地域課題

先ほどの「中心적으로取り組んでいる地域課題」の詳細について……

	課題1	課題2	課題3	課題4～ または 順序不明	計
① ものづくり	2	3	1		6
② IT	1				1
③ 産業・中小企業の振興	7	3	1	1	12
④ 観光	2	4	1		7
⑤ 雇用・定住	4	4	1	2	11
⑥ 交通	2	1	3	2	8
⑦ 医療	2		3	2	7
⑧ 福祉		1	2	1	4
⑨ 介護		1	1	1	3
⑩ 保険・健康			2	1	3
⑪ 安全対策	1			1	2
⑫ 子育て支援	3	1	1	1	6
⑬ 教育	1	1		2	4
⑭ 自然、文化、歴史の保全と活用			1	2	3
⑮ 人権尊重				1	1
⑯ その他	1		2	3	6

◆ 「産業・中小企業の振興」
「雇用・定住」が上位

◆ 続いて「交通」
「医療」
「ものづくり」
「子育て支援」分野

※課題の具体例は後述

配布資料「I 地域振興に関する課題(詳細)」より

キーワード
「パートナー」「販路拡大」「ネットワーク」「連携」
「広域」「他圏域」「部局横断」「6次産業化」

分野重複の課題
「産業・中小企業の振興」+「観光」+「雇用・定住」+「交通」
「IT」+「交通」+「安全対策」 …etc.



複数主体 × 広域 × 複合業務(連携)

※「②期待している成果にはまだ達していない」¹⁹

本学COC事業での連携

◆複数主体・広域

⇒成功事例の他地域での実験的展開

:学生による試験的实施

A級グルメのまちづくり石見広域版(H25.浜田市からの提案)

◆複合業務(異業種連携)

⇒複数の専門分野と連携して展開

:3キャンパスの異なる専門性を活用した調査研究・知見

川本町エゴマ(医学×栄養学×経営学)

…etc.

大学のシーズ面から連携事業を提案し、広域課題解決に向け、地域間の接着機能を担う

5) しまね地域マイスター認定制度

本制度は、島根地域のあらゆる分野へ精通した学生を認定する、**本学独自の学士認定制度**です。1年次に3キャンパス共通科目『しまね地域共生学入門』にて、島根県の地域課題を概論的に学びます。2年次以降では（一部、1年次含む）『**選択専門科目**』として、地域課題を専門的に研究・学習する機会を設け、『**地域共生演習**』としてフィールドワーク（現場に飛び出した学習）を取り入れて地域課題について学べるゼミを選択していきます。また、より地域に精通した人材育成の為に、高度な専門科目の取得、キャンパスを越えての『**集中実践科目**』（合同ゼミ）にて、他方向からアプローチする視点を養います。



カリキュラムマップ

CURRICULUM MAP

学年	1年	2年	3年	4年
総合演習		地域共生演習		地域共生卒業研究
専門科目	選択専門科目			
		集中実践科目		
基礎科目	しまね地域共生学入門			

『しまね地域マイスター』に認定された学生は、卒業時には自ら課題に対して向き合い、考え、**課題解決に向けた行動力のある人材として社会に飛び出すことが出来る事**を目標としています。

地域に対しては『地域事情に精通した人材』、『地域や人をつなぐ、コーディネート力を持つ人材』、『熱意をもち課題解決に取り組める実践力を持った人材』を育成することにより、自ら課題に対して考え・行動出来る人材として受け入れられることを目指していきます。

『しまね地域マイスター』認定を受けた学生が、将来的に自治体・企業等に就職を希望する際に有利にはたらく等、環境整備を行っていきます。

『しまね地域マイスター認定制度』各カリキュラムについて

しまね地域共生学入門

複雑な地域課題において、複数の専門からの知見により学ぶことで、実際に地域に出て実践する力を養います。

集中実践科目

キャンパスを跨ぎ、それぞれの専門を交えてフィールド学習を通じたディスカッション等を行い学ぶことで、視野を広げます。

選択専門科目

『しまね地域マイスター』を取得するための認定対象科目です。

地域共生演習

地域課題について学べるゼミを指定。より深く地域について学ぶことが出来ます。

地域共生卒業研究

地域課題について学んできたこれまでの知識を踏まえ、受講することで『しまね地域マイスター』取得が実現します。



6) しまね地域共育・共創研究助成の研究成果

(1)

【地域活動経費】

申請者	島根県立大学 総合政策学部 総合政策学科（浜田キャンパス） 准教授 松田善臣
研究テーマ	学生が作る学生のための公共交通の利用促進を目的とした情報誌の制作

1. 研究目的	本活動の目的は、平成 26 年度島根県立大学新入生を対象とした、公共交通の利用促進、ならびに地域情報の提供のための情報誌を制作することである。
2. 方法	<p>上記の目的を達成するため、主に以下の活動を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・浜田市の公共交通の現状調査 浜田市提供の資料（地域公共交通実施計画書など）により、浜田市の公共交通を取り巻く現状について調査を行った。具体的な統計データなどから、その深刻な状況を確認することができ、公共交通の利用を促進する必要性について再認識することができた。 ・利用促進のための方策についての調査、情報誌制作における基本的な考え方 モビリティマネジメント関連の書籍等から、公共交通利用促進のためのさまざまな方策について調査を行い、その上で、制作する情報誌についての基本的な考え方を決定した。 ・掲載する情報の収集、ページ構成・レイアウト 新入生にとって身近な公共交通である路線バス（大学線）を取り上げることとし、大学線を利用して行くことのできるお店の情報を掲載することとした。取材によって得られた膨大な情報を、限られた紙面の中でいかにわかりやすく、楽しく見てもらえるかを考えながら、ページの構成・レイアウトを決定し、最終的な原稿を作成した。
3. 結果	A5 サイズ、12 ページの冊子「まるっと浜田」を 287 部作成した。掲載した主な内容としては、大学線に関する基本的事項（系統ごとの経路の違いやダイヤ）の紹介、大学線沿線スポットの紹介、自動車の保有にかかるお金の話などである。
4. 研究成果の公表	<p>本活動の途中経過を、平成 26 年 2 月 21 日に本学で開催された「第 1 回全域フォーラム」のポスターセッションにおいて発表した。</p> <p>作成した情報誌については、平成 26 年 4 月 2 日に新入生を対象に行われた「学生生活オリエンテーション」の場で、新入生全員に配布するとともに、その内容についてプレゼンを行った。また、本学本部棟 1 階のスペースにも配置し、学生が自由に持ち帰れるようにしている。さらに、市役所でも来庁した市民が自由に取ることができるスペースに置いてもらうこととしている。</p>



5. 地域貢献の成果

今回作成した情報誌によって、どの程度バスの利用者増に結びついたかを検証することは容易ではないが、定期・回数券の売り上げデータを比較するなどして効果の検証を行う。なお、新入生からは、「便利だ」「バスに乗って(掲載されているお店に)行ってきました」との声が多数寄せられており、ある程度は利用促進に貢献できたと考えられる。

(2)

【地域活動経費】

申請者	島根県立大学 看護学部 看護学科（出雲キャンパス） 准教授 吾郷ゆかり
研究テーマ	ALS 等神経難病患者のコミュニケーション支援のニーズと現状

1. 地域活動の目的													
希望する学生と共に「ALS 療養者と家族のコミュニケーション支援の現状とニーズ」に関するインタビューを行い、島根県の難病コミュニケーション支援の現状を把握すると共に学生の学習の機会とする。													
2. 方法													
<p>H25年12月：看護学部2年次学生に活動の主旨を説明して参加者を募集。</p> <p>H26年1月～3月：療養者や支援者と日程調整をし、学生2～3名ずつが同行し「島根県のALS療養者と家族のコミュニケーション支援ニーズ」に関する聞き取り調査を行う。</p> <p>(1) 難病支援担当者に島根県のコミュニケーション支援の現状を聞く。</p> <p>(2) 了解を得た療養者、家族、支援者にコミュニケーション支援の現状についてインタビューを行う。</p> <p>(3) 訪問調査日時</p> <table border="0"> <tr> <td>1月9日</td> <td>しまね難病相談支援センター（支援者）、松江市内 レスパイト病院</td> </tr> <tr> <td>1月10日</td> <td>松江市内 レスパイト病院（療養者）</td> </tr> <tr> <td>1月22日</td> <td>出雲市内 療養者宅（療養者）</td> </tr> <tr> <td>1月23日</td> <td>雲南市内 雲南保健所（支援者）</td> </tr> <tr> <td>2月28日</td> <td>益田市内 訪問看護ステーション（支援者）</td> </tr> <tr> <td>3月28日</td> <td>松江市内 総合病院（療養者）</td> </tr> </table>		1月9日	しまね難病相談支援センター（支援者）、松江市内 レスパイト病院	1月10日	松江市内 レスパイト病院（療養者）	1月22日	出雲市内 療養者宅（療養者）	1月23日	雲南市内 雲南保健所（支援者）	2月28日	益田市内 訪問看護ステーション（支援者）	3月28日	松江市内 総合病院（療養者）
1月9日	しまね難病相談支援センター（支援者）、松江市内 レスパイト病院												
1月10日	松江市内 レスパイト病院（療養者）												
1月22日	出雲市内 療養者宅（療養者）												
1月23日	雲南市内 雲南保健所（支援者）												
2月28日	益田市内 訪問看護ステーション（支援者）												
3月28日	松江市内 総合病院（療養者）												
3. 結果													
<p>島根県に在住し療養生活するALS療養者の元へ出かけて聞き取り調査を実施した。了解を得て現状や要望についてインタビューをした結果、県東部ではレスパイト先の病棟でもパソコンや文字盤を用いたコミュニケーション支援が実施されており、以下の内容に要約した。また、東部在住の療養者のニーズはある程度充足されていることなどがわかった。</p> <p>レスパイト入院中のコミュニケーション支援に関する現状と要望について</p> <p>1) 音読用文字盤の使用</p> <p>透明文字盤は操作に慣れないと読みにくいと、普段は音読文字盤を使って思いを聞いて欲しい。</p> <p>2) 「伝の心」を使えるように病棟に設置</p> <p>自分の思いが伝えられるように病室内にパソコンを設置して欲しい。「伝の心」は自分に合ったスイッチがないと役に立たないため、スイッチを患者の可動域に合うように選択して欲しい。</p>													

3) 急ぎの時の対応

パソコン操作に時間がかかると疲れる。急ぎの時は透明文字盤を使って効率的に意思を読み取って欲しい。

4) 意思伝達装置の開発の促進

TLS（完全閉じ込め症候群）になると「伝の心」も使えなくなる。脳波等を利用した意思伝達装置を早く開発して欲しい。

5) TLS の状態でも声をかけて

顔の表情や顔色をよく見て変化を捉えて欲しい。

4. 成果の公表

H26 年 3 月：大学内での成果発表

H26 年 7 月（予定）：島根看護学術集会にて示説発表

5. 地域貢献の成果（地域課題に対する提言、示唆等の考察をご記入下さい）

レスパイト入院中の患者のコミュニケーションに関するニーズが明らかとなり、入院中にも患者の状況に合わせて支援方法を決定する必要がある。レスパイト入院中はその人が通常行っているコミュニケーション方法を望むが、複数の施設にレスパイト入院をする場合があり、全ての患者のニーズを充足することは難しい。しかし ALS 患者のレスパイト入院中は患者に負担のかからないよう医療チームの医師、看護師、ST、OT らが共通する方法でコミュニケーションをとれるよう考慮する必要がある。

コミュニケーション支援について聞き取り調査を実施したが、ケースが少なく療養者の満足度や要望を明らかにできたとは言えない。継続して実施し、特に県西部の神経難病者のレスパイト入院に係るコミュニケーション支援の現状について課題を明らかにしたい。

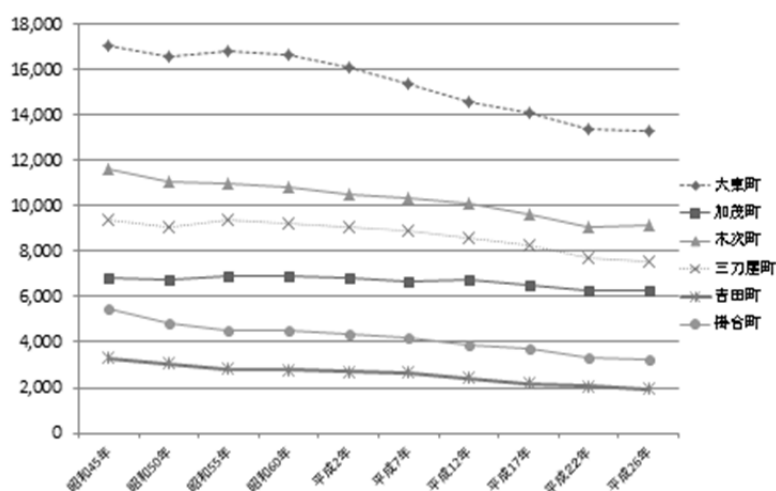
申請者	島根県立大学短期大学部 総合文化学科（松江キャンパス） 准教授 工藤泰子
研究テーマ	雲南市吉田町における観光事業 —地域と協働した観光教育の実践—

1. 研究目的

平成 16 年、大原郡大東町、加茂町、木次町、飯石郡三刀屋町、掛合町、および、吉田村の隣接 6 町村が合併し、雲南市が誕生した。

かつて、たたら製鉄で繁栄した吉田村は、昭和 50 年代になると人口減少が深刻な問題として取り上げられるようになり、平成 26 年 1 月現在、1,942 人、世帯数 669 件まで落ち込んでいる。昭和 45 年の人口統計（3,288 人）と比較すると、40.94%も減少している（表 1）。

表 1 雲南市各町の人口推移(昭和45年～平成26年1月現在)



資料:雲南市「雲南市人口・世帯数」(平成26年3月4日閲覧)
<http://www.city.unnan.shimane.jp/www/contents/1200031652493/index.html>

これは、雲南市の中でも掛合町（40.79%減）と並び、極めて大きな減少幅である。さらに、平成 22 年のデータと比較すると、掛合町が 3.7%の減少であるのに対し、吉田町は 5.18%減と、雲南市内においても過疎化が急速に進んでいることがわかる。しかも、人口自体が市内で最も少ないことから、吉田町の人口流出、空き家増加は、極めて深刻な問題である。

本取組みは、島根県雲南市吉田町（旧飯石郡吉田村）を対象に、観光教育を通して、地域の魅力を発見し、地域の人々と関わりながら、本学が目標に掲げる「課題探究力及び実践力を兼ね備えた人材育成」の実践と、研究活動を通して地域社会への貢献の実現を目指したものである。

2. 方法

本事業期間が短かったため、申請者の担当科目「観光資源学」（1年後期選択科目）において、地域への理解・関心を深めることで、2年次「卒業プロジェクト」（観光文化ゼミ）で展開・充実させることに重点を置いた。

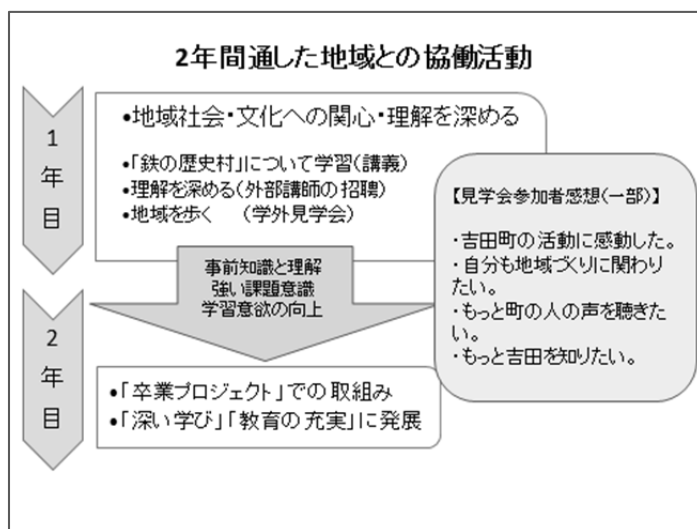
具体的には、吉田町に関する講義を2コマ（90分×2）行い、その後、課外見学会を実施した。講義のうち1コマは、昭和50年代から吉田町の地域づくりを担ってきた方を外部講師として招き、30年におよぶ取組みをお話いただいた。

課外見学会では、吉田町内施設見学のほか、地元の町づくり系会社（吉田ふるさと村）社長、菅谷たたら山内施設長のお話を聴いた。

3. 結果

今回は、実質的な事業期間が非常に短いことから、期間内に成果を出すことよりも、次年度以降の教育の充実を図ることに重点を置いた。見学会に参加した学生の感想文を読むと、数回の講義と一度の見学会だけでも多くのことを学び、吉田町の今までの活動に感動し、「将来自分たちも地域づくりに関わっていきたい」といった感想が目についた。

また、見学会に参加した1年生13名のうち、7名が26年度「卒業プロジェクト」で「観光文化ゼミ」のメンバーとなった。このことから、当初の目標でもある「深い学び」、「教育の充実」に向けて、一歩前進したと言える。



4. 研究成果の公表

○「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）研究準備協議会」（平成26年3月7日）にて、ポスター報告。

○報告書の作成・配布（平成26年3月31日発行）

「雲南市吉田町における観光振興—地域と協働した観光教育の実践—『地（知）の拠点整備事業』平成25年度 しまね地域共育・共創研究成果報告書」

5. 地域貢献の成果

地域と協働した教育活動を行う際には、できるだけ長い時間をかけて取り組む必要がある。教員はもちろんだが、学生たちも地域の人々と何度も会うことで、その土地に愛着がわき、お互いの信頼関係がうまれてくる。短期間に成果をのぞむのではなく、人と人、地域と大学の、信頼関係を構築することが大切なのではないか。

申請者	島根県立大学短期大学部 健康栄養学科（松江キャンパス） 教授 名和田清子
研究テーマ	島根県産「つや姫」の生産・販売拡大に向けた取り組み

1. 研究目的
<p>近年、島根県では、温暖化により平坦地域の「コシヒカリ」の品質低下が問題とされ、「コシヒカリ」に替わる米として、品質が安定し、良食味米である「つや姫」の普及拡大に取り組んでいる。そこで今回、「つや姫」の今後一層の PR や、食味向上を目指すことを目的に、島根県、島根県農業技術センター、本学健康栄養学科の教員及び学生が共同で、「つや姫」の食味等、おいしさを科学的に分析することとした。</p>
2. 方法
<p>平成 25 年度産「こしひかり」を基準として、25 年度産の「きぬむすめ」「つや姫」について、食味及び物性について、比較検討を行った。食味については、食糧庁の食味試験実施要領に準じて食味官能検査を行った。試験者は健康栄養学科教員及び学生全員（1 年生及び 2 年生）とした。物性については、炊飯米の骨格構造を、真空凍結乾燥法により、電子顕微鏡で観察した。また、炊飯米の粘りと硬さについては、テンプレッサーを用いて評価を行った。これらの結果を基に、平成 25 年度産「つや姫」PR を行った。</p>
3. 結果
<p>①官能評価</p> <p>外観については、「つや姫」の得点が有意に高かった。香については、3 種類で有意な差は認められなかった。味については、「こしひかり」に比較して、「つや姫」、「きぬむすめ」の得点が有意に高かったが、「つや姫」と「きぬむすめ」との差は認められなかった。粘りについては、「こしひかり」に比較して、「つや姫」の得点が有意に高かった。「こしひかり」と「きぬむすめ」、「きぬむすめ」と「つや姫」の差は認められなかった。硬さでは、「きぬむすめ」が最も硬く、「こしひかり」と「つや姫」との間に差は認められなかった。総合評価の結果では、「こしひかり」に比較して、「つや姫」、「きぬむすめ」の得点が有意に高かったが、「つや姫」と「きぬむすめ」との間に差は認められなかった。</p> <p>②炊飯米の骨格構造</p> <p>炊飯米のデンプン細胞中のデンプン粒の形状は、「つや姫」と「きぬむすめ」が比較的似ており、「こしひかり」とは異なる傾向があった。「つや姫」と「きぬむすめ」では、アミロプラスト中のデンプン粒の形が扁平で比較的大型（10～12μm）でデンプン粒間のすき間が小さく、「こしひかり」では「つや姫」、「きぬむすめ」と比較しアミロプラスト中のデンプン粒の形が丸く小さめ（8～10μm）、デンプン粒間のすき間が大きかった。</p> <p>③炊飯米の粘りと硬さ</p> <p>テンプレッサーによる炊飯米の物性評価を行った結果、平成 25 年度「つや姫」は「こしひかり」と比較して、良い食味の推定指標として一つである、硬さと粘りの比をとったバランス度が高い値を示した。</p>

4. 研究成果の公表

- ①島根県と本学が連携して「つや姫」の食味分析に取り組むことや、官能試験の実施について、マスコミにプレスリリースを行った。官能試験の当日、新聞社 4 社より取材を受けた。
- ②「つや姫」PR のため、官能試験の結果を島根県内の担い手農家を対象としたイベントに出展した。(平成 26 年 1 月、くにびきメッセ、対象者 1300 名)
- ③分析結果を文部科学省平成 25 年度地(知)の拠点整備事業(大学 COC 事業)研究準備協議会で発表した。

5. 地域貢献の成果

- ①学生への教育効果→ 島根県産米の生産の現状と課題について、また、島根県産品の振興を図るための方法論などについて修得することができた。
- ②地域貢献としての成果→ 研究の成果を地域に公表することにより、今回の活動の目的とした「つや姫」のPRのための一助とすることができた。
- ③課題→ 今回の分析は短期間で実施したため、さらに詳細な検討が必要である。また、今後、島根県農業技術センターで実施されている分析結果などを合わせて総合的な評価を行う必要がある。それらの結果から、「つや姫」PRのための広報資料を作成することが今後の課題である。

(5)

【しまね地域共創基盤研究費】

申請者	島根県立大学 総合政策学部 総合政策学科（浜田キャンパス） 教授 井上厚史
研究テーマ	石州左官の故郷である大田市および江津市の「鍔絵マップ」制作

1. 研究目的	<p>島根県石見地方が全国に誇る「鍔絵（こてえ）」について昨年度から調査を開始したが、その過程で石州左官が残した鍔絵の分布状況を確認するために島根県大田市から鳥取県琴浦町～倉吉市にかけて「鍔絵調査キャラバン」（9月28日～30日）を実施したところ、琴浦町に「光（みつ）の鍔絵」というパンフレットが制作されていることを知った。この鍔絵は石州左官の流れをくむものであるが、一方石州左官の故郷である大田市仁摩町馬路には簡単なパンフレットがあるのみで、詳しい解説もガイドブックもない。そこで、昨年度からの調査結果をもとにした「大学生がつくる鍔絵マップ」を制作し、石州左官が製作した鍔絵の素晴らしさを広く周知させることを目的とする研究を立ち上げた。</p>
2. 方法	<p>『鍔なみはいけん』（ワンライン、2008）の著者である渡部孝幸氏、仁摩町馬路にあるまちづくりセンター主事の石橋哲一郎氏、そして地元出身で石州左官の高度な技術を伝承していらっしゃる松浦満幸氏との緊密なコラボレーションによって、次世代に手渡せるような本格的な「石州鍔絵マップ」を制作する。</p>
3. 結果	<ol style="list-style-type: none"> 1. 大田市仁摩町馬路地区に、大学生が制作した「鍔絵マップ」を合計4,800枚無償提供。 2. 島根県東京事務所、同大阪事務所、同広島事務所に、それぞれ「鍔絵マップ」を600部無償提供し、島根県の観光PRに協力。 3. 当該地域で活動されている渡部孝幸、松浦満幸、石橋哲一郎諸氏とのコラボレーションを実施し、「鍔絵マップ」の制作を完了した。 4. フィードバック調査として、広島県福山市役所、同竹原市役所観光課、NPO 法人ネットワーク理事長との意見交換会を開催し、島根県の鍔絵に大きな関心を集めることができた。
4. 研究成果の公表	<p>上記のように、「大学生がつくる鍔絵マップ」を県内関係各方面に合計約7000枚を無償提供し、島根県の鍔絵に関する広範な宣伝活動を支援するとともに、広島県福山市および竹原市においてフィードバック調査を実施し、当地でも鍔絵の宣伝・知名度アップに尽力した。</p>
5. 地域貢献の成果	<p>近年大学生による地域貢献活動は盛んになる一方だが、ともすればシンポジウムにおける単発のパワーポイント発表や報告書の作成等、一過性の成果物に終始する嫌いが見受けられる。しかし、それでは本当の意味での地域貢献にはならないのではないかと。地域を愛する若者が、日頃の地道な調査・研究活動を通して、次世代に手渡せるような意味のある成果物への企画・制作が望まれている。本当の意味での地域貢献とは何かを、今一度考える時期を迎えているのではないだろうか。</p>

申請者	島根県立大学 総合政策学部 総合政策学科（浜田キャンパス） 准教授 久保田典男
研究テーマ	産業観光の推進による観光振興の可能性

1. 研究目的	
<p>本研究では、島根県において着地型観光の推進に向けた観光による地域産業振興が注目される中、これまで観光資源としてあまり認識されてこなかった産業遺産や老舗中小企業等を観光資源と捉える新しいタイプの着地型観光の形態である産業観光に着目する。そして島根県で産業観光が積極的に行われているとはいえない現状を踏まえ、産業観光の推進によって地域経済においてどのようなメリットがもたらされるのか、メリットをもたらすための条件とはどのようなものかを、先行研究の整理や先進事例の考察から明らかにすることを目的としている。</p>	
2. 方法	
<p>具体的な研究方法としては、観光振興や地域振興に関する文献や、産業観光に関する先行研究のサーベイを行った。</p> <p>また、大学が産業観光の推進においてどのような役割を担うのかを考察するために、立正大学や法政大学において複数回に亘り開催された「産学連携と産業振興に関する研究会」に参加することで情報収集を行うとともに研究者等との人的ネットワークの構築に努めた。これらの研究会では、地域振興において文系大学がどのような役割を担うのかという共通の問題意識の下、さまざまな専門分野の研究者等が参画し、産学連携による地域産業振興の具体的事例などについても意見交換が行われたことから、本研究における論点の整理を行う中で有益な情報を得ることができた。</p> <p>さらに島根県や広島県の中小企業者に対してもヒアリングを実施することで、企業側からみた産業観光導入のメリット・デメリットなどについて整理を行った。</p> <p>これらの活動を通じて論点を整理しつつ、産業観光の取組の先進事例の事例研究を行った。本研究では先進事例として、とくに岡山県倉敷市（玉島エリア）の事例を取り上げ、当該事例における産業観光推進の担い手に対しインタビュー調査を行いつつ取組内容を整理した。</p>	
3. 結果	
<p>産業観光のプレイヤーは、①企業、②地域・自治体、③来訪者に大別されるが、産業観光の推進は、3者のそれぞれにとって意義あるものである。具体的には、①企業にとっては、消費者の信頼感の醸成、従業員のモチベーション向上、社会・地域貢献、②地域自治体にとっては、既存の産業立地を活かした新たな観光魅力の創出や地域産業振興、③来訪者にとっては、地域や歴史に対する理解促進、個人の興味に応じた楽しみ方の享受などの効果が期待される。</p>	

産業観光の推進にとって中心的な役割を担う企業にとっては、本業への効果として自社商品・製品のPRや企業活動のPRに期待する一方で、来訪者への対応や人件費などのコスト不安に対する不安を抱えている。とくに食品製造業においては、衛生上の問題や機密保持への対応も求められる。

先進事例の考察を通じ、産業観光の推進が地域経済にメリットをもたらす条件は、①企業側の理解獲得と②産業観光の魅力を伝えるためのストーリーづくりの2点に整理される。

4. 研究成果の公表

研究成果については、2014年2月21日に島根県立大学浜田キャンパスにおいて開催された「第1回全域フォーラム」において、ポスターセッションによる発表を行った。当該発表内容は、2014年3月に公立大学法人島根県立大学地域連携推進センターにおいて発行された『地域と大学の共育・共創・共生に向けた縁結びプラットフォーム』においても公表されている。

5. 地域貢献の成果

産業観光を推進するうえでカギとなる企業側の理解の確保にあたっては、産業観光への取組みに伴うコストを吸収するための仕組みづくりや、行政、地域住民との連携が不可欠となる。また、産業観光の魅力を伝えるためのストーリーづくりにあたっては、熱意をもったコーディネーターの存在が求められ、こうしたコーディネーターが地域を回り観光資源を掘り起こす作業が必要となる。このため島根県においても、コーディネーターを確保・育成する仕組みづくりが今後求められよう。

本研究を通じて、産業観光を島根県において具体的に推進する可能性を地域が意識する大きな契機となった。具体的には産業観光の先進事例の研究を進めていく過程で、本研究の成果をゼミ活動などの教育活動などにも展開していったところ、ゼミ生が自主的に島根県浜田市の水産加工業者への工場見学ツアーを企画するビジネスプランを策定するに至った。当該プランは本学、浜田市、産業支援機関（商工会、商工会議所、政府系金融機関）などで運営するビジネスプランコンテスト「島根県立大学 産業コンテスト MAKE DREAM 2013」で最優秀賞を受賞した。プランを作成した学生の意向もあり、現状では当該ビジネスプランの実現化には至っていないが、産業観光を切り口とした教育活動への展開は、企業側が自社の強みや課題を認識し新たな事業展開を推進するための機会を提供することにつながると考えられる。

【しまね地域共創基盤研究費】

申請者	島根県立大学 総合政策学部 総合政策学科 (浜田キャンパス) 講師 豊田知世 (代表) 准教授 林田吉恵、講師 李憲、講師、鄭世桓
研究テーマ	島根県の森林価値の再評価：CO ₂ オフセットビジネスについて

1. 研究目的
<p>森林資源のエネルギー供給機能、CO₂ 吸収機能、木材供給機能の3つの機能に着目し、島根県において自立して持続可能な産業としての林業の在り方を模索すること。本研究の考え方は他の中山間地域や北東アジア地域を巻き込み適用することが可能であるため、最終的には北東アジア地域全体でのビジネスモデルを構築することを視野にいれている。</p> <p>今回は ①森林資源のCO₂ 吸収効率性、②エネルギー利用としての可能性、③韓国の動向調査を中心に実施する。</p>
2. 方法
<p>関係機関へのヒアリング、森林関連情報や統計資料を整備し、森林を中心にした総合的な研究フレームワークを作成した。具体的な方法は、</p> <p>①森林資源のCO₂ 吸収効率性 島根県の森林のCO₂ 吸収効率性が、全国と比較してどの程度なのか、効率性を評価するDEA (データ包絡分析法：Data Envelopment Analysis)を用いて分析した。DEAとは、事業体(企業、事業所、国家、地方自治体、病院、学校など)の経営活動の効率性を相対的に評価する手法であり、効率が低いと判断された場合には改善の方向性を示すことができる。</p> <p>②エネルギー利用としての可能性 2016年から、松江市と江津市に大規模木質バイオマス発電所が建設されることから、森林資源を積極的にエネルギー(電力)に代えた場合の、発電可能量とその効果について推計した。時間経過を伴って変化するシステムダイナミクスによるシミュレーションを中心に、長期間のシミュレーションを行った。</p> <p>③韓国の動向調査 日本は、中国と韓国を対象に木材輸出戦略を策定していることから、浜田港を利用した島根県の森林輸出の可能性について探るため、韓国の森林の現状および課題について、韓国の林野庁および森林総合科学院へヒアリングを行った。</p>
3. 結果
<p>①森林資源のCO₂ 吸収効率性 本研究では47都道府県を対象に、各都道府県別の森林のCO₂ 吸収に関する効率性を分析した。ここでは、投入データとして3つの変数(労働者/森林面積、森林面積、高性能林業機械等/森林面積)を用いた。また、アウトプットデータとして3つの変数(木材生産</p>

量/森林面積、森林蓄積/森林面積、蓄積増加分/森林蓄積)を用いた。この結果、最も効率的な都道府県は11あり、それ以外の都道府県は、規模の改善で効率化できることが明らかとなった。島根県の効率は0.764であり、全国第39位だった。ただし、推計に用いるデータの選定によって推計結果は変わるため、データの選出については課題である。

②エネルギー利用としての可能性

ここでは、1) 林地残材、製材工場からの廃材を利用した場合と、2) 森林資源を積極的にエネルギー資源として活用した場合の2つのケースを想定した。その結果、1) 廃材利用の場合、年間26.4GWhの発電量(固定電力買い取り価格:3.6億円)および、17,723t-CO₂のCO₂削減量(CO₂クレジットとして1.8億円)の発電量とCO₂削減効果があることが推計された。また、2) 森林資源を積極的に活用した場合、年間779GWh発電量(固定電力買い取り価格:262億円)および、523,655t-CO₂のCO₂削減効果(CO₂クレジットとして52億円)の発電量とCO₂削減効果があることが推計された。ただし、この推計には費用(賃金、機械、運送費)や本事業を行うために必要となるエネルギーからのCO₂排出量などを考慮していないため、費用や運用のためのエネルギー使用量を考慮したモデルの開発が今後の課題である。

③韓国の動向調査

森林のCO₂吸収を評価するための取り組みを始めたところであり、2020年以降の施行に向けて、制度を整備している。日本の制度を参考にしているため、今後森林環境分野における日韓協力の可能性もあることが考えられる。

また、日本の木材輸出戦略として、韓国と中国を対象に、輸出量を増やす目標が建てられている。中国を含めた北東アジア地域における具体的な森林ビジネスモデルの策定は、今後の課題である。

4. 研究成果の公表

豊田知世・林田吉恵・鄭世桓・李憲、『島根県の森林価値の再評価:CO₂オフセットビジネスについて』、島根県立大学COC事業「地域と大学の共育・共創・共生に向けた縁結びプラットフォーム 第1回全域フォーラム」、2014年2月21日、島根県。

(予定) 林田吉恵・豊田知世・鄭世桓・李憲(2014)『わが国森林事業の効率性分析』、総合政策論叢、28号。

5. 地域貢献の成果

島根県は豊富な森林資源を有しているが、そのほとんどが利用されていない状況である。ただし、森林のCO₂吸収能力やエネルギー利用を評価する制度が整備されつつあるため、CO₂クレジットや電力固定買い取り制度を利用しつつ、森林ビジネスを実施できる可能性が示された。ただし、今年度の研究では、ヒアリングやデータ整備、モデルの構築に従事したため、実際の費用を含めた分析は不十分であった。引き続き調査を行ったうえで、島根県において自立して持続可能な産業としての林業の在り方を探っていききたい。

【しまね地域共創基盤研究費】

申請者	島根県立大学 看護学部 看護学科（出雲キャンパス） 准教授 松本玄智江
研究テーマ	農医連携による限界集落の活性化に関する試み ～島根県出雲市吉野集落の実践を通じて～

1. 研究目的	出雲市佐田町吉野地区という限界集落において、農医連携の教育、IT を活用した健康教室を開催する等大学との関わりのなかで、限界集落の活性化をめざす。
2. 方法	・吉野地区集会所と大学をライブオンシステムで接続し、ライブオンシステムを活用して健康教室を開催する。
3. 結果	<ul style="list-style-type: none"> ・ライブオンシステムの環境整備が3月に完了。 ・健康教室開催 <ul style="list-style-type: none"> 3月26日 第1回 システムの確認と健康教室を試行 地元参加者 13名 4月9日 第2回 健康教室開催「誤嚥予防」(嚥下体操, 唾液腺マッサージなど) 地元参加者 9名 4月30日 第3回 健康教室開催「ロコモ予防」(ロコチェック, ロコモ体操など) 地元参加者 10名 5月からは農作業が忙しくなるため、健康教室は4月で一旦終了とする。
4. 研究成果の公表	<ul style="list-style-type: none"> ・3月4日 学内の研究成果発表でポスター発表 ・島根日日新聞3月29日(土)「Web会議システムによる『よしの健康教室』を開催(於: 出雲市佐田町吉野集会所) -地(知)の拠点整備事業の一環-」が掲載される。
5. 地域貢献の成果(地域課題に対する提言、示唆等の考察をご記入下さい)	<ul style="list-style-type: none"> ・健康教室を3回しか実施していないので、地域の方の健康にどれだけ効果があったかは不明であるが、定例開催することで冬季の健康管理に役立つのではないかと考えられる。しかし、認知度が低く参加者が一部の住民に限られているので、広報を通して認知度を上げると共に参加者を増やしていく必要がある。 ・健康教室など地域の方との交流の機会を通して、地域ニーズを把握する機会となり、地域の期待を踏まえた大学ができる地域貢献について考える機会となっている。

申請者	島根県立大学 看護学部 看護学科 (出雲キャンパス) 教授 山下一也
研究テーマ	エゴマの化粧品オイルとしての6次産業化の可能性 - 邑智郡川本町特産品エゴマオイルの開発 -

1. 研究目的

島根県邑智郡川本町では2002年からシソ科の一年草「エゴマ」が栽培され、さまざまな特産品に使われている。エゴマと言えば、韓国風の焼き肉で肉を包む薬物野菜というイメージがある。日本では江戸時代までは食用油などにするため、種を搾っていた。一時は東北の一部で細々と栽培されるだけになっていたが、健康に良いとされている α -リノレン酸が多量に含まれていることがわかり、健康効果に注目が集まっている。今までのところ、エゴマ油をはじめ、エゴマドレッシング、エゴマもち、エゴマ豆腐、エゴマ味噌、エゴマアイス、エゴマ大福などありとあらゆる加工品にエゴマが使われている。

そこで、健康効果がうたわれるエゴマを化粧品オイルとしての6次産業化の可能性についてラットを用いて検討した。

2. 方法

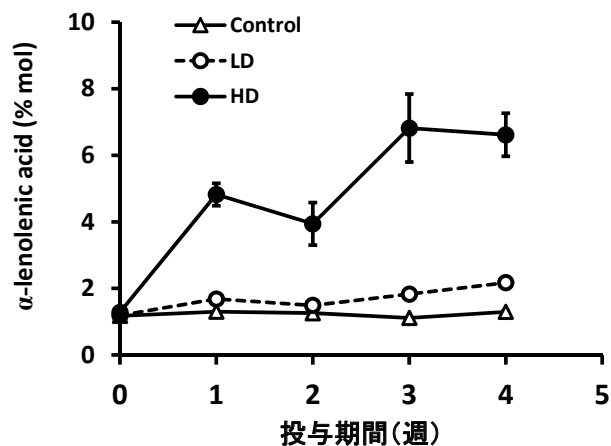
被験物質：エゴマ油。使用動物：10週齢のWistarラットを、1群5匹、3群合計15匹を用いた。飼育条件：ラットは、島根大学動物舎の飼育室でプラスチックケージに1匹飼いされ、自由飲水、および、固形飼料MFを自由摂食させた。塗布方法：剪毛した背部皮膚に、1 mLの被験物質溶液を1日1回、週6日、6週間連続して塗布し、塗布部位は週1回剪毛した(図参照)。塗布物質濃度：エゴマ油は高容量と低容量の2種類を、コントロール群には希釈に使用した溶液のみを使用した。血中脂肪酸の定量：2週間毎にエーテル麻酔下で眼底静脈より約1 mLの血液を採取し、遠心分離により血漿を分取後、ガスクロマトグラフィーを用いて脂肪酸量を算出した。皮膚色の評価：塗布区画について肉眼判定を行い、皮膚の白色化の判定はGellinらの基準を参考にして行った。評価は3名の評価値の平均を使用した。

皮膚標本作製および観察法：6週間塗布後、ラットの皮膚を採取し、組織学的皮膚標本作製し光学顕微鏡で観察した。



3. 結果

エゴマ油の高容量と低容量の2種類においては、図に示すように、血中 α -リノレン酸が上昇しており、塗布により血中の α -リノレン酸が上昇することは、エゴマ油の化粧品としての付加価値が示唆された。また、特にラット皮膚に対しての有害事象は観察されなかった。図は血中 α -リノレン酸の変化を示す。



4. 研究成果の公表

国内外の学会などにて公表予定。

5. 地域貢献の成果

今後、エゴマクリームの化粧品として開発を継続していく予定で有り、県下のメーカーとのマッチングを行っていく計画である。

【しまね地域共創基盤研究費】

申請者	島根県立大学短期大学部 保育学科（松江キャンパス） 教授 山下由紀恵
研究テーマ	民話蘇生研究 －「島根県美濃郡匹見町昔話集稿・道川地区」の復刻と再生－

1. 研究目的

本研究は、昭和50年代に録音と書き起こしが残された匹見町道川地区の民話を、地域に子どもたちがいる間に語り伝えることによる、伝承の継続を目的とする。広島県に近い匹見町道川は、全人口167人、73世帯。道川小学校の在校生は現在6人。かつて豊かな民話の語り手たちが過ごした地域であったことを、今、伝えておく必要がある。島根県立女子短期大学の学生たちが卒論で残した書き起こし原稿を復刻し、益田市保育研究会、益田市立匹見保育所との協力により、人の声に乗せて、生き生きと子どもの生活の場で子どもが語り手になるまで蘇生させる。本研究はその蘇生法を探るための研究をめざした。

2. 方法

本学図書館には、本学卒業生が手書きで書き起こした民話集稿二編が残っている。一編は「島根県邑智郡大和村昔話集稿－第1巻：比敷・宮内・村之郷地区」。昭和50年に「島根女子短期大学昔話研究会編」の名前で発行された、手書き原稿のコピーを製本したものである。もう一編は「島根県美濃郡匹見町昔話集稿：道川地区」。昭和51年に、「島根女子短期大学特殊研究会」の名前で、同じく手書き原稿のコピーを製本した形で残っている。いずれも当時島根大学教授であった田中瑩一先生の卒業研究指導の一環として、当時の本学学生が、大和村、匹見町道川へ、他大学学生たちと民話採集に出かけ、卒論指導を受けながら手書きでテープ起こし原稿を残したものである。

申請者は、この民話を採集記録したかつての卒業生たちに会い、彼女たちの記憶が明確である間に、大和村や匹見町道川に、昭和50年代の民話を戻すことを計画してきた。平成24年度、「島根県美濃郡匹見町昔話集稿：道川地区」を残した卒業研究グループの中から、2名の卒業生に協力を得て、また元島根大学教授田中瑩一先生、益田市保育研究会、民話の会石見の協力を得て、益田市匹見町美濃地屋敷において、「匹見の民話を聞くつどい」を行った。この民話の語りの集いに参加した保育関係者、地域の教育関係者から、「ふるさと教育」資源として、自分たちの生活する地域の民話を残すことの意義について、賛同を得た。しかし、かつての方言資料を現在の子どもたちに伝承文化として残していくためには、様々な子どもの発達段階にふさわしい加工が必要ではないかとの意見もあった。

本研究では、民話を生活体験の中に蘇生させるための、方法を検討するため、まず、手書き記録の「島根県美濃郡匹見町昔話集稿：道川地区」「島根県邑智郡大和村昔話集稿－第1巻：比敷・宮内・村之郷地区」をワープロソフトにより、デジタルデータ化した。そのうえで、いくつかの加工修正案を作成したうえで、保育・教育の場で様々な年齢の子ども・成人の民話活動に取り入れ、各年齢段階に応じた、最善の民話蘇生法を探求することを計画している。

平成 25 年度中は、単独研究として主に学生のアルバイトによる、データのデジタル化作業を進行させた。平成 26 年度以降、平成 24 年度に研究協力を得たメンバー他の卒業生、地元の教育関係者との共同研究として、保育・教育の現場での行動記録による研究へと発展させる。

3. 結果

①今回の研究助成により Word 入力した昔話集稿は、結果的に以下の 2 冊となった。いずれも約 40 年前の本学卒業研究であり、今回の在学生によるアルバイト作業で、計画したとおり「匹見町昔話集稿」は、読み取り困難な文字を除いて、全体を入力し終えることができた。「大和村昔話集稿」も、一部確認作業を残してほぼ入力し終えた。(添付資料 1 が書き起こし集稿。添付資料 2 が今回 Word 入力後の原稿一部。)

「島根県美濃郡匹見町昔話集稿：道川地区」島根女子短期大学特殊研究会，1976

「島根県邑智郡大和村昔話集稿—第 1 巻：比敷・宮内・村之郷地区」島根女子短期大学昔話研究会，1975

作業に携わった学生は、平成 25 年度保育学科 1 年 3 名であり、総作業時間は、87 時間であった。1 名が単独で「匹見町昔話集稿」を入力し、2 名が、協力して「大和村昔話集稿」を入力した。

②入力作業は、Word 横書きスタイルにより行い、読み取り困難な文字を●印で入力しながら行ったため、現時点では完全なデジタル化に至っていない。平成 26 年度中にさらに、編集し直す必要が残っている。これらの確認作業については、元の昔話収録を研究代表者で行った島根大学田中瑩一名誉教授、ならびに書き起こし卒業研究を行ったかつての卒業生に協力していただく必要があるが、今年度中に、在学生と合わせて研究会を実施し交流を持つことができたため、平成 26 年度中に確認作業を実施することは十分可能な状況である。今後は、総合文化学科岩田英作教授の行っている音源の整理と保存の研究の成果を踏まえて、さらに 2 編の昔話の書き起こしの正確なデジタル化が可能になると思われる。

③在学生による入力作業は当初予定したよりかなり短時間で済んだため、入力後の言語データ分析のためのプログラム・参考文献等を研究助成金で準備した。デジタル入力後のデータを IBM SPSS Text Analytics for Surveys(日本語版)で分析することにより、各地区の昔話集稿に登場する人物・動物等の名詞、それらにまつわる形容詞等、語りで昔話を話す際のテキスト独特の要因分析を今後行うことができる。②の確認作業終了後に、島根県の昔話の特徴を分析しつつ、各地区の現在の保育に活かしていくことを目指したい。今回の作業で、研究題目とした「匹見町昔話集稿」のみならず「大和村昔話集稿」のデジタル入力も終了したため、島根県内 2 地域の昔話の要因比較が可能となった。語り継がれた昔話の各地区の独自性と共通性が今後明らかになると期待できる。

4. 研究成果の公表

上記①②の成果を含めて、平成 26 年 2 月 21 日に浜田キャンパスで行われた COC 全域フォーラムで研究発表を行った

＜しまね地域共育・共創研究成果報告＞

「地域資源を保育教育課程に活かす『ふるさと教育』研究」

5. 地域貢献の成果

平成 26 年 2 月 21 日 COC 全域フォーラムでの研究発表で明らかにした通り、島根県内の言語文化は画一的な「出雲方言」「石見方言」「標準語」で成り立っているわけではなく、20km 未満の近い地区でも異なった言語文化を引き継いでいるという多様性をもっている。今回の作業でデジタル化が可能となった昔話集稿を、現代の保育教育課程において活用することで、自らの文化と他の文化の違いと共通性を発見し、文化（環境・人・ことば）の多様性を理解し尊重できる人材育成へと展開できるのではないかと考えている。方言によるかつての昔話を現在の保育に活かし、地域の子どもの直接的体験・交流と発達段階を重視した「ふるさと教育」の開発につなげたい。

平成 24 年度に匹見町「美濃地屋敷」で実施した「匹見の民話を聞くつどい」では、益田市保育研究会の方々が古い民話と伝承遊びを再現してくださり、地域の文化的資源を保育に活かす手法について「今の子どもに伝えるための工夫」を検討して下さった。今後は、2 編の昔話集稿の Word 入力編集が終了し次第、保育研究会の保育研究へと引き継いでいきたい。

2.3 キャンパス合同学生ボランティア研修会

「地域に貢献する学生のボランティア活動」を支援する取り組みとして、5月15日(水)に出雲キャンパスで学生ボランティア研修会を開催しました。

当日は、出雲・浜田・松江キャンパスの学生、教職員をはじめ、地域でボランティア活動をされている方など56名の参加がありました。

第1部の講演会では「ボランティアのすすめ ～ホスピスのボランティア活動をおして～」という演題で、松山市のホスピス病院のボランティアコーディネーターである森菊子氏に講演をして頂きました。森氏は「誰かのために何かをしたいという思いは必要ですが、継続するには自らが楽しむこと。どれだけ多くのことをするかではなく、その人のためにどれだけ心をこめるかが大切。」と、ボランティアの意味やボランティアだからできることなどについて話されました。聴講した学生からは「楽しいからするボランティアを目指したい。」という感想や、地域の一般参加者の「ティーサービスは良い試み。取り入れてみたい。」といった思いが語られました。ボランティアの方々と一緒に作られたという、握りしめると心地よい『癒やしのハート』をいただきました。

第2部では、地域で活躍する6つの団体・事業により募集するボランティア活動について具体的に説明していただき、学生たちは熱心に耳を傾けていました。終了後に、参加したいボランティアについてさらに詳しい内容を聞きに行く学生の姿がありました。今回の研修会が、参加された皆さまの今後のボランティア活動のきっかけになれば幸いです。

『癒やしのハート』を手にとってにっこり



写真を示し多くの体験を語られた森菊子氏



看護学科2年生より講演に対するお礼の言葉



出雲市総合ボランティアセンターからの紹介



3. 3 キャンパス合同学生ボランティア交流会

日時：平成 25 年 11 月 9 日（土）14:00～18:00

10 日（日）10:00～15:00

会場：島根県立大学浜田キャンパス 交流センター 研修室

島根県立大学浜田キャンパスにおいて、ボランティア活動に参加してきた学生の「3 キャンパス合同学生ボランティア交流会」が開催されました。

この企画は、松江・出雲・浜田の 3 キャンパスの学生が日頃行っているボランティアを相互に理解し合い、その関心を高めたうえで、3 キャンパスのボランティア活動でのつながりをつくることを目指しています。また宿泊で交流を十分に深めた後に、ボランティアについて語り合い、3 キャンパス連携ボランティア活動を企画することを目的とし、学生主体で企画・運営にあたりました。3 キャンパスから学生 24 名、教職員 8 名の合計 32 名が参加しました。



また宿泊で交流を十分に深めた後に、ボランティアについて語り合い、3 キャンパス連携ボランティア活動を企画することを目的とし、学生主体で企画・運営にあたりました。3 キャンパスから学生 24 名、教職員 8 名の合計 32 名が参加しました。

【第一日目】

○オリエンテーション、自己紹介

初日はオリエンテーションとして 2 日間のスケジュールを確認し、その後自己紹介をしました。

○「先輩からのひとこと」(浜田キャンパス 3 年生)

島根県全土を原付バイクで走った経験、被災地ボランティア（岩手）、西日本ヒッチハイク旅で田舎に泊まった経験等を通じて、海外支援金の募集を広島で行い 200 万円を目指していることなどお話しいただきました。経験から「行動・好奇心・野心」が行動のキーワードとなっており、1)自分の軸を持つこと、2)すぐに行動すること、3)周りを巻き込むこと、4)逃げない忍耐力を持つこと、5)自信を持つこと、が大切であると教えてくれました。

○「地域とのつながりづくり～絵本制作をとおして～」(読み聞かせサークルゆるりの会)

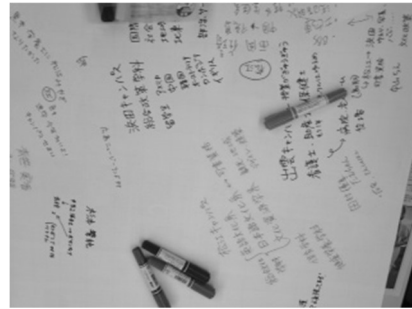
「かきえもん」という浜田市三隅町の柿づくりに関する絵本を実際に読み聞かせてくれました。このかきえもんの絵本制作は、サークルの先輩が三隅白砂会より依頼を受けて、地域の方々はもちろん、三隅の柿農家さんや松江キャンパスの岩田教授の協力を頂きながら制作したものであり、地域の人々とのつながりがあったからこそ完成できた作品であることを強調していました。待つだけではなく、こちらからアプローチしていく大切さを教えてくれました。



○ワールドカフェ

各キャンパスでの特徴的な学生ボランティア活動についてワールドカフェ形式を利用して相互に話し合いをしました。共通テーマを決めテーブルごとに話し合いながら、リ

リーダー以外のメンバーがテーブルを移動し、次々に別のリーダーのいるテーブルへ移動して話し合います。リーダーはテーブルでの会話を新たなメンバーへ伝え、意見交換を続けます。テーマは「私のキャンパス紹介」「今（今まで）、私はこんな感じ」「これからは、○○なことをしてみたい！」の3つについてワールドカフェ形式で交流と相互理解を深めました。



○交流会

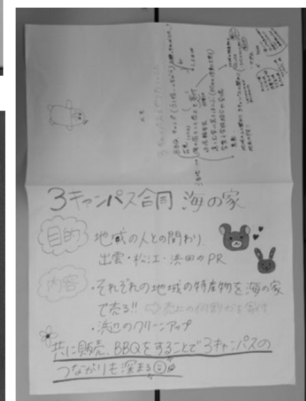
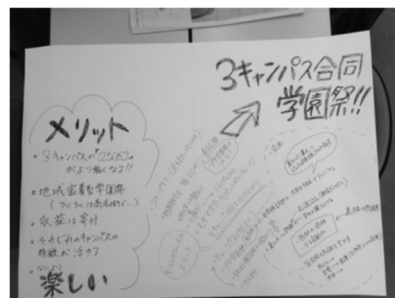
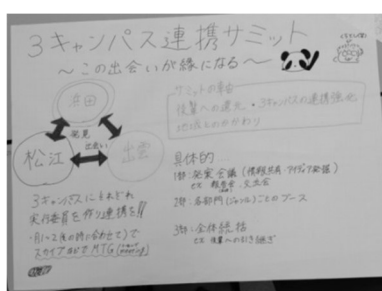
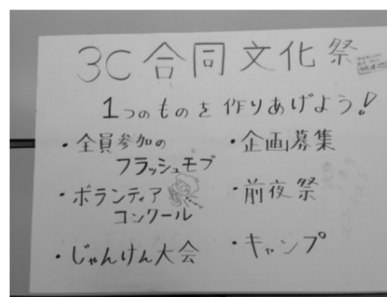
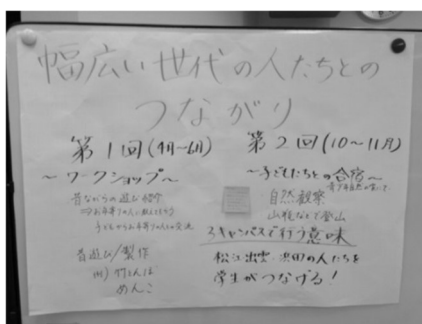
夜には交流会を開催しました。全員でお鍋を調理し、ボランティアに限らず同じ大学での学友として大いに語り合いながら交流を深めました。

【第二日目】

初日で交流が深まったところで、いよいよ二日目は3キャンパスの連携でやってみたいボランティア企画にあたりました。5つのグループに分かれそれぞれの企画を出し合い発表を行いました。参加学生は1~2年生が多く、企画をまとめる際に浜田キャンパスのボランティアサークル「地域密着てごねっと」の先輩にアドバイスをもらいながら作成にあたりました。プレゼン後、教職員が審査した結果から来年度の実施企画を決定しました。審査基準として1) 企画内容の楽しさ、



2) 3キャンパスである意味、3) 地域に貢献できているか、4) 実現可能か、5) 一生懸命か、の5点で審査がなされました。5つの企画案「3C海の家」「3C合同学園祭」「幅広い世代の人たちとのつながり」「3C合同文化祭」「3キャンパス連携サミット」が報告され、僅差で「幅広い世代の人たちとのつながり」に決定しました。さらに翌年ボランティアを実施する実行委員となるメンバーを選出しました。今後もそれぞれ良さを取り入れながら3キャンパスで来年度の企画実行に向け一致団結して解散となりました。



IV. 各キャンパスの活動

《浜田キャンパス》

平成25年度 公立大学法人島根県立大学
地域連携推進センター浜田キャンパス運営会議 名簿

(任期：平成25.4.1～平成26.3.31)

職名	氏名	備考
教授	林 秀司	・地域連携推進センター長
准教授	田中 恭子	・地域連携推進センター副センター長 ・事業推進検討会
准教授	金野 和弘	・委員(研究企画検討会、情報発信・公開講座検討会)
講師	西藤 真一	・委員(教育支援検討会、情報発信・公開講座検討会)
講師	豊田 知世	・委員(情報発信・公開講座検討会、教育支援検討会)
講師	マニング・クレイグ	・委員(事業推進検討会)
地域連携課 課長	草刈 健司	・委員
地域連携課 主任	河部 安男	
地域連携課 主任	槇野 康一	
地域連携課 主事	竹口 雄一	(任期：平成25.9.17～平成26.3.31)
地域連携 コーディネーター	吉田 隆博	(任期：平成25.10.1～平成26.3.31)
嘱託員	竹根 美雪	
嘱託員	前原 直美	(任期：平成25.9.17～平成26.3.31)

浜田キャンパス：地域連携活動概要

地域連携推進センター副センター長 田中 恭子

文部科学省補助金事業「地（知）の拠点整備事業」が採択された平成 25 年度においては、従来から本学で取り組んできた教育・研究・社会貢献の各領域における地域活動が、3 キャンパスの特色を活かしながら全学一丸となって一層推進される形で始動した。

全学的な取組としては、まず教育分野での 3 キャンパス必修科目である「しまね地域共生学入門」の新設準備が進められている。

研究においても「しまね地域共育・共創研究助成金」制度の創設により、より多くの教員が地域研究を展開しはじめている。平成 25 年度においては 10 件の採択があり、それぞれのキャンパスにおいて、または第 1 回全域フォーラムにおいて地域へ成果報告を実施している。

社会貢献においても本学学生が活発に地域へ出向きボランティア活動を行っているところであるが、今年度も地域連携推進センター全学運営活動事項である 3 キャンパス合同学生ボランティア交流会が実施されている。ここで企画された学生合同ボランティア案については次年度の開催に向け準備が進んでおり、センター全体として支援していきたい。3 キャンパスでの合同開催によって、学生のボランティアを通じた相互学習に加え、県内全域に本学学生の社会貢献活動を拡大展開する意味でも、今後大きく期待している活動の一つである。

以上の教育・研究・社会貢献の各領域において、3 キャンパスがそれぞれの強みを活かしつつ、実績を礎とした総合力を充分発揮すべく全学的な連携・協働を強化していくことが求められている。

浜田キャンパスにおいても、これまでの地域連携推進センターとしての取組は、「地（知）の拠点事業」の開始により、平成 25 年度では一層充実したものとなっている。

今年も東日本大震災に伴う災害ボランティア活動に本学学生が参加しているが、本年度は災害ボランティアを継続するため、そのきっかけを作るボランティア（きっかけバス）や、GINGA-NET 報告会等が実施されている。加えて島根県西部での大雨災害ボランティア活動では、学生のみならず教職員一体となって活動に参加した。

また、今年度は浜田市との共同研究事業に加え、益田市との共同研究事業も開始された。4 件の地域研究の成果報告がなされ、フロアとの活発な意見交換が繰り広げられた。

紙幅の制約もあり、すべての活動を紹介することはできないが、以上のように平成 25 年度も多くの地域連携活動が実施された。「地（地）の拠点整備事業」の採択を契機に、3 キャンパスでの教育・研究・社会貢献活動の在り方が、今後本学がこれまで以上に「地域に根ざした大学」へと進化するための鍵となっていると思われる。

1) 学生の地域貢献活動

○学生ボランティア活動（震災ボランティア以外）

浜田キャンパスでは、毎年多くの学生が地域から依頼のあったボランティア活動に参加している。以下今年度行われた学生ボランティア活動の様子の写真と参加者からの感想を紹介し、さらにボランティア活動の一覧を付す。

◆依頼者感想◆

【温泉津やきもの祭り】(H25年4月24日)

右も左も分からない状況の中、はじめこのボランティアに参加するのに不安がありました。しかし、終わって振り返りますと、参加して良かったと思っています。本部でのチラシ配り、案内、駐車場警備、後片付けなど、どれも主体的にできました。一年生の学生と交流ができたことが一番の収穫だったと思います。(2年生・勝又輝明)



【有福通学合宿】(H25年10月17日)

10月17日から19日にかけて行われた国府公民館有福分館での通学合宿は僕にとって3回目の通学合宿であり、忘れられない思い出になりました。有福小学校は今回、全校生徒が参加しましたがそれでも15人という非常に少ない学校でした。しかしその少なさゆえに学年を越えて皆の仲がとても良いのです。上級生はお兄さんお姉さんとして下級生の面倒をしっかりと見ていましたし、下級生は上級生を信頼しているようでした。僕たちから見れば普通の小学生ですが、授業から放課後までずっと一緒に過ごしている彼らからすればみんな家族のようなのかもしれません。大学生のほうが大切なことを学ばせてもらいました。彼らの仲がいつまでも続くことを願っています。(1年生・高橋賢太郎)



ボランティア活動の一覧

依頼団体名	活動場所	活動期間	内容	人数
長沢一町内 自治協議会	浜田市長沢町	H25.4.28	お神輿担ぎ	5名
浜田商工会議所	浜田市内	H25.4.29	大名行列	3名
NPO 法人石見 ものづくり工房	温泉津町	H25.4.20-21	温泉津やきもの祭り	4名
ひきみ田舎体験 推進協議会	益田市匹見町	H25.5.3-4	匹見峡春祭り	3名
島根県立少年 自然の家	少年自然の家（江津 市）	H25.5.3-5	春のオープンデー	3名
国立三瓶青少年 交流の家	国立三瓶青少年交流 の家	H25.5.10-12	ボランティア活動入門セミ ナー	2名
浜田市立 国府公民館	浜田市内	H25.5.12	浜田ろう学校運動会	3名 +吹奏楽部
浜田市社会福祉 協議会	陸上競技場（浜田市）	H25.5.18	障がい者スポーツ大会	4名
島根県立江津 清和養護学校	清和養護学校（江津 市）	H25.5.25	養護学校運動会	4名
子育て支援セン ター	子育て支援センター	H25.5.25	すくすく 10 周年記念イベ ント	6名
浜田市立 国府公民館	有福小学校	H25.6.9	プール清掃、ふれあいスポ ーツ大会	3名
島根県赤十字 血液センター	学内	H25.6.19	献血呼び込み協力	1名
石見小学校 5年2組	石見小学校体育館	H25.6.23	ダンスショート指導	ダンス部 6名
浜田市社会福祉 協議会	石央文化ホール	H25.7.4	託児（青年会議所記念講演）	2名
いのっ子クラブ	井野公民館	H25.7.1-9.30	子どもたちとすごす夏休み	1名
浜田市立 杵束公民館	杵束公民館	H25.7.4-6	小学生通学合宿	5名
浜田市立 周布公民館	周布公民館	H25.7.10-14	小学生通学合宿	7名

ボランティア活動の一覧

島根県立少年自然の家	少年自然の家（江津市）	H25.7.13-14	チャレンジ・ザ・サマー	4名
いわみ福祉会	浜田市金城町	H25.7.14	神楽大会	3名
ひきみ田舎体験推進協議会	益田市匹見町	H25.7.20	わさび田復旧作業	24名
浜田市立石見公民館	石見公民館	H25.7.28	いわみっ子まつり	8名
島根県立少年自然の家	少年自然の家（江津市）	H25.8.1-3	ジュニアサマーキャンプ	4名
浜田市立国府公民館	久佐公民館	H25.8.6-7	夏休みこどもリーダー塾	2名
大田市役所教育部	三瓶（大田市）	H25.8.7-11	夏の山村留学 リーダー	2名
浜田地区広域行政組合	浜田市・江津市内	H25.8.7-9	浜田広域圏子ども交流事業	8名
浜田市立黒沢公民館	浜田市三隅町	H25.8.10-11	かっぱランド夏祭り	8名
江津市立江津中学校	江津中学校	H25.8.19-22 (計3回)	夏季学習会 指導補助	5名
ひきみ田舎体験推進協議会	益田市匹見町	H25.9.13-14	達磨祭	3名
浜田市立国府公民館	浜田ろう学校	H25.9.15	ろう学校文化祭	5名
株式会社 集和	アクアス	H25.9.18-20	水族館訪問（デイサービス利用者付き添い）	3名
江津市立江津幼稚園	江津幼稚園	H25.7-9 (計4回)	園児とのふれあい・神楽指導	2名
島根県立少年自然の家	少年自然の家（江津市）	H25.9.28-29	秋のオープンデー	
浜田ことばを育てる親の会	浜田市総合福祉センター	H25.10.5	託児	2名
浜田市教育委員会	国府公民館有福分館	H25.10.17-19	有福小学校通学合宿	
浜田市地域医療対策課	浜田市総合福祉センター	H25.10.27	健康福祉フェスティバル	2名

ボランティア活動の一覧

国立病院浜田 医療センター	浜田医療センター	H25.10.27	病院フェスタ薬剤科ブース	2名
しまね国際セン ター	学内作法室	H25.11.1	えいごであそぼ！in はまだ～ハロウィン～	9名
夕日ヶ丘聖母幼 稚園 母の会	夕日ヶ丘幼稚園	H25.11.2	ゆうゆうフェスタ	6名
みすみフェステ ィバル実行委員 会	三隅中央公園	H25.11.9-10	みすみフェスティバル	3名
ひきみ田舎体験 推進協議会	匹見町	H25.11.10	ロードレース大会	2名
沢谷地域連合自 治会	美郷町	H25.11.23-24	沢谷よいとこぶらりマップ 作り	5名
小坂農業生産組 合	弥栄町	H25.11.24	桜と紅葉の植樹	2名
浜田ことばを育 てる親の会	松原小学校	H25.12.1	託児	2名
ひきみ田舎体験 推進協議会	匹見町老人福祉セン ター	H25.12.6	とちの実交流会	3名
島根県赤十字血 液センター	学内	H25.12.11	献血呼び込み協力	2名
浜田市社会福祉 協議会	石央文化ホール	H25.12.11	託児	3名
しまね国際セン ター	学内研修室	H25.12.15	災害時外国人サポーター 養成講座	7名
夕日ヶ丘聖母幼 稚園 母の会	夕日ヶ丘聖母幼稚園	H25.12.17	英語と日本語での絵本の 読み聞かせ	2名
NPO 浜田フッ トサルクラブ	ふれあいジム・かなぎ	H25.12.21-22	ハーフタイムの演舞	19名
浜田市教育委員 会	石央文化ホール	H26.1.12	浜田自治区成人式	3名
しまね国際セン ター	子育て支援センター	H26.2.8	ニイハオ！留学生と遊ぼう	9名
しまね国際セン ター	あすなろ館（益田市）	H26.2.23	西部アンテナサロン 「ひな祭り&世界あそび」	4名

ボランティア活動の一覧

ボーイスカウト 石見地区協議会	原井小学校体育館	H26.3.2	ボーイスカウト活動体験会	5名
浜田市社会福祉 協議会	総合福祉センター	H25.6-H26.3	手話講座	2名
浜田市社会福祉 協議会	—	H25年度	障害児居場所づくり推進委員	1名
江津市立 谷住郷公民館	谷住郷公民館	H25.4-7 (計5回)	こども読書会等	7名
浜田市世界 こども美術館	こども美術館	土日祝	こども美術館ホリデー創作	2名
てらこや	雲雀丘小学校	H25.4-H26.3	体操教室補助員	5名

○ボランティア・ポイント抽選会（平成 25 年 12 月 18 日開催）

島根県立大学浜田キャンパスでは、学生のボランティア活動を奨励し、学生による地域交流や地域貢献活動を促進させるため、平成 22 年度からボランティア活動の参加者にボランティア・ポイントを付与するキャンパス・マイレージ事業に取り組んでいます。

今年度も、12 月 18 日（水）12:40~13:10 に、学生会館食堂（カフェテリア）2 階にて、ボランティア・ポイント抽選会を開催しました。

抽選会には、ボランティア・ポイントを既に獲得した学生だけでなく、まだボランティア活動に参加していない学生も参加して、にぎやかな抽選会となりました。

今回は、遠方への学生活動に役立つ「旅行券」、浜田の美味しいご馳走をいただける「浜田の選べるうまいもんセット」、浜田市内各事業所で活用できる「浜田市共通商品券」、学生の活動範囲を広げることのできる「共通バスカード」、ボランティア活動の先輩である卒業生から提供いただいた「ホットカーペット」などの商品を当選した学生に授与しました。

当日に参加したすべての学生を対象とした抽選会では、県大のロゴ入りトートバッグ、ペン、ペットボトルカバーなど、県大グッズ商品が授与されました。



○第5回 地連 café OPEN！（平成25年5月8日開催）

浜田キャンパスカフェテリア2階にて第5回地連カフェが開催されました。今回の目的はサークルや個人の話を通じて多角的な面から1年生にアプローチすることです。先輩とつながりを作り、色々な活動に参加して最高の大学生活を送ってもらいたいという願いを込めて開催されました。第5回のメニューは、先輩達はその第一歩を踏み出すきっかけ作りをする形で各団体、サークルによるブースごとの活動紹介（第一・二部）、そして個人ごとの活動報告（第三部）でした。学生主体の企画・運営がなされ盛り沢山の地連 café Time となりました。

【第一・二部～各団体・サークルによる活動紹介～】

6団体による活動報告がなされ、それぞれのボランティア経験を踏まえた先輩達によるサークル活動でのきっかけ、活動への想い、悩み、醍醐味について紹介いただきました。参加サークルは、「はまでいあん」「しまえっこ」「わさび計画」「ハイキング」「県大ねっこわーく」「BBS」でした。

【第三部～聞ききれ！話しきれ！！お気に入りの先輩を見つけよう！～】

10名の先輩によるボランティアを含む地域や海外での活動体験の紹介がなされました。

- 倉田さん「都会と田舎の地域を歩く―一人旅で出会ったもの―」
- 谷口さん「海外企業研修@インド」
- 黒木さん「地連活動のすすめ～100回以上のボラ活動を通して～。各種研修、講習、資格、他大学とのつながり。」
- 佐竹さん「ボランティアを通してできた人間関係、人材活用」
- 小暮さん「県大でボランティアをする意義」
- 豊島さん「アジア一周体験記」
- 川本さん「県大ねっこわーく@島根と災害ボランティアについて」
- 有間さん「地域とかかわる部活」
- 林下さん「ハイキングを通して地域とつながる」
- 青川さん「わさび活動」

今回はボランティアという活動の枠を超え、それぞれが地域・海外での経験を通じ、この大学生活で獲得した「もの」「こと」を後輩に伝えてくれました。

参加者50名と多くの方にお越し頂きました。また企画・運営学生スタッフとして（2年生）黒木大輔さん、谷口由記さん、小暮里奈さん、有間健次さん、倉田敏宏さん。（3年生）藤本みのりさん。（4年生）佐竹亮祐さん。皆様ありがとうございました。

（文責：田中恭子）

○第6回 地連 café OPEN！（平成25年10月4日開催）

浜田キャンパスカフェテリア2階にて第6回地連カフェが開催されました。今回のテーマは「ボランティアを語ろう」です。国内のボランティア報告はもちろん、今回は加えて海外ボランティアの報告として国境を越えた取り組みについてお話を伺うことができました。

【国内ボランティア】

「島根・東北活動ボランティア報告」十川ちひろさん（3年）、井上洲さん（2年）

遠方へ出向いてするボランティア活動について「どんな目的で？どんな気持ちで活動しているのか？」を考えたことをきっかけに、身近に部活動でできるボランティアへ応用して活動し、最終的にボランティアを続けていく人が出てくればいいのか、「行動することで考えることができる」という気づきに至った経緯をお話してくださいました。狭い県だからこそ人と人の繋がりがゆくゆくは自分の困ったときの助けになるということを教えてくださいました（井上さん）。

十川さんは東北災害ボランティアへの学習支援の活動後に、自宅に帰宅しないで学校の裏に泊まっている子ども達との会話や、いくら作業しても終わらない現場の悲惨な状況などから、参加前には予想していなかったほど事態が深刻であることを知るにつれ、島根から参加する意義について考えさせられたことをお話くださいました。作業（ハード面のボランティア）から人対人（ソフト面）のボランティアへの移行の難しさについて教えてくださいました。お二人の報告まとめとして、『Give & Take たのしまね』が一番大事であると締めくくっています。



【海外ボランティア】

「国際ボランティアの話」門上貴さん（4年）

これまでの経験や想いの変化を話してくださった導入から、なぜバングラディッシュのNGOで活動するに至ったのかを熱く語って下さいました。インド一人旅の経験、国際協力の意味や自分のやりたいこと、出来ることは何か？と問い続け、自分の幸福を日々考え発信し続けた結果、自分の可能性を試してみたくなった、これがバングラディッシュNGOでのインターンシップへ繋がったとのこと。豊富な海外経験談とそこからの「非日常」的な気づきの数々を臨場感あふれる語り口でお話いただきました。



3名の報告後フリートークが行われ活発に交流がされていました。終了時にはJICA伊藤様より「トンガ 青年海外協力隊～島根から世界へ～」と題し、JICAでの国際協力活動をご説明いただきました。

スピーカーの皆様、多くの気づきあるお話をありがとうございました。

（文責：田中恭子）

○第7回 地連 café OPEN！（平成25年11月29日開催）

浜田キャンパスカフェテリア2階にて、第7回地連カフェ「ボランティアプラットホーム」が開催されました。今回は、ボランティア参加者側の学生と、ボランティア依頼者側の団体が交流し、意見交換を通して、相互理解を深めることを目的としています。ボランティアプラットホームは、学生ボランティア報告（第一部）、ボランティア依頼者報告（第二部）、ボランティア団体ブースでの個別相談（第三部）の3部構成で行われました。



【第一部 学生ボランティア報告】

第1部では、ボランティアに参加した学生が、ボランティアを通して感じたこと、学んだことについて、報告としてくれました。報告者の皆さんのテーマは以下の通りです。



●杉本繁純さん（1年）「ボランティアを続けて」 現地に行くことで理解が深まり、それによって自分も成長できるため、現地に出ることの大切さを伝えてくれました。

●宮川遼さん（1年）「外に目を向ける」 失敗してもそれを教訓に成長できるため、失敗を恐れず外に出て、いろいろな人との出会いや新しいことへ挑戦してほしい、と伝えてくれました。



●倉田敏宏さん（2年）「県大の底上げ！！」。ボランティアの経験を通じて、新しい出会いや発見があり、それにより成長することができる。今の県立大学の現状は、ボランティアに参加する側としない側に分かれているため、情報や経験を共有する場を作り、県大の底上げにつなげていきたいと話してくれました。

【第二部 ボランティア依頼者報告】

第二部は、3つのボランティア依頼団体から、学生が参加したボランティアの様子や、今後のボランティア情報について紹介していただいた後、学生に向けたメッセージをいただきました。

- 村武まゆみさん（国府公民館）ボランティアとは、人助けをするというのはもちろんあるが、一緒に参加して楽しむことが重要。国府公民館では、大学生発のアイデアで活動できる地域に開かれた公民館を目指しています。大学生、いつでも大歓迎です。



- 石橋留美子さん（匹見町）高齢化や地域住民の減少が進む中、若い学生に地域に入ってもらうことで地域住民が元気になっている。人手不足の補充だけではなく、地域の人と人との交流人口が増加して、地域の人も喜んでいきます。

- 濱野健一さん（国立三瓶青年少年交流の家）ボランティアに参加することで、これまで見えなかったのが見えてくるようになる。新たな発見、新たな出会い、などの「気づき」を大切にしてほしい。三瓶青少年交流の家は国立の施設なので、人材育成の機能を担っている。ボランティア活動の企画・運営に関するセミナーも開催しており、学生を受け入れています。

【第三部 ボランティアブース】

第三部では、ボランティア依頼団体ごとに 3 つのブースを設置し、ブースごとに少人数で意見交換や情報交換、個別相談などを行いました。みなさん積極的にブースに訪れ、具体的な活動内容や参加方法について質問をしていました。



参加者 40 名と、多くの方に参加いただきました。ボランティアの参加者側と依頼者側が一度に介する場を設けたのは、今回が初めてでした。双方の思いを聞くことで、今後はより満足度の高い活動ができるのではないかと期待されます。今後もこのような機会を増やしていきたいと思えます。報告者のみなさま、参加いただいたみなさま、ありがとうございました。

（文責 豊田知世）

○第8回 地連 café OPEN! (平成26年1月29日開催)

浜田キャンパスカフェテリア2階にて第8回地連カフェが開催されました。今回は学生時代にボランティア活動を積極的に行っていた卒業生をお招きし、発表とワークショップを行いました。

【卒業生トーク】

(仲宗根大輔氏 2013年卒 元・BBS サークルメンバー、西日本旅客鉄道株式会社勤務)

浜田でのボランティアを通してのエピソード「自分を変えた人」「社会人になって活かされたこと」をテーマにお話ししていただきました。小さいころからの夢を実際の今の職業にしている、諦めず、夢を持ち続けなければかなえられることが伝わってきました。大学生活と社会人の違いや、大学は社会人になるための準備期間であり、延長線上にあることなど、納得させられることばかりでした。『大学生活を悔いの残らないよう過ごして欲しい』という先輩としてのメッセージが印象的でした。

【ワークショップ】

「針金人生」というワークショップを参加者と一緒に行いました。今までの人生を振り返っての人生のアップダウンを針金で表してもらい、色粘土を使い自分のイメージでその時期の心境を表してもらいました。

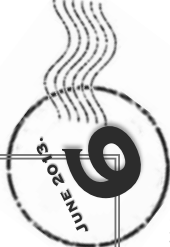
受験で苦しんだ思い出、海外に行った先輩の人生など様々な生きざまを知ることができました。今回は、国際基督教大学から休学をして現在、津和野町役場町長付としてインターンシップで来られている福井健さんにも参加していただきました。福井健さんの、針金を何本も繋ぎ合わせて作った作品が面白かったです。参加者同士の仲も深まったようでした。



次に付箋を使用したワークショップを行いました。「針金人生」で今までの振り返りをしたうえでの、様々な出会いのエピソードを簡単に書いてもらいました。家族、友だち、高校の先生の言葉など人それぞれ自分自身が変わる瞬間に出会った人は、ずっと覚えているということが分かりました。短い時間で、一人ひとりの生き方を共有することができました。少し恥ずかしい話も発表することで、すっきりした様子の参加者に安心しました。

今回、企画段階から計画をして、地連カフェに参加したとき、『こんなことやりたい』と思ったことをやらせていただきました。参加者の人数は少なかったけれど、いつも聞けない、生きざまなど楽しくお話しすることができ、温かい和やかな雰囲気になったと思いました。

オロリン タイムズ



CONTENTS

- 01 新入生が語る、地域の魅力
- 02 いくつになっても学びたい！
『平成 25 年度公開講座』はじまる
- 03 浜田市唯一の「映画館」
オロリン座
- 04 VOLUNTEER
- 04 災害ボランティア隊
学生が伝える、被災地の今！
- 05 第 5 回 地運カワ工開催
～地域で活躍するサークル紹介～

新入生が語る、地域の魅力

新入生 青木 亜希

MINAKO
AOKI

もうすぐ7ヶ月の歳を迎えるおじいちゃん。早朝5時半に保育園に来て草取りや道端の掃除をすることが日課。そのことで、近々表彰されるのに「わしは、えんまもんいらん」と一辺倒。浜田にはえんまおじいちゃんのように縁の下の力持ちとして町を支えている人が沢山います。益田から浜田に来て2か月ですが、町のイベントに行く度に元氣いっぱいの子どもたちや家族のように気遣ってくれる町の方々が大好きになりました。おせっかいとも言えるほどの地域の方々の優しさが伝わってくることに気づきました。(1 回生 青木美奈子)

NANA
HASHIGUCHI

私は、鳥取県立大学に來て学生と地域の距離がとても近いことに驚きました。私の地元はイベントがたくさんありまして、ですがボランティアしたい、行事を盛り上げたいと思っても実際にどう動けばいいかわかりませんでした。この大学には地域連携課があるからボランティアの情報やスムーズに得ることが出来ます。中には伝線行事など観光として見ることはできません。夏休みの子どものキャンプなども通なら体験できないことまでさせていただけ自分たちで企画できるものもありません。自分が今までしていたことが出来るように今になって本当の環境だと思おう、これからは自分もたくさん人のイベントに参加していきたいです。(1 回生 橋口菜々)

から梅雨に
熊がでてきて
こんにちは
まっきーの一句

本学園辺でも5月11日(土)の朝、熊の目撃情報が寄せられました。この日は公開講座やオロリン座の映画上映とイベントが重なっていた日だったので、参加者の方に注意喚起を行ったところです。熊ってほんと怖いですね。



いくつになっても学びたい！『平成25年度公開講座』はじまる

今年度も5月11日より公開講座がスタートしました！

第1回目の講座は、鎌倉投資信託株式会社代表取締役社長の鎌田恭幸氏をお迎えし「一人ひとりの小さな一歩が未来を拓く～一人ひとりにできるリーダーシップとは何かについて考える～」を題目に90分におわたって講演いただきました。

今年度も皆様にお楽しみいただけるよう、努力してまいります。1年間よろしくお願いたします。

受講者から寄せられた公開講座の感想の一部をご紹介します。

初めて聞く投資信託会社の社長 鎌田 恭幸さんの話をきくのがとても勉強になりました。ありがとうございました。(70代・男性)

初めて参加しましたが、盛りだくさんの内容でとても楽しかったです。学生の皆さんが普段と違う考え、感じ、行動しているのがよく伝わってきました。(20代・女性)

リーダー像について多くの意見を聞かせて参考にさせていただきました。自分もこれからリーダーとして動くことがあると考えるとやるべきことが多くあります。(県大生・男性)

今日のお話で私にとって印象に残ったこと一つあげますと人から必要とされることや働くということによって人は何を全うできるかということも健康で健やかに人生を全うできることと云われまして、この言葉です。(70代・男性)

自転車の正しいルールが再認識でき、マナーについて考えさせられました。車と自転車、そして歩行者が共存できる道路環境が必要なのも判りました。自転車が車道で事故がなく走行できる道路環境が新たに作ればいいなと思いました。(50代・男性)



今後開催予定

- 6月26日 「政治家よ言葉を磨け～レトリカ(弁論術)について」
石見の限らない輝き
- 7月10日 韓国を旅する
- 7月13日 夢を創造して地球環境に貢献する
- 7月17日 ロシアを旅する
- 7月17日 石見地方の歴史遺産をどう観光に結びつけるか
一石見銀山と石州左官
- 7月24日 アメリカを旅する
- 7月31日 中国を旅する
- 7月31日 地域に暮らす



● 5月18日開催 『地域は現金収入を得る手段を創出したい』の講話
(掲載分以降の開催は9月25日～となります)

今年度も地域連携推進センター（以下 地連）が主催する“地連カフェ”が5月8日（水）に開催されました。第4回までに続き、大成功に幕を下ろすことができました。

さて、地連カフェとはどのようなものなのでしょうか。



県立大学には、学生と地域を結び、様々な活動やボランティアをまとめて、紹介、推進する地連があります。活動的な学生が集まり、多くのイベントを企画していますが、そのうちの一つに“地連カフェ”というものがああります。地連にもっと多くの学生に来てほしい、地連をもっと多くの学生や地域に知ってほしいという思いから、年4回カフェエリアにて活動発表や紹介、プレゼンなどを軽食を食べながら気軽に楽しく行っています。1年生や、地連にあまり来ることがない人を対象にきっかけづくりの一つとしての活動です。



それでは、この度の第5回地連カフェの内容をご説明します。「参加者に多角的に刺激と選択肢を与え活動意欲を高める」「踏み出しにくい第一歩と一緒に踏み出す」「お気に入りの先遣作り」をコンセプトに3部構成にしました。

1部では地域系・ボランティア系サークル5団体からの活動内容や活動についての意識等をプレゼンを通して、県大にはいろんなところで活動しているサークルがあることを知ってもらいました。また、参加者自身どんなことに興味があるかを考え直す機会を作りました。

2部では1部参加5団体に加え、海外での活動体験や、個人活動等に入れている10名の先輩の話をブースに分かれて聞く仕組みを作りました。聞くだけでなく参加者自身の興味のある事を話したり、詳しく話を聞けるように、対話ができることを重視し、少人数でローテーションして回りました。

3部は2部の続きで、ローテーションの時間に追われることなくさらに深く話せるようにしました。

参加者に書いてもらったアンケートには「興味がなかったことにも興味が出た」「もっと活動してみたいと思った」等前向きな言葉が多く、7名の学生実行委員は大成功を喜びました。

これからも“地連カフェ”を続けていきたいのでよろしくお願ひします。
(文責：ボランティアメンター 黒木大輔 (2回生))

お知らせ

メルマガについて
キャンパスポーターの皆様にはオロリタイムズの他に、毎月1回メルマガを配信しています。
年度途中でも登録できますのでご希望の方はお知らせください。
tiki@admin.u-shimane.ac.jp

編集：横野康一
平成25年6月発行
島根県立大学 地域連携推進センター 浜田キャンパス
〒697-0016 浜田市野原町 2433-2

今年度最初のオロリタイムズいかがでしたでしょうか。
本年度より、前任・岡田が松江キャンパスへ異動となりましたので、わたくし、横野が編集を担当することとなりました。学内のイベント、学生のボランティア活動の様子など幅広く掲載できるようにしたいと思います。
キャンパスサポーターの皆様には、今後ともご支援のほどよろしくお願ひいたします。

浜田市唯一の「映画館」オロリタイムズ

名作映画鑑賞サークル『オロリタイムズ』も開設より1年が経ちました。地域への映画文化の普及と、地域に親しまれる大学づくりを目指して活動を続けていきます。



●次回の上映予定
7月8日（水）16:40～
『鳥も空も飛ぶ』
会場：県立大学 講義研究棟1F 大講義室1
●上映しました●
4月14日 『アヒルと鴨のコインロッカー』
5月11日 『ルイーサ』

VOLUNTEER

参加しました！高校生学習サポート☆
6月16日に島根県立島根中央高校にて、期末テスト対策の学習サポートを行いました。この事業は今年度3回予定されており、1回目となる今回は2～3名の高校生に対し大学生1名がついて、マンツーマン方式で指導を行いました。

ボランティア情報

平岡都さんの御霊を慰めるとともに、彼女が抱いた「夢」を引き継ぎ一人ひとりが自らの「夢」の実現を誓うために平成22年度に設置した花壇「Garden of Hope」の手入れを行います。
◆日時：6月26日（水）12時30分～13時
◆場所：県立大学浜田キャンパス 講義前コミュニケーションラウンジ
※動きやすい服装で、手ぬぐい・道具をご持参いただけると助かります。

災害ボランティア隊 学生が伝える、被災地の今



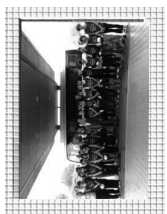
私たちは、5月22日から26日まで、宮城県南三陸町に行ってきました。

到着の日から、活動が始まりました。私たちの仕事は、農業支援でした。もとは畑だったらしい場所で、細かいガラスなどを拾う作業から始まり、鎌で草を刈ったり、大きな瓦礫を取り除いたり、一言で農業支援と言っても、その活動は様々でした。

被災地では、多くの人がプレハブの仮設店舗で笑顔で前向きに商売をしています。ストレスから、アルコール中毒者や自殺者が増えているそうです。

現地のボランティアセンターの方は、「東北のものを売ってください。島根から被災地は遠いですが、直接足を運んでくださることは、とても嬉しいです。でも、しょっちゅう来られるところではありません。だから、被災地とつながれたホタテやわかめを、買ってください。」とおっしゃってられました。これなら、島根でもできます。

被災地のものを買うことで、現地の経済を回すことにつながり、復興にもつながっていくと思います。
私はこれからも、島根からできることを考え、実践していきたいです。
(第1クール リーダー 3回生藤本みのり)



◆災害ボランティア隊◆

第1クール
【場所】 宮城県南三陸町
【日時】 5月22日 23日 現地到着
5月23日～25日 活動
5月25日 現地出発 26日 到着

第2クール
【場所】 宮城県南三陸町
【日時】 5月29日 30日 現地到着
5月30日～6月1日 活動
6月1日 現地出発 2日 到着

オロリン タイムズ



秋になつて涼しい気候となりました。私の家は江津市桜江町です。先日のお雨がありました。朝の嵐は無事のように先白私の家の台所に黒いスズメバチが入ってきました。大学も自然豊かな山の上で多岐のスズメバチには気をつけましょう。

秋口に
窓から入る
スズメバチ
まっきーの一句

CONTENTS

- 1 サークル紹介 ~舞濱社中~
- 2 学生インタビュー*学長室へ行ってみました。
- 3 大学事務局~アドミッション室より~
ボランティア活動
- 4 公開講座スケジュール
- 5 第14回 海遊祭
- 6 地域の人と盛り上がる、県大の運動会~一期一会~

サークル紹介~舞濱社中~

地域の伝統文化を楽しむ 舞濱社中

こんにちは！石見神楽サークル、舞濱社中です。私たちは今、海遊祭の本番に向けて日々練習しています。部員は、4回生4人、3回生4人、1回生1人で、9人のうち5人が石見神楽経験初心者です。練習では、石見神楽宇野保存会の方に来ていただき、一から教えていただいています。七月末に大学カフェテリアで発表会をしましたが、みんな前で舞うのは初めてで、ものすごく緊張しましたが、楽しんですることができました。先日お老人ホームにて海遊祭で行う演目と同じものをやりました。人前で舞うのは練習とは全く違うのでとてもよい経験になりました。これからは、本番に向け、部員一丸となつていい舞ができるように頑張ります！（文責： ）



学生インタビュー*学長室へ行ってみました。

夢は希望となり目標となる！ 浜田で暮らし、地域を愛する 県内・外出身の学生2人が学長へインタビュー！



学長：本田 直一
宮城県出身
2009年3月まで島根大学学長
同年4月から島根県立大学学長

世界を見据えた生き方を

十川：大学生にこれから積極的に出てほしい分野はありますか？

学長：グローバルな人間になって欲しいですね。何をしてもどんな仕事に就いても常に世界との繋がりを意識して、世界を見据えて生きて欲しいと思います。

学生の自分は学びである

青木：ご自身の今までの経験も踏まえて学長先生が考える大学4年間の意味とは何か教えてください。

学長：やはり、この時期にしか学べないことを学ぶのが学生の本职工作だと思います。学業を頑張るのももちろんのこと、色々な経験を積み自分は今後どうしていきたいか自分の将来を考えるのも身につけて欲しいと思います。さらには、人との繋がりを広ぐ様々な交流を通してその輪を広げていくことが学生がやるべきことであり、貴重な大学生活4年間において意味を持つものであると思います。



夢を叶える法則！？

十川：学長先生が学生に対して期待することはありますか？

学長：できるだけ1年生の時から夢を持って欲しいと思います。それは何度変わってもいいんですが、常に夢を持って今何をするかを考えて生活して欲しいなと思います。夢を、話めていくと希望になり、希望を話めていくと達成すべき目標が見えてくると思うんですね。このように話めて考えていくことで実現性が高まっていくのでは無いのでしょうか。



常に双方向であつて欲しい

青木：島根県立大学は地域との関わりがとて密接だと思つていますが、市民の方に対して何か要望はありますか？

学長：市民の方には大学生を支える役目を担つて欲しいと思つています。地域のために大学生と市民がお互いに次世代を考えて行動し、互いの在り方ですね。

地元に戻つてからもできることをやって欲しい

十川：就職などで都会に出る若者の地元離れが進んでいます。今後学生はどのように島根に貢献していけばいいと考えますか？

~インタビューを終えて~
「常に健康でいること、それが学長としての仕事だと思つた。そうおっしゃった、いきいきとした表情がトレードマの学長先生！健康にはとても気を使つていて、歩数計を持ち歩いたり、断食者さんで表彰されたりするそうです。好きな女優さんは今も昔も変わらず八千草薫さん！とても気さくに話してくださり良い緊張感の中インタビューを遂行することができました。ありがとうございました！



Profile (左から)

十川ひろろマン 徳島県出身、3年生、
青木美奈子マン 島根県出身、1年生、

島根県西部地域の着ぐるみの歓迎から始まったオープンキャンパス。第1回は8月3日(土)、第2回は9月14日(土)に開催し、全国各地からそれぞれ190名、161名の合計351名の高校生、保護者のみなさんにご来場され、盛大に開催することができました。

当日は、多くの学生にボランティアスタンプとしてご協力いただき、キャンパスツアーや学生相談、地連caféにおける地域活動の紹介など、大活躍してくれました。またランチ交流会では、ダンス部や大道芸部、そして燈籠がパフォーマンスを披露し、大変盛り上がりました。

一方、先生方にも第1回は3講座、第2回は2講座の合計5講座の模擬講義や、メディアセンターLLSRにおける語学体験プログラムなど、本学の教育内容を広くPRしていただきました。

このように、学生と教職員が一丸となり「島根県立大学」の生の姿を参加者にお見せすることができました。参加者からのアンケートからも、ほとんどの方が「学生の方が生き生きしていた」、「活気がある大学のイメージをもった」「アットホームな感じであり、親近感がある」等、本学への好印象を持たれた様子が見て取れ、大成功に終わることができました。

最後にオープンキャンパスの実施にあたり、ご協力いただいた教職員並びに学生ボランティア、学生団体の皆様にお礼申し上げます。本当にありがとうございます。(文責：アドミッシン室長 的場好信)



ボランティア活動

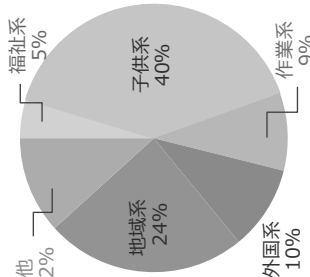
日本列島各地で異常気象による台風や大雨、竜巻による被害が出ています。ここ島根県内でも7月から8月にかけての大雨により、被害に遭われた方にお見舞い申し上げます。

県立大学では島根県社会福祉協議会からの協力依頼を受けて、学生に災害ボランティア募集をしましたところ約80名の学生と教職員がボランティア活動に従事しました。ちょうど夏休み中だったこともあり、参加者が少ないことが想定されましたが、多くの学生が協力を申し出てくれました。下の写真は、萩・津和野と浜田・江津地域での活動の様子です。



皆様からいただきました『島根県立大学 未来ゆめ基金(寄附金)』よりボランティア支援グッズを購入させていただきました。

Q: どんなボランティアをやってみたいですか?



- 子供系 … 託児、読み聞かせ、学習支援、交流
- 地域系 … イベント、交流
- 他 … 被災地支援、募金活動 等
- 外国系 … 日本語支援、チャーター作業系 … 草刈り、清掃活動
- 福祉系 … 高齢者、障がい者

★アジアの中の日本学★

- ① 稲の道 (長江文明) から
9/25 (水) 18:15~19:45
- ② 南方 (インドネシア) から
10/2 (水) 18:15~19:45
- ③ 延辺 (中国吉林省朝鮮族自治州) から
10/9 (水) 18:15~19:45

講師: 飯田泰三 (浜田キャンパス教授)

今年度の公開講座も残りわずかとなりました。キャンパスサポーターのみなさまは会員証をご提示いただくだけで受付なしで参加していただけます。予約なしで飛び込み参加も出来ます。みなさまのご聴講をお待ちしています。



★石見に生きる～石見の元氣人が語る～★

- 連携しながらワクワクするまちづくりを目指して
講師: 藤田貴子氏 (NPO 法人てごねっと石見事務局長)
10/16 (水) 18:15~19:45
- ふるさと (地方) を変えるのは君達だ!!
講師: 横田宇氏 (産業人材育成コーディネーター)
11/6 (水) 18:15~19:45
- 住み慣れた地域で暮らし続けるために!!
講師: 竹本弘子氏 (浜田市 高齢障がい課 高齢者包括支援係)
12/11 (水) 18:15~19:45



6/29開催「石見の知らない輝き」の様子
講師: 中村俊郎氏 (中村ブレイズ代表取締役社長)

★社会を学ぶ★

- インド・バンガロールにおける企業の展開～
島根県立大学海外企業研修の経験から～
講師: 久保田典男 (浜田キャンパス准教授)
10/23 (水) 18:15~19:45
- 都市と地方を結ぶ「災害避難者保険」
講師: 村井洋 (浜田キャンパス教授)
11/20 (水) 18:15~19:45

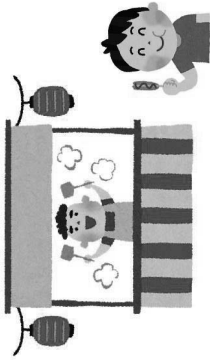
★言語を学ぶ★

- 内容言語統合型学習の紹介
講師: 小林明子 (浜田キャンパス講師)
11/27 (水) 18:15~19:45
- ヨーロッパでの内容言語統合型学習
講師: ケイン・エリナ・アン (浜田キャンパス准教授)
12/4 (水) 18:15~19:45





日時：平成25年10月13日(日)
/10月14日(月・祝)



鳥根県立大学では様々な活動を
通して地域の方々と交流を深めて
います。そんな中で、私たちは県
立大学の学園祭である「海遊祭」
を通して、地域の方々と学生を結
ぶ役割を担っています。10月13
日(日)、14日(月・祝)に行わ
れる海遊祭は今年で14回目を迎
え、回数を重ねるごとに地域との
交流の機会も増えています。

それでは、第14回海遊祭の内容
をテーマ、企画、模擬店の順にご
説明します。

今年のテーマは「海新撃」。海新
撃の「海」とは海遊祭の「海」、「新」
とはご来場された方々の印象に残
るような新しい海遊祭を作るとい
う意味を込め、「撃」はご来場され
た方々に衝撃を与えるような海遊
祭を作るという意味を込めました。
今年はこのテーマを掲げ海遊祭を
作り上げていきます。

地域の皆さんが参加できる企画
では「はまけん。～浜っ子vs県大
生～」という企画を考えておりま
す。これは地域の方々と県大生と
でカラオケ、クイズ、そしてだい

してもらい、地域の特産品を販売
していただきます。今年は新しく
「模擬店グランプリ」を行い、最
も素晴らしい模擬店を決めた
と思います。また、体育館では
地域の方々によるフリーマーケット
を行います。今年は今までの最
大の26団体に参加していただ
きます。

海遊祭が成功するよう実行委員
一同精一杯頑張ります。ぜひ当日
大学へご来場ください。(文責：第
14回海遊祭実行委員会 上見剛太)

ご不明な点がございましたら、
お気軽にご連絡ください
090-8062-3182 (実行委員会)



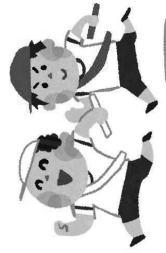
みなさんこんにちは。第10回鳥根県立大学運動会開催実行委員会です。今年も県立大学運動会を開催いた
します。今年の運動会のテーマは「一期一会～忘れられない10周年～」です。今年で運動会も10周年
となり、節目の運動会となります。このテーマには運動会が第一回運動会からの

「運動会が県立大生と市民の皆様の出会いの場となれるように」

というテーマをもう一度見つめ直し再確認し頑張ろうという思いが込められています。
また(かける)には10周年に懸ける、全力で駆ける、などの意味が込められており参加者の皆様だけでな
く実行委員会にとっても忘れられることのできない運動会にしていきたいと考えています。
運動が得意な方も得意でない方も、大人も子供も楽しめるような運動会となっています。このテーマを胸に
今年も、正々堂々と戦いよい汗を流しましょう！運動会には市民の皆様やお子様のエントリー枠もございます
ので、皆様のご参加をお待ちしております。(文責：第10回運動会実行委員長 景山拓也)



開催日：H25年10月5日(土)
エントリー：H25年10月4日(金)締切
参加費：500円(軽装代・参加賞代など)
【お問い合わせ先】
かげやまたくや
景山拓也
Tel. 090-3747-5153



お知らせ

キャンパスボランティアについて

浜田キャンパスでは毎月26日に学生の安心確保の思いを込めた花壇「Garden of Hope」の清掃および植え替え作業を、学生・教職員で行っています。そこで一緒に活動していただけるサポーターさんはご協力をお願いいたします。

※tiki@admin.u-shimane.ac.jp

編集：横野康一
平成25年10月発行
鳥根県立大学 地域連携推進センター 浜田キャンパス
〒697-0016 浜田市野原町 2433-2

2) 地域に関する教育・研究活動

○地域振興に関する提言を含む優秀卒業研究・論文発表会の取り組み

本発表会は、平成 15 年の第 1 回目から数えて今回は第 11 回目となる。今年はゼミ担当指導教員から学部の卒業研究 11 点、大学院の修士論文 1 点の計 12 点の推薦があり、地域連携推進センターの教員が以下の評価基準の下、査読評価を行った。

評価基準：

1. 「地域振興に関する提言を含む」ものという視点からみた主題の適切さ
2. 地域社会に関わる具体的分析や政策分析を含んでいるか
3. 研究・論文としての水準が標準以上のものであるかどうか
4. 記述・論述の仕方の適切性、根拠となる資料の明示等

今回表彰された研究は、観光資源の活用に関する研究、浜田市の都市計画に関する研究、公共交通に関する研究、地域の疎開保険制度に関する研究など、現代社会と地域に関わる問題が取り上げられた。これらは、総合政策学部の教育方針および本学の大学憲章に沿ったものであった。卒業研究は執筆した学生自身の努力の賜物であると同時に、浜田市をはじめとする地域の皆さまの協力が不可欠である。実際、発表会の最後に受賞者全員からコメントや感想を寄せていただいたところ、同級生や指導教員ばかりでなく、地域の方々への感謝の言葉が多く聞かれた。地域に根ざす大学となるよう日々努めている本学としては、地域振興に関する提言を含む優秀卒業研究・論文を表彰し、本発表会を開催することの意義を改めて再確認する機会となった。今年、文部科学省から「地（知）の拠点整備事業」の採択をいただいた本学にとって、本発表会は次回以降、ますます重要度を高めることが予想される。

- ・発表会の開催日時 平成 26 年 2 月 14 日（金） 9:30～12:00
- ・開催場所 島根県立大学浜田キャンパス 講義研究棟大講義室 1

口頭発表者：

発表 1	疎開保険制度の拡充と適用-智頭町と比べる佐用町での制度適用-	木戸口夏美さん
発表 2	石見銀山の観光資源の保存と活用	櫛本 望愛さん
発表 3	隠岐諸島の離島航路の維持方策と地域振興	齋藤 創志さん
発表 4	古地図から導く浜田の都市計画の推移	陶山 祥 さん
発表 5	賢く残せ 石見の公共交通～石見新交通スタイルの提案～	三賀森貴弘さん

ポスター発表者：

浜田漁港の振興に関する考察-特定第3種漁港間の比較-	小椋 陽介さん
疎開保険制度の拡充と適用-智頭町と比べる佐用町での制度適用-	木戸口夏美さん
石見銀山の観光資源の保存と活用	櫛本 望愛さん
隠岐諸島の離島航路の維持方策と地域振興	齋藤 創志さん
「古地図から導く浜田の都市計画の推移」	陶山 祥 さん
島根県浜田市におけるコンパクトシティ化の是非	高橋 克弘さん
賢く残せ 石見の公共交通～石見新交通スタイルの提案～	三賀森貴弘さん
江津市における地域活性化について	村岡 祥子さん
「島根県における買い物支援に関する考察-益田圏域の買い物支援を中心に-」	吉田 理紗さん

受賞者：

浜田市長賞：三賀森貴弘さん

COC 特別賞（今年度新設）：三賀森貴弘さん

奨励賞：小椋陽介さん、木戸口夏美さん、櫛本望愛さん、河野美里さん、齋藤創志さん、陶山祥さん、高橋克弘さん、三賀森貴弘さん、三宅登子さん、村岡祥子さん、吉田理紗さん、（五十音順 学部生）ボガツキー アレクサンドル（大学院生）



○浜田市と島根県立大学の共同研究成果報告会（平成 26 年 2 月 14 日開催）

本学では「浜田市との連携協力に関する協定書」に基づき、地域振興など浜田市の施策に有用なテーマについて浜田市と共同で研究をしております。

本年度においては、以下の 2 件の研究テーマで実施しました。

2 月 14 日（金）、島根県立大学大講義室 1 にて平成 25 年度研究成果報告会が開催され、市民や行政関係者など 101 名の参加がありました。

1. 「水産加工業活性化に関する調査 ～浜田市水産加工業者の事業拡大に向けて～」

久保田典男 准教授

2. 「港町「浜田」を振興する産業政策 ―特定第三種漁港を中心として―」

光延忠彦 教授



研究成果報告会の様子



発表は共同研究に携わったゼミ生により行われました。

○益田市と島根県立大学の共同研究成果報告会（平成 26 年 2 月 17 日開催）

5 月 27 日(月)、益田市と島根県立大学は、相互協力関係を一層深め地域社会の発展に寄与することを目的として包括連携協定を締結しました。

自治体との包括連携協定は既に浜田市、出雲市、松江市と締結していますが、キャンパス所在地以外の自治体との協定締結は初めてとなります。

本年度は、この協定に基づき以下の 4 テーマにて共同研究事業を実施しました。

2 月 17 日(月)、益田市立市民学習センターにて平成 25 年度研究成果報告会が開催され、133 名の参加がありました。

1. 萩・石見空港に対して地域が期待する要素と、それに対応した空港活用のあり方

西藤真一 講師

2. 温泉宿泊施設を中核とした産業振興とまちづくりに関する調査

～地域内連携による滞在型観光地を目指して～

久保田典男 准教授

3. 益田市における経験型観光プランの研究

金野和弘 准教授

4. ひきみボランティア制度の持続的発展と地域運営体制構築に関する調査・研究

林 秀司 教授

藤山 浩 連携大学院教授



研究成果報告会の様子



包括連携協定の調印式の様子
右から、山本浩章益田市長、
本田雄一理事長

○「地方航空ネットワークの維持と地域の役割を考えるシンポジウム」の開催

本学と日本大学産業経営研究所、全日本空輸株式会社、島根県、益田市、萩・石見空港利用拡大促進協議会は共同で2013年12月13日に「地方航空ネットワークの維持と地域の役割を考えるシンポジウム」を共催にて開催し、計152名の参加を得た。本シンポの概要は以下に示すとおりである。

2013年6月、第183回国会で「民間の能力を活用した国管理空港等の運営等に関する法律」、通称「民活空港運営法」が成立した。かねてより、滑走路等の基本施設と空港ビルの運営について、民間の能力を生かした一体運営を行う「空港経営改革」の重要性が指摘されてきたが、それに向けた第一歩である。

今回の法律の成立を受け、現在、国が管理する地方空港では、仙台空港をはじめとしていくつかの空港において公共施設等運営権制度を活用した新たな空港運営の方策が模索されているが、今後は地方自治体が管理する空港においてもそうした検討が進み、利用者にとって利便性の高い空港経営のあり方が具体化されるだろう。

一方、特に地方空港においては利用者獲得の面で大きな課題が残されており、いずれの空港も利用促進に注力しているところである。しかし、今後の人口減引き合いに出すまでもなく、LCCも含めた競争の進展や国内航空利用者数の推移からみて、地方航空ネットワークの維持はますます厳しさを増すものと予想される。

これまで地方航空ネットワークは、国による政策的配慮や航空会社の自助努力によって維持されてきたが、激化するグローバル市場で競争に直面する航空会社にとっては自身の経営体力の強化が喫緊の課題であり、これまでのような自助努力に期待することはできない。一方で、国としても国民負担の拡大を回避しなければならず、国による政策的配慮にも限界がある。

つまり、今後はますます最大のステークホルダーとなる地域との協働が求められる。空港は地域振興のひとつのツールである。その際、それぞれの地方空港の置かれる環境は地域によって大きく異なるのであって、各地域に適した活用策をそれぞれが模索すべきであろう。

2013年には「政策コンテスト」という羽田発着枠の新しい配分方法により、地元と航空会社が協力して便を維持していこうという新しい試みが行われ、石見空港はこれまで1日1便であった羽田便が2便に増えることになった。この枠の獲得はあくまでも第一歩であり、今後はこの2便の維持が地元の課題となる。

このシンポジウムの目的は、航空ネットワークの維持にむけた模索考え方、地方空港や

それにかかわるステークホルダーはどのようにかかわるべきか考えるきっかけづくりを提供することであった。

当日は、行政、経済界を中心に計 152 名の方に参加していただくとともに、福島空港の活性化に取り組む学識者・経済界・行政の方々にもお越しいただきシンポジウム終了後も熱心な意見交換がなされた。

空港はあくまで旅客にとっては通過地点のひとつである。利用促進策は出発地と目的地となる両空港の地道な協力があってこそ効果を発揮するものである。このシンポジウムとおしてご縁を得た両者の取り組みが今後に生かしていただきたいと願っている。

また、今回のシンポジウムを開催するにあたって、発案からご登壇まで熱心にご協力をいただいた加藤一誠教授（日本大学）をはじめ、多忙を極めるなかで趣旨にご賛同いただき、ご登壇を快諾してくださった小巻泰之教授（日本大学）、田村亨教授（北海道大学大学院）、富田光欧部長（全日本空輸株式会社）、平谷伸吾副市長（益田市）に、厚くお礼申し上げます。

さらに、福島空港関係者との情報・意見交換の実現に導いてくださった小林茂常勤監査役（北海道糖業株式会社）、引頭雄一教授（関西外国語大学）、そして長谷部一雄会頭（須賀川商工会議所）をはじめとする福島空港関係の方々、シンポジウム終了まで熱心に傾聴していただいたすべての参加者にこの場を借りてお礼申し上げます。



○受託研究プロジェクト「高速道路整備と救急医療活動の関係について」の実施

- 委託元：山陰自動車道建設促進期成同盟会（事務局：江津市）
- 受託：島根県立大学総合政策学部西藤ゼミ
- 実施期間：2013年5月～2014年3月

2013年度、山陰自動車道建設促進期成同盟会の事務局を務める江津市から上記プロジェクトを受託しゼミ生による研究活動を実施した。以下は、その趣旨と概要である。

安全安心なまちづくりは、地域にとって重要な政策課題である。高速道路整備は救急医療活動の円滑な遂行などに寄与し、その目標を達成するうえで重要な役割を担う。島根県ではNEXCO西日本と協力することで県民の安全と地域社会の活性化、高速道路利用者利便性の向上促進を図るために相互協力に関する協定を結んでいる。NEXCO西日本は島根県と同様に各県と災害時にも対応し双方の資源を有効に活用するために地域防災もあわせて地元自治体に協力するために包括的相互協力協定を結んでいる。

ところで、高速道路整備が救急医療活動にどのように効果をもたらすかという関係について調べた過去の先行研究を整理すると、①高速道路整備による医療活動に対する効果がどの程度であったか計測したものがいくつか存在する。また、②高速道路整備によって、救急医療活動のこういった側面に効果をもたらすのか検証した研究もある。

本研究では、特に後者②に着目し、先行研究の分析手法（数量化Ⅱ類）を踏襲し、島根県内の消防本部に所属する救急隊員を調査対象としてアンケートの配布を行い、その回収結果を分析した。アンケートでは、現在の緊急医療体制に対する満足度をはじめ、高速道路整備によって得られると考えられるプラスの効果をいくつか設定し、それに対してどの程度効果があると考えられるのか、要因ごとに評価をしてもらった。具体的には、患者への振動、騒音、応急処置時間、車両運転、道路状況、渋滞回避といった要素である。そして、高速道路整備が医療活動にどの程度有用であるのか、また救急医療活動のどのような要素が高速道路整備によって改善すると期待されるのか分析した。

本調査を実施するにあたって、島根県土木部高速道路推進課におけるヒアリングでは、業務多忙中にもかかわらず、長時間にわたって調査を受け入れていただけた。また、江津市建設部土木建設課にはアンケート調査の実施に際して配布と回収をお手伝いいただくなど、多大なご協力をいただいた。ここに記し、厚くお礼申しあげる。

○2013 年度北海道学生研究会 (SCAN) への参加

- 開催日時：2013 年 11 月 30 日 (土)
- 開催場所：釧路公立大学
- 参加ゼミ：西藤ゼミ (総合政策学部)

本年度、総合政策学部の西藤ゼミは、北海道学生研究会研究発表会に初めて参加する機会を得た。本年度の研究発表会は、道内 8 大学 23 班のほか、西藤ゼミ 2 班、大阪経済大学経済学部上宮ゼミ 2 班を加えた計 10 大学 25 班の報告会であった。

本年度の大会テーマは「北海道の魅力～発見と活用～」であり、ゼミで学生が研究を進めているテーマを 2 件報告した。他大学の学生の研究レベルの高さには及ばなかったことは残念であるが、それを糧に学生自らの研鑽を積んでもらいたいと願っている。



(図)SCAN 開催案内チラシ

(表) 研究発表会報告テーマ一覧

【道内大学】8大学・23班		
大学名	班	報告タイトル
北見工業大学	産学官連携価値創造研究室	北見地域における学生による社会貢献の可能性に関する研究
	釧路公立大学	下山ゼミ A
	下山ゼミ B	旅行先選択行動の実証分析 ～根室地域における研究旅行の可能性～
	神野ゼミ	北海道の自然エネルギー利用による地域の持続可能な発展の可能性
	皆月ゼミ	釧路管内における小児ワクチン接種の現状と接種率向上のための課題
公立はこだて未来大学	高度ICT海洋系	消費者に北海道の旬を伝えるタッチポイントデザイン
札幌大学	武者ゼミ A	プロスポーツチームによる社会貢献の地域活性化
	武者ゼミ B	北海道のグルメによる経済効果
	武者ゼミ C	北海道の持つ可能性と今後の課題 ～自然と経済からの考察～
札幌学院大学	中山ゼミ	ノードとリンクからみる北海道観光市場の掘り起こし
	加藤ゼミ A	札幌における文化芸術政策の現状と未来
	加藤ゼミ B	江別市における子育て支援政策の現状と課題 ～子育てしやすい街づくりへ～
	佐々木ゼミ	音更町における大規模農業の展開と地域づくりの方向性
北星学園大学	平澤ゼミ	森林を利用したまちづくり
北海学園大学	野原ゼミ	エコアイランドリニューアル構想
	大貝ゼミ A	十勝における6次産業化の現状と方向性
	大貝ゼミ B	十勝地域における観光振興の課題
	宮島ゼミ A	「純」道産スイーツはなぜ「甘い」のか？
	宮島ゼミ B	道産焼酎はおじさんだけのものじゃない！！ ～地域ブランドを活用した地域活性化戦略を考える～
	宮島ゼミ C	タイ人が北海道にほほえむ理由 ～東南アジア人の観光客を呼び込む戦略～
	中園ゼミ A	若者自立支援ネットワーク・旭川市における就労支援の実態
	中園ゼミ B	男性にとつての男女共同参画
北海道教育大学釧路校	平岡ゼミ	私たちが提案する ～みんなをHAPPYにする サスティナブルツーリズム in 浜中
【道外大学】2大学・4班		
大学名	班	報告タイトル
大阪経済大学	上宮ゼミ A	言葉の落とし穴～フレーミング効果～
	上宮ゼミ B	「おひとり様XX個まで」が及ぼす影響
島根県立大学	西藤ゼミ A	高速道路整備と救急医療活動の関係について
	西藤ゼミ B	交通選択と空港活用～萩・石見空港を例に～

(資料) SCAN ホームページから引用 (<http://scan946.web.fc2.com/>)

山陰地域フィールド体験学習——弥栄の農林業と暮らし

9月14日（土）から17日（火）まで、「山陰地域フィールド体験学習——弥栄の農林業と暮らし」の授業を、浜田市弥栄町において実施した。この授業の活動には、弥栄町で実践されている地元のみなさんが地域を案内する「弥栄ええとこ歩き」というプログラムを活用させていただいた。授業に参加した学生は、島根県立大学総合政策学部から7名、島根県立大学短期大学部から3名、島根大学から3名、鳥取短期大学から4名であった。

○ 林業のプロと行く間伐体験～森は学び舎～

授業は14日（土）の午後から始め、最初のプログラムとして、石央森林組合にご協力いただき、浜田市弥栄笠松市民の森において間伐体験を行った。

○ ほんき DE 米づくりコース

15日（日）には、小坂農業生産組合と株式会社ほんき村にご協力いただき、コンバインを使った現代の稲刈り体験、ライスセンターや精米プラントの見学、米粉ピザづくり体験などを行った。意見交換会では、「地元学」の実践をきっかけにさまざまな活動と交流が生まれている小坂集落の活動について話をうかがうことができた。

○ 昔の稲刈り&天空の集落めぐり

16日（月・祝）の活動は、2班に分かれて行った。小熊集落を訪問した班は、午前中に、鎌やバインダーを使った稲刈りと稲架掛けなどを体験した。昼食には、おにぎり、煮しめなどの地元のみなさん心づくしの料理をいただいた。午後は、見晴し台や蛍ポイントなど、「集落めぐり」を行い、集落おこしについて意見交換を行った。

○ 新鮮！旬菜☆田舎体験コース

16日（月・祝）に仲三集落を訪問した班は、午前中に、産直市の見学、地生えキュウリの収穫体験、イノシシの被害にあった田の見学などを行った。地元食材を使った弁当と手作りのスイーツをいただきながらの昼食交流会の後、「プロジェクト・ワイルド」のアクティビティを通して、環境の変化とイノシシの生息数の変化について考えた。

○ 発表会

最終日の17日（火）は、学習成果の発表会を行った。3日間の体験で学んだこと、発見した地域の課題や魅力、自分たちなりに考えた課題解決や魅力活用の方法について、2つの班ごとに発表してもらった。その中では、弥栄町の人々の暖かさやつながりの強さが語られ、聴いていただいた地元ステークホルダーの方々にも、受け入れ側の伝えたかったことをしっかり受け止めてもらったと、評価していただいた。



▲活動のようす（於 小熊集落）

（林 秀司）

○蔚山大学校との合同ゼミフィールドワーク

本学では毎年韓国蔚山大学校の留学生の研修を受け入れており、平成 25 年度も 20 名の学生が約 1 ヶ月間本学に滞在した。今回は蔚山大学校の学生と田中ゼミ 3 年生（13 名）の共同実施にてゼミを開催した。なお日本語教育ご担当である小林先生との共同講義形式をとった。

プログラムの目的

「地域を知る」「世界を知る」という 2 テーマに分かれて、調査テーマを設定し、日韓の類似点や相違点を調べることを目的とした。調査過程では、フィールド学習を通じ、実際の地域での取り組みや今後の展開などについて聞き取り調査を行ったうえで、日本人学生と蔚山大学生が両国の視点から議論し、考察を深めることとした。

実施概要

このプログラムは、90 分講義およそ 18 コマを、グループ作業、ヒアリング、報告内容の作成、発表、のステップで、日韓混合の 4 グループに分かれてプログラムを進めていった。ヒアリング調査を実施し、チームのテーマごとに日韓比較を試みた。

活動スケジュール

日程	時刻	事項
6月26日(水) 講義 グループ作業	2限 10:50-12:20	・講義 ・【田中ゼミ発表】島根⇒6次産業化⇒カフェ⇒マツダ⇒現代
	3限 13:20-15:00	・自己紹介とグループ分け ・調査テーマ決定
	5限 16:40-18:10	・質問事項決定
7月1日(月) 風のえんがわ ヒアリング	12:30-13:30	・店主より事業概要説明 ・ヒアリング
	13:30-14:00	周辺散策
7月3日(水) マツダ工場見学 ヒアリング	10:30-11:30	工場見学 ※ヒアリング回答は後日得た
7月5日(金) 7月8日(月) 7月9日(火)	5限 16:40-18:10	・各チームで発表報告資料を作成 ・進捗の報告
	6限 18:20-19:50	
	7月17日(水)	2限 10:50-12:20 3限 13:20-15:00
7月19日(金)	10:00-12:00	成果発表会

フィールド学習

フィールド学習の第一回は、江津にある古民家カフェでのヒアリングを実施した。島根県の現状および課題を理解し、その上で地域での取り組みについて実際の経営者のお話をうかがい、両国の事例と比較し、6次産業化の特徴について議論しながら考えることとした。第二回は広島マツダ工場見学およびそこのヒアリングを行った。マツダの事業活動の特徴を理解するために、ものづくりの現場を見学し、その上で現代自動車グループと比較し、2社の事業活動の特徴について他の学生と議論しながら考えることを目的とした。

以上のフィールド学習を経て、各グループの発表テーマは以下ようになった。

- ・6次産業化（日本）チーム 「私たちの考える6次産業のビジョン」
- ・6次産業化（韓国）チーム 「韓国の地域資源の活用 -特産品の梨と廃校の事例-」
- ・マツダチーム 「自動車会社の環境への取り組み～マツダと現代自動車のケース～」
- ・現代自動車チーム 「現代チーム～現代自動車の社会貢献～」

各グループで回答をまとめる作業を行い、調査結果と分析をメンバーで分担して作業を進め、結論を話しあった。また、講義で作成した資料は学生が、Facebookへアップロードし、日本語表現についてと、専門内容について、それぞれ教員が添削指導を行った。

成果発表会

最終報告である成果発表会では、1チームの発表時間 30分（発表：20分 コメント・質疑応答：10分）として、全員が発表を分担した。フロアからの日本語の質問に対してもおおむね応答できた。

学習の効果

両国の学生にとって身近な問題も、状況を把握していない相手に伝えるためには、言語の定義や概念を正確に理解していなければ、意思疎通や議論の基礎が成立しないことを感じていたようである。しかし、共通テーマで両国の事例をそれぞれ出身国の学生と直接議論しながら比較することで、対象の理解、分析が深まった点は効果的な学習であった。



3) 地域から／地域への応援・情報発信

○島根県立大学浜田キャンパス公開講座等の開催

島根県立大学では、地域に開かれた大学として地域の方々の知的好奇心に応えるため、毎年度公開講座等を開催している。

平成 25 年度公開講座 受講者数一覧

No.	テーマ カテゴリ	講師	所属	講座名	開催日	受講 者数	平均受 講者数
1	石見に 生きる ～石見 の元が 話す	中村 俊郎	中村ブレイス株式会 社 代表取締役社長	石見の限りない輝き	6月29日	70	28.2
2		岡田 浄	浜田市弥栄支所 自 治振興課	地域に暮らす	7月31日	18	
3		藤田 貴子	NPO法人でごねっ と石見 事務局長	連携しながらワクワクするまちづく りを目指して	10月16日	22	
4		横田 学	産業人材育成コーデ ィネーター	ふるさと(地方)を変えるのは君達 だ!!	11月6日	17	
5		竹本 弘子	浜田市 高齢障がい課 高齢者包括支援係	住み慣れた地域で暮らし続けるた めに!!	12月11日	14	
6	未来を 創造す る	鎌田 恭幸	鎌倉投信株式会 社 代表取締役社長	「一人ひとりの小さな一歩が未来を 拓く」～一人ひとりにできるリーダ ーシップとは何かについて考える～	5月11日	22	16.3
7		三澤 誠	有限会社エヌ・イー・ワ ークス 代表取締役社長	地域に現金収入を得る手段を創出し たい	5月18日	17	
8		桧谷 進	阪神食品株式会社グル ープ総本社 代表取締役	夢を創造して地球環境に貢献する	7月13日	10	
9	言語を 学ぶ	小林 明子	浜田キャンパス	内容言語統合型学習の紹介	11月27日	12	11.5
10		ケイン・エレナ・アン	浜田キャンパス	ヨーロッパでの内容言語統合型学習	12月4日	11	
11	世界を 旅する	金 恩志	浜田市国際交流員	韓国を旅する	9月25日	37	28.3
12		タチアナ・クラビヴィナ	島根県国際交流員	ロシアを旅する	7月17日	21	
13		ドナルド・マルヤマ	浜田市国際交流員	アメリカを旅する	7月24日	29	
14		王 恒	浜田市国際交流員	中国を旅する	10月9日	26	
15	アジ アの中 の日本 学	飯田 泰三	浜田キャンパス	アジアの中の日本学① 稲の道(長江 文明)から	9月25日	12	12.0
16		飯田 泰三	浜田キャンパス	アジアの中の日本学② 南方(インド ネシア)から	10月2日	11	
17		飯田 泰三	浜田キャンパス	アジアの中の日本学③ 延辺(中国吉 林省朝鮮族自治州)から	10月9日	13	
18	社会を 学ぶ	松田 善臣	浜田キャンパス	意外と知らない? 自転車のルー ル・マナー	5月25日	18	18.0
19		西藤 真一	浜田キャンパス	意外と知らない? 航空・空港のすが た			
20		マニング・クレイグ	浜田キャンパス	県大生による海外でのサービス・ラー ニング	5月29日	16	
21		福原 裕二	浜田キャンパス	「北朝鮮」について考えてみよう	6月12日	34	
22		村井 洋	浜田キャンパス	「政治家よ言葉を磨け—レトリカ(弁 論術)について」	6月26日	16	
23		井上 厚史	浜田キャンパス	石見地方の歴史遺産をどう観光に結 びつけるか—石見銀山と石州左官—	7月17日	8	
24		久保田 典男	浜田キャンパス	インド・バンガロールにおける企業 の展開～島根県立大学海外企業研修 の経験から	10月23日	25	
25		村井 洋	浜田キャンパス	都市と地方を結ぶ「災害非難者保険」	11月20日	9	

受講者数 計 488 名 (1 講座あたり 19.5 名)

平成 25 年度学生研究発表会 参加者数一覧

No.	ゼミ	所属	テーマ	開催日	参加 者数	平均参 加者数
1	田中 恭子ゼミ	浜田キャンパス	6次産業化	12月14日	32	32.0
2	豊田 知世ゼミ	浜田キャンパス	環境			

平成 25 年度は 25 回の講座が開講され、延べ 488 名の参加者を得た。前年の参加者は 28 回、898 人であったが、これは教員が学生に参加を呼び掛けたことによる。一昨年の平成 23 年度は 23 講座、486 名の受講者であったことを踏まえると、例年と同水準の開催回数および参加者数であったといえる。

平成 25 年度は、学生によるゼミ研究報告を市民向けに公開する取り組みを試行的に行った。報告したゼミは、田中ゼミと豊田ゼミである。両ゼミとも同じ日に同じ会場で開催したが、参加者数は 32 名と他の講座と比較しても好評であった。

もっとも出席者が多かった講座は、中村俊郎氏（中村ブレイス株式会社代表取締役）による「石見の限りない輝き」で 70 名であった。その次に出席者の多かった講座は、金恩志氏（浜田市国際交流員）による「韓国を旅する」の 37 名であった。

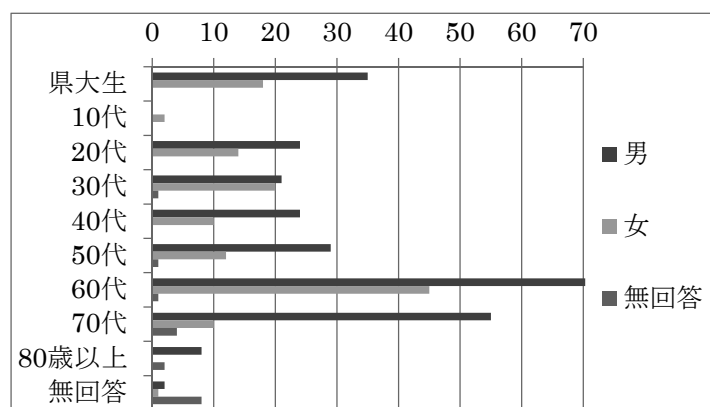
受講者には、できる限りアンケートに回答していただくことにしている。その結果について、以下で簡単にまとめる。

表：アンケートに回答した段階での参加回数

1回目	196 名
2回目	48 名
3回目	35 名
4回目	19 名
5回以上	45 名
不明	151 名
合計	494 名

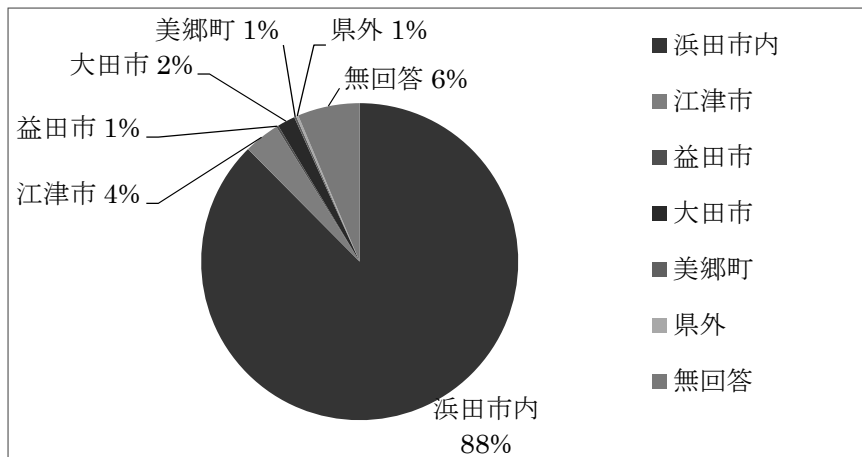
公開講座のリピーター獲得は重要である。この点について、上の表で示される参加者数を確認すると、複数回参加している受講者も比較的多い。

図：回答者の年齢と性別（単位：人）



回答者（出席者）の年齢層は比較的高齢の男性に偏っている。受講者の掘り起しが必要である。

図：回答者の居住地（N=442）



回答者（受講者）のほとんどは浜田市内に在住する方々である。江津市や益田市など、隣接する市の在住者ですら、きわめて少ないことから、受講者獲得のうえでは市内から探る必要がある。

表：キャンパス・サポーター登録の有無

有	101 名
無	268 名
不明	73 名

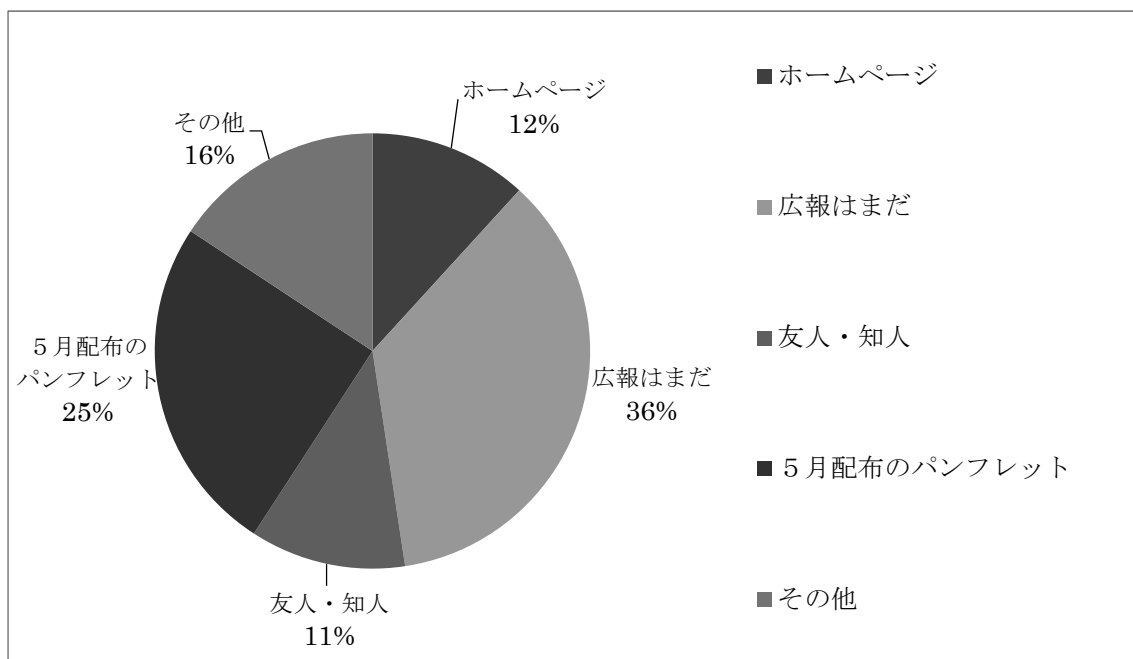
キャンパス・サポーターに登録している人よりも、登録していない人のほうが圧倒的に多い。キャンパス・サポーターとして登録するメリットが公開講座そのものには乏しいのかもしれない。この点については今後、別途検討したい。

表：公開講座に出席する理由

① 知識を深めたいから	246 名
② このテーマについて勉強をしているから	31 名
③ 知識を獲得し、仕事や地域活動に活かしたい	76 名
④ 生涯学習として関心があったから	92 名
⑤ 講師(またはゼミ活動)に関心があったから	73 名
⑥ 大学主催の行事だから	37 名
⑦ 交友関係を広げたいから	4 名
⑧ 公開講座に出席することが楽しいから	35 名
⑨ その他	14 名

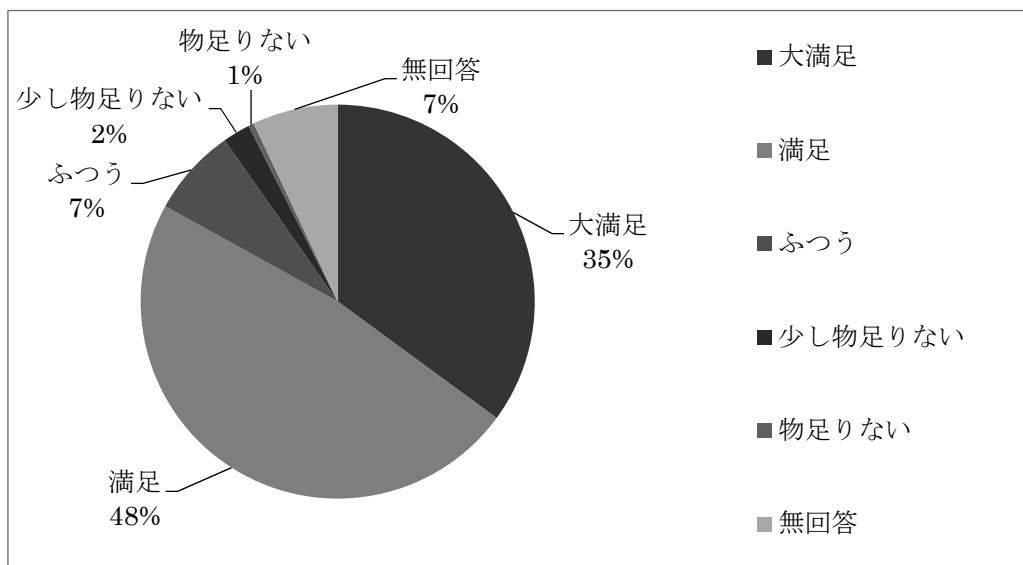
公開講座への参加理由は、「知識として深めたいから」という項目が最も高く、続いて「生涯学習として関心があったから」という項目が続く。したがって、学ぶ意欲のある受講者が主要な受講者層であろう。

図：公開講座を知った経緯 (N=439)



公開講座を知った経緯は、「広報はまだ」と回答するひとが36%に上り、ホームページなど電子媒体を通じて情報を得る人は少ない(12%)。これは受講者が比較的高齢者に偏っていることも一つの要因であると考えられる。

図：公開講座の満足度 (N=442)



公開講座に出席する人の満足度は、「満足」「大満足」と答えた人が93%にのぼった。おおむね、公開講座の内容は市民に好評を得たと判断できる。

○学生研究発表会（平成 25 年 12 月 14 日開催）

島根県立大学浜田キャンパスにおいて、「学生研究発表会」が開催されました。

この発表会開催の目的は、学生の研究について、より広く市民の皆さんに知っていただくことと同時に、学内で学生が研究の成果を報告する機会を設けることです。

経緯・今後の展開として、当該「学生研究発表会」について、平成 26 年度からは本学「大学 COC 事業」における浜田キャンパス「キャンパス・プラットフォーム」の研究発表の場の一つとして位置づけることを予定しています。このため、平成 25 年度は試験的に開催し、平成 26 年度からは、広く参加ゼミを募って実施するよう検討しております。

今回は初の試みということもありましたが、32 名の市民の方々が参加され、活発な質疑も行われました。

【豊田ゼミ】

浜田市の廃棄物処理について～PCM 手法を活用して～

浜田市におけるごみ問題にはどのようなものがあるのか、どのような解決策が考えられるのか、何が出来るのか。これらについて PCM 手法を用いて論理的に考察した。

浜田市では、大学生のごみの分別が不十分であるという問題があり、その問題の要因分析と、問題を解決するために有効なプロジェクトを検討した結果を発表した。



▲発表を行う豊田ゼミの学生(8 名による発表)

【田中ゼミ】

6 次産業化とコミュニティ・ビジネス

6 次産業化とコミュニティ・ビジネスはどのような違いがあるのか、また両者はどのような関係にあるのか。

それぞれについて具体的事業事例を紹介し、取組手法・対象課題・担い手・取組の目的の比較を行った。

6 次産業化は事業性、コミュニティ・ビジネスでは公共性と事業性の優先順位が異なるが、双方とも 2 要素を兼ね備えることが事業継続に重要であるとの結論が出された。



▲発表を行う田中ゼミの学生(3 名による発表)

○2013年オープンキャンパス（平成25年8月4日開催）

島根県立大学総合政策学部では、8月3日に第1回オープンキャンパスを実施しました。当日は総勢180名（高校生119名、同伴者61名）の方にご来場いただき、模擬授業のほか、進路に関する相談、キャンパス見学ツアーなどに参加していただきました。



地域連携推進センターでは「地連ブース」を出展しました。ここでは、大学と地域が連携した取り組みについてパネル展示を行い、「地域に開かれた大学」をアピールしました。見学に訪れた高校生や父兄の方々も、大学の地域連携について興味深く見学なされていました。

今年度の地連ブースでは、県西部の特産品を使った果物をトッピングに加えたかき氷を来場者にふるまいました。厳しい暑さのなか、来場された皆様からも大好評でした。ちなみに、かき氷メニューは、★メロン：益田、★ゆず&はちみつ：美都産ゆず、浜田産純粋はちみつ、★抹茶：浜田産抹茶入り に加え、定番のいちご、ブルーハワイの計5つでした。



また、今回の地連ブースでは、本学の学生により昨年度結成された石見神楽の「舞濱社中」の協力も得て、石見神楽にかんするVTRの上映も行っていました。



地連ブースではもうひとつ、「合格祈願ポプリ」の製作体験ができるコーナーを設けました。こちらは、本学の学生がおもに高校生を相手に、作業をしながら進路や受験、大学生活について気さくに対応していました。

○はまだ灯 2013（平成 25 年 10 月 26 日開催）

総合政策学部 2 年生 黒木大輔

10 月 26 日、「灯りが繋げる市民の絆」を合言葉に、「はまだ灯 2013」が浜田キャンパスをメイン会場として開催された。当キャンパスの学生、平岡都さん（当時 1 年生）が犠牲となった痛ましい事件から 4 年、このような事件を二度と起こしたくない、誰にも経験してほしくないという一心で、学生と市民が企画した。



〈市民と学生がキャンドルを並べる様子〉

また、今年は 3 部構成とし多くの参加者にお越しいただいた。

平岡さんへの追悼の意を捧げることに加え、事件の風化防止や市民同士の繋がり、防犯への意識啓発を促すなど再発防止をイベントのねらいとした。

多くの学生がスタッフとして関わり、当日の会場設営をはじめ、それまでの準備や会議にも積極的に参加した。

【1 部- 浜田市安全安心まちづくり推進大会】

手話を交えた浜田市民歌合唱により幕をあげ、貢献団体・あいさつ川柳（※1）の表彰式へと続いた。

式典には浜田市長や浜田警察署長も参列され、浜田市一丸となって安全で安心して暮らせるまちにしようとする強い意志が感じられた。

（※1 「あいさつ川柳」-市内全小学校を対象に挨拶とテーマとした川柳を募集。2010 年より、はまだを明るく照らし隊が実施する取り組み。）



〈オープニングの浜田市民歌合唱〉

【2 部-みらいサミット】

当キャンパス 文化系ディベート部「Q.C. L.C」と島根県立浜田高等学校、島根県立浜田商業高等学校、石見智翠館高等学校から 2 名ずつがあつまり、「私たちの住むまちの安全」をテーマに“学生目線の安全安心に関する不安”について、当キャンパス講堂ステージ上にて公開ディスカッションを行った。登壇者の緊張した表情も束の間、「それぞれの高校に通う学生が自分たちの通学路に感じる様々な不安点」や「青少年・少女のネット被害につ



〈サミットの様子〉

いて」「私達の住む町、浜田はこれからどのようにすれば安全安心で暮らせるようになるか？」と、広く終始白熱した議論となった。

最後に、浜田市長、浜田警察署長からそれぞれ「安全安心というのは、まちの基本となる。今回出た意見を参考にして、これから行政を進めていきたい。」「事件以降、私達は警備を強化しパトロール等の防犯活動をしてきた。

これを機会に、気を引き締め直し安全安心のまちにむけて、努めていきたい。」との講評をいただいた。

【3部-はまだ灯】

講堂外では学生・市民有志により 1000 個以上のキャンドルが並べられ、火を灯した。そのキャンドルの入れ物には多くの方の追悼や防犯についての願いなどが描かれており、心がつながった瞬間でもあった。学生代表（1回生女子）のスピーチでは、「行政と市民と県大生が共に安心・安全な明るいまちづくりを考えるきっかけになった」と語り、全体で平岡さんに黙祷を捧げた。

カフェテリア前では、当キャンパス合唱部「イエローカイト」と広島市民合唱団「ぼつきり」によるアカペラや、吹奏楽部による演奏が披露された。また、300 個の灯籠が灯されているカフェテリアでは、10 分間の「サンドアート」が2本上映された。このサンドアートは、はまだ灯し 2013 のために特別に作って下さったもので、はずかしがりやの女の子から笑顔が広がる心温まるストーリーとなっている。また、マリン大橋や神楽なども取り上げられ、浜田が舞台となっており、地域のつながり、人のつながりの大切さを再認識させられた。



〈火が灯ったキャンドル〉

最後に、一刻も早い当事件の解決と、浜田市が安全で安心して暮らせるまちになることを願うと共に犠牲となった平岡都さんのご冥福をお祈り申し上げます。

○島根中央高等学校学習支援

総合政策学部 2年生 有間健次

昨年度から開催されている大学生による島根中央高等学校1年生を対象とする数学と英語の学習支援会。この学習支援会は中山間地域に位置する島根中央高等学校は近隣に大学がなく、高校生が直接大学生と接する機会が少ないため、高校生の進学に対する意識の向上をめざして、開催されたものである。

昨年度の1回の開催に続き今年度は3回開かれ、毎回、約10名の大学生と20名の高校生が朝から夕方まで、休憩を含む計6時間の勉強会を行う。勉強形態は学生1人に対し、生徒が2名、もしくは学生2名に対し生徒が3名という形で行われる。

学生は約10日前に、当日行う勉強教材を配布していただき、予習をしたうえで当日の学習会に臨む。

また、昼食をみんなで一緒に食べることによって、勉強だけではなく、これからの高校生活や、大学生活の楽しさなど、幅広い話題で打ち解けることができ、学習意欲の向上に加え、学生と生徒とのコミュニケーションが図れた価値ある学習支援となった。

下記は参加した学生、生徒の感想である。

～大学生～

- ・生徒が素直に聞いてくれてうれしかった。
- ・私は、文系だったので数学が難しかった。
- ・生徒が気軽に話してくれてよかった。
- ・私は教員志望であるため、こういった実際の現場で経験ができてとても自分のためになった。
- ・ぜひとも次回も参加させていただきたい。
- ・自分も高校生に戻った気分だった。

～高校生～

- ・大学生がとても優しく丁寧に教えてくれた。
- ・勉強だけではなく、いろんな話が聞けて良かった。
- ・わかるようになるまで教えてくれた。
- ・大学生が話しやすい人で良かった。
- ・数学が長くて疲れたけど楽しかった。
- ・国語もやってほしい。
- ・2年生になっても参加したい。

○島根カタリバ

総合政策学部 2年生 加藤理子

“島根わさび計画”は、「みんなで『輪』になって、『支』えあい、生徒の心に『火』を点けよう」という想いで、島根県の NPO と共同で平成 24 年 1 月に立ち上げられた組織である。この活動で、私たち大学生が実際に県内の高校の総合学習の時間帯を利用して出張授業を行なっている。高校生の彼らにとって、人生の先輩でかつ年齢が近い大学生が、それまでの人生や自分の持つ考えについて紙芝居形式で語り、少人数のグループで話し合うことで自分の進路や明日からの生き方について考えることができる「きっかけの場づくり」をしている。

もともとは、NPO 法人カタリバのキャリア学習プログラムが平成 23 年 11 月に雲南市で実施され、そこに参加した島根県内の大学生（島根県立大学 3 名、島根大学 2 名）が、この事業を島根県内のより多くの生徒に届けたいとの思いから始まった活動である。

その後、昨年より、島根わさび計画から名称が変更され、現在は“島根カタリバ”として活動している。

<活動内容>

自分たち大学生の言葉は高校生にとって、親でもなく友達でもない、あえて第三者である“ナナメの関係”から入ることにより高校生の心に素直に響くのである。高校生への事前アンケートなどを参考にして、企画者である学生プロジェクトマネージャーが高校の先生と共に実施当日の授業プランを計画し、参加する大学生スタッフに高校生徒のコミュニケーションスキルの研修会を実施のうえで、本番の日を迎える。授業時間は実施校によって異なるが、おおよそ 90 分から 110 分程度。実施後も高校生へ事後アンケートに答えてもらい、集計結果をもとに実施報告書を高校へ提出する。昨年度は計 3 回の島根カタリバを行った。

表 1：これまでの島根わさび計画実施校

平成 24 年 3 月 19 日	島根県立大東高校 1 年生
平成 24 年 9 月 12 日	島根県立浜田高校 1 年生
平成 24 年 9 月 12 日	邑南町立羽須美中学校 3 年生
平成 24 年 9 月 25 日～27 日	島根県立松江東中学校 1 年生
平成 25 年 3 月 18 日	島根県立大東高校 1 年生
平成 25 年 9 月 13 日	鳥取県立米子西高校 1 年生
平成 25 年 12 月 25 日	島根県内高校 1 年生（学びの向上学力セミナー）
平成 26 年 3 月 10 日	島根県立大東高校 1 年生

<カタリバ授業例（100分の場合）>

1. 座談会（25分）

大学生1人に対して中・高校生が3～5人の班を作り、その班内で会話を進めていくうえで、高校生自身の頭の中にある将来への夢や漠然とした不安を言語化し彼ら自身の自己理解を促す時間。



2. 先輩の話（35分）

1つの授業でおおよそ4～8人の大学生が自分の人生を紙芝居形式で語ることで、彼らにとって新たな価値観の発見や、人生のサンプルの提供をする。



3. まとめの時間（40分）

座談会の班に戻り、先輩の話で感じたことを共有する中で具体的な目標設定を行う。将来の夢が明確に決まっている生徒、そうでない生徒含めて、とにかくその日から何ができるのかを一緒に考え、行動することの重要性を伝える。

これまでの活動の中で、感動して泣く生徒がいたり、先生から「生徒たちのあんなに輝いている目を見たのは初めてだ」という、大変嬉しい言葉もいただいた。

この取り組みがメディアでも取り上げられ、鳥根県内の高校から注目されてきている。さらに鳥取県にも足を運び、活動をした。今後とも県立大学生と鳥根県立大学が共同で取り組み、さらに鳥根県高校教育課やNPO法人とも連携をとって今後ますますの発展が期待される。

○「はまだ・絵本～ご当地活性化事業～」絵本制作第二弾『さいじょうかきえもん』

総合政策学部 3年生 岩田光彩 山田周子

よみきかせサークルゆるりの会は、平成 25 年 11 月に浜田市三隅町の特産品である西条柿を題材に『さいじょうかきえもん』というご当地絵本を完成させました。

・読み聞かせサークルゆるりの会とは

平成 23 年に松江キャンパスから編入された玉木さくらさんが「よみきかせサークルゆるりの会」を創設しました。活動内容は、浜田市内の小学校を中心に絵本の読み聞かせ活動を行っています。また読み聞かせ活動だけでなく影絵、人形劇など、活動の幅を広げていきます。現在部員は約 15 人です。

・『さいじょうかきえもん』が出来るまで

平成 23 年のビジネスプランコンテスト「MAKE DREAM 2011」において、玉木さくらさんが「はまだ・絵本」～ご当地活性化事業～をテーマに発表し、そこで見事最優秀賞を受賞されました。その後浜田市三隅町の「石州和紙」を題材にした絵本「きいてきいて！こうくんのひみつ」を約一年かけて 200 部制作し、島根県内の図書館などの公共機関に寄贈しました。

この絵本を三隅町の白砂公民館の方々に読んでいただき、「西条柿について絵本を通して子供たちに知ってもらいたい。食べ物がありふれている世の中で子供たちに柿を好きになってもらいたい」という思いからご当地絵本第二弾『さいじょうかきえもん』の制作がスタートしました。

制作内容としては、実際に柿づくりを行われている農家さんの所へ見学に行ったり、柿を使ったアレンジレシピを紹介してもらったり、現地で柿シャーベットを食べさせてもらいました。こういった活動を通して西条柿の良さをふんだんに取り込んだ絵本を作っていました。

・最後に

これからも読み聞かせサークルゆるりの会は読み聞かせ活動はもちろんのこと、地域の人々との繋がりを深め、それを大切にしていきたいと思います。どうぞよろしくお願ひします。



○「3.11 チャリティー・コーラス in はまだ3」開催

総合政策学部 1年生 橋口菜々

東日本大震災復興支援コンサート「3.11 チャリティー・コーラス in はまだ3」が2014年3月9日に開催された。

「忘れません！3.11 浜田の熱い思いを歌に託して被災地に届けよう！」というテーマの通り、震災が起こった2011年3月11日から3年が経ち徐々に震災の記憶が人々から薄れつつある中で、被災地の一日もはやい復興とそこに住む方々の安定した生活を取り戻せることを願い、私たちの歌声で精一杯のエールをおくることを目的とし、このコンサートは開催している。

今年で3回目となるこのイベントには石央文化ホール合唱団“響”をはじめとする石見地方の各市民団体や小学校、高校などから参加者が集い、それぞれが心を込めてコーラスを披露した。

また、島根県立大学の被災地支援ボランティアサークル「県大ねっこわーく@島根」から、2014年2月19日から22日の4日間で行われた「きっかけバス47」という被災地派遣ボランティアの報告を行った。スライドを用い被災地の現状を伝えた。

会場は参加者、観客で溢れ、全員で時間と思いを共有した。陽気な曲では手拍子を行い共に歌い、落ち着いた曲では引き込まれ雰囲気浸った。

最後に会場にいる全員で合唱した『花は咲く』は、一人ひとりが被災地のことを思い元氣と希望が届くことを祈って歌った。

チャリティー・コーラスは被災地にエールを届けるだけでなく浜田市民にも笑顔や活力が生まれる、そんなイベントだと感じた。

○きっかけバス 47 報告ならびに意見交換会（平成 26 年 3 月 6 日開催）

浜田市役所において、「きっかけバス 47 報告ならびに意見交換会」を行いました。

「きっかけバス 47」とは公益法人助け合いジャパンが主催しており、47 都道府県から学生たちが東北三県にバスで行くプロジェクトです。

東北大震災から丸三年が経とうとする今、東北の人たちは「風化」と「風評」に苦しんでおり、もう一度日本中に「旋風」を巻き起こしたいと考えた学生たちが中心に動きました。

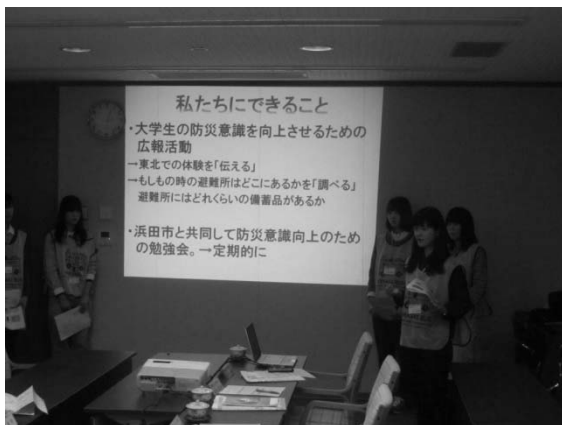
きっかけバス島根で、2 月 19 日～22 日で東北三県を訪れ、学生達が現状をみて、『感じてきたこと』や『これから何が自分に出来るのか』を久保田章市浜田市長に報告しました。



▲久保田章市 浜田市長



▲発表を行うきっかけバス参加の学生



▲今後における決意表明



▲久保田市長と参加学生

まとめとして、

1. 思い込みをせず、他人事にしない
2. 災害を減らすことはできないが、被害者は減らせる

『浜田市と島根県立大学生が協働で、“もしも”のことが起きた場合を想定し、ひとりひとりの防災意識を高めたい』と決意表明を行いました。

○きっかけバス 47 学内報告ならびに意見交換会（平成 26 年 3 月 11 日開催）

島根県立大学カフェテリアにおいて、「きっかけバス 47 学内報告ならびに意見交換会」を行いました。

きっかけバス島根で、2 月 19 日～22 日で東北三県を訪れ、学生達が現状をみて、『感じてきたこと』や『これから何が自分に出来るのか』を本学教職員に周知を行ったところ、20 名の本学職員の参加がありました。

報告の後、参加した教職員と一緒に『防災意識の向上のために大学として何が出来るか』等、意見交換を行いました。



▲発表を行うきっかけバス参加の学生



▲島根県立大学職員と防災についての意見交換

○きっかけバス 47 街頭募金活動（平成 26 年 3 月 31 日まで開催）

JR 浜田駅、スーパー等において、「きっかけバス 47 街頭募金活動」を行いました。



▲募金活動を行う学生



▲JR 浜田駅の職員の方と一緒に募金活動を行った



3月11日は7時30分～8時30分、9時50分～10時20分、12時30分～13時30分の3回に分け、JR浜田駅の職員の皆様、「県大ねっこわーく@島根」の学生と一緒に募金活動を行いました。

学生の話によると「町を歩く市民の皆様が、『頑張ってね』と声をかけて募金してくれるので、温かさを感じた」と言います。

市民の皆様をはじめ、たくさんの方々によるご支援のおかげで、学生にとって貴重な体験が出来たことと思います。

今回のことを『きっかけ』にして、これからも頑張ってもらいたいと思います。

○弥栄産業まつり出展と里山テイスティング

総合政策学部林秀司ゼミは、2013年度は、その授業の一環として、地域のみなさんと連携しつつみずから企画した活動を実践することとし、弥栄産業まつりへの出展（出店）と里山歩きのイベント「里山テイスティング」を行った。

●弥栄産業まつり出展（出店）

当ゼミ3年生6名は、2012年度に受講した「現代しまね学実践」の経験から、浜田市弥栄町のよさを生かした地域づくりの一助となるような活動を志し、浜田市弥栄支所産業課をはじめとする地元の協力者のみなさんと協議を重ねた結果、浜田市食生活改善推進協議会弥栄支部と共同で、「弥栄産業まつり」に郷土料理を出品することとなった。学生たちが出品したのは、むかごご飯とドジョウ汁であった。むかごご飯はむかごが入った炊きこみご飯で、ドジョウ汁はそば粉でつくっただんごをドジョウに見たてたものである。あらかじめ調理指導を受け、前日から仕込みを行い、11月3日（日・祝）の当日も早朝から準備をしての出展（出店）となった。当日は雨もよりの天候のなか、多くの方にご来場いただき、お買い求めいただき、いずれも完売することができた。

●里山テイスティング

11月4日（月・休）に、浜田市美川西地区において、「里山テイスティング」と題した里山歩きのイベントを実施した。このイベントは、同地区の6集落をめぐる約10kmのコースを自然を感じながら歩き、里山の良さを再発見しようと企画されたものである。地元の指導農業士にご協力いただき、当ゼミ3年生5名も参加して組織された実行委員会は、この日まで、何回もの打ち合わせを重ね、準備してきた。当日は、想定していた定員の30名を超える参加者を得て、同地区内にある「農村カフェのんびり」を9時頃に出発し、美川公民館西分館で開催されている地域の収穫祭「きんさい みんさい たべん祭」に合流し、そこで、そば打ちや餅つきの体験、たばやしの鑑賞をさせていただいた。そして、14時頃にふたたび「農村カフェのんびり」にゴールし、参加者からはそれぞれ感想を話していただき、イベントは終了した。



▲弥栄産業まつり出展のようす



▲里山テイスティングのようす

（林 秀司）

○全初年次生が地域に出かける「フレッシュマン・フィールド・セミナー」

フレッシュマン・フィールド・セミナーは、社会のさまざまな現場（フィールド）に出かけていき、そこでフィールドにおられる人々への調査を通じて課題を発見し、課題の解決策を提案するセミナーである。入学初年次から地域のさまざまな人と接し、自らの学修目的を明確化することで、自らが望んだ職業に就く能力を学生に身につけさせることを目的としている。

このセミナーは、1) 事前学習、2) フィールド調査、3) 調査結果分析、4) 課題解決策の提案、5) 成果発表、の5つのプロセスで構成されている。各セミナーの実施回数にもよるが、概ね10～13回を教室で行い、島根県内・浜田市・近隣地域に出向いてのフィールド調査を2～5回ほど実施する。春学期のフレッシュマン・スキル・セミナーで学んだアカデミック・スキルを活用しながら、課題発見と課題解決能力を身につけ、2年次から始まる専門教育への橋渡しをするセミナーでもある。

平成26年1月23日には、このセミナーの最終プロセスである「フレッシュマン・フィールド・セミナー合同成果発表会」が、浜田キャンパス講堂において開催され、全16ゼミが各ブースに分かれ成果をポスターセッション形式で報告した。今年度は邑南町の先進的な取り組みを、広く石見地域においても共有し、さらなる連携を目指していこうという浜田市の提案をきっかけに、4ゼミが共通のテーマに取り組むという初の試みもなされた。この発表会には学生・教職員はもとより、取材・調査先関係、一般市民、報道関係の皆さんなど多数の来場者があり、昨年度に引き続いて来場者の投票によるコンテスト表彰もおこなわれた。

学生が地域課題と自分自身との具体的な関わりを築く良い機会であると同時に、地域に貢献する大学となることを目指す本学としても、地域との連携がさらに深まっていく契機ともなった。



ゼミ名	概要	フィールド
赤坂ゼミ	「A 級グルメのまちづくり」石見広域版（浜田市内飲食店の調査） 赤坂ゼミでは、邑南町の A 級グルメ構想を石見地域へ拡大展開することを目的とし、浜田市内飲食店への地域食材に関する調査を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・海鮮レストラン 会津屋八右衛門 ・お土産ショップ五地想市場 ・浜田市観光振興課 ・邑南町 ・素材香房 ajikura ・シックス・プロデュース(有) ・万禧亭
瓜生ゼミ	シリーズ「浜田と石見の“元気印”」を探る！ 浜田市内で「うどんの今田」を、また浜田市弥栄町内で「田舎カフェ&キッチン陽気な狩人」を営む今田孝志氏の日を取材・撮影することで、このゼミの特徴である[映像]による知識化と認識化を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ・田舎カフェ&キッチン 陽気な狩人 ・うどんの今田
大橋ゼミ	グラントワ（島根県芸術文化センター）及び石見神楽の現状を調査し、現在いろいろと取られている施策を考え、課題を発見し、さらに出来得れば、これらをより活性化させるための策を提案する。	<ul style="list-style-type: none"> ・グラントワ(島根県芸術文化センター) ・浜田市観光振興課 ・神楽ショップくわの木園
大前ゼミ	日本でも有数の水産都市である浜田市の現状と課題を探る。	<ul style="list-style-type: none"> ・浜田市水産課 ・しまね漁業協同組合浜田支所 ・(株)シーライフ ・しまねお魚センター
川中ゼミ	「島根県立少年自然の家」と「しまね海洋館アクアス」による社会教育の実際を知り、地域における役割を検討することを目的とし、少年自然の家主催事業「森と海のつどい」にボランティアスタッフとして参加をした。この活動により、社会教育の意義だけにとどまらず、子供の成長や発達への支援のあり方、子供と自然との関係、より良いコミュニケーションの取り方などを考察することができた。	<ul style="list-style-type: none"> ・島根県立少年自然の家 ・しまね海洋館アクアス
木村ゼミ	「浜田市の金融機関（銀行）の企業に対する取り組みと課題」 浜田市の金融機関（銀行）の業務や取り組みと浜田市の企業の銀行との関わり方について調査し、浜田の産業活性化のための今後の課題を探る。このゼミでは、銀行と企業がどのような関係にあって、どのような課題に直面しているのかを学び、実感することを目的とする。	<ul style="list-style-type: none"> ・日本海信用金庫本店 ・山陰合同銀行浜田支店 ・日本政策金融公庫浜田支店 ・浜田商工会議所 ・島根県浜田地区建設業協会 ・紺屋町商店街振興組合
久保田ゼミ	「中小企業の事業展開」 島根県を代表する中小企業 1 社をケーススタディの題材として取り上げ、同社の取組みを調査することを通じて、中小企業を調査するうえでの手法を学ぶとともに、中小企業の抱える課題やその解決策、中小企業の事業展開の取組みについて学ぶ。	<ul style="list-style-type: none"> ・石見食品(株)
西藤ゼミ	「消費者ニーズの調査」 ～石見地域の食材に関する複数ゼミの合同プロジェクト～ 本ゼミでは、消費者が石見特産の食材についてどのような価値について注目し、何を期待しているのか探る。	<ul style="list-style-type: none"> ・ゆうひパーク浜田 ・NPO 法人明るい農村かわもと ・邑南町 ・素材香房 ajikura ・シックス・プロデュース(有) ・万禧亭

ゼミ名	概要	フィールド
田中ゼミ	「A級グルメのまちづくり」石見広域版（益田市内飲食店の調査） 邑南町のA級グルメ構想を石見地域へ拡大展開することを目的とし、益田市内飲食店への地域食材に関する調査を行う。飲食店での地域食材の使用方法や地産地消率、仕入れの決定条件など、飲食店の地域食材へのニーズを把握するためヒアリング調査を実施する。調査を通じて6次産業の取り組みを理解し、生産・加工・販売の一連の供給体制のあり方を経営学の視点から検討する。	<ul style="list-style-type: none"> ・パン&コンフィチュール モヌッカ ・田中葡萄園 ・邑南町 ・素材香房 ajikura ・シックス・プロデュース(有) ・万禧亭
豊田ゼミ	「未来の廃棄物処理のあり方」 ゴミはもはやゴミではない。浜田市では世界的にも先進的なゴミ処理方式が用いられている。ゴミを溶かして資源に変える焼却場、建物の中にある埋め立て場・・・浜田から循環型社会の構築を考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・エコクリーンセンター ・浜田市不燃ごみ焼却場 ・石央リサイクルセンター
中川ゼミ	「浜田市の福祉の現状と課題を考える」 浜田市のさまざまな福祉の事業所、施設を訪れ、浜田市の福祉の現状と課題を考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・聖喰寮 ・長寿苑 ・ヴィレッジせいわ ・こくぶ学園 ・桑の木園（かなぎウエスタンライディングパーク） ・神楽ショップくわの木
八田ゼミ	石見の「ものづくり」—「石見焼」の魅力— 18世紀中頃から、現在の江津市を中心とする石見地方で作られてきた「石見焼」。独特の「はんど」（大型の水がめ）をはじめ、現在では、時代のニーズに沿った多様な日用品も製作され、多くの人々に愛されている。石見の風土と人々の技に育まれてきた「石見焼」の歴史と現状を学び、地域の貴重な伝統工芸品である「石見焼」の魅力を把握する。	<ul style="list-style-type: none"> ・石州嶋田窯 ・島根県石央地域地場産業振興センター
林秀司ゼミ	いくつかの農産物を事例に取り上げ、その生産・販売に関する地域調査を行うことを通じて、地域農業や農業生産・販売の実態と課題について理解を深める。	<ul style="list-style-type: none"> ・浜田および江津市内の農産物生産者（9名） ・いわみ中央農業協同組合 ・邑南町 ・素材香房 ajikura ・シックス・プロデュース(有) ・万禧亭
林田ゼミ	家の価値ってどうやって測るの？ 滞納している税金は、どのようにして取り立てるの？ この授業では、浜田市税務課と徴収課に行き、実際にどのように家の価値を測るのか、実地調査をして計算し、税金をどうやって納付してもらっているのか、その極意を教えてください。	<ul style="list-style-type: none"> ・浜田市税務課 ・浜田市徴収課 ・浜田市営住宅
光延ゼミ	「島根県における国政選挙の投票率の研究」 —なぜ若者の選挙離れが起きるのか？— 若者の投票率の低下が叫ばれて久しい。特に20代の若年層は著しい。そこで島根県の国政選挙における投票率について調べ、他の都道府県との比較から、投票率向上にはどのような方法があるのかを考える（提案する）。	<ul style="list-style-type: none"> ・島根県選挙管理委員会 ・島根大学 ・津和野町内 ・松江市内 ・出雲市内
渡部ゼミ	津和野町の歴史的文化的文化財を活用した観光業の現状を調査し、課題を発見し、町の観光業を活性化するための振興策を提案する。	<ul style="list-style-type: none"> ・津和野町教育委員会 ・津和野町内

○島根県立大学産業コンテスト「MAKE DREAM 2013」開催

平成25年12月13日（金）に、本学交流センターコンベンションホールにて本学の学生が浜田の地域資源を活用したビジネスプランを提案する島根県立大学産業コンテスト「MAKE DREAM 2013」最終プレゼンテーションが開催された。

「MAKE DREAM」は、地域の企業や行政などに学生の発案する若者ならではの自由な発想を聞いてもらい、新産業や新事業創出の参考にしてもらう「アイデア提供型」の企画であり、今回で3年連続3回目の開催となる。

同コンテストの運営は、主催のはまだ産業振興機構をはじめ、行政、支援機関の幅広い協力を得て行われている。審査にあたっては、久保田章市浜田市長を審査委員長とし、浜田商工会議所、石央商工会、日本政策金融公庫浜田支店、島根県商工会連合会石見事務所といった各協力機関からトップクラスの方々が審査員として参画した。

コンテストには合計22組からの応募があり、書類選考を通過した上位6組が最終プレゼンを実施した（表）。

表 「MAKE DREAM 2013」最終プレゼンテーション発表者とテーマ（発表順）

氏名	学年	発表テーマ
田村沙代	2年	浜田ご当地Tシャツで 地域おこし～水産業PRプロジェクト
篠原梨紗・平岡美友紀	2年	つなぎ～学生とNPOの地域振興ミーティング
倉田敏宏 (共感大賞)	2年	食から学ぶ田舎体験型ツアー～食と学びと癒しを弥栄で
和田元春・湯川瑞基 (最優秀賞)	2年	浜田の水産加工まるごとツアー～産業観光の導入
青野祥子 (優秀賞)	4年	女性高齢者を活用したビジネス
山岡賢太	3年	OMOTENASHI～高齢者と外国人をつなぐゲストハウス

その結果、2年の和田元春さんと湯川瑞基さんが発表した、浜田市の水産加工業者に対し工場見学、加工体験、加工品の試食などを実施する産業観光ツアーを実施し、浜田市の水産加工品をPRすることを狙いとした「浜田の水産加工まるごとツアー～産業観光の導入」が最優秀賞を受賞した。また、4年の青野祥子さんが発表した「女性高齢者を活用したビジネス」が優秀賞を、2年の倉田敏宏さんが発表した「食から学ぶ田舎体験型ツアー」が共感大賞（来場者が最も共感したプランへ投票し、その得票数が最も多いものに対して贈られる）を受賞した。

また今年度は、昨年度最優秀賞を受賞した「さかなのがっこう～もっと浜田を好きになる」のプラン実現に向けた取り組みの報告も行われた。

（文責：久保田典男）



○高大連携の取り組み

島根県立大学と島根県立浜田高校及び島根県立江津高校とはそれぞれ平成 16 年、平成 19 年に高大連携包括協力協定を締結し、相互の特色を活かした連携活動を行っている。

【島根県立浜田高校】

平成 16 年 11 月 18 日 高大連携包括協力協定を締結、連携事業（出張講座、ゼミ開放、教育実習生の受け入れ、学生交流など）を継続的に実施

平成 25 年度の活動状況

9 月 9 日 高大連携推進会議

10 月 16 日 出張講座（HIRAKU「大学出前講座」）

10 月 23 日 ゼミ（総合演習Ⅱ）体験（2 年生 3 名参加）

10 月 28 日～11 月 9 日 高校授業見学（教職課程担当教員及び教職課程履修者が見学）

【島根県立江津高校】

平成 19 年 6 月 1 日 高大連携包括協力協定を締結、連携事業（出張講座、ゼミ開放、英語授業開放、学生交流など）を継続的に実施

平成 25 年度の活動状況

7 月 3 日 高大連携推進会議

7 月 8 日 大学授業体験（2 年生 72 名参加）

10 月 23 日 ゼミ（総合演習Ⅱ）体験（普通科 2 年生 53 名参加）

10 月 28 日 フレッシュマン英語コミュニケーションⅡ（英語科 2 年生 13 名参加）



▲大学授業体験の様子



▲ゼミ体験の様子

○大学生による小中学校学習支援事業の取り組み

大学生による小中学校学習支援事業は、浜田市内の小学校と中学校に学生（学習支援員）を派遣し、週1～2回（1回1～2時間）程度、放課後の時間に学習指導を実施する事業。この事業は島根県立大学と浜田市との連携協力協定（平成19年5月18日締結）に基づき、学力向上を目的として平成19年度から中学生を対象として開始し、平成24年度からは小学生も対象に含め、実施している。平成25年度は3校の小学校、4校の中学校が参加し、延べ243名の学生が従事した。



▼学習支援の様子（浜田市立第三中学校）



（浜田市立東中学校）

【派遣先】

浜田市立第一中学校	平成19年度～
浜田市立第二中学校	
浜田市立第三中学校	
浜田市立東中学校	平成20年度～
浜田市立金城中学校	
浜田市立松原小学校	平成24年度～
浜田市立三隅小学校	
浜田市立三階小学校	平成25年度～

【派遣実績】

平成19年度	6名、延べ93名
平成20年度	11名、延べ128名
平成21年度	14名、延べ201名
平成22年度	14名、延べ191名
平成23年度	20名、延べ192名
平成24年度	32名、延べ250名
平成25年度	25名、延べ243名

～参加学生感想～

Q. 参加してよかったことはなんですか？

- ・人とのコミュニケーションをとることができた。勉強を教えながら、自分にとっても勉強となった。（学部1年・男性・初参加）
- ・「教えることの難しさ」の実感。子どもたちと仲良くなれたこと。（学部2年、男性・初参加）

～学校からの感想～

Q. 参加した学生の様子について

- ・とても熱心で、自分たちから生徒に関わってもらえたのが良かったです。
- ・個々の児童に合わせた支援に配慮したり、学習意欲がわくような声かけや参加カードへのメッセージをくださったりと、子ども達のやる気に応えようと熱心に支援してくださいました。児童も自分から質問するなど回数を重ねるごとに積極的な姿勢が見られるようになり自信もついてきています。

○無料映画上映会「名作映画鑑賞オロリン座」

総合政策学部 4年生 山本雅之

島根県には県内に2館しか映画館がなく、それらも松江市と出雲市といった県東部にあり、浜田市はもちろん、県西部の石見地域には映画館が一つもありません。そこで地域の映画文化の振興のために、本学の学生、教職員のみならず、地域の皆さんも参加できる、無料映画上映会「名作映画鑑賞サークル・オロリン座」が発足し、2012年度より活動を続けています。

◆2013年度「オロリン座」活動報告

2012年度は発足当初ということもあり、多くの教員の方々と相談を密にし、映画上映の計画を練ってきましたが、2013年度は学生が上映会のスケジュール等の決定を行い、より学生が積極的に参加しての活動になったと言えます。もちろん、場所や機材の提供など多くの面で教員の方々にお世話になっています。2012年度同様、2013年度も上映会の客足は良いものと言い切ることはできませんが、上映を楽しみにし、毎回参加をしていただける方がいることにもお礼を申し上げます。まだまだ、浜田市内での認知が低い状況にはあります。私は2013年度をもって卒業となりますが、新しく加入した新入生がより一層オロリン座を盛り上げ、浜田市内で認知される活動に成長させてくれるのではないかと期待しています。

◇上映した作品など◇

	日時	上映タイトル	場所	主催
第6回	平成25年5月11日(土) 13時30分～	ルイーサ	大講義室1	地域連携推進センター メディアセンター
第7回	平成25年7月3日(水) 16時40分～	亀も空を飛ぶ	大講義室1	地域連携推進センター メディアセンター
第8回	平成25年10月14日(月) 14時～	隣る人	大講義室1	中川研究室
第9回	平成25年11月13日(水) 16時40分～	エンロン	メディアセンター	地域連携推進センター メディアセンター

○NEAR センター市民研究員制度

日本海をはさんで北東アジア地域に接する島根県とその周辺には、様々な視点からこの地域に強い興味を抱き、知識を蓄えている市民がいる。島根県立大学北東アジア地域研究センター（NEAR センター）では、日本を含む北東アジア地域の研究に強い興味を持っている市民の方々にNEAR センターの市民研究員として共に研究していただく「NEAR センター市民研究員制度」を平成18年度に創設した。

市民研究員はNEAR センターに所属し、研究会等への参画を通じて自らの興味関心に基づく研究活動に取り組むほか、研究テーマで意気投合した本学の大学院生と共同研究を行うなど、大学院生の研究に刺激を与えていただいている。

一昨年度立ち上げたグループ・リサーチ・サロンは、今年度2つに再編成され、関連する領域の共同研究や情報交換を行う場となっている。



平成25年度における成果として、市民研究員自らの企画により以下の研究会を開催した。

1. 日時：平成25年7月13日(土) 13:30～17:00

場所：交流センター コンベンションホール

内容：第1部：第2回 NEAR アカデミック・サロン（江口伸吾センター長補佐）

第2部：市民研究員の発表報告

- ・「中国寧夏回族自治区固原市における産業振興一考」

…湯屋口初實（市民研究員）

- ・「石州和紙の絵手紙でコンテストに応募してみた！」

…坂東朋子（市民研究員）

- ・「和紙と石州半紙について」…中政信（市民研究員）

2. 日時：平成25年11月16日(土) 14:00～17:00

場所：交流センター コンベンションホール

内容：第1部：第3回 NEAR アカデミック・サロン

- ・佐藤壮研究員「北方領土隣接地域を歩く―根室調査報告―」

第2部：市民研究員の発表報告

- ・「出雲大社『平成の大遷宮』について」…豊島秀明（市民研究員）

- ・「実習生就学前教育から見えるもの」…迫義人（市民研究員）

- ・「山陰地方における北東アジア地域との地域間交流を通じた地方自治体の国際政策―国家間対立に直面する地方自治体の対応に関する政治決定過程の分析―」…永井義人（市民研究員）

また、毎年行っている[市民研究員研究発表会]及び[市民研究員と大学院生の共同研究成果報告会]を以下のとおり開催した。

[平成25年度 市民研究員研究発表会]

日時：平成26年1月25日(土)14:00～16:30

場所：交流センター コンベンションホール

内容：

- 1) 「絵図・地図の変遷からみる日本の近代化
—松江市史絵図・地図編の成果から—
…阿部志朗(市民研究員)
- 2) 「チベット仏教探検先駆者・能海寛の最期
を語った、フランス人麝香商人 G. ペロンヌを追って」…岡崎秀紀(市民研究員)
- 3) 「2013年古代史サミット in 高千穂の成功と全国邪馬台国連絡協議会の設立について」…田中文也(市民研究員)



[平成25年度 市民研究員と大学院生の共同研究成果報告会]

日時：平成26年3月1日(土)14:00～17:00

場所：交流センター コンベンションホール

内容：

- 1) 「中国の大興安嶺におけるオルゴヤエヴェンキ族の生活変化と自意識に関する研究」
[報告者] 哈麗娜(北東アジア開発研究科 博士前期課程 2年)
小菅良豪・若林一弘(市民研究員)
- 2) 「モンゴル国の低学歴貧困家庭からみた現代モンゴル都市社会—学歴と将来に関する親と子どもの期待を手がかりに—」
[報告者] バダムサンブー・ヒシグスレン
(北東アジア開発研究科 博士前期課程 1年)
岡崎 秀紀(市民研究員)
- 3) 「中国朝鮮族における高齢者介護と家族・ジェンダー規範に関する社会学的研究—中国黒竜江省穆稜市A鎮の高齢夫婦間介護を対象にして—」
[報告者] 孫 美玲(北東アジア開発研究科 博士前期課程 2年)
大橋美津子(市民研究員)

◇講演会講師等

教員名	依頼元	内容	期間
別枝 行夫	島根県自治研修所	階層別研修	H25.4.1~H26.3.31
岩本 浩史	島根県自治研修所	階層別研修	H25.4.1~H26.3.31
北村 真紀	広島文教女子大学	広島文教女子大学講師	H25.7.12
豊田 知世	島根県立江津清和養護学校	高等部作業班（木工班）特別授業講師	H25.11.1
八田 典子	島根県社会福祉協議会	シマネスクくびき学園講師	H26.1.17
西藤 真一	金沢大学	過疎地域研究シンポジウムでの産学官連携の実践に関する指導・助言	H26.2.9

◇審査会委員等

氏名	発令元	名称	任期
飯田泰三	島根大学	島根大学就業力育成支援事業外部評価委員会委員	H22.12.1~H27.3.31
生田泰亮	島根県中山間地域研究センター	島根県中山間地域研究センター運営協議会研究課題評価専門委員	H23.9.30~H25.3.31 H26.1.23~27.3.31
生田泰亮	江津市政企画課	江津市指定管理候補者選定委員会委員	H24.11.1~H27.10.31
生田泰亮	江津市	江津市都市計画審議会委員	H25.12.2~27.11.30
岩本浩史	国土交通省中国地方整備局	江の川河川整備懇談会委員	H25.4.30~H26.3.31
岩本浩史	浜田市	浜田市情報公開審査会並びに浜田市個人情報保護法審査会及び浜田市個人情報保護審議会委員	H25.10.1~27.9.30
江口真理子	島根県教育委員会	島根県総合教育審議会委員	H25.8.26~27.8.25
大橋敏博	(財)浜田市教育文化振興事業団	(財)浜田市教育文化振興事業団評議員	H22.6~H26.6
大橋敏博	浜田市総合調整室	浜田市行政改革推進委員会委員	H18.1~H24.1 H24.6.7~2年
大橋敏博	島根県芸術文化センター	島根県芸術文化センター協議会委員	H18.3.1~H22.2.28 H24.3.1~H28.2.29
大橋敏博	浜田市文化振興課	浜田市美術品等収集委員会委員	H18.4.1~H28.3.31
大橋敏博	独立行政法人日本芸術文化振興会	芸術文化振興基金運営委員会文化団体活動専門委員会委員	H24.8.1~H25.6.30
大橋敏博	浜田市教育委員会	浜田市文化財審議会委員	H24.4.1~H26.3.31
大橋敏博	益田市市長	益田市公平委員会委員	H25.1.1~H28.12.31
大橋敏博	文化庁	劇場・音楽堂等活性化事業協力者会議委員	H25.5.15~H26.3.31
大橋敏博	独立行政法人日本芸術文化振興会	芸術文化振興基金運営委員会地域文化専門委員会委員	H25.8.1~26.6.30
岡本 寛	益田市総務部総務管理課	益田市行政情報公開不服審査会委員	H24.4.1~H26.3.31 H26.5.14~H28.5.13
岡本 寛	(財)しまね女性センター	(財)しまね女性センター 評議員	H25.4.1~
岡本 寛	浜田市	浜田市情報公開審査会並びに浜田市個人情報保護法審査会及び浜田市個人情報保護審議会委員	H25.2.14~H27.9.30
沖村理史	浜田市くらしと環境課	浜田市地球温暖化対策地域協議会幹事	H21.2.2~H26.3.31
沖村理史	(財)三瓶フィールドミュージアム財団 (財)しまね自然と環境財団	しまね環境アドバイザー	H20.9.22~H21.3.31 H22.4.14~H26.3.31
沖村理史	島根県環境生活部環境政策課	島根県環境審議会委員	H24.7.1~H26.6.30
川中淳子	(独) 国立病院機構浜田医療センター	浜田医療センター地域医療支援病院諮問委員会委員	H23.4~H25.3 1年延長あり
川中淳子	浜田市市民福祉部調整室 浜田市地域福祉課地域福祉係 (H24.4~)	浜田市保健医療福祉協議会委員	H18.1.27~H20.3.31 H24.4.20~H26.3.31
木村秀史	邑南町	邑南町マスコットキャラクター一次審査会委員	H26.2.17
久保田典男	しまね地域産業活性化協議会	しまね地域産業活性化協議会委員	H23.8.21~28.3.31
久保田典男	浜田市観光協会	浜田市観光協会法人移行検討委員会委員の就任	H25.3.18~H26.3.31
久保田典男	株式会社はまた特産品センター	株式会社はまた特産品センター再構築検討委員会委員	H25.4.11~H26.3.31
久保田典男	公益財団法人ちゅうごく産業創造センター	「産学金官連携」推進のための方策検討調査委員会副委員長	H25.5.1~H26.3.31
久保田典男	NHK広島放送局	日本放送協会中国地方放送番組審議会委員	H25.6.1~H27.5.31
久保田典男	NPO法人石見銀山協働会議	石見銀山基金事業選定委員	H25.6.1~H28.3.31
ケイン・エレナ・アン	江津市小中高大連携英語研究会	江津市小中高大連携英語研究会プロジェクト会議	H25.6.27
ケイン・エレナ・アン	江津高等学校	中学生レシテーションコンテスト審査員	H25.11.6
小林明子	公益財団法人しまね国際センター	しまね国際センター評議員	H25.5.31~H28年6月頃
小林明子	島根県教育庁高校教育課	島根県高校生等留学支援事業運営指導委員（選考委員）	H25.7.24~26.3.31
小林明子	浜田市中学校長会	少年の主張浜田市大会審査員	H25.9.13

氏名	発令元	名称	任期
金野和弘	島根県環境生活部	島根県県民いきいき活動促進委員会委員	H25.4.1～H27.3.31
金野和弘	川本町商工会	院内ステーション実現化推進検討委員会委員	H25.7.1～26.2.15
西藤真一	浜田市地域公共交通活性化協議会	浜田市地域公共交通活性化協議会委員	H25.4.1～H27.3.31
西藤真一	島根県浜田県土整備事務所	地域整備方針検討会議オブザーバー	H25.6.13～9.30
田中恭子	島根県用地対策課	島根県事業認定審議会委員	H23.9.20～H26.9.19
田中恭子	公益財団法人しまね産業振興財団	(公財)しまね産業振興財団評議員	H24.6.18～平成28年定時評議員会終結の時まで
田中恭子	島根県総務部長	島根県固定資産評価審議会委員	H24.12.15～H26.12.14
田中恭子	島根県総務部財政課	改革推進会議委員	H25.4.1～H26.3.31
田中恭子	島根県商工会連合会	商工会のあり方(行動指針)検証・検討委員会委員	H25.7.1～26.3.31 ※10.31しまね県大会CD
寺田哲志	斐伊川神戸川治水出雲市協議会	グリーンステップ利活用検討会委員	H25.8.10～10.31
中川敦	浜田市社会福祉協議会	浜田市地域福祉活動計画策定委員会委員	H24.6～H26.6
八田典子	島根県土木部都市計画課	しまね景観審査委員会委員	H13.4～H28.3.31
八田典子	国土交通省中国地方整備局道路部道路計画課	社会資本整備審議会専門委員	H24.11.26～H26.11.25
八田典子	江津市	江津駅前施設公営型プロポーザル実施選定委員会委員	H25.9.4～10.31
八田典子	江津市	石州赤瓦研究会委員	H25.11.14～H26.3.31
八田典子	浜田市建設部建設企画課	浜田市景観計画策定委員会委員	H26.1.6～H27.3.31
林秀司	島根県地域政策課	島根県立しまね海洋館指定管理業務評価委員	H23.2.1～H28.1.31
林秀司	島根県都市計画課	島根県景観審議会委員	H20.2.1～H28.1.31
林秀司	島根県教育委員会文化財課	石見銀山遺跡調査活用委員会委員	H20.1.7～H23.1.6 H23.4.1～H26.3.31
林秀司	島根県土木部河川課	島根県河川整備計画検討委員会委員	H24.4.1～H28.3.31
林秀司	(公財)ふるさと島根定住財団	公益財団法人ふるさと島根定住財団評議員	H24.6.27～平成28年定時評議員会終結時まで
林秀司	島根県農林水産部農業経営課	島根県中山間地域等振興対策検討委員会委員	H24.8.27～H26.6.9
林秀司	島根県農林水産部農村整備課	島根県農地・水保全管理支払交付金検討委員会委員	委嘱の日～H29.3.31
林秀司	国土交通省中国地方整備局	江の川河川整備懇談会委員	H25.4.30～H26.3.31
林秀司	益田市	益田市景観審議会委員	H25.5.31～H27.3.31
林田吉恵	島根県(環境生活部環境生活総務課)	島根県消費生活審議会委員	H24.7.27～H26.7.26
光延忠彦	浜田市総合調整室	浜田市行政改革推進委員会委員	～H24.1 H24.6.7～2年
光延忠彦	益田市政策企画課	益田市行政改革審議会委員	H24.2～H26.1 H26.3.1～H28.2.28
福原裕二	島根県総務部総務課	第3期竹島問題研究委員	H24.10.28～H26.12.31
藤原真砂	浜田市役所建設企画課	浜田市都市計画審議会委員	H14.4.25～H26.2.14
藤原真砂	浜田市水産振興協会	浜田地域水産業構造改革推進プロジェクト地域協議会委員	H19.10～H22.10 H22.12～H25.12
藤原真砂	島根県都市計画課	島根県都市計画審議会委員	H22.11.10～H28.1.31
藤原真砂	島根県都市計画課	島根県都市公園指定管理業務評価委員	H22.11.1～H27.10.31
藤原真砂	島根県環境生活総務課(男女共同参画室)	島根県男女共同参画形成促進会議構成員	H20.10.1～ 任期の定めなし
藤原真砂	島根県河川課	都治川・三隅川治水対策検討委員会委員	H22.10.1～H23.3.25 H23.10.20～H25.10.19
藤原真砂	浜田圏域健康長寿しまね推進会議(浜田保健所)	浜田圏域健康長寿しまね推進会議	H25
藤原真砂	国土交通省中国地方整備局	江の川河川整備懇談会委員	H25.4.30～H26.3.31
松田善臣	浜田市地域公共交通活性化協議会	浜田市地域公共交通活性化協議会委員	H25.4.1～H27.3.31
三浦邦彦	江津市小中高大連携英語研究会	江津市小中高大連携英語研究会プロジェクト会議	H25.6.27
三浦邦彦	江津高等学校	中学生レシテーションコンテスト審査員長	H25.11.6
光延忠彦	浜田市企画財政部地域政策課	浜田市まちづくり総合交付金等改善委員会 委員	H24.9.27～H26.3.31
光延忠彦	全国健康保険協会島根支部	全国健康保険協会島根支部評議会評議員	H25.4.1～H26.10.31

《出雲キャンパス》

平成25年度 公立大学法人島根県立大学
地域連携推進センター出雲キャンパス運営会議 名簿

(任期：平成25.4.1～平成26.3.31)

職名	氏名	備考
教授	齋藤 茂子	・しまね看護交流センター長 ・地域連携推進センター副センター長 ・地域連携推進委員会委員長
准教授	松本 亥智江	・地域連携推進委員会委員 (担当：公開講座、キャンパスツアー等に関する事)
准教授	三島 三代子	・地域連携推進委員会委員 (担当：出前講座、ぎんざんテレビ出前講座等に関する事)
准教授	伊藤 智子	・地域連携推進委員会委員 (担当：キャンパスモニター、タウンミーティング等に関する事)
准教授	吾郷 ゆかり	・地域連携推進委員会委員 (担当：学生ボランティアに関する事)
助教	川瀬 淑子	・地域連携推進委員会委員 (担当：広報活動、キャンパスモニター、タウンミーティング等に関する事)
助教	梶谷 麻由子	・地域連携推進委員会委員 (担当：公開講座、キャンパスツアー等に関する事)
助手	小村 智子	・地域連携推進委員会委員 (担当：産公学連携、受託研究・事業、学生ボランティア等に関する事)
助手	嘉藤 恵	・地域連携推進委員会委員 (担当：出前講座、ぎんざんテレビ出前講座等に関する事)
企画員	大地本 一到	・地域連携推進委員会委員

出雲キャンパスの地域連携活動概要

しまね看護交流センター長 (地域連携推進センター副センター長) 齋藤 茂子

出雲キャンパスでは、これまで取り組んできた地域貢献や地域交流活動を、より一層充実した体制で行う拠点として、平成25年10月、「しまね看護交流センター」を設置した。センターには「キャリア支援部・看護研究支援部・地域連携推進部」の3つの部を置き、プロジェクトリーダーを中心に様々な活動を展開していくこととなった。

したがって、上半期は地域連携推進委員会として、下半期はしまね看護交流センター地域連携推進部の事業と重ねて活動を行った。詳細については、以下のとおり所掌事項に沿って報告する。

1. 出雲キャンパスプラットフォーム会議

島根県内及び近隣地域の保健・医療・福祉の各施設、行政機関、教育機関等と連携し、保健師、助産師、看護師等の看護実践の質の向上に資する専門知識や技術の教授、研究活動に対する支援、研究成果等の情報収集及び発信を行うとともに、看護学の教育研究活動を通して得られた成果を広く地域社会に還元することを目的として、平成25年10月1日「しまね看護交流センター」を設置した。

しまね看護交流センターは、出雲キャンパスにおけるCOC事業の活動拠点としての役割も期待されることから、10月1日の開所式に合わせて、第1回出雲キャンパスプラットフォームを開催した。出雲キャンパスプラットフォームの構成員として、参加を依頼した島根県、出雲市、島根県看護協会、各実習施設、県内看護師等養成学校・施設、近隣コミュニティセンターなどから24名の方の参加を得て、センター設置趣旨及びセンター事業説明のあと、センターに期待されることについて意見交換を行った。

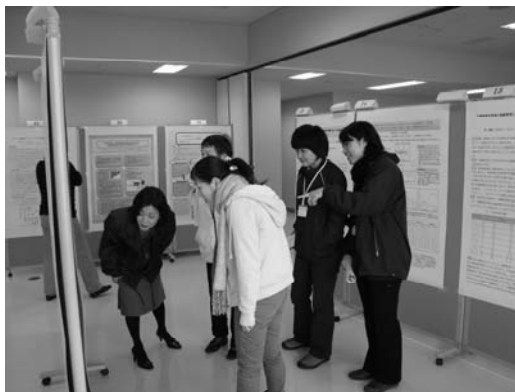
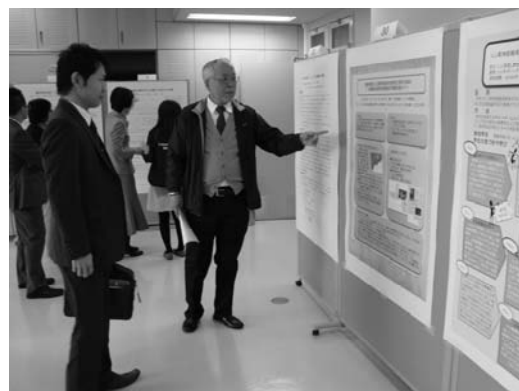
しまね看護交流センター

センターに3つの部を置き、大学の機能を生かした活動を行います。

- キャリア支援部**
 - 就職情報提供、就職支援セミナー開催、就職支援相談、就職支援セミナー開催、就職支援セミナー開催、就職支援セミナー開催
 - 就職支援セミナー開催
 - 就職支援セミナー開催
 - 就職支援セミナー開催
- 看護研究支援部**
 - 看護研究支援セミナー開催
 - 看護研究支援セミナー開催
 - 看護研究支援セミナー開催
 - 看護研究支援セミナー開催
- 地域連携推進部**
 - 地域連携推進セミナー開催
 - 地域連携推進セミナー開催
 - 地域連携推進セミナー開催
 - 地域連携推進セミナー開催

2. 研究に関する取り組み

平成26年3月4日、「平成25年度 しまね看護交流センター研究成果報告会及びCOC事業しまね地域共育・共創研究報告会」を同時開催した。午前は、出雲キャンパス特別研究費を獲得した28テーマ（自主テーマ研究 21件、特定テーマ研究 7件）及びCOC事業しまね地域共育・共創研究助成金を獲得した3テーマ（地域活動経費 1件、しまね地域共創基盤研究費 2件）について研究発表会（ポスター）を行った。熱心に意見交換が行われ、研究成果の共有を図ることができた。午後は、研究に関するフリートーキングを行った。ここでも活発に意見交換が行われ、今後の研究活動の活性化に大いに役立った。



3. 地域連携活動報告

I 活動の概要

1) 地域との連携推進に関すること

(1) 出雲キャンパスモニター制度の実施

平成25年度は、現職の看護職である卒業生・修了生モニターの日程調整が難しく参加者が少人数になったため、近隣地域モニターと卒業生・修了生モニターの合同会議とし、2回実施した(197ページ:出雲キャンパスモニターに関する取り組みの項参照)。

(2) 出雲キャンパスタウンミーティングの実施

平成 24 年度から始め、隠岐島前・益田の 2 地区で実施したタウンミーティングを、平成 25 年度は、10 月のしまね看護交流センター開所に向けた準備業務と重なったため、津和野地区 1 カ所のみで実施した。事例発表者として学生を 2 名参加させるなど、意見交換しやすい企画となるよう工夫した。(200 ページ：出雲キャンパスタウンミーティングに関する取り組みの項参照)。

(3) 出雲産業フェアへの参加

「出雲産業フェア 2013」に出展し、10 月に開所した「しまね看護交流センター」の紹介や、研究課題のポスター展示、ぎんざんテレビ出前講座の PR などを通し、共同事業や委託研究の獲得に向けた広報活動を行った。また、新たに学生の参加を得て、血圧測定の実演を実施した。(201 ページ：産公学連携に関する取り組みの項参照)。

2) 地域貢献に関すること

(1) キャンパスツアーの実施

相談窓口を通して依頼があった団体・学校にキャンパスツアーをコーディネートし実施した(202 ページ：視察・見学・体験学習の項参照)。

(2) 学生ボランティア

学生にボランティアマイレージ制度やボランティア保険加入登録者数の拡大を図り、学生ボランティアの推進を図った。また、ボランティア研修会・ボランティア交流会を開催した。災害ボランティア活動においては学生の自主的な大学間交流がみられた。(197 ページ：学生ボランティアマイレージに関する取り組みの項参照)。

3) 地域からの要望・相談対応窓口に関すること

地域貢献登録カードを活用し、各教員の地域貢献可能なテーマを一覧表にし、ホームページに公開した。10 月のしまね看護交流センター設置に合わせて、地域からの相談窓口を一元化(ワンストップサービス)し、対応した。

4) 公開講座等の生涯学習の実施に関すること

(1) 公開講座等の実施

各教員から公開講座登録カードの提出を求め、公開講座・リカレント講座・連携講座の年間プログラムを企画し、講座実施に際し支援した(190 ページ：公開講座等に関する取り組みの項参照)。

(2) 出前講座の実施

地域・団体・学校等からの相談・依頼に対して出前講座を企画・実施した（195ページ：出前講座に関する取り組みの項参照）。

(3) ぎんざんテレビ出前講座の実施

ぎんざんテレビ出前講座を企画し、収録日の調整を行った。また、講座の台本を編集し、記録誌「石見の風にのせて-ぎんざんテレビ出前講座の軌跡6-」として刊行した。（195ページ：ぎんざんテレビ出前講座に関する取り組みの項参照）。

5) 産公学連携に関すること

(1) 受託・共同研究／事業等の広報・コーディネート

受託研究・共同研究等相談窓口を設置し、受け入れ態勢を整えた。また、ホームページにこれまでの受託研究実績を含む教員の研究実績、産公学連携の実績等を公開した。新たに、北浜地域包括ケア支援検討会を発足し、平成26年度から本格的に事業を開始する（201ページ：産公学連携に関する取り組みの項参照）。

(2) 島根県、出雲市との連携事業

島根県、出雲市からの受託事業を本学教員により企画・実施した。また、公開講座の一部を出雲市と連携講座として実施した（203ページ：受託共同事業に関する取り組みの項参照）。

6) 広報活動に関する取り組み

ホームページにおいて取り組み内容の紹介を行うとともに、公開講座・キャンパスモニター会議・ボランティア研修会等の実施報告に写真を交えて随時掲載し、広報に努めた。

今後は、さらに多くの方々に活動内容について知っていただくため、効果的な広報の方法について検討していく必要がある。

7) 今後の課題

しまね看護交流センターの開設に伴い、地域に根ざした大学づくりをより一層進めるため、出雲キャンパスモニター制度、タウンミーティングを継続して実施し、地域住民からの意見を大学運営に反映させた。今後もモニター制度やタウンミーティングの充実を図りながら継続し、地域に根ざした大学づくりを進める。

また、教職員および学生が地方公共団体や企業などと連携し、公開講座等の充実、学生ボランティア活動の推進、産公学連携事業の実施など、地域のニーズを踏まえた社会貢献活動を行っていくためには、これまでの事業の実績を分析し、しまね看護交流センターの地域連携推進部として他の二つの部と上手く連動しつつ効果的な事業を展開する必要がある。

II 活動の実績

1 公開講座等に関する取り組み

1) 公開講座・リカレント講座等の基本的な考え方

公開講座：本学が持っている専門的、総合的な教育・研究機能を幅広く社会に公開することにより、看護に関する知識・技術および一般教養を身につけるための学習の機会を社会人等に広く提供する。

リカレント講座：看護に関する最新の知識や技術を修得する機会を提供し、仕事や社会活動に活用する能力を養うために、看護専門職者等を対象とした講座を開く。

2) 平成 25 年度公開講座実施要領

* 担当教員：助教以上の教員

* 講座内容：看護に関するもの、一般教養など

* 受講対象：一般、看護職者

* 開催回数：1 回または複数回

* 開催時期：平成 25 年 5 月～平成 26 年 3 月

* 開催場所：本学、その他県内

* 開催時間：本学の場合は 9:00～21:00 とする。ただし、学外の場合は当該施設と相談して決定する。

* 開催方法：

- ① 原則として担当教員が運営するが、求めに応じて地域連携推進委員会(事務局)が支援する。
- ② 公開講座の参加申込みの受付は管理課：公開講座担当が行う。応募を受け付けられない事態については担当教員が申込者に通知する。
- ③ 客員教授に公開講座に参加していただくこともある。
- ④ 修了証書は講座の担当教員が発行の有無を決定し、準備する。
- ⑤ 手話通訳・託児の希望者の受け入れは担当教員の判断により決定し、手配は担当教員が行う。託児を行う場合、大学で傷害保険に加入する。
- ⑥ 担当教員は「受講者入館証」を事前に管理課から受けとっておき、当日受付で受講者に配付する。

* 教材費：1 講座につき上限 1 万円とする。登録カードを通じてあらかじめ予算を提示し、地域連携推進委員会で協議・決定する。購入時は「物品購入依頼」を管理課に提出すること。材料費※は、受講者負担とする。

※…材料を用いて何かを作成するための費用

3) 公開講座概要

①模擬患者 (SP) 養成講座

開催日時	第1回 5月31日(金) 19:00~20:30
	第2回 6月28日(金) 19:00~20:30
	第3回 7月26日(金) 19:00~20:30
	第4回 9月20日(金) 19:00~20:30
	第5回 10月18日(金) 19:00~20:30
場所	出雲キャンパス 215 実習室 他
演題	第1回 「模擬患者とは～看護教育における模擬患者の意義～」
	第2回 「コミュニケーションの基本～聞くこと・伝えること～」
	第3回 「模擬患者に必要なこと～シナリオと役作り～」
	第4回 「体験してみよう！模擬患者 ～演技をするということ～」
	第5回 「模擬患者に必要なこと ～感想の伝え方, 効果的なフィードバックとは～」
講師	松本玄智江准教授 吉川洋子教授 平井由佳講師 岡安誠子講師 梶谷麻由子助教 川瀬淑子助教
受講者	第1回: 3名 第2回: 4名 第3回: 4名 第4回: 11名 第5回: 9名

②性格検査で自分を見つめよう!

開催日時	7月27日(土) 10:00~12:00
場所	出雲キャンパス 217 講義室
講師	橋本由里准教授 平井由佳講師
受講者	22名

③家で療養生活を送るための予備知識

開催日時	第1回 8月29日(木) 10:00~12:00
	第2回 9月6日(金) 10:00~12:00
場所	第1回 四絡コミュニティセンター
	第2回 出雲キャンパス 216 実習室
講師	吾郷ゆかり准教授 落合のり子准教授 三原かつ江講師 阿川啓子助教
受講者	72名

④アロマで心と身体のリフレッシュ in 隠岐

開催日時	第1回 9月7日(土) 14:00~17:00
	第2回 9月8日(日) 9:00~12:00
場所	第1回 隠岐の島町 中央公民館

第2回 隠岐の島町 中央公民館
講師 松本玄智江准教授
受講者 21名

4) リカレント講座概要

①米国の新聞コラムで学ぶ看護

開催日時 第1回 5月28日(火) 13:10~14:40
第2回 6月4日(火) 13:10~14:40
場所 出雲キャンパス 208講義室
講師 田中芳文教授
受講者 第1回:2名 第2回:4名

5) 看護協会連携講座概要

①臨床看護研究計画立案

開催日時 第1回 8月26日(月) 10:00~16:00
第2回 8月27日(火) 10:00~16:00
第3回 9月18日(水) 10:00~16:00
第4回 9月19日(木) 10:00~16:00
場所 出雲キャンパス 217講義室 他
講師 高橋恵美子准教授 吾郷美奈恵教授 石橋照子教授 梶谷みゆき教授
三島三代子准教授
受講者 第1回:59名 第2回:59名 第3回:51名 第4回:51名

②看護研究論文の質向上に向けた査読活用のすすめ

開催日時 9月13日(金) 10:00~16:00
場所 出雲キャンパス 217講義室
講師 石橋照子教授 吾郷美奈恵教授 梶谷みゆき教授
受講者 23名

6) 「医療人権を考える会」との連携講座概要

①たった一つの命 ~どう生きるか, どう支えるか~

開催日時 6月16日(日) 13:30~15:30
場所 出雲キャンパス 大講義室
講師 石垣康子氏(北海道医療大学大学院客員教授, 元東札幌病院副院長)
受講者 253名

7) 出雲市生涯学習講座との連携講座

①ストレスケアセミナー

開催日時 7月20日(土) 10:00~12:00
場所 出雲キャンパス 217講義室
講師 石橋照子教授 松谷ひろみ助教
受講者 42名

②命を考えるシリーズ第3弾「あなたはどのように看取り、看取られたいですか？」

開催日時 1月29日(水) 13:30~16:00
場所 出雲キャンパス 大講義室
演題 ①「平穏死のすすめ」
②「在宅で看取るということ」
講師 ①石飛幸三氏
(世田谷区特別養護老人ホーム芦花ホーム医師
平成25年度本学客員教授)
②高橋京子 (花みずきナースステーション代表取締役)
受講者 215名

③アロマで心と身体のリフレッシュ Part.8

開催日時 第1回 2月8日(土) 10:00~12:00
第2回 2月22日(土) 10:00~12:00
第3回 3月15日(土) 10:00~12:00
場所 出雲キャンパス 215講義室 他
講師 松本玄智江准教授
受講者 第1回:13名 第2回:11名 第3回:9名

8) 島根県健康福祉部健康推進課後援講座

①公衆衛生看護学実習の効果的な指導

開催日時 8月5日(月) 10:00~16:00
場所 出雲キャンパス 217講義室
講師 吾郷美奈恵教授 齋藤茂子教授 落合のり子准教授 永江尚美准教授
小田美紀子講師 祝原あゆみ助教 小川智子助教
受講者 8名

9) くすのきプラザとの連携講座

①プレパパ・ママ講座 ~赤ちゃん先生から学ぼう! 妊娠・出産・子育て~

開催日時 第1回 7月21日(日) 10:00~12:00

	第2回 11月23日(祝) 10:00~12:00
場所	第1回 いずも子育て支援センター 第2回 川跡コミュニティセンター
講師	長島玲子准教授 井上千晶講師 多々納憂子助教
受講者	第1回:23名 第2回:24名

10) 今後の課題

平成25年度の受講者総数は約1,000名(昨年度比126%)であった。公開講座の課題として受講生確保があり、今年度は広報活動として、地元新聞へのチラシ(山陰中央新報,旧出雲市地区)折り込みの他、ポスター・リーフレットを県内142施設に送付した。また、キャンパスモニターからの意見を取り入れ、近隣の3コミュニティセンター(鳶巣・川跡・高浜)へは、講座開催1ヶ月前に別途チラシ(各戸配付もしくは回覧)を配付した。これらの効果か今年度は受講生が大幅に増加した。他にも、各種団体との共催講座が増えており、このことも受講生確保につながったのではないかと思われる。

参加しやすい講座をめざして、土日開催や夜間開催も積極的に取り入れてきた。また、講座が7~9月に集中しやすいため、公開講座を実施する教員の協力を得て、1年間を通して講座を開講できるようにした。公開講座実施後は、公開講座の様子をホームページで随時閲覧できるようにしたが、タイムリーな報告とならないことがあり、今後の課題である。

今後の取り組みとして①講座が重ならないように開講時期を調整する、②開講時期に合わせての広報活動をきめ細かく実施する、③本学以外の開講など受講機会を増やす、④講座終了後はタイムリーに講座の様子をホームページに掲載する、などに取り組んでいく必要がある。

2 出前講座に関する取り組み

平成 25 年度は、地域連携推進委員会を窓口に関地域や各種団体からの出前講座の相談・依頼を受け 15 講座を実施した（表 1）。今後も地域や各種団体からの出前講座の相談・依頼の対応していきたい。

表 1 平成25年度 出前講座一覧

依頼者	開催月日	担当者	内容
出雲市佐田町吉野地区自治会長	5月26日	松本亥智江	日常生活におけるアロマの楽しみ方
	1月13日	小田美紀子	人間関係を良好に保つために必要なこと
いきいき健康教室鳶巣	5月23日	吉川洋子	出すことは基本ー便秘の予防法ー
	7月25日	松本亥智江	若々しい脳と身体を維持するために
北浜コミュニティセンター	12月14日	吾郷美奈恵	生活習慣病予防について
津和野町役場地域包括支援センター	11月16日	伊藤智子	認知症予防について
いきいき健康教室鳶巣	10月17日	齋藤茂子	地域活動をして得るもの
	11月14日	祝原あゆみ	高齢者の食事
はまひるがおの会	11月14日	松本亥智江	いきいき脳の作り方
	1月9日	梶谷麻由子	血圧の話
川跡長生会	8月23日	伊藤智子	老いを知らずに生きる方法
	10月25日	岡安誠子	寝たきりにならない暮らし～転倒予防～
	1月24日	小田美紀子	元気に長生きするための日常生活について
日御碕コミュニティセンター	2月27日	吉川洋子	出して元気、腸を整える
出雲市民病院（会員向け）	3月20日	伊藤智子	認知症、老いについて

3 ぎんざんテレビ出前講座に関する取り組み

石見銀山テレビ放送株式会社と連携した出前講座は 4 年目となり、今年度は 24 講座を収録した（表 2）。放送エリアである大田地域のほか、県内各地で講座内容の周知ができるよう、記録誌や DVD を作成し活用していきたい。

表2 平成25年度 ぎんざんテレビ出前講座一覧

回	テーマ	担 当
1	生活習慣を見直しみんなで支える健康づくり	吾郷美奈恵
2	上手に睡眠を取り、明日への活力へ	平井由佳
3	骨盤底の衰えを防いで快適ライフ	長島玲子
4	お酒の話し～健康的なお酒の飲み方をしましょう～	永江尚美
5	たばこの話し～喫煙する人もしない人も考えてみましょう～	永江尚美
6	慢性心不全をもつ人の暮らし方	三島三代子
7	家庭でできる簡単リラクゼーション～ハンドマッサージ～	梶谷麻由子
8	スキンケア	和田由佳
9	睡眠	和田由佳
10	歯周病から体を守る？！	伊藤奈美
11	上手にお酒とつきあうために（１）（２）	石橋照子
12	子どもたちにとって大切なワクチンの話～予防接種～	高橋恵美子
13	避難所で活かす健康生活の知恵	落合のり子
14	認知症を予防しよう！～楽しくできる！ フリフリグッパ体操～	平塚知子
15	赤ちゃんと一緒に楽しもう～ママ・パパのための簡単エクササイズ～	井上千晶
16	初めてのベビーマッサージ －服を脱がせないタッチングとオイルをつかわないマッサージ－	濱村美和子
17	寝たきりにならない暮らし2－低栄養の予防	岡安誠子
18	仕事と介護を両立するには～「小規模多機能居宅介護と訪問看護」～	吾郷ゆかり
19	認知症と食事	山下一也
20	腰にやさしいお話 ～腰痛予防と対策～	川瀬淑子
21	助産師になりたい	嘉藤 恵
22	かなえたい！私の夢～看護師への道のり～	三原かつ江
23	保健師の魅力	小川智子
24	経験者による支援－がんのピアサポート	平野文子

4 地域交流事業

1) 出雲キャンパスモニター制度に関する取り組み

本キャンパスに対する地域住民の理解と連携を深め、地域に開かれたキャンパスをめざすとともに、本キャンパスの活動や事業、安全確保について意見や情報を得て、今後の大学運営に反映させることを目的とした、近隣地域モニター制度を平成 22 年度から開始した。さらに平成 23 年度からは、卒業生・修了生モニターも募集している。

今年度は 1 回目を平成 25 年 6 月 4 日（火）午前に出雲キャンパス 3 号館 217 講義室において開催し、近隣モニター 10 名、卒業生・修了生モニター 2 名の参加を得て、モニター委嘱状交付の後、学内の年間行事の説明、地域連携に関する事業の説明を行った。

意見交換では、「専攻科公衆衛生看護学専攻の学生を主とした学生との交流が地域にとってはとてもありがたい。」「学部の学生とも交流がしたい。」等学生との関わりを望んでおられる意見が多くあった。また、要望として、「孤独死や介護問題、また、子育て中のお母さんの孤立などの問題にも目を向けていただき、指導を頂きたい。」「3 年前に検査入院時に病院の食事が薄味だったが、退院後は濃い味付けの食事に戻ってしまった。鳶巣の慶人会は 300 人いるが、今後食生活について知識を教えてほしい。」などの声があった。

第 2 回目を平成 26 年 2 月 18 日（火）午前 217 講義室にて開催し、近隣モニター 7 名、卒業生モニター 1 名の参加を得て、年間活動の報告（しまね看護交流センターの活動、学生生活、教育等について）を行った。

近隣モニターからは出前講座がとても好評なこと、「看取り」をテーマに取り上げた公開講座がとても勉強になったこと、学生が地域に馴染んでいて嬉しいこと、などの意見が出された。また、学部教育で、1 年次に近隣の高齢者宅を訪問するが、その後どのように発展的に地域を学ぶのかについて質問があり、学部長から説明があった。学生の宿舍や親元を離れた生活での食事についても意見を交換した。

今後の課題

近隣モニターは大学から近いことや学生との繋がりもあり、大学との接点が保たれているが、卒業生モニターは仕事の都合や大学までの距離も遠い場合があり、接点が持ちにくい現状である。普段の大学の行事には参加が難しい場合が多いが、現場で働く立場で母校に望みたいこと等を会議やアンケートを通して、今後も把握していきたい。平成 25 年度は、モニターに参加してもらえる行事が少なかったことから、引き続き平成 26 年度モニターとして就任して頂き、交流を深め、大学運営や教育に対する意見を聞いていきたい。

2) 学生ボランティアマイレージに関する取り組み

(1) 学生ボランティア研修会

目的：研修を通して「ボランティアとは何か」「自分たちにできることは何か」について考えボランティア活動の動機付けをする。

日時：平成 25 年 5 月 15 日（水）13：10～15：50

場所：217 講義室

内容：①講演会 森菊子氏（ホスピス病院ボランティア・コーディネーター）

「ボランティアのすすめ～ホスピスを支えるボランティア活動を通して～」

参加者：学生 20 名（出雲 15 名，浜田 2 名，松江 3 名）

教員 11 名 職員 4 名 外部の方々 21 名 計 56 名

成果と課題：森氏は「誰かのために何かをしたいという思いは必要ですが、継続するには自らが楽しむこと。どれだけ多くのことをするかではなく、その人のためにどれだけ心をこめるかが大切。」と、ボランティアの意味やボランティアだからできることなどについて話され、ボランティア活動から得られるものについて理解した。

参加者による講演や活動紹介について評価は高く、ボランティア活動への意識は高まったといえる。しかし、研修会への学生の主体的な参加が少なく、研修については原則 1，2 年次生は参加するようにしたい。地域のボランティア・ニーズと学生の関心をつなぎ、効果的なボランティア活動を支援する工夫が必要である。

(2) 浜田・松江・出雲 3 キャンパス合同学生ボランティア交流会（浜田キャンパス当番）

目的：3 キャンパスのボランティア活動での学生同士のつながりをつくり、宿泊で交流し、ボランティアについて語り合い 3 キャンパスでのボランティア活動を企画する。

日時：平成 25 年 11 月 9（土）14:00～10 日（日）～15:30（浜田キャンパスに宿泊）

場所：浜田キャンパス 交流センター 研修室

参加者：学生 23 名，教職員 8 名（出雲キャンパス学生 5 名，教員 2 名）

内容：「地域・社会貢献ボランティア活動」について

◇交流会

<Ice break> 自己紹介ゲーム

<My キャンパスのお勧めボランティア！（ワールドカフェ方式）>

- ・どのような活動をしてきたか、していきたいか
- ・取り組む上での課題や反省点、良かった事例のアドバイス
- ・今後の抱負、3 キャンパスが連携して取り組める活動、等々

◇宿泊による交流と次年度計画

H26 年度実施予定の 3 キャンパス合同学生ボランティア活動を計画した。

成果：普段、交流の少ない 3 キャンパスの学生同士が語りあうことでお互いのボランティア活動や考え方を知る機会となり今後、継続的に交流するきっかけ作りになった。

(3) 災害ボランティア活動支援

いわて銀河ネットによる募集があり、広報の結果8・9月の参加希望があった。
看護学科1年次生 5名が参加した。

その後も島根大学、島根県立大学の学生が協力して災害支援活動を継続するために企画する主体的な活動を支援している。

(4) 学生ボランティア・マイレージ制度実績

学生ボランティア保険加入数 180人

登録学生数：181名（看護学科：1年56名 2年58名 3年54名）

（専攻科：公衆衛生看護学専攻11名 助産学専攻2名）

活動報告件数：1年・・・58件

2年・・・68件

3年・・・3件

公衆衛生・・・1件

助産・・・0件

計 130件

活動内容：下記表参照

活 動 内 容 内 訳	参加した活動件数
障がい児支援・福祉施設イベント	15
大学・病院・行政各行事支援	17
健康イベント（啓発活動）	16
小中学生自然体験・合宿	19
コミュニティーセンター等のイベント	3
地域交流・まちづくり	23
ボランティア活動研修	20
その他	17

学生ボランティア・マイレージのポイントの上位

一位：看護学部2年（8300点） 二位：看護学部2年（8000点）

三位：看護学部1年（7000点）

*平成26年5月28日（水）のボランティア研修会の際に表彰した。

(5) 地域からのボランティア依頼・受け付けの流れ

学生ボランティアに関する外部からの問い合わせ・連絡調整・依頼を受けたり、募集を受けた後の応募の流れについて共通する対応ができるようにフローチャートを作成した。時系列に整理できるようにし、Vドライブのしまね看護交流センター／地域連携推進部／学生ボランティア関連／ボランティア依頼実績表により関係者が情報を共有できるようにした。

(6)まとめと今後の課題

新入生オリエンテーション時に学生ボランティア・マイレージ制度と保険加入について説明し登録者を募った。保険加入はH25年10月には目標の150名以上を達成したが、在校生には年度途中でも適宜PRをする必要がある。ボランティア活動報告とマイレージ申請は昨年度より大きく増加した。実施報告の写真添付を任意として報告の方法を簡便にするなどの改善策の効果があったと思われる。学生ボランティア・マイレージ得点の上位3名についてはH26年度のボランティア研修会の際に表彰した。

ボランティア研修会では学生の主体的な参加が少ないことが課題である。学外の施設・機関からは学生のボランティアを期待する声が多く聞かれるため、学生の地域貢献活動を大学として支援していけるよう引き続き取り組む必要がある。3キャンパス合同学生ボランティア交流会や災害ボランティア活動のための学生交流は進んでいるので、継続して後方支援を行う。

しまね看護交流センター地域連携推進部の学生の地域交流・地域貢献プロジェクトと連携して、学生がボランティア活動に主体的に参加できるよう情報提供や促しにより継続的に支援する必要がある。

3) 出雲キャンパスタウンミーティングに関する取り組み

(1)平成25年度 島根県立大学出雲キャンパスタウンミーティング in 津和野

目的：安心して暮らせる町づくりのために、津和野町民、保健医療福祉従事者、行政担当者、出雲キャンパス教員・学生により「津和野町の保健医療福祉の現状と課題」「豪雨災害の経験から」「行政や出雲キャンパスへの期待」等について意見交換を行い、津和野町の地域特性と人づくりについて相互の理解を深める。
また、出雲キャンパスは、出された意見を今後の大学運営に反映する。

日時：平成26年3月1日（土）13:00-16:00

場所：津和野町民センター 大集会室

メインテーマ：「暮らしを支える保健・医療・福祉と人づくり」

～この町で安心して暮らし続けるために～

参加者：町民の皆様 津和野町長 津和野共存病院長 津和野の地域医療を守り支援する会会員ほか 保健・医療・福祉関係従事者 行政関係者（出雲キャンパス専攻科修了生含） 高校関係者

本学から：山下副学長 吉川学部長 梶谷AD副センター長 齋藤センター長
地域連携推進委員会（地域連携推進部）委員 稲垣室長 大地本企画員
学生（津和野町出身の3年次生、フィールド学習参加者2年次生）

内容：津和野共存病院、須山信夫院長より「津和野町における地域包括医療・ケア」、島根県立大学出雲キャンパス2年次生井原奈緒より「フィールド学習に参加して」、島根県立大学出雲キャンパス3年次生益井みづきより「看護を学んで考えること」、島根県立大学出雲キャンパス山下副学長より「島根の地域特性と看護教育」と題して話題提供を行った。後半は「暮らしを支える保健・医療・福祉

と人づくり ～この町で安心して暮らし続けるために～」をテーマに、下森博之氏（津和野町町長）、桑原泰彦氏（津和野町特別養護老人ホーム施設長）、喜島悦子氏（津和野共存病院看介護部長）、大中八臣氏（津和野町の医療を守り支援する会代表）、西藤絢子氏（津和野町保健福祉課保健師：出雲キャンパス専攻科修了生）の5名のパネリストの方々からの話の後、津和野町民、看護師等医療従事者、大学関係者を交え、意見交換を行った。

結果：一般83名、大学関係者14名（話題提供学生2名含）、津和野町関係者5名の参加があった。話題提供の内容について98%の人が大変よかった・よかったという回答だった。また、パネルディスカッションの内容は81%の人が大変よかった・よかったという回答だった。地元でのタウンミーティング開催希望は76%の人が希望していた。参加者からは、「学生の話聞き刺激になった」「学生さんにもっと津和野にきてもらい、現状を知ってほしい」「地域の医療、生活支援体制を守り、充実させることは、地域の存在に関わることと改めて認識した。」「大変興味深い内容だった。この活動をすることで町民の方や行政の声を生で聴くことができた。大学教育において地域のために力を注いでくださっていることも理解し、組織として更に協力体制を整える必要を感じた。」「初めて参加してみて大変よかったと思う。1日でも元気で生活したいと思う。」といった多くの意見や感想があった。

成果・課題：少子高齢化が進む医療過疎に豪雨災害が重なった多くの健康課題を抱える津和野町での開催は、地元からの期待が大きく、やりがいのあるタウンミーティングとなった。これを機会に津和野町との交流を続け、人材育成のみならず、地域に貢献する島根県立大学としての役割を果たしていきたい。また、大学運営や入学者の確保、人材確保等の話しに終わらず、地域の特性や課題を踏まえ、人づくりについて議論できるタウンミーティングを目指したい。

4) 産学連携に関する取り組み

① 受託・共同研究／事業等の広報・コーディネート

HPでこれまでの受託研究実績を含む教員の研究実績、産学官連携の実績等を公開し、受託研究・共同研究等相談窓口を設置し、それぞれ担当者を置き、受け入れ態勢を整えた。受託研究等における取り扱い要領に基づき、島根県（1件）、出雲市（2件）からの受託事業を実施した。

出雲市との連携協定に基づく受託事業として、児童虐待予防研修を本学教員により画・実施した。講座は大学を会場に3講座実施した。

② NPO法人・関係団体・企業等との連携

出雲ドームで11月2日・3日に開催された出雲産業フェアに120社・団体と共に出展（参加）した。山下教授・加納教授の研究を紹介したほか、しまね看護交流センターの紹介、学生による血圧測定など健康チェックを行った。また、研究実施状況・出前講座等の受け入れテーマの一覧表を作成し、配付／説明した。成果としては市内の企業及び団体から2件の照会があった。また、主催者である出雲市の産業振興課の職

員に中小企業等への研究打診を依頼した。

北浜地域包括ケア支援検討会に大学のスタッフ8名が委員となり住民と行政、大学が協働で行う地域づくり活動を開始した。

③ 各種審議会・委員会等への参加

77の各種審議会・委員会に所属し、118回各種審議会・委員会に出席し活動を行った。

5 視察・見学・体験学習

1) キャンパスツアーに関する取り組み

近隣地域コミュニティセンターをはじめ、県内を中心に様々な団体・学校から、出雲キャンパスの施設見学、ミニ講義・講話などの依頼が寄せられ随時対応してきた。平成24年度にこれらの対応を整理し、新規事業「シニア・ジュニア版キャンパスツアー」を企画して、地域・各種団体等からの相談や依頼に対応することとした。平成25年度は、下記のとおり、シニア版5件・ジュニア版2件のキャンパスツアーを実施した。

(1) シニア版キャンパスツアー

日時	依頼者および対象者	目的等	担当者	実施内容				
				講義見学	ミニ講義(ミニ講話)	学内見学	学食体験	その他
6月25日 (火)	出雲市社会福祉協議会 佐田支所 虹の会(認知症家族の会)14名		松本	なし	認知症について (山下一也)	あり	あり	
7月2日 (火)	雲南保健所 医事・難病 支援グループ 雲南市パーキンソン病 患者家族会「ひまわりの 会」(代表:黒田一夫) 奥出雲町パーキンソン 病家族会「つばさの会」 (代表:伊藤正幸) 30名	家族会のお出かけの集 い	松本 嘉藤	なし	(山下一也)	あり	あり	
9月27日 (金)	四絡民生委員児童委員 協議会(副会長:嘉儀宏 一) 民生委員児童委員 13名	民生委員児童委員の資 質の向上を目指す	伊藤	なし	島根県における高齢 者福祉・障害者福祉 の現状と課題 (永江尚美)	なし	なし	
11月22日 (金)	にこにこポット(高齢者介 護ボランティア):代表長 谷川公子	高齢者介護をするにあ たつての技術を高める	松本	なし	なし	あり	なし	介護技術体験(ベッ ド上での身体の動か し方、車いすへの移 乗など)
1月16日 (木)	雲南市立の小中学校教 頭会(加茂小学校教頭 杉原先生) 20名	現場教員として看護を 志す子ども達のため に出雲キャンパスの看護 教育の状況/看護教育 を取り巻く情勢などにつ いて、看護教育の現状 について理解する	松本	なし	看護学教育の動向 (吉川洋子)	あり	なし	なし

(2) ジュニア版キャンパスツアー

日時	依頼者および対象者	目的等	担当者	実施内容				
				講義見学	ミニ講義(ミニ講話)	学内見学	学食体験	その他
7月8日 (月) 14:30~ 16:00	本庄中学校 3年生20名	①島根の地域医療の実 態を知り、今の自分を見 つめ、自分自身の将来 の職業や生き方につい て考える。 ②働くことについての理 解を深め、その意義を 発見する。	松本	なし	島根県の医療の現状 (三原かつ江)	あり	なし	手洗いの実習
10月25日 (金) 10:00~ 14:00	美保関中学校 2年生38名、引率3名 1年生34名、引率2名	地域課題(地域医療)に 即した「ふるさと教育」 事業 ①生命の尊厳について 考える機会とする。 ・生命誕生の現場に関 する講話 ・沐浴、育児体験	松本	なし	私の誕生日 (長島玲子)	あり	弁当持参	赤ちゃん、 元気かな? ~聴診器で 聴いてみよう~ (井上千晶) (多々納憂子) (長島玲子)

6 受託共同研究

1) 島根県委託事業：がん相談員等資質向上事業(平成23～25年度)

<目的>

がん患者の不安を解消するには、相談に対応できる人材の育成が必要であることから、がん情報提供促進病院の相談員等を対象とした研修を実施し、相談の質の向上を図る。

<事業内容>

1. がん相談に関する研修の実施
2. ピアサポーター養成に関する研修の実施

<事業の実施概要>

2つの事業の委員会を設けて計画・実施・評価を行い、互いに連携を図りながら取り組んだ。

1. がん相談に関する研修の実施

1) 対象者：がん診療連携拠点病院及びがん診療連携推進病院のがん相談員・医療ソーシャルワーカー(MSW)・看護職、情報提供促進病院及び県内病院のがん相談に携わるMSW等

2) 具体的な事業内容

- ・がん相談研修に関するプログラムの作成
- ・がん相談に関する研修会の開催

島根県東部・西部での地区研修会、中央研修会の開催(3回/年)
ニーズ調査に基づいた研修プログラムの企画・評価

3) 事業の概要(年度毎)

(1)平成23年度：研修プログラムの検討、がん相談員研修会の実施・評価

(2)平成24年度

- ①がん相談員を対象としたニーズ調査の実施
- ②ニーズ調査結果に基づくがん相談員研修会の企画・実施・評価

(3)平成25年度

①がん相談員研修会を開催し、東部地区研修会は41名、中央研修会は51名が受講した。

・がん相談員を対象としたニーズ調査結果から、日頃の実践で難しいと感じる「アセスメント」と「認識のズレがある場合の対応」について研修を企画した。

・研修の共通テーマを設け、地区研修会で基礎編、中央研修会で発展編の内容とした。

・地区研修会(東部研修)、中央研修会の2回を実施(西部研修は豪雨のため中止)。

・地区研修会ではDVD教材を自主制作した(「関係者間に認識のズレがある事例」)。

②「がん相談員研修事業」の評価及び事業報告に関するアンケート調査を実施した。



平成25年度研修会ポスター



中央研修：グループワーク



研修委員長による解説

2. ピアサポーター養成に関する研修の実施

<がんのピアサポーターの役割>

がん治療体験者が、がんの正しい知識や情報リテラシーを身につけ、がん患者の学習や情報収集をサポートする。必要に応じ、自らの体験を紹介し、同じ「がん体験者」として様々な悩みに共感的に耳を傾けながら、がん患者・家族が安心して療養できるサポートを行う。

- 1) 対象者：島根県内に在住するがん患者
- 2) 具体的な事業内容
 - ・ピアサポーター養成研修に関するプログラムの作成
 - ・ピアサポーター養成研修の実施・評価
 - ・ピアサポーターによる相談会の実施
- 3) 事業の概要(年度毎)
 - (1) 平成 23 年度
 - ① 研修プログラム作成のための情報収集，先進地視察，シンポジウム参加を行う。
 - ② 市民講演会(がんピアサポーターの意義・必要性，活動の実際を紹介)を県内東部・西部地区の2会場で開催し，患者・家族，医療・行政関係者，学生等 228 名の参加があった。
 - (2) 平成 24 年度
 - ① 東部地区を対象にした研修説明会・研修会を開催し，13名の受講・修了認定をする。
 - ② 研修プログラムの評価・見直しを行う。
 - (3) 平成 25 年度
 - ① 市民講演会の開催
 - ② 西部地区を対象にした研修説明会・研修会を開催し，7名の受講・修了認定をする。
 - ③ ピアサポーターによる相談会のための先進地視察(千葉がんセンター)を行う。
 - ④ 「島根県がんピアサポーター相談会」を開催(1/23(木)：松江市立病院，2/2(日)：ビッグハート出雲)し，6件(9名)の相談があった。

(詳細については，平成 25 年度島根県委託「がん相談員等資質向上事業報告書」参照)



島根県がんピアサポーター養成研修会ポスター

ピアサポーター講師による講義と演習の様子

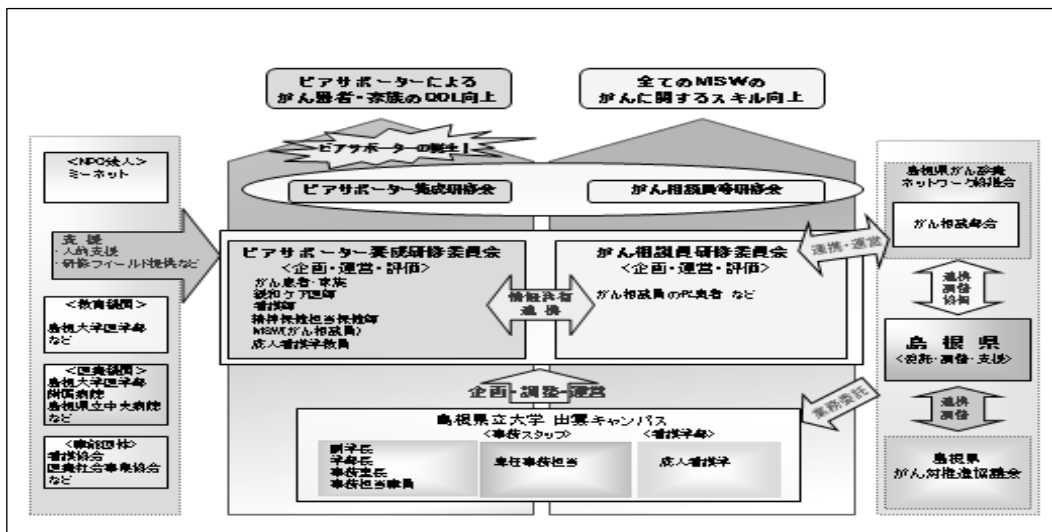


図1. 事業:委員会(ピアサポーター養成研修・がん相談員研修)と関係機関との連携

2) 平成 25 年度杵築地区介護予防教室事業（白うさぎの会）；出雲市

期間：平成 25 年 4 月 17 日～平成 26 年 3 月 31 日

業務受託の場所：杵築地区

事業受託料：525,000 円

関係機関：出雲市高齢者福祉課・大社支所市民サービス課，出雲市社会福祉協議会大社支所，大社高齢者あんしん支援センター，大社コミュニティセンター，杵築地区社会福祉協議会，健康づくり推進委員

出雲キャンパス事業参加者名

齋藤茂子，山下一也，永江尚美，松本亥智江，伊藤智子，小田美紀子，加藤真紀，祝原あゆみ，小川智子，梶谷麻由子，平塚智子，岩成奈々恵

（事業の概要）

（1）目的

出雲市と島根県立大学出雲キャンパスとの協働により，杵築地区の高齢者を対象に地域のネットワークを活用した介護予防教室を試行し評価を行う。認知症予防プログラムを軸に介護予防教室を試行しながら地域のネットワークづくり，参加高齢者のニーズの把握，スタッフの育成に重点をおいた活動を行う。

（2）実施内容

① 地元説明会	1 回	28 名
② 事前調査	1 回	31 名
③ 介護予防教室	14 回	366 名（延べ）
④ 研修会	2 回	77 名（延べ）
⑤ 事後調査	1 回	25 名
⑥ 事業報告会	1 回	27 名

（3）評価内容等

教室開始時と終了時の認知機能，抑うつ，幸福感，社会関連性指標，体組成測定等，参加簿の記録，はげみ記録，終了時における参加者へのアンケートほか

（4）成果および課題

杵築地区役員の皆様のリーダーシップは見事だった。回想法もしかり，ミニ講話では質問が多く出され，盛会であった。

グループ回想法，ミニ講話および研修会を実施し，一度ではあるが出雲キャンパスの見学を企画した。毎回，地区の高齢者 30 名程度の参加があり，グループ回想法では，回を重ねるごとに慣れ親しみ会話が弾んだ。大社遷宮による大社地域の盛り上がりもあったが，地元の伝統や文化，しきたりなどの歴史や地区の特性について語り合うことができた。研修会では，過去に事業を実施した地域の方の参加があり，地域を越えて交流の場となった。引き続き，継続して活動が行われることを期待している。

★ 詳細については，平成 25 年度「白うさぎの会報告書」参照

3) 平成 25 年度児童虐待防止推進研修事業；出雲市

本事業は 3 年目を迎え、出雲市要保護児童対策地域協議会（事務局；出雲市子育て支援課）と出雲キャンパス（スタッフ 10 名）が共同で実施した。

年々深刻化する児童虐待の現状を市民一人一人が理解し、適切に対応できる力量を高めること、また、児童虐待が複雑、多様化する中で当事者を支援する地域の支援ネットワークづくりの強化が必要とされている。

今年度の講座は、虐待を予防する日常の子育て支援のあり方、虐待における親や子どもの病理とこころの医療等について学習し、特に地域と医療機関の連携に焦点をあてたネットワークづくりについて検討した。

今後さらに、市民一人ひとりが現状を知り、児童虐待について理解を深めるための場づくりや親子の心の医療をはじめとする当事者の支援についても力量を高めることが必要といえる。

プログラム概要と参加者数

第 1 回

日 時：2013 年 8 月 24 日（土） 13：20 ～ 16：30

場 所：島根県立大学 出雲キャンパス 大講義室

テーマ：「母子保健活動の現状と子ども虐待予防のための子育て支援」

内 容：○報告 「出雲市の母子保健の現状報告」

○講演 「普段の子育て支援から始まる子ども虐待予防」

参加者：90 名

第 2 回

日 時：2013 年 9 月 22 日（日） 13：20 ～ 16：30

場 所：島根県立大学 出雲キャンパス 大講義室

テーマ：「医療における子ども虐待防止への取り組みと支援ネットワークづくり」

内 容：パネルディスカッション

参加者：44 名

第 3 回

日 時：2013 年 11 月 16 日（土） 13：20 ～ 16：30

場 所：島根県立大学 出雲キャンパス 大講義室

テーマ：「子ども虐待と精神障がいとの関連性・親子の心の医療のあり方」

内 容：講演 「子ども虐待における親の病理・子どもの病理と心の医療」

参加者：77 名

（詳細については、「平成 25 年度児童虐待防止推進研修事業報告書第 3 巻」参照）

《松江キャンパス》

平成 25 年度 公立大学法人島根県立大学
 地域連携推進センター松江キャンパス運営会議 名簿

(任期：平成 25.4.1~平成 26 年 3.31)

職 名	氏 名	備 考
教 授	小泉 凡	・地域連携推進センター副センター長
助 教	水 珠子	・地域連携推進委員会委員 ・地域連携コーディネーター (学生ボランティア推進)
講 師	矢島 毅昌	・地域連携推進委員会委員 ・地域連携コーディネーター (教育機関連携)
講 師	ラング・クリス・アレキサンダー	・地域連携推進委員会委員 ・地域連携コーディネーター (公開講座連携)
管理課長	上代 勇夫	・事務局委員
嘱託員	藤原 香緒里	・事務局委員

平成 25 年度 松江キャンパスの地域連携活動概要

平成 25 年度の松江キャンパス地域連携推進センターでは、公開講座・教育機関連携・学生地域ボランティア活動の推進の 3 つを軸に活動した。また正課授業・卒業プロジェクト・サークル活動を通して、あるいは学科、グループ・個人の単位でも活発な地域貢献活動が行われた。

さらに、文部科学省「地（知）の拠点事業（大学 COC 事業）」の採択にともない、COC 事業準備委員会を設置し、キャンパス・プラットフォーム「しまね地域共生センター」の開設準備を進めた。以下の目次に従って、松江キャンパスの地域貢献活動をまとめることにする。

1. 地域連携推進委員会の活動
2. 地域に関する教育・研究活動
3. 公開講座・講演会等の開催
4. 地域活性化支援
 - (1) 企業・団体・NPO 法人等との連携
 - (2) 自治体等との連携
5. 学生による地域貢献活動
6. 教育機関等との連携－保・幼・小・中・高・大の教育連携
7. 教育課程のための地域の施設・機関との連携
8. おはなしレストランライブラリーの地域連携活動

25 年度の特筆すべき活動として、第一に、文部科学省「地（知）の拠点事業（大学 COC 事業）」の採択にともない、松江キャンパスでは、「健康・保育・文化・観光」の専門分野を生かした共同研究の推進、さらにその成果を生かした履修証明プログラムの開発をめざし、拠点となるキャンパス・プラットフォーム「しまね地域共生センター」の開設準備を進めたことである。平成 26 年 3 月 7 日には「地域共生へのアプローチ」をテーマに、研究準備協議会（キャンパス・フォーラム）を開催し、各学科で進行中の地域志向研究について学外協力者を交えて発表を行った。

第二に、学生（個人や団体）が自主的に企画する独創的で魅力的なプロジェクトに対して、大学が費用を補助し、夢の実現を支援する事業「キラキラドリームプロジェクト」が開始されたことだ。公開審査会を経て、4 つのプロジェクトが採択された。そのうち、Shimane Specialty Smoothie プロジェクトは、地域資源である「松江のお茶」と「島根の特産品」をふんだんに使ったオリジナルスムージーを商品開発し、地域イベントに積極的に参加した。また、部活動による地域活性化支援も活発化する傾向がみられた。

恒例の公開講座「椿の道アカデミー」は、25 年度には特別企画はなかったものの、20 周年記念事業の文化資源探究講座など人気講座が通常講座化されたことにより、のべ参加者数は 24 年度より 41 名増加し、会員制度の理解もようやく浸透してきたことを感じる。

26 年度以降は、「しまね地域共生センター」が松江キャンパスの地域連携活動を統括し、推進役を果たしていくことになる。今後も、「地域をキャンパスに」「キャンパスを地域に」の精神を念頭に置き、地域のニーズにこたえる地域貢献活動を継続していきたい。

しまね地域共生センター センター長 小泉 凡

1. 地域連携推進委員会の活動

松江キャンパスにおいては、地域連携推進委員会が、「公開講座」「教育機関・その他高大連携」「学生ボランティア活動の推進」での地域貢献の3部門で委員により窓口を分担した。

- ・委員長（地域連携推進センター副センター長） 小泉 凡（総合文化学科教授）
- ・公開講座での地域貢献担当委員 ラング・クリス（総合文化学科講師）
- ・幼保園のぎ・乃木小学校・湖南中学校・松江商業高等学校との三者連携を含む教育機関とその他高大連携担当委員 矢島毅昌（保育学科講師）
- ・学生ボランティア活動推進での地域貢献担当委員 水 珠子（健康栄養学科助教）

2. 地域に関する教育・研究活動

【地域志向科目の位置づけ】

地域志向の教育に関する25年度の主な事業としては、各学科と教務委員会において、すでに開設している地域志向科目を選定し、平成26年度カリキュラムマップを作成し、同時に平成26年度授業計画書に「地（知）の拠点整備事業における地域に関する学修を行う授業科目一覧」として掲載する準備を行った。この整備により、学生の自主活動の中での地域課題探究心育成を目指す「地域志向」を含む科目履修、卒業研究への学びのロードマップを構築する基盤を構築した。

【履修証明プログラム開発開始準備】

研究に関しては、「地域のニーズに応え、地域と協働し、地域に信頼される大学」を目指すことを掲げた大学憲章に合わせ、「健康・保育・文化・観光」の専門分野を生かした共同研究の推進、さらにその成果を生かした履修証明プログラムの開発をめざし、拠点となるキャンパス・プラットフォーム「しまね地域共生センター」の開設準備を進めた。

【しまね地域共育・共創研究助成金】

しまね地域共育・共創研究助成金制度を創設し、平成25年度より助成金の運用を行った。松江キャンパスから4件申請、3件採択となり、地域志向の研究活動が促進された。また、平成26年度分については松江キャンパスから11件の申請があった。

【『地域研究と教育』vol.2の作成】

松江キャンパスの地域志向研究のリスト作成や、「地域」に特化した研究と地域貢献をめざす研究教育活動をまとめた冊子、『地域研究と教育』vol.2を作成した。これは、24年度版をより充実させ、最新情報を盛り込んだ改訂版である。なお、同誌に掲載した研究・教育課題名と研究者名は以下の通りである。

健康栄養学科		
<地域の「食」と栄養の専門研究>		
1	島根県産「つや姫」のおいしさに関する研究	健康栄養学科
2	西条柿の食品開発研究	赤浦和之教授

3	しまね和牛の食味研究	籠橋有紀子准教授、石田千津恵助教、川谷真由美助手、水珠子助教
4	大学と行政が連携して行う地域交流型食育推進の検討	名和田清子教授、川谷真由美助手
5	地域振興に活かす特許	籠橋有紀子准教授、直良博之教授、名和田清子教授
<教員と学生による患者会支援活動>		
6	小児糖尿病大山サマーキャンプ	名和田清子教授
7	炎症性腸疾患患者会食事学習会	名和田清子教授
<学外への協力事業>		
8	「やすぎどじょう」を使用したレシピの考案	石田千津恵助教、名和田清子教授
9	松江市健康フェスティバルへの参加協力	名和田清子教授、川谷真由美助手
10	松江市：松江市の食育推進実行部隊である「食部会」での活動	名和田清子教授
11	雲南市：「うんなん鯖パンプロジェクト・うんなんスイーツの杜プロジェクト」	名和田清子教授、石田千津恵助教
12	奥出雲町：「野菜産地ツアー」への参加協力	名和田清子教授
13	安来市：米のモニタリング調査・食味調査の実施	安藤彰朗教授、石田千津恵助教、川谷真由美助手
14	農林水産省・島根県：第4回食育推進全国大会	石田千津恵助教、川谷真由美助手、健康栄養学科
15	松江保健所：1日食品衛生監視員	安藤彰朗教授、石田千津恵助教、川谷真由美助手
16	コープフェスティバルへの参加	名和田清子教授、水珠子助教
17	しまねオーガニックフェア	名和田清子教授
18	松江商工会議所：「まつえ駅前活き活き青空」への参加協力	川谷真由美助手、安藤彰朗教授、直良博之教授、石田千津恵助教
19	サイエンスパートナーシップ（SPP）	健康栄養学科
20	小学校：乃木小学校での食育授業	直良博之教授、川谷真由美助手、水珠子助教
保育学科		
1	「全人的保育者養成を目指して一ほいくまつりという総合表現活動の取り組みー」	福井一尊准教授
2	虐待の早期発見と支援に向けて	藤原映久講師
3	島根県保育所（園）・幼稚園造形研究会への協力	福井一尊准教授
4	保幼小連携教育体制における多様性の研究	山下由紀恵教授、岸本強教授、福井一尊准

		教授、藤原映久講師、矢島毅昌講師
5	島根県における保育士・幼稚園教諭の採用実態と人材養成の課題	山下由紀恵教授、岸本強教授、小山優子准教授、福井一尊准教授、矢島毅昌講師
6	保幼小連携教育の現状と課題	山下由紀恵教授、岸本強教授、白川浩教授、福井一尊准教授、藤原映久講師、矢島毅昌講師 【学外】島根県教育庁義務教育課、島根県健康福祉部、青少年家庭課、松江市教育委員会小中一貫教育推進課、松江市健康福祉部子育て課、益田市保育研究会
7	保育専門職育成のための「表現とコミュニケーション」ワークショップ・プログラムの開発	山下由紀恵教授、福井一尊准教授、(故)森山秀俊教授 【学外】NPO法人あしぶえ、松江市健康福祉部子育て課
8	「幼保一体化保育」体制の現状と課題	山下由紀恵教授、岸本強教授 【学外】島根県健康福祉部青少年家庭課、松江市健康福祉部子育て課、雲南市健康福祉部子育て支援課
9	しまね子育て支援専門職ネットワーク構築に向けた領域横断的カンファレンス・プロジェクト	山下由紀恵教授、名和田清子教授、出雲C：三島みどり元教授
10	教員と学生による地域支援ボランティア	保育学科
総合文化学科		
1	小泉凡教授のハーン研究と地域貢献	小泉凡教授
2	へるん探求	小泉凡教授、松浦雄二准教授
3	出雲神話翻訳研究会	藤岡大拙名誉教授、小泉凡教授、小玉容子教授、松浦雄二准教授、村上桃子講師、クリス・ラング講師、竹森徹士元准教授
4	「魅力ある松江の観光を考える」シンポジウムへの参加	工藤泰子准教授
5	観光フィールド・トリップ	小玉容子教授、松浦雄二准教授、マユアキ教授、クリス・ラング講師
6	アジア文化交流	塩谷もも准教授
7	アジア文化演習	鹿野一厚教授、塩谷もも准教授
8	地域探検学	鹿野一厚教授、小泉凡教授、工藤泰子准教授、塩谷もも准教授
9	日本古典文学を歩く	村上桃子講師

10	日本文化演習	渡部周子講師
11	おはなしレストランはじまるよ！－読み聞かせによる人間力の育成－	岩田英作教授、マユ－あき教授
12	絵本専門図書館「おはなしレストランライブラリー」の誕生	岩田英作教授、マユ－あき教授
13	全国図書館大会島根大会における分科会の共催	石井大輔講師
14	文化情報誌「のんびり雲」	大塚茂教授、鹿野一厚教授
社会教育・地域貢献		
1	椿の道アカデミー－20周年を迎えた社会人向け公開講座－	小泉凡教授
2	卒後教育としての「栄養士のためのステップアップ講座」	健康栄養学科
3	出雲キャンパスとの連携事業 社会人の学び直しニーズ対応 「子育て支援専門職再教育」事業	山下由紀恵教授、名和田清子教授、高橋憲二元教授、出雲C：三島みどり元教授、出雲C：濱村美和子講師、出雲C：山下一也教授 【学外】日本助産師会島根県支部、島根県栄養士会、島根県保育協議会、島根県国公立幼稚園長会、島根県特別支援学校、島根県看護協会（保健師職能）、島根県社会福祉協議会福祉人材センター、松江市健康福祉部子育て課、松江市教育委員会特別支援教育課、出雲市地域振興部少子対策課、浜田市市民福祉部子育て支援課、島根県健康福祉部健康福祉総務課
4	COC事業共同研究 地域とともに育む「ふるさと教育」共同プロジェクトー北東アジア地域学術交流研究助成金－ 「地域資源と協同的体験を保育教育課程に生かす「ふるさと教育」の研究ー島根県益田市モデルー」	山下由紀恵教授、鹿野一厚教授、矢島毅昌講師 【学外】白梅学園大学大学院 無藤隆教授、島根県中山間地域研究センター、益田市保育研究会、益田市教育委員会、益田市福祉環境部、アンダンテ21、益田市民活動推進協議会

【キャンパス・フォーラム】

3月7日には、「地域共生へのアプローチ」をテーマに、研究準備協議会（キャンパス・フォーラム）を開催した。健康栄養学科は「食を通じた島根の活性化」、保育学科は「地域早期支援

の仕組みを考える」、総合文化学科は「地域と子ども・ふるさと教育・読み聞かせ」をテーマとし、各学科で進行中の地域志向研究について学外協力者を交えて発表を行った。その後、3名のコメンテーターによる発表内容および本学COC事業へのコメントをいただいた。以下に当日のプログラムと写真を掲載する。

[研究準備協議会「地域共生へのアプローチ」プログラム]

13:00 開場

13:30-13:40 ご挨拶・概要説明 島根県立大学短期大学部副学長 山下由紀恵

【1】発表 健康栄養学科 「食を通した島根の活性化」

13:45-14:15 総括 島根県立大学短期大学部教授 名和田清子

〈発表〉島根県立大学短期大学部教授 赤浦和之

島根県立大学短期大学部准教授 籠橋有紀子

【2】発表 保育学科 「地域早期支援のしくみを考える」

14:20-14:50 総括 島根県立大学短期大学部教授 山下由紀恵

〈発表〉川本町教育委員会派遣指導主事 笠井修

川本小学校通級指導教室教諭 大山英子

島根県立大学短期大学部教授 山下由紀恵

【3】発表 総合文化学科 「地域と子ども・ふるさと教育・読み聞かせ」

14:55-15:25 総括 島根県立大学短期大学部教授 鹿野一厚

〈発表〉島根県立大学短期大学部教授 小泉凡

松江市産業観光部観光文化課文化係長 真野啓子

島根県立大学短期大学部教授 鹿野一厚

島根県立大学短期大学部教授 岩田英作

【4】COCへの期待 コメンテーター

15:30-15:50 公益社団法人島根県栄養士会会長 山本綾津子

島根県立大学短期大学部講師 藤原映久

松江観光協会観光文化プロデューサー 高橋一清

(質疑応答)

【5】全体総括

15:55-16:20 「松江キャンパス地域共生へのアプローチ」

4/1開設しまね地域共生センター長 小泉凡



キャンパス・フォーラムでは、総合文化学科工藤泰子准教授による「雲南市吉田町における観光振興—地域と協働した観光教育の実践」をテーマとしたポスター発表も実施された。過疎化が急速に進行する吉田町の人々と連携し、教育・研究活動の充実と地域振興を目指した、工藤准教授担当「観光資源学」（1年生後期）における取組みの報告である。なお、本発表は、「地（知）の拠点整備事業」、「平成25年度しまね地域共育・共創研究助成金」を受けて実施されたものである。

図1

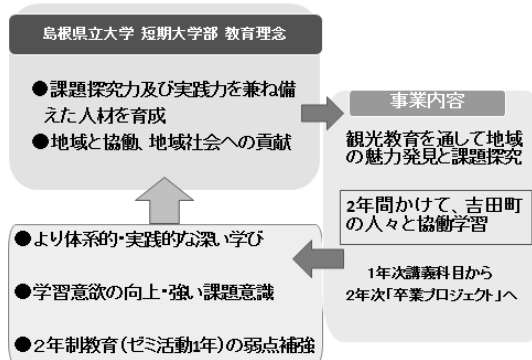
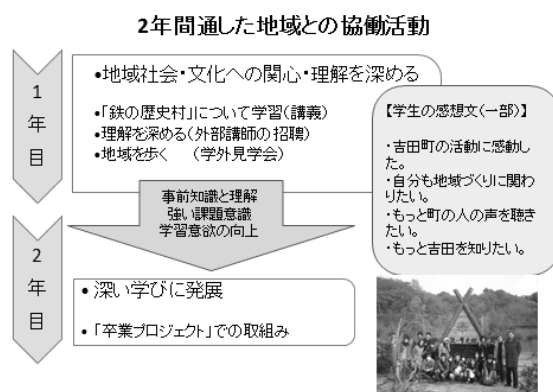


図2



工藤泰子「雲南市吉田町における観光振興—地域と協働した観光教育の実践」ポスター発表より

3. 公開講座等の開催

【平成25年度公開講座の概要】

平成23年度から、松江キャンパス利用者向け「椿の道アカデミー」会員制度を開始し、生涯教育、地域教育の拠点としての松江キャンパスの魅力づくりの推進を図ってきた。25年度は図書館利用者証を兼ねた「会員証」を、268名に支給した。

「椿の道アカデミー」における各講座は、それぞれの趣旨や内容に従って、通常複数回の講義や実習等を提供し、受講者数も独自に定めている。平成25年度の「椿の道アカデミー」では合計12講座、78回を開講することとし、受講者を募った。結果、総申込者数280名の内、登録者数は268名であった（「平成25年度公開講座会員登録者数」参照）。これを割合に変換すると、約96%の登録率である。なお、「山陰民俗学会連携講座：民俗の行方～山陰のフィールドから考える」、「民族音楽の楽しみ：ガムラン教室」、「椿の道読書会」そして「健康栄養講座：島根の食と健康」が、「まつえ市民大学」連携講座の一部であることから、この市民大学関連の受講生も上記中の該当講座を受講している。

平成24年度は、「椿の道アカデミー20周年記念特別講座」の参加者を含め、延べ1,927名だったのに対し、25年度は1,968名と増加している。特別講座で好評だった講座が、通常講座として実施できた事によるものと思われる。なお、平成25年度公開講座の開催状況については、一覧表を248頁に掲載している。

平成 25 年度 公開講座会員登録者数(H26, 3 月末)

講座名	定員	申込	登録	登録率
1. 総合文化講座	100	104	100	96%
2. 源氏物語を読む	100	100	97	97%
3. 出雲神話翻訳研究会	100	65	64	98%
4. 英語絵本の音読と「読み聞かせ」に挑戦	10	15	12	80%
5. 椿の道読書会	15	17	16	94%
6. 子育て・孫育てのための子ども理解講座	15	22	22	100%
7. 健康栄養講座	20	25	22	88%
8. 栄養士のためのステップアップ講座	40	19	19	100%
9. 食育講座	20	19	18	95%
10. 山陰民俗学会連携講座	100	38	38	100%
11. 民俗音楽の楽しみ	25	23	21	91%
12. 文化資源探求講座	50	86	65	76%
合計	595	533	494	93%
申込者実数	*	280	268	96%

【当事者と異なる視点で—子育て・孫育て世代のための子ども理解講座】

保育学科の矢島毅昌講師は「子育て・孫育て世代のための子ども理解講座」を開講した。本講座では、一般社会人を対象に、子育て・孫育ての当事者とは少し異なる視点から子ども理解を深めることを目的とする講義が行われた。第1回「子どもを育むコミュニケーション」では、子どものコミュニケーション能力の低下をめぐる問題について、コミュニケーションは協働で達成されるものであり、個人の能力の高低の問題ではないこと等が紹介された。第2回「子ども向けの文化財」では、文化財の善し悪しの多様性や、新たなメディアの悪影響への不安に惑わされないことの大切さ等が紹介された。第3回「子どもをとりまく社会現象」では、「子育てが困難な社会」という現象が、「正しい」子育て法の問題点や、「子育てもそれ以外もパーフェクトな親」を理想とする価値観の危険性等の視点から紹介された。受講者にとって、実用的な知識や技術とは趣の異なる教育学的な視点による学びの場となった。

【栄養士のためのステップアップ講座】

管理栄養士国家試験の合格を目指す栄養士の卒後教育として、島根県内の栄養士を対象として開催した。ここ五年間の延べ参加者は100名を超えた。本学HPの在学生・卒業生総合支援web『Camellia (カメリア)』に質問掲示板を立ち上げ、日程が合わない、遠方で来られないという方でも、随時質問ができるよう対応した。合格後も情報提供を希望する人が多く、卒業後や国家試験合格後も繋がりを絶やすことなく、地域に貢献できる講座を目指している。

【英語絵本の読み聞かせ】

平成 25 年度は成人対象の「英語絵本の音読と『読み聞かせ』に挑戦」講座を実施した。受講者数は 11 名で、和気あいあいとした雰囲気で行えた。最終回はおはなしレストランライブラリーでの読み聞かせの実践を行い、ライブラリーに来ていた子供たちが熱心に英語絵本の読み聞かせに耳を傾けてくれた。



【地方学会と連携した公開講座】

山陰民俗学会連携講座「民俗の行方—山陰のフィールドから考える—」

山陰両県の民俗研究を支えてきた山陰民俗学会と連携した講座を開始した。テーマは民俗の行方。高度成長を経た日本では、日常の暮らしや祭り、民俗は著しく変容した。新しい暮らしや様変わりした祭りの行く末はどうか、民俗の何が変わり何が変わらないのか、民俗の変容を山陰のフィールドから 4 回にわたって考えた。テーマは「護符文化の変遷」「年中行事・祭りの変化と継承」「民俗芸能の伝承と学校教育」「出雲・石見の年中行事のいま」で、講師は同学会員および本学教員がつとめた。

【フィールドトリップ講座】

文化資源探求講座：出雲神話をあぐる

学内の座学ではなく、外に出て、山陰の文化資源を五感で観察、探求しようという趣旨の講座で、参加者のご要望にこたえて 24 年度の「椿の道アカデミー 20 周年記念事業」の一部を継続する形で実施した。

計 51 名の参加者は 10 月 14 日（祝日）、3 台の小型バスに分乗して、安来市荒島地区の王陵の丘周辺の古墳・墳墓群、清水寺、かたりのおみいまる語臣猪麻呂の伝承地、黄泉比良坂、いや揖夜神社、あだかや阿太加夜神社など、主として出雲東部の史跡や出雲神話ゆかりの地を歩いた。NPO 法人出雲学研究所会員で元山陰中央新報社論説委員の岡部康幸氏と小泉凡教授が講師として同行し、さらに現地の専門家による説明をきいた。

神話の伝承地がごく身近にある出雲。その文化資源の豊かさを再認識できる一日だった。



古代出雲王陵の丘（安来市）

【26 年度公開講座の準備】

従来の松江キャンパス地域連携推進センターの事業内容を、しまね地域共生センターへ移行す

る準備を行うとともに、平成 26 年度公開講座においてより地域志向色を強めた形で講座の拡充を図った。具体的には、人気の高い文化資源探求講座を 1 講座から 2 講座に拡大し、そのうち「松江ゴーストツアー」は NPO 法人松江ツーリズム研究会との連携講座として実施することとした。全体としては 25 年度より 2 講座増え、14 講座を開講することとなった。

【客員教授による講演会の公開】

25 年度は各学科で客員教授による講演会を実施し、椿の道アカデミー会員や一般に公開した。各学科の客員教授講演会の概要は以下の通りである。

① 健康栄養学科

日時：平成 25 年 12 月 6 日（金）

講師：川崎医療福祉大学副学長 中坊幸弘氏

テーマ：「栄養士・管理栄養士のこれまでとこれから」

参加者：学生 84 名、教職員 11 名、学外 5 名 合計 100 名

② 保育学科

日時：平成 25 年 7 月 13 日（土）

講師：白梅学園大学大学院教授 無藤 隆氏

会場：本学大講義室

テーマ：「新しい保育・幼児教育の仕組みと専門性の向上への期待」

参加者：学生、教職員および学外者約 190 名

③ 総合文化学科

講義 1

日時：平成 25 年 6 月 26 日（水）

講師：詩人・絵本作家 アーサー・ビナード氏

テーマ：「和」のこころの移り変わり

会場：本学大講義室

講義 2



▼客員教授講演会 無藤 隆氏

日時：平成 25 年 11 月 13 日（水）

講師：東京大学教授、文化資源学会初代会長 木下直之氏

テーマ：「町を歩けば—ハリボテの町・わたしの城下町・股間若衆たち」

会場：本学大講義室

参加者：講義 1・2 を通して、学生・教職員・学外からの参加者の合計 370 名

4. 地域活性化支援

(1) 企業・団体・NPO法人等との連携

松江キャンパスにおいては、25年度もNPO法人等、学外団体との協力を継続的に推進した。今年度は、健康栄養学科により食育推進での連携活動、総合文化学科の「おはなしゼミ」による県内各地での読み聞かせ活動等、多彩な連携事業を実施した。

平成25年度松江キャンパス学外団体との共催事業及び学外団体への協力事業

事業名称	本学担当者	事業内容	期間	参加者	備考
やすぎどじょう生産組合 安来市観光課	健康栄養学科 教授 名和田清子 助教 石田(坂根) 千津恵 嘱託助手 飛田香 TA 藤村紫那	「やすぎどじょう」を使用したレシピの考案	平成25年 4月～7月		健康栄養学科1、 2年生6名参加
文部科学省 地 (知)の拠点整備事業 島根県、島根県 農業技術センターとの共同事業	健康栄養学科教員	つや姫のおいしさに関する研究における食味官能試験	平成25年度		健康栄養学科1、 2年生80名参加
農林水産省 平成25年度6次産業化促進技術対策事業	健康栄養学科 教授 赤浦和之	島根県の農林水産物の6次産業化促進のためのワークショップ開催他	平成25年 10月31日、12月 5日		島根県の6次産業化促進に係る 検討会委員
島根県立大学北東アジア地域学術交流研究助成金(地域貢献プロジェクト)	健康栄養学科 教授 赤浦和之	西条ガキ熟柿ピューレ商業化生産のための温度管理技術の開発	平成25年度		健康栄養学科教員と企業との共同研究
島根県畜産技術センター 受託研究	健康栄養学科 准教授 籠橋有紀子	受託研究課題「飼料米を活用した『しまね和牛』肥育牛の出荷月齢早期化に係る牛肉品質の評価」の実施	平成25年 8月1日～ 平成26年 3月31日		健康栄養学科学生2名参加
島根県立大学学術教育研究助成金(共同研究)	健康栄養学科 准教授 籠橋有紀子	しまね和牛を利用した高齢者向けの食肉開発の試み	平成25年 7月1日～ 平成26年 3月31日		健康栄養学科教員と島根県畜産技術センターとの共同研究 健康栄養学科学生2名参加
島根県立大学北東アジア地域学術交流研究助成金(地域貢献プロジェクト)	健康栄養学科 教授 名和田清子 教授 小柏道子 助教 石田千津恵 助教 水 珠子 助手 川谷真由美 主任看護師 手島由美子	大学、行政、地域の連携による、青年層への食育プログラムの開発	平成25年度		健康栄養学科教員と学生、松江市との共同研究

平成 25 年度牛乳・乳製品利用料理コンクール 島根県 大会	健康栄養学科 教授 名和田清子	開催支援	平成 25 年 10 月 6 日		健康栄養学科学生 5 名ボランティア
炎症性腸疾患患者会 陽だまりの会	健康栄養学科 教授 名和田清子	研修会の開催支援及び講師	平成 25 年 10 月 19 日	16 名	健康栄養学科学生 4 名ボランティア
炎症性腸疾患患者会 はなみずきの会 (浜田保健所)	健康栄養学科 教授 名和田清子	研修会の開催支援及び講師	平成 25 年 11 月 10 日	15 名	
炎症性腸疾患患者会 倶楽部 UCD (出雲保健所)	健康栄養学科 教授 名和田清子	研修会の開催支援及び講師	平成 26 年 1 月 19 日	20 名	
第 40 回小児糖尿病大山サマーキャンプ	健康栄養学科 教授 名和田清子	第 40 回小児糖尿病大山サマーキャンプの開催支援	平成 25 年 8 月 5 日～ 12 日		健康栄養学科学生 10 名ボランティア
第 3 回しまねオーガニックフェア (島根県・島根県農業協同組合中央会・全国農業協同組合連合会島根県本部主催)	健康栄養学科 教授 名和田清子	開催のための支援	平成 25 年 12 月 7 日		健康栄養学科学生 15 名ボランティア
イオン松江店	総合文化学科 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」読み聞かせとダンス	平成 25 年 8 月	100 名	学生 12 名参加
出雲市立中央図書館 (ブックネット出雲)	総合文化学科 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」読み聞かせ	平成 25 年 8 月	20 名	総合文化学科学生 3 名参加
古志原公民館	総合文化学科 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」読み聞かせ	平成 25 年 9 月	50 名	総合文化学科学生 3 名参加
スティックビル おもちゃのひろば	総合文化学科 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」読み聞かせ	平成 25 年 11 月	20 名	総合文化学科学生 3 名参加
いりすの丘 tupera tupera 「しましまじん盆踊り」	総合文化学科 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」読み聞かせとサポート	平成 25 年 10 月	30 名	総合文化学科学生 10 名参加
スティックビル 松江市男女共同参画課催し	総合文化学科 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」読み聞かせ	平成 25 年 11 月	10 名	総合文化学科学生 5 名参加
浜田市金城町さざんか祭り「でまえとしょかん」(金城図書館ミッケの会)	総合文化学科 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」読み聞かせ	平成 25 年 11 月	30 名	総合文化学科学生 5 名参加

NPO 法人松江ツアーリズム研究会	総合文化学科 教授 小泉 凡	同 NPO 法人が管理・運営する小泉八雲記念館の顧問として、常設展示・企画展・レプリカ作成・キャプション作成の監修を行う。また、松江ゴーストツアー(月1回)、ミステリーツアー(年2回)、まち歩き(年1回)の講師をつとめる。	平成 25 年 4 月～平成 26 年 3 月		
焼津市教育委員会	総合文化学科 教授 小泉 凡	焼津小泉八雲記念館の名誉館長として、児童向け講演「妖怪に学ぼう」(8月3日)、焼津ゴーストツアー(8月4日)、文芸作品コンクールへのメッセージ執筆、26年度企画への助言等を行う。	平成 25 年 4 月～平成 26 年 3 月	講演会・ゴーストツアー参加者 20 名	
「子ども塾—スーパーヘルンさん講座—」 (松江市観光振興部観光文化課主管・子ども塾実行委員会主催)	総合文化学科 教授 小泉 凡	子どもの五感を育む教育実践「子ども塾」を実施・運営し、塾長をつとめる。テーマは生物多様性。島根大学附属小学校の教員、兵庫県立人と自然の博物館と連携して実施。	平成 25 年 8 月 17 日、 19 日、20 日	参加児童 6 名	
ニューオーリンズ友好都市提携 20 周年記念事業 (松江市観光振興部国際観光課主管、同実行委員会主催)	総合文化学科 教授 小泉 凡	実行委員長として、事業の企画・運営にあたる。小泉八雲記念館「ニューオーリンズとラフカディオ・ハーン展」(10月—3月)、記念式典・リトルマルディグラほか(10月6日)	平成 25 年 8 月～平成 26 年 1 月	記念式典参加者 230 名、リトルマルディグラ参加者 200 名	
アイリッシュ・フェスティバル in 松江 2014 (松江市観光振興部国際観光課主管、アイリッシュ・フェスティバル実行委員会主催)	総合文化学科 教授 小泉 凡 准教授 工藤泰子	同事業の実行委員長・委員として企画・運営にあたる。	平成 24 年 10 月～平成 25 年 3 月	パレード参加者 280 名	総合文化学科学生 6 名参加

【健康栄養学科の地域活性化支援】

健康栄養学科においては、平成 25 年度は、食育活動として、島根県立大学北東アジア地域学術交流研究助成金を受け、健康栄養学科教員および学生が、松江市と共同で、「大学、行政、地域の連携による、青年層への食育プログラムの開発」を行った。また、乃木小学校の 5 年生を対象として「からだのリズムと朝ごはん」について、松江市立湖南中学校、第四中学校の中学生を対象として、サイエンスパートナーシップ「美味しさと健康のサイエンス」での食育を行った。島根県産品の振興を図る取り組みとしては、「やすぎどじょう」を使用したレシピの考案や、島

根県産米「つや姫」、しまね和牛等の科学分析、西条柿熟柿ピューレを利用した食品開発等を行った。やすぎどじょうのレシピの考案では、2年生は、どじょうを春巻きの皮で包み揚げ、独自のソースをディップして食べる「どじょうスティック」を、1年生はどじょうをオイルサーデンの要領で油漬けし、ピザ生地にした「どじょうリアン pizza」を提案した。



1年生の作品「どじょうリアン pizza」(左)



および2年生の作品「どじょうスティック」(右)

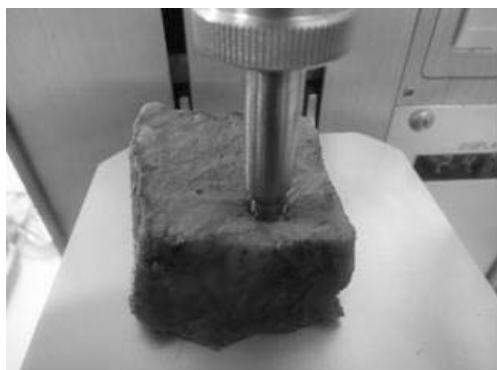
島根県産米「つや姫」の科学分析では、温暖化により品質の低下している平坦地域の「コシヒカリ」に替わる米として、「つや姫」の普及拡大を目的に、島根県、島根県農業技術センターと共同で官能試験、理化学分析（電子顕微鏡で炊飯米断面の構造を観察、テンシプレッサーで炊飯米物性（粘りと硬さ）を機械的に測定）を行った。早期出荷された「しまね和牛肉」の品質評価手法の検討について、平成25年8月から平成26年3月において、健康栄養学科教員（代表者籠橋有紀子准教授）および学生2名が島根県畜産技術センターとの受託研究において協力し、官能試験および理化学分析を用いて「しまね和牛肉」の食味を科学的に評価し、データの提供を行った。成果の一部は、平成26年2月の卒業研究発表会において発表を行った。さらに島根県、島根県農業技術センターと本学栄養学科共同で「島根県産つや姫の美味しさに関する研究」に取り組み、「つや姫」の食味を科学的に評価した。西条柿熟柿ピューレを利用した食品開発では、東出雲の柿農家と健康栄養学科教員（赤浦和之教授）との共同で熟柿ピューレを用いた2種類の



飲料、炭酸飲料「酢(し)まね柿サイダー」と柿果汁入り飲料「酢まね柿っこ」の商品化を行った。さらに、平成25年度牛乳コンクール（島根県牛乳普及協会）（10月6日、於 島根県立大学短期大学部松江キャンパス）では、学生5名がボランティアを務めた。また、地産地消推進のための支援として、平成25年12月7日には、第3回しまねオーガニックフェア（島根県・島根県農業協同組合中央会・全国農業協同組合連合会島根県本部主催）に、学生15名がボランティアとして参加した。

熟柿ピューレを用いた「酢(し)まね柿サイダー」と柿果汁入り飲料「酢まね柿っこ」

次年度も引き続き、地域の活性化の観点から、西条柿では、西条ガキ熟柿の生産と熟柿ピューレを用いた加工食品の開発を行う。また、「しまね和牛肉生産技術の開発および品質評価手法の検討」を目的として、「しまね和牛肉」の食味について理化学分析および官能評価等の手法を用い、基礎データの集積・提供および加工に関する技術協力を行う。「島根県産つや姫の美味しさに関する研究」を目的として、「つや姫」の食味に与える効果について、官能試験等の手法を用いて検討し、データの提供・技術協力を行う。



「しまね和牛肉」の理化学分析（左） および官能試験（右）の様子

このほか、難病患者会の活動支援のため、健康栄養学科教員および学生がボランティアとして活動した[炎症性腸疾患患者会研修会「陽だまりの会（松江市）」（平成25年10月19日、教員1名、学生4名）、「はなみずきの会（浜田市）」（11月10日、教員1名）「倶楽部UCD（出雲市）研修会」（1月19日、教員1名）（教員1名、学生 名（1月19日）、小児糖尿病患者会「第40回小児糖尿病大山サマーキャンプ（主催：日本糖尿病協会島根県支部「大山家族）」にて教員1名、学生10名（8月5日～12日）]。

【保育学科の地域活性化支援】

保育学科においては、福井一尊准教授が、島根県保育所（園）・幼稚園造形教育研究会顧問として県内保育所・幼稚園に連携協力し、平成25年11月25日に本学で園児の絵画作品審査会を実施した。同審査により選ばれた園児の作品は、島根県立美術館で平成25年1月16日から20日まで「第9回島根県保育所（園）・幼稚園造形作品展」として展示・公開された。

また福井一尊准教授は、平成25年11月2日に社会福祉法人島根県社会福祉協議会主催の「しまね県民福祉大会」において、「障がい者アートの魅力と可能性」と題したシンポジウムでコーディネーターを務め、島根県立美術館で12月6日から8日まで開催された「平成25年度島根県障がい者アート作品展」では審査委員長として絵画・書・写真・デザイン・工芸等の作品を審査し、展示・公開した。

また、平成23年度に山下由紀恵教授・森山秀俊教授・福井一尊准教授が、NPO法人あしぶえ・松江市健康福祉部子育て課との共同研究を通じて開発した「松江発—保育専門職のための『表現とコミュニケーション』ワークショップ・プログラム」の効果を土台として、昨年度に引き続いて本年度も保育学科の正課「児童文化」にNPO法人あしぶえによるワークショップを組み込み、一部連携した授業を実施した。

【総合文化学科の地域活性化支援】

総合文化学科では、しまね多文化共生ネットワークとの共催による「医療英語勉強会」（ラング・クリス講師）の開催、英語絵本の読み聞かせ（小玉容子教授）、卒業プロジェクトおはなしゼミによる読み聞かせボランティアの実施（岩田英作教授）、NPO 松江ツーリズム研究会と連携した文化資源をツーリズムに生かす実践活動（小泉凡教授）、松江観光協会主催の観光シンポジウムへの協力や（社）鉄の歴史村地域文化研究所・（株）吉田ふるさと村と連携した観光教育の実践（工藤准教授）など、昨年を引き続き、活発な活動が行われた。

*「キッズイングリッシュ」の英語絵本読み聞かせ活動

平成 25 年度の「キッズイングリッシュ」（担当は小玉容子教授、総合文化学科 2 年前期）受講



生 24 名は、おはなしレストランライブラリーで「英語絵本の読み聞かせ」を行った。7 月から 9 月にかけて、絵本や紙芝居の読み聞かせと歌や手遊びなどを組み合わせ、20 分程度の時間で計 16 回実施した。

学生たちは、出版されている絵本だけでなく、授業で作成した教材なども用いて、児童英語教育実践活動を行うことができた。子供たちだけでなく保護者も一緒になっての活動となった。また、学生の実践力向上にとって貴重な体験となった。

*医療英語勉強会

「医療英語勉強会」は、島根に住む外国人を対象とした医療通訳育成・技能向上を目的として実施中の事業である。しまね多文化共生ネットワークと連携し、平成 20 年 4 月から平成 26 年 3 月にかけて、月に一度金曜日の午後に 2 時間ほど勉強会を実施している。勉強会参加者は、10 名程度である。（担当はラング・クリス講師）

勉強会では、実際の医療場面を想定したテキスト文の日本語から英語への翻訳学習を行ない、診療科ごとの通訳会話役割練習を行なう他、医療に関する研究報告をビデオでみてから、ディスカッションすることで、医療用語を身につけることを目的とした。

*松江ゴーストツアーおよびミステリー・ゴースト・ツアーの企画・実施

昨年度に引き続き、NPO 松江ツーリズム研究会と連携し、松江ゴーストツアーおよびミステリー・ツアーを企画・実施した。松江ゴーストツアー（へるんコース）は平成 25 年度中に 7 回開催され、小泉凡教授が「小泉八雲—異界への旅」というテーマでツアーに先立ち講演を行った。またミステリー・ツアーは島根県内のパワースポット、出雲神話、小泉八雲ゆかりの地を、参加者には事前に訪問地を知らせることなくバスで 1 日かけて巡る着地型観光プランである。実施日は①7 月 13 日（土） ②9 月 8 日（日）で、のべ参加者は 75 人、小泉凡教授が 2 回のツアーを企

画しガイド役をつとめた。

*「まち歩き」の企画実施

小泉凡教授は、NPO 松江ツーリズム研究会と連携し、小泉八雲記念館の企画展「ニューオーリンズとラフカディオ・ハーン」および松江・ニューオーリンズ友好都市提携 20 周年に因み、「ハーンを魅了したニューオーリンズの文化に出会う松江さんぽ」を企画し、講師をつとめた。企画展のギャラリー・トークの後、松江市内で、ハーンとニューオーリンズに直接的・間接的に接点をもつ 5 か所を訪ね、五感で楽しんだ。実施日は 10 月 12 日（土）で 25 名の参加者があった。

*ちどりマップの作成

松江市への観光客誘致、松江城周辺のまち歩き人口の増加を目的に、観光文化ゼミ生 3 名による観光マップの作成を行った。「歩いてみいだわ ちどりまっぷ」（ウォーキング用）、「走ってみいだわ ちどりまっぷ」（ジョギング用）の 2 種類である。ゼミで松江歴史館を見学した際、入館者数が減少していることを知り、歴史館や松江城周辺の観光客を増やしたいという思いから、散策用の観光地図作成を企画した。また、取材中、城周りでジョギングをしている人を多く見かけたことから、ジョギング用マップも併せて作成することになった。

イラストはすべて手描きとし、近現代建築の情報や、ジョギング用には道の状態（信号機の有無や、道路の段差、交通量など）を記載するなどの工夫を取り入れた。これらの観光マップは、松江城周辺の観光施設数カ所に設置されている。



みいだわまっぷ 裏面



*ピンクのポスト・クッキーの製作・販売

松江市およびカラコロ工房への観光客増加、「幸運のピンクのポスト」（カラコロ広場に設置）の認知度を高めてポストの利用者を増やすことを目的に、観光文化ゼミ生 3 名がお土産用クッキーの製作・販売を行った。カラコロ工房、NPO 障がい者自立支援所ぼんぼん船（出雲市多伎町）と連携し、担当者と打合せを重ね、10 月の学園祭での市場調査、カラコロ工房での試験販売（11 月）を経て改良を重ね、1 月 26 日（日）、本格的に販売を開始した。初日は、学生たち自ら PR 販売を行った。

松江の観光ポスト
松江の観光ポスト
松江の観光ポスト

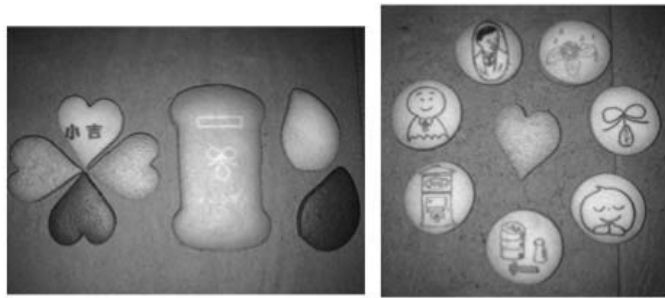
松江市の観光ポストも幸運が訪れるとの個別セットで250円
口工房にある新たな観光ポスト「ピンク」の認知度向上
光スポンジ「ピンク」をア
の幸運のポスト」をア
ビルしよう」と、県立
大短期大学部（同市）模
浜乃木（丁目）の学生
がポストに「なんだク
ッキー」の販売を始め
た。

観光学を学ぶ3人の
学生が、「手紙を送っ
た人も、受け取った人
も、受け取った人

松江市の観光ポストも幸運が訪れるとの個別セットで250円
口工房にある新たな観光ポスト「ピンク」の認知度向上
光スポンジ「ピンク」をア
の幸運のポスト」をア
ビルしよう」と、県立
大短期大学部（同市）模
浜乃木（丁目）の学生
がポストに「なんだク
ッキー」の販売を始め
た。

観光学を学ぶ3人の
学生が、「手紙を送っ
た人も、受け取った人
も、受け取った人

完成したクッキー



『山陰中央新報』平成 26 年 2 月 1 日付



パッケージ・デザインの打合せ



販売開始日

*観光シンポジウムへの参加

工藤泰子准教授と観光文化ゼミ生 3 名が、平成 25 年 11 月 4 日（月・祝）、松江の観光集客力を高めることを目的としたシンポジウム「魅力ある松江の観光を考える」（主催：松江観光協会他）に参加した。本シンポジウムは、官民協働による魅力ある観光地再建・強化事業の一環であり、石森秀三氏（北海道大学特別招聘教授）らを講師に招き、会場には市内外からの観光や町づくり関係者が集まり、意見交換などが行われた。工藤准教授は、パネルディスカッションのコーディネーターを務め、ゼミ生 3 名（來海靖未さん、大野光季さん、柿田有香さん）は、彼女たちが開発したカラコロ工房のお土産「ピンクのポストクッキー」についてプレゼンを行った。

* 吉田町における観光教育の実践

工藤泰子准教授は、地（知）の拠点整備事業平成 25 年度しまね地域共育・共創研究活動助成金を受け、「雲南市吉田町における観光振興―地域と協働した観光教育の実践」と称した活動を行った。吉田町の地域活性化に取り組む（社）鉄の歴史村地域文化研究所、（株）吉田ふるさと村の人々と連携した観光教育を実践した。

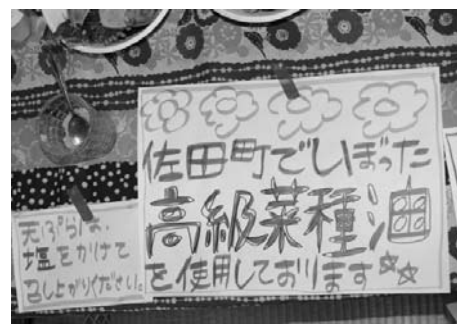
(2) 自治体等との連携

松江キャンパスは、平成 19 年度に松江市との協力協定を締結し、その後は協定を踏まえ、教育連携協議会の開催や、「公開講座」でまつえ市民大学と連携するほか、松江市主催行事に本学教員と学生が協力するなど連携を強化している。正課教育において、松江市職員を非常勤講師とする複数の専門科目講義・実習、松江市立施設・学校における実習も継続して実施している。

【松江市主催文化教育行事への協力】

・「寺マルシェ」への協力

松江市青年会議では、11 月 23 日に松江市石橋町の順光寺において寺マルシェを実施した。この事業の趣旨は、地域コミュニティの「心のよりどころ」としてのお寺、神社を会場としたイベントを開催し、そこで、地域生産物や芸術文化の発信などを通し、人々が交流し憩いを感じられる「場」づくり、にぎわいの創出を実現しようとするもので、「松江いいね！プロジェクト」の一環として実施されたものだ。本学からは、キラキラドリームプロジェクトで採択を受けた Shimane Specialty Smoothie プロジェクト（島根県特産品を使ったオリジナルスムージー開発）の総合文化学科 1 年生 2 名が、スムージーの島根特産のシャインマスカットを使ったスムージーの販売を、総合文化学科民俗文化資源ゼミ（小泉教授）の学生 7 名が、調査地である出雲市佐田町朝原の菜種油で揚げた佐田野菜の天ぷらとマンジロウ・カボチャのスープを提供した。また、小泉凡教授が、トークショーを行い、プロジェクトの評価委員もつとめた。



・「第 10 回子ども塾―スーパーヘルンさん講座」への協力

松江市観光文化課および「子ども塾実行委員会」主催による、子どもの五感力育成の教育実践である標記事業に、総合文化学科の小泉凡教授が塾長として、小倉佳代子非常勤講師・総合文化学科学生 1 名が企画・運営・実施に協力した。期間は、平成 25 年 8 月 17・19・20

日、会場は「出雲かんべの里」周辺。

・ニューオーリンズ市友好都市提携 20 周年記念事業への協力

松江市では 10 月 4 日から 6 日にかけて、ニューオーリンズ市からの訪問団 11 名を迎え、歓迎レセプション、小泉八雲記念館企画展「ニューオーリンズとラフカディオ・ハーン」のオープニングセレモニー、レクチャーコンサート、友好都市提携 20 周年記念式典、リトルマルディグラ・フェアウェルパーティーを開催した。小泉凡教授が一連の記念事業実行委員会の委員長として、企画・運営に携わった。

・「アイリッシュ・フェスティバル in 松江 2014」への協力

松江市・(財)松江市観光開発公社・松江商工会議所・山陰日本アイルランド協会・京店・南殿町商店街が実行委員会を組織してアイルランドと松江の文化交流・松江の文化振興および中心市街地活性化の目的で実施する行事で、平成 26 年 3 月 9 日に開催。

総合文化学科小泉凡教授・工藤泰子准教授・小倉佳代子非常勤講師が実行委員として、松江キャンパスのティンホイッスル・サークル、総合文化学科「民俗・文化資源ゼミ」に所属する約 10 名の学生が企画・実施に携わった。

【自治体と連携した共同研究】

・平成 25 年度は、島根県立大学北東アジア地域学術交流研究助成金を受け、健康栄養学科教員および学生が、松江市と共同で、食育の地域貢献プロジェクト「大学、行政、地域の連携による、青年層への食育プログラムの開発」を行った。

・平成 25 年度島根県立大学学術教育研究特別助成金による共同研究「島根県の保幼小連携教育体制における多様性の研究」の一環として、県内から幼稚園・保育所等の専門職者および行政担当者を集めて、平成 25 年度保育学科客員教授の無藤隆先生（白梅学園大学大学院教授）による講演会（参加者約 190 名）を開催した。また講演会后、松江市健康福祉部子育て課および松江市教育委員会と連携して「松江市接続期カリキュラム」研究発表会（参加者約 80 名）を開催した。なお同研究の本学のメンバーは、保育学科の山下由紀恵教授（代表者）・岸本強教授・福井一尊准教授・藤原映久講師・矢島毅昌講師である。

また山下由紀恵教授は、総合文化学科の鹿野一厚教授および保育学科の矢島毅昌講師と共同で、平成 25 年度島根県立大学北東アジア地域学術交流研究助成金による共同研究「地域資源と協同的体験を保育教育課程に生かす『ふるさと教育』の研究 ―島根県益田市モデル―」を実施している。1 年目となる平成 25 年度は、益田市保育研究会、益田市教育委員会、益田市市民活動推進協議会、NPO 法人アンダンテ 21、島根県教育委員会、島根県中山間地域研究センター等と連携して、「自然と人の暮らし」の地域資源研究を実施した。

【松江市青年会議等への協力】

・松江市の、若者によるまちづくりの推進を目的として平成 23 年 7 月に設置された「松江市青年会議」（政策部政策企画課所管）に総合文化学科学生 2 名が委員として参加した。また「21 世紀ウィメンズプロジェクト」（男女共同参画課所管）に総合文化学科学生 1 名が委員として参加し、松江市に協力する活動を行った。

【松江市立女子高等学校との連携】

・松江市立女子高等学校によるキャンパス見学と卒業生交流会

松江市立女子高等学校1年生のキャリア教育推進に協力して、1年生全員（120名）のキャンパス見学会を実施した。平成25年10月15日14:00から16:10まで、施設見学と模擬授業を実施した。模擬授業は、地域連携推進委員会からラング・クリス講師（TESOL、CALL）により「いろいろな英語取得法を体験してみよう」というテーマで行われた（会場：大講義室）。講義後に同じ大講義室で、松江市立女子高等学校卒業の本学学生（4名）との交流会があり、質疑応答が行われた。

【正課授業における連携協力】

- ・保育学科専門科目における、学外の専門職現任者および経験者による講義——保育学科専門科目「障害児保育Ⅰ」（1年後期必修科目・1単位）の非常勤講師として、松江市立発達・教育相談支援センター所長の河井克典講師、同指導主事の青木規子講師、松丘加奈講師、山根司津子講師により、支援の必要な子どもの実態や松江市の取り組み・関係機関との連携等についての講義が行われた。保育学科専門科目「児童館（児童クラブ）の機能と運営」（1年後期選択科目・2単位）の非常勤講師として、松江市立東津田児童館の石倉優子講師により、実際の児童館活動に関する講義が行われた。保育学科専門科目「乳児保育」（2年前期必修科目・2単位）の非常勤講師として、元松江市子育て支援センター所長の井上恵美子講師により、長年にわたる豊富な現場経験を基に講義が行われた。保育学科専門科目「地域福祉論」（2年後期選択科目・2単位）の非常勤講師として、元松江市社会福祉協議会常務理事の須田敬一講師により、松江市における地域福祉の実践例を通じた講義が行われた。
- ・総合文化学科専門科目における、学外の専門職現任者および経験者による講義——「詩と小説の創作」（日本語文化系1年生後期選択科目・1単位）の非常勤講師として、（社）松江観光協会・観光文化プロデューサーの高橋一清講師が、「しまねツーリズム論」（文化資源学系2年後期選択科目・1単位）の学外講師として、松江市産業観光部観光事業部長の錦織裕司氏、島根県商工労働部次長の井上道子氏、島根県教育庁文化財課世界遺産室主任の角俊一氏が授業（各1回）を担当した。また「地域探検学」（文化資源学系1年前期選択科目・1単位）では、現地研修において奥出雲町の全面的な協力を得て、授業を実施した。
- ・松江市立施設・学校における実習協力——健康栄養学科・保育学科の専門科目実習について、松江市立病院、松江市立学校給食センター、松江市立保育所、松江市立幼保園のぎ、松江市立幼稚園が協力し、実習指導を行っている（実習欄に別掲）。
- ・松江キャンパス近辺の幼・小・中学校との密接な連携協力——学生ボランティアが、松江市立幼保園のぎ、松江市立乃木小学校、松江市立湖南中学校等と、教育上の密接な連携協力を行っている。

このような緊密な教育上の連携を踏まえて、平成26年2月6日に「松江市・島根県立大学松江キャンパス・教育連携協議会」を開催し、実習協力や講師派遣について実務的に連携を協議した。実施要綱は、以下のとおりであった。

【平成 25 年度松江市・島根県立大学松江キャンパス・教育連携協議会】

1. 目的

- ・平成 19 年度の「松江市島根県立大学包括協定」にもとづく相互協力の趣旨に基づき、松江市と松江キャンパスの具体的な教育連携事業を見直す。
- ・年度末に、次年度のスムーズな相互協力関係に向けて、教育連携事業における実務的な協議を実施する。

2. 主催 島根県立大学短期大学部松江キャンパス

3. 会場 島根県立大学短期大学部松江キャンパス大会議室

4. 日時 平成 26 年 2 月 6 日（木） 13：30～15：00

5. 議題

- ・実習（栄養士・保育士・幼稚園教諭）受け入れ協力についての情報交換
- ・講師の相互派遣についての計画
- ・共同研究・受託研究について
- ・施設使用の協力についての計画
- ・松江キャンパスにおける文部科学省「COC 知（地）の拠点事業」の取り組みについて
- ・その他

6. 松江市側参加者

- ・政策部次長 講武直樹
- ・政策部政策企画課副主任 秋原志帆（包括協定担当）
- ・松江市教育委員会 教育総務課長 須山敏之
- ・健康福祉部 子育て課長 岩田光弘
- ・観光振興部 観光文化課長 村尾 勝
- ・松江市発達・教育相談支援センター（エスコ）所長 河井克典

7. 松江キャンパス側参加者

- ・副学長 山下由紀恵
- ・健康栄養学科長 名和田清子
- ・保育学科長 岸本 強
- ・総合文化学科長 小玉容子
- ・地域連携推進センター副センター長 小泉 凡
- ・地域連携推進センター教育連携担当委員 矢島毅昌
- ・事務室長 樋野輝男
- ・管理課長 上代勇夫

なお、松江市との教育連携協議会は、26 年度以降はより連携範囲を拡大し、しまね地域共生センター教育連携協議会として実施する予定である。

5. 学生による地域貢献活動

【学生の自主的なボランティア活動】

平成 22 年度より、島根県立大学「学生地域ボランティア活動推進事業」の一環として、学生のボランティア保険加入を支援している。25 年度の学生のボランティア保険加入は、438 名。また学生の活動先は、以下のとおりであった。

●障害者・高齢者支援ボランティア

「松江医療センター」「さくらの家」「松江学園」ほか

●障害児支援ボランティア

「ふるさとあったかスクラム事業」「児童発達支援センターわっこ」ほか

●島根県青少年の家（サン・レイク）ボランティア

●松江市立幼保園のぎボランティア

「のぎっこまつり」「運動会・園児援助」

●保育所・幼稚園・学童保育ボランティア実習（個人）

県内外の幼稚園・保育所・小学校、リンゴ園ボランティア、「放課後のぎっこ広場」「安来市立十神小学校」「三瓶こだま学園」ほか

●災害ボランティア

「島根県災害ボランティア隊（南三陸町・住田町ほか）」「きっかけバス」

●アイリッシュ・フィスティブアル in 松江

●第 10 回子ども塾—スーパーヘルンさん講座

●第 20 回 2013 松江市環境フェスティバル

●第 3 回しまねオーガニックフェア

●市民ボランティアまつり

●米—1 グランプリ 2013

●第 11 回松江神在月だんだんウォーク

●松江シティ F C 試合運営ボランティア



【キラキラドリームプロジェクト～】

平成 25 年度より、学生（個人や団体）が自主的に企画する独創的で魅力的なプロジェクトに対して、大学が費用を補助し、夢の実現を支援する事業がはじまった。公開審査会を経て、4 つのプロジェクトが採択された。

● キラキラ枠【補助額：100,000 円以内】

✓ Let's Go ダーツ de 夢探しの旅プロジェクト【補助決定額：60,000 円】

ダーツで決まる行先で出会う人の夢 100 人分を集め、その実現の手助けをする

● Come Back to Our Home プロジェクト【補助決定額：60,000 円】

島根にいながら留学気分を味わえる交流の場づくり

- ドリーム枠【補助額：300,000円以内】
- ✓ ご当地絵本製作プロジェクト【補助決定額：210,000円】
島根のお茶を知ってもらえるオリジナル絵本の製作
- ✓ Shimane Specialty Smoothie プロジェクト【補助決定額：150,000円】
島根県特産品を使ったオリジナルスムージー開発～地域イベントへの参加



公開審査会の様子

このうち、地域のイベントに積極的に参加をして地域活性化のために奔走したプロジェクトチームの活動内容を紹介する。

Shimane Specialty Smoothie プロジェクト～島根の新たなお茶スタイル！お茶の力で活性化！

● 【参加学生】

総合文化学科1年 竹本莉乃・倉橋萌佳（チーム名：TEAS）

● 【企画概要】

地域資源である「松江のお茶」と「島根の特産品」をふんだんに使った、美味しいオリジナルスムージーを商品開発する。味と健康・美容にこだわるため、健康栄養学科の人や多くの短大生にモニターとなってもらう。若い女性に訴求できるように、お洒落なポスターやリーフレットを作り、商品の魅力を伝えていく。商品化後は、地域のお祭り・イベントに出店し、スムージーを通じてお茶に親しみを持ってもらい、地域の活性化に貢献する。

● 【商品開発からスタート】

若い女性に人気のスムージーを商品にすることに決めた。スムージーの原材料は、抹茶と島根の特産品を使うことが企画上外せない条件だった。当初、「抹茶×いちじくスムージー」、「抹茶×出西しょうがスムージー」、「抹茶×シャインマスカットスムージー」の3種類を開発予定だったが、試作をいくら重ねても、いちじくと出西生姜は納得のいく味にならず、断念。「抹茶×シャインマスカットスムージー」の1種類に集中するこ



ととした。

試行錯誤を続ける中、品質が劇的に向上したのは、地元で活躍する野菜ソムリエの土井小百合さんに協力をお願いしてからだった。「これならいける！」そう確信できた。

●【原材料集めに奔走】

資金が潤沢ではなかったため、大社町のぶどう農家のところへ規格外品を安く提供していただくよう交渉をした。4軒の農家を紹介してもらい、実際に農園に訪問し、皆さんにご快諾をいただいた。長持ちさせるための保存方法のコツや、どの部分がおいしいのかを教えていただいた。



●【商品の魅力を伝えるためのグッズ作り】

商品の魅力を伝え、若い女性に、ピン！ときてもらうためのPRグッズを作成した。カップ、ポロシャツ、ポスター、チラシ等を作るため、プロのデザイナーとの打ち合わせは初めての経験で、自分たちの想いをカタチにしていく喜びを感じた。



デザイナーとの打ち合わせ風景



オリジナルポロシャツ



ロゴマーク

●【いざ出店！】

様々な人脈をフル活用してイベントの主催者に積極的にアポイントを取り、出店チャンスを開拓した。出店経験がなく、全てがゼロからのスタートだったが、作業手順や接客を試行錯誤で改善し、販売方法を確立していった。

市民が沢山集うイベントでは、日頃の学生生活では接する機会が少ない年代の方とのコミュニケーションを図るため、商品や活動内容を記載したチラシを手渡しするなどの工夫をした。活動の終盤は、イベントの主催団体から出店依頼がくるようになった。



参加したイベント

開催日	イベント名	主催者名
平成 25 年 10 月 13 日	島根県立大学短期大学部飛鳥祭	島根県立大学短期大学部
平成 25 年 10 月 19 日	松江水燈路	松江観光協会
平成 25 年 11 月 23 日	寺マルシェ	松江市青年会議
平成 26 年 2 月 16 日	ユナイテッド サークルフェス	松江市青年会議
平成 26 年 2 月 22 日	Café×bar 「灯」	Cafe×Bar 灯 実行委員会



●学生のコメント

(竹本)

初めて、自ら企画・交渉・実行を体験しました。プロジェクトをスタートさせたばかりのころは、ただひたすらやるという感じで回りがあまり見えていませんでした。しかし、スムージーの試作を重ねたり、イベント出店の交渉を進めていくうちに余裕ができ、楽しみながら活動をする事が出来たと思います。ぶどう農家さんや、デザイナーさん、松江商工会議所の方など、普通に学生生活を過ごしていたら会うことはないような方々と会うことができました。就職活動を控えていることもあり、世の中にはどういう大人がいるのかという視点で考えることもでき、刺激を受けました。

スムージーをPRするにあたり、各イベントでポスターとブラックボードを設置しました。ポスターも自分で作成しましたが、なかなか納得いくものを作ることができず、イベ

ントごとに違うデザインのものを作りました。最後に作ったポスターは、今までの経験を活かして納得いくものを作ることができました。ポスター1つ作ることもとても難しいと感じました。

私達の方で、どれだけお茶に親しみを持ってもらえたか、島根について知っていただけたか分かりませんが、本当に微々たるものだと思います。これから幾つかのイベントを控えていますが、その後も別の形ででも継続できたらいいと思っています。私達の今回のプロジェクトだけで終わるのはもったいないと思うので、今後も考えていきたいと思っています。今回は、このような素敵な機会を与えていただき、ありがとうございました。

(倉橋)

プロジェクトを通して、自分たちで一から考えて実行することの大変さや難しさを学びました。特に、試作では、どうしたら美味しくなるのかというところから、どうしたら若い人に好まれる味になるのか、というところまでハードルを上げて考えることがとても苦勞しました。ですが、諦めずに試作を重ねることによって本当に美味しくすることができ、ここでまず達成感を感じました。また、そのスムージーを人々に買って飲んでもらう時に口に合うのか不安がありましたが、実際、飲んでもらって「美味しかったよ」と言ってもらえた時は、また新たな達成感を得ることができました。

私は、会計を担当しましたが、初めての経験で始めは分からないことが多くで大変でしたが、周りの人に教えてもらってからきちんと管理をすることができ、本当に自分のためになりました。また、イベントに出店したことで接客をする機会があり、普段このような機会が無いので良い経験になりました。

高校の時から地元の活性化とPRをしたいという夢がこのプロジェクトで叶えることができ、本当にやってよかったと思いました。この経験を将来に役立てたいです。

【茶道部の活動】

昭和23年から続く本学において最も歴史をもつ茶道部は、茶道が盛んな松江において地域貢献に継続的に取り組んでいる。

・「松江城大茶会30回記念 特別座談会」への参加

「松江の茶の湯と本物志向に伝えるまちを目指して」座談会のメンバーとして、平成25年9月12日(木)、赤山茶道会館にて松浦正敬氏(松江市長)、田部真孝氏(田部美術館館長)らとともに、本学茶道部副部長(総合文化学科学生)が若者の立場からみた茶道文化について発言した。内容は同月29日(日)山陰中央新報特集紙面にて掲載された。

・「第8回ノスタルジックたてまち手仕事マーケット2013」への協力

堅町町内会主催による手仕事マーケット



手仕事マーケット2013

において、NPO 法人まつえ・まちづくり塾の出店に際し、本学茶道部員 2 名（総合文化学科学生）が抹茶の点て出しの協力をおこなった。

・「松江水燈路 2013」への参加

城山大茶会 30 周年を記念した城下町松江「水と光の幻想」水燈路のイベントの一環として、平成 25 年 10 月 19 日（土）午後 5 時から午後 7 時半まで、堀川遊覧船乗場のふれあい広場で、本学茶道部員 10 名（総合文化学科学生）が乗降客、観光客など約 100 人に、菓子付きで抹茶のおもてなしをした。同月 25 日付け山陰中央新報投稿欄「こだま」に、短大茶道部による心あたたまる点て出しに感銘を受けたという読者投稿があった。

【日本舞踊サークルの活動】

日本の伝統文化を国内外に伝える積極的な活動を展開する本学日本舞踊サークルは、今年度島根県立美術館において「出雲阿国展」が開催されたこともあり、多くのイベントで、歌舞伎の祖と伝えられる出雲阿国の踊りを復元した「阿国念仏踊り」を披露した。

・「第三回出雲伝統芸能祭」への参加

出雲伝統芸能フェスティバルが平成 25 年 7 月 28 日（日）、出雲大社神楽殿にて実施された。第一部出雲阿国のつどいでは本学日本舞踊サークル部員 7 名（総合文化学科学生）が「阿国念仏おどり」を演じ、第二部では中村獅童が「雨の五郎」を演じた。



出雲伝統芸能祭

・「松江水燈路 2013」への参加

松江水燈路において平成 25 年 10 月 19 日（土）、本学日本舞踊サークル部員 7 名（総合文化学科学生）が参加し、阿国念仏踊りを演じた。

・「安来 清水寺灯参道」への参加

清水寺灯参道の平成 25 年 10 月 20 日（日）根本堂ミニコンサート「阿国念仏踊りとバリ舞踊」において、本学日本舞踊サークル部員 7 名（総合文化学科学生）が阿国念仏踊りを演じた。

【ティンホイッスル・サークルの活動】

平成 26 年 3 月 8 日（土）・9 日（日）に開催された、アイリッシュ・フェスティバル in 松江 2014 のセント・パトリックス・デイ・パレードに参加するとともに、アイリッシュ・パブ「シャムロック」や屋台村の設営等、イベントのボランティア・スタッフとして協力した。

6. 教育機関等との連携—保・幼・小・中・高・大の教育連携

初等中等教育機関との教育連携については、平成 18 年度の協定締結以降、各学科における松江市立幼保園のぎ・松江市立乃木小学校・松江市立湖南中学校・松江商業高校との緊密な連携協力のもと、教員による特別授業のほか、学生による読み聞かせ実践・食育実践指導等の連携事業を実施し、教育的成果をあげている。

【大多和学園との連携協力】

25 年度は新たに学校法人大多和学園との連携協力に関する協定を締結し、3 月 27 日（木）11：00 から本学大会議室で調印式を実施した。なお協定は 4 月 1 日から発効となる。調印式への出席者は以下の通りである。



- 学校法人大多和学園：大多和理事長、豊田副校長、田中教諭（SSH 担当）
- 公立大学法人島根県立大学：本田理事長・山下短期大学部副学長・岸本教務学生生活部長（兼、保育学科長）、名和田健康栄養学科長、鹿野総合文化学科長、福井准教授（地域連携推進委員）
また、次のような連携協力項目を予定している。
- 大学の各種講座への参加
平成 26 年度椿の道アカデミー「英語絵本の音読を楽しもう」（中学生以上）
開催日：7 月 28 日、7 月 29 日、7 月 30 日、7 月 31 日、8 月 1 日
- 大学教員による出張講義
大多和学園 SSH 研究発表テーマに関連した講義等
- 大学による非常勤講師派遣
大多和学園 SSH 事業「コミュニケーション・メソッド（国際的に通用するコミュニケーション能力の育成科目）の教育課程の開発」
- 大多和学園からの進学者による高校訪問・大学説明会

【連携校協議】

平成 25 年 7 月 12 日に、幼保園のぎ、乃木小学校と松江キャンパスの三者連携会議が行われた。また、平成 25 年 5 月 20 日と平成 26 年 2 月 27 日に、湖南中学校、松江商業高校、松江キャンパスの三者連携会議が行われた。

このような緊密な教育上の連携をふまえて、今年度も昨年度に引き続き「連携校教育研究会」を開催した。大学教育にいたるまでのキャリア教育のあり方について、本学教員講師と連携校教員の間で質疑応答が行われ、大学教育側としても有意義な研究会となった。「連携校教育研究会」開催状況は以下のとおりであった。

[平成 25 年度連携校教育研究会]

1 期日 平成 25 年 8 月 19 日(月) 10:00~12:00

2 会場 島根県立大学短期大学部松江キャンパス 管理棟 2 階 大会議室

3 テーマおよび講師

テーマ:「地域連携とキャリア教育」

(1) 河部安男氏(島根県立大学浜田キャンパス地域コーディネーター)

「地域コーディネーターの役割」

(2) 赤名 文氏(島根県立大学短期大学部教務学生課 ソーシャルラーニング担当コーディネーター)

「大学と地域社会を結ぶ『大学関連携ソーシャルラーニング』について」

(3) 岩田英作氏(島根県立大学短期大学部教授、松江キャンパス キャリアセンター副センター長)

「キャリア教育で何を育てるかー地域連携との関わりのなかでー」

(4) 出席者の取組み事例・座談会

(5) 地(知)の拠点整備事業の紹介

4 参加者 幼保園のぎ 飯庭久美子園長ほか 1 名

乃木小学校 藤原利明教頭ほか 2 名

湖南中学校 園山信夫校長ほか 9 名

松江商業高校 足立充徳教頭ほか 3 名

浜田キャンパス 河部安男地域コーディネーター

松江キャンパス

岩田英作教授、地域連携推進センター小泉 凡教授、矢島毅昌講師、上代勇夫
課長、藤原香緒里囑託員、赤名文コーディネーター 計 26 名

平成 25 年度松江キャンパス教育機関との連携事業

機関名・事業名称	本学担当者	事業内容	期間	本学参加学生	備考
Science Partnership Program (SPP) の実施	健康栄養学科教員	美味しさと健康のサイエンス	平成 25 年 8 月 5 日~8 月 7 日	健康栄養有志	松江市中学生延 52 名
江津市江津中学校	健康栄養学科教授 直良博之	教育コミュニティ創造ふるさと学習支援事業 食育講演会 「食べたものは体の中でどうなるのかーハッピーになる食事ー」	平成 25 年 11 月 29 日		江津中学校 全生徒
松江市乃木小学校	健康栄養学科教授 直良博之 助教 川谷真由美	食育授業 「からだのリズムと朝ごはん」	平成 25 年 12 月 13 日	健康栄養 4 名	5 年生 165 名参加

野波保育所所内研修会講師	保育学科 教授 岸本 強	所内職員研修会	平成 25 年 7 月 26 日		
出雲市保育協議会 保育士部会研修会	保育学科 教授 岸本 強	保育協議会研修会	平成 25 年 8 月 29 日		
松江市立しんじ幼 保園園内研修会講 師	保育学科 教授 岸本 強	園内職員研修会	平成 25 年 9 月 20 日		
浜田市保育連盟研 修会講師	保育学科 教授 岸本 強	保育連盟合同研修会	平成 25 年 10 月 30 日		
野波保育所所内研 修会講師	保育学科 教授 岸本 強	所内職員研修会	平成 26 年 2 月 28 日		
松江市立湖南中学 校	保育学科 講師 矢島毅昌	総合的な学習の時間 「フィールドワーク のまとめ」発表（1 年 生） 講評	平成 26 年 1 月 29 日		湖南中 1 年生 165 名参加
松江市立湖南中学 校	総合文化学科 教授 鹿野一厚	総合的な学習の時間 講師「フィールドワー クの行い方」	平成 25 年 6 月 13 日		湖南中 1 年生 165 名参加
松江市立湖南中学 校	総合文化学科 教授 小泉 凡	総合的な学習の時間 講師「地域探検の魅 力」	平成 25 年 6 月 13 日		湖南中 1 年生 165 名参加
松江市立内中原小 学校	総合文化学科 教授 小泉 凡	英語活動の時間 講 師「小泉八雲とアイル ランド」	平成 26 年 1 月 14 日		内中原小 4 年生 126 名参加
松江市立城北小学 校	総合文化学科 教授 小泉 凡	社会科「地域の文化を 受け継ぐ」の時間 講 師「小泉八雲と怪談」	平成 26 年 2 月 24 日		城北小 4 年生 105 名参加
松江市立湖南中学 校	総合文化学科 准教授 高橋 純	総合的な学習の時間 講師「発表の仕方につ いて」	平成 25 年 6 月 13 日		湖南中 1 年生 165 名参加
松江市立幼保園の ぎ	総合文化学科 教授 マユアキ 教授 岩田英作	3 学科共通科目「読み 聞かせの実践」	平成 25 年 5 月 ～ 平成 26 年 1 月	健康 9 名 保育 18 名 総文 47 名	
松江市立乃木小学 校	総合文化学科 教授 マユアキ 教授 岩田英作	3 学科共通科目「読み 聞かせの実践」	平成 25 年 5 月 ～ 平成 26 年 1 月	健康 9 名 保育 18 名 総文 47 名	
松江市立忌部小学 校	総合文化学科 教授 マユアキ 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プ ロジェクト「おはなし ゼミ」読み聞かせ	平成 25 年 4 月 ～ 平成 26 年 2 月	総文 11 名	
宍道子育て支援セ ンター	総合文化学科 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プ ロジェクト「おはなし ゼミ」読み聞かせ	平成 25 年 5 月	総文 3 名	
吉賀町双葉保育所	総合文化学科 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プ ロジェクト「おはなし ゼミ」読み聞かせ	平成 25 年 6 月	総文 4 名	
出雲市立久多美小 学校	総合文化学科 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プ ロジェクト「おはなし ゼミ」読み聞かせ	平成 25 年 6 月	総文 6 名	

雲南児童クラブ	総合文化学科 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」読み聞かせ	平成 25 年 8 月	総文 3 名	
海潮児童クラブ	総合文化学科 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」読み聞かせ	平成 25 年 8 月	総文 3 名	
鹿島子育て支援センター	総合文化学科 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」読み聞かせ	平成 25 年 9 月	総文 3 名	
江津市立江津中学校	総合文化学科 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」読み聞かせ	平成 25 年 9 月	総文 9 名	
東出雲錦新町保育園	総合文化学科 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」読み聞かせ	平成 25 年 11 月	総文 6 名	
石見養護学校	総合文化学科 教授 岩田英作 事務局 石倉義生	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」読み聞かせ	平成 25 年 11 月	総文 3 名	
出雲市立中部小学校	総合文化学科 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」読み聞かせ	平成 25 年 11 月	総文 6 名	
島根県立三刀屋高等学校	総合文化学科 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」読み聞かせ	平成 26 年 2 月	総文 2 名	

出張講座(高大連携)の状況

(大学への派遣依頼を受け、専門領域の講義を高校生向けに行った場合)

期日	曜日	時間	テーマ (会場)	回数	担当者	相手先	参加者数
5月27日	月	9:00～12:50	五感でとらえた明治の松江～小泉八雲の世界～ 講義および現地研修	1	小泉 凡(総合文化学科教授)	松江市立女子高等学校	30
7月10日	水	14:30～16:20	子どもの言葉の育ちと絵本	2	矢島毅昌(保育学科講師)	島根県立大田高等学校	30
7月10日	水	14:30～16:20	神話のひみつ-ヤマタノヲロチ退治-	2	村上桃子(総合文化学科講師)	島根県立大田高等学校	28
11月14日	木	14:25～16:15	栄養学について ～栄養素とからだ～	2	安藤彰朗(健康栄養学科教授)	島根県立大東高等学校	30
11月14日	木	14:25～16:15	語学について	2	小玉容子(総合文化学科教授)	島根県立大東高等学校	14
11月14日	木	14:25～16:15	乳幼児の造形表現	2	福井一尊(保育学科准教授)	島根県立大東高等学校	62
2月22日	土	14:00～16:00	文部科学省委託事業「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」に係る学校図書館公開講座	1	岩田英作(総合文化学科教授)	島根県立三刀屋高校	30

【健康栄養学科の教育機関連携】

乃木小学校では、小学5年生165名を対象に、「からだのリズムと朝ごはん」をテーマとする食育授業に健康栄養学科教員（直良博之教授、川谷真由美助手）と学生4名が取り組み、朝ごはんの良いところやバランスの良い朝ごはんを児童と一緒に考えながら実施した。さらにH25年度は「サイエンス・パートナーシップ・プログラム（SPP）」に「美味しさと健康のサイエンス」が採択され、地元の中学校と連携してサイエンスの体験学習を実施した。テーマは『食・美味しさ・健康』とし、3日間連続で「講義と実習」と「調理と喫食」の内容を盛り込んだ参加型のプログラムを実施した。



▼食育授業風景 乃木小学校



▼SPP 授業風景 味覚とうま味の生理

【保育学科の教育機関連携】

保育学科の正課「児童文化」では、1年生2年生が合同で複数のパートに分かれて「児童文化」のための制作過程を学び、「ほいくまつり」開催によって地域の子どもたちと交流しつつ、大学での学びを還元している。この「ほいくまつり」の案内にあたって、松江市内保育所・幼稚園がポスター掲示・パンフレット配布に協力している。この「児童文化」の教育課程は、平成17年

度文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」の選定を受けて全国的にも評価された。平成25年度「第40回ほいくまつり」は、平成25年6月29日（土）に島根県民会館大ホールで開催され、多くの親子が学生の作りだした歌唱・司会・影絵・劇などの「児童文化」を楽しみ学生と交流した。



▼島根県民会館大ホール入口：
来場者への手作りペンダントのプレゼント

「ほいくまつり」とは？

私たち島根県立大学短期大学部保育学科は、毎年6月島根県民会館大ホールに1,500人の子どもたちとその保護者を招待して『ほいくまつり』を開催しています。

この『ほいくまつり』というのは、私たち学生が日頃学内で学んでいることを総合表現として舞台上で発表することを通して県の児童文化向上に寄与するとともに、地域の子どもたちや保護者の皆様楽しく夢のあるひとときを過ごしてもらおうという趣旨で開催しているものです。

取り組みの軸となるのは実行委員会です。実行委員長、総合責任者、会計の三役を中心に各パートのリーダーを合わせた14人がその構成メンバーです。このリーダー会は定期的で開催され、各パートの要望や意見が交流されるとともに、話し合いを通じて方針が出されかつ総合的な指示が出されていくのです。

『ほいくまつり』の取り組みは、『児童文化』という授業の一環として行われますが、週に2回の授業の時間だけでは時間は全く足りません。そこで、準備はほぼ毎日、放課後残って行うこととなります。5月に入るとパート別のリハーサル、6月になると全体リハーサルが始まります。その場では先生方や他のパートの仲間たちから多くの課題点が出され、よりよいものを創るために各パートは議論をし、修正していきます。もちろん、なかなか自分たちの思うようにはいかず、みんなで悩みながら進めていくこととなります。しかし、その過程の中で協力することの大切さを学び、感性を磨いていくとともに、保育というものが要求する厳しさを知るのです。

当日、子どもたちの笑顔にたくさん出会えることは最高の感動ではありますが、同時に『ほいくまつり』の取り組み過程そのものが私たち自身に大きな自信と勇気と夢を与えてくれるのです。





▼平成 25 年 6 月 29 日 第 40 回ほいくまつり 保育学科一同



▼「第 40 回ほいくまつり」ステージ



▼来場者との交流

【総合文化学科の教育機関連携】

総合文化学科では、岩田英作教授・マユアキ教授とともに、「読み聞かせの実践」を履修する学生（全学科）、卒業プロジェクト「おはなしゼミ」の学生が、松江市乃木小学校（17 回）、忌部小学校（27 回）、幼保園のぎ（17 回）などで、絵本の読み聞かせ活動を行った。（「3. おはなしレストランライブラリーの地域連携活動」参照）

また、総合文化学科の教員は、湖南中学校の「総合的な学習の時間」に協力した。詳細は以下の通りである。

* 湖南中学校 1 年生「総合的な学習の時間」への協力授業

総合文化学科の 3 名の教員は、湖南中学校における総合的な学習の時間に、専門分野や総合文化学科の担当授業の内容を生かして、昨年に引き続き協力授業を行った。小泉凡教授の授業は平成 25 年 6 月 13 日「地域探検の魅力—松江再発見の旅—」、鹿野一厚教授の授業は 9 月 19 日「フィールドワークの行い方」、高橋純准教授の授業は 1 月 21 日「発表の仕方」であった。対象は、1 年生 165 名であった。

7. 教育課程のための地域の施設・機関との連携

健康栄養学科、保育学科において実習先との連携の強化策を検討し、可能な部分から実施している。健康栄養学科では、栄養士養成のため各種給食施設等との緊密な連携を図っている。保育学科は、実習指導計画から実習評価に至るまで実習先と連携して実習成果の充実を図っている。

【健康栄養学科の実習施設・機関との連携】

栄養士免許を取得するためには、校外実習が必修である。平成25年度に実施した県内施設を下表に示した。実習終了後は、評価票の提出を求め、また、次年度の内容を検討する資料として、学生が作成した実習レポートを送付し連携を図った。また、実習先の管理栄養士を本学非常勤講師として招聘したり、学生を島根県栄養士会の研修会に参加させる等して連携強化を図っている。

平成25年度 校外給食実務実習依頼先一覧

地区	実習依頼先	実習人員	日程
島根	松江赤十字病院	4	8/19～8/23
			8/26～8/30
	松江市立病院	4	8/19～8/23
	独立行政法人 国立病院機構 松江医療センター	4	8/19～8/23
	医療法人 社団創健会 松江記念病院	2	8/26～8/30
	松江生協病院	1	9/9～9/13
	玉造厚生年金病院	1	9/2～9/6
	社会福祉法人 松豊会 津田の里	3	9/3～9/6, 17
			9/9～9/13
	松江市立北学校給食センター	2	9/9～9/13
	松江市立西学校給食センター	2	9/9～9/13
	松江市立南学校給食センター	2	9/9～9/13
	島根県立中央病院	3	9/9～9/13
	出雲市立出雲学校給食センター	1	9/9～9/13
	出雲市立斐川学校給食センター	1	9/9～9/13
	安来市立広瀬小学校	1	9/9～9/13
	雲南市三刀屋学校給食センター	2	9/9～9/13
公立邑智病院	1	9/2～9/6	
独立行政法人 国立病院機構 浜田医療センター	1	8/19～8/23	
鳥取	米子市学校給食センター	3	9/2～9/6
広島	尾道市立市民病院	1	9/2～9/6
山口	阿東東学校給食共同調理場	1	9/2～9/6
	下松市立東陽小学校	1	9/2～9/6
愛媛	松山赤十字病院	1	9/9～9/13

【保育学科の実習施設・機関との連携】

保育学科では、「保育実習Ⅰ（保育所・施設）」「保育実習Ⅱ」については、「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について（厚生労働省雇児発第1209001号）」にもとづき、保育学科が実習施設を選定して実習指導委員会を設けている。毎学年度の始めに、この委員会の協議によって保育実習計画を策定している。

平成25年度 保育学科実習実施施設・機関

区分	所在	施設・機関名	備考
保育所	島根県松江市	松江市立城東保育所、松江市立白潟保育所、松江市立末次保育所、こばと保育園、しらとり保育所、しらゆり保育園、つわぶきこども園、つわぶき保育園、なかよし保育園、なの花保育園、ひよし第2保育園、みどり保育所、みのり黒田保育園、愛恵保育園、古志原保育所、松江ナザレン保育園、松江保育所、松尾保育所、嵩見保育所、袖師保育所、虹の子保育園、乃木保育所、法吉保育所、本庄保育所	1年前期・保育実習Ⅰ（保育所） 2年前期・保育実習Ⅱ
	島根県出雲市	えんや保育園、たき保育園、ねむの木保育園、ハマナス保育園、ひまわり第1保育園、ほくよう保育園、わたりはし保育園、伊波野保育園、神門保育園、神門第2保育園、莊原保育園、東部保育園、平田保育所	
	島根県雲南市	雲南市立かもめ保育園、雲南市立斐伊保育所、雲南市立三刀屋保育所	
	島根県安来市	城谷保育所、安来保育園	
	島根県奥出雲町	馬木幼稚園、阿井幼稚園	
	島根県大田市	大田市立大田保育園、大田市立久手保育園、大田市立静間保育園、あゆみ保育園、サンチャイルド長久さわらび園	
	島根県江津市	のぞみ保育園	
	島根県川本町	川本保育所	
	島根県浜田市	うみかぜ保育園、周布保育園	
	島根県隠岐の島町	双葉保育園	
	鳥取県米子市	キッズタウンかみごとう保育園、キッズタウンさくら保育園、福生保育園、仁慈保幼園、えんぜる保育園	
	鳥取県倉吉市	敬仁会保育所ババル園	
	鳥取県鳥取市	むつみ保育園	
	兵庫県豊岡市	豊陵保育園	
	愛媛県今治市	白鳩保育園	
	香川県宇多津町	わかくさ北保育園	
	埼玉県さいたま市	さいたま市立尾間木保育園	
	鹿児島県鹿屋市	わかば保育園	
	鹿児島県奄美市	笠利聖母保育園	
	児童館・児童クラブ	島根県松江市	
鳥取県米子市		米子市車尾児童館	
鳥取県日吉津村		日吉津村立児童館	
鳥取県八頭町		下南児童館	
富山県高岡市		高岡市西部児童センター	

児童福祉施設等	島根県松江市 島根県出雲市 島根県安来市 島根県浜田市 島根県隠岐の島町 鳥取県米子市	松江赤十字乳児院、島根東光学園、双樹学院、松江学園、松江整肢学園、国立病院機構松江医療センター、島根県立わかたけ学園、しののめ寮 さざなみ学園 安来学園 聖煌寮、こくぶ学園 仁万の里児童部 米子聖園天使園	2年前期・保育実習Ⅰ(施設)
幼稚園	島根県松江市 島根県安来市 島根県出雲市 島根県雲南市 島根県奥出雲町 島根県大田市 島根県江津市 島根県浜田市 鳥取県米子市 鳥取県倉吉市 鳥取県鳥取市 香川県坂出市 愛媛県今治市 兵庫県豊岡市 埼玉県さいたま市 鹿児島県鹿屋市 鹿児島県奄美市	松江市立幼保園のぎ、松江市立古志原幼稚園、松江市立大庭幼稚園、松江市立内中原幼稚園、松江市立城北幼稚園、松江市立母衣幼稚園、松江市立中央幼稚園、松江市立津田幼稚園、松江市立本庄幼稚園、松江市立揖屋幼稚園、松徳幼稚園 安来市立安来幼稚園 出雲市立荘原幼稚園、出雲市立西野幼稚園、出雲市立平田幼稚園、出雲市立塩冶幼稚園、出雲市立長浜幼稚園、出雲市立高松幼稚園、出雲市立四絡幼稚園、出雲市立大社幼稚園、出雲市立多伎幼稚園 雲南市立寺領幼稚園 奥出雲町立亀嵩幼稚園 大田市立大田幼稚園、大田市立久手幼稚園 江津市立江津幼稚園 浜田市立長浜幼稚園、浜田市立石見幼稚園、夕日ヶ丘聖母幼稚園 米子みどり幼稚園、みずほ幼稚園、にしき幼稚園 倉吉幼稚園 認定こども園ひかり幼稚園 香川大学教育学部附属幼稚園 今治めぐみ幼稚園 豊岡市立豊岡めぐみ幼稚園 浦和みずほ幼稚園 星幼稚園 奄美市立赤木名小学校付属幼稚園	2年前期・後期・教育実習

この実習施設・機関により構成された実習指導委員会で策定された実習計画により、実習全体の方針、実習の段階、内容、施設別の期間、時間数、学生の数、実習前後の学習に対する指導方法、実習の記録、評価の方法が明らかにされている。

「保育実習Ⅲ」については、実習施設を保育学科が選定して実習指導委員会を設けている。実習生、実習施設の指導者、本学実習担当教員が、それぞれ緊密に連絡をとりながら実習の効果を十分発揮するように努めている。

「教育実習」については、原則的に実習指導委員会を設けるが、学生が自主的に地元等の実習幼稚園を選定する場合は個別に対応している。実習生、実習幼稚園の指導教員、本学実習担当教員が、それぞれ緊密に連絡をとりながら、実習の効果を十分発揮するように努めている。平成25年度に保育学科が連携して実習を実施した実習施設・機関は上の表のとおりであった。

8. おはなしレストランライブラリーの地域連携活動

【読み聞かせの活動】

平成 25 年度、おはなしレストランで行なった絵本の読み聞かせ活動は次の 5 種類である。

- ◆松江市立幼保園のぎでの実践（5 月～7 月、11 月～1 月の毎週月曜日）

参加した学生数 75 名 読んだ絵本の冊数 255 冊

- ◆松江市立乃木小学校での実践（5 月～7 月、11 月～1 月の毎週水曜日）

参加した学生数 75 名 読んだ絵本の冊数 357 冊

- ◆松江市立忌部小学校での実践（4 月～7 月、10 月～3 月の毎週金曜日）

参加した学生数 11 名 読んだ絵本の冊数 153 冊

- ◆おはなしレストランライブラリーでの実践（4 月～2 月の毎週日曜日）

参加した学生数 11 名 読んだ絵本の冊数 76 冊

- ◆出前シェフ（不定期）22 カ所での実践

参加した学生数 11 名 読んだ絵本の冊数 160 冊

幼保園のぎ、乃木小学校での実践は、健康栄養学科、保育学科、総合文化学科の 1 年生のうち、「読み聞かせの実践」を履修した 75 名が参加した。忌部小学校と本学おはなしレストランライブラリーで行なう「おはなしのじかん」は、総合文化学科 2 年生のうち、卒業プロジェクト「おはなしゼミ」の 11 名が参加した。「おはなしのじかん」は、常時 30 名前後の親子連れの来館があった。「おはなしのじかん」の特別企画として開催した 7 月の七夕会、10 月の大学祭企画、12 月のクリスマス会、そして 2 月の感謝祭では、100 名を超える親子連れでにぎわった。

不定期の取組として、学外の保育所や図書館などからの要望を受けて読み聞かせに出かける「出前シェフ」は、平成 25 年度は合計 22 か所で活動を行なった。松江市内の保育所をはじめ、イオン松江店、グループホームアンジュ、江津市立江津中学校、島根県立三刀屋高等学校など、中高生や高齢者を対象にした活動も積極的に行なった。また、斐川いりすの丘での実践では、絵本作家の tupera tupera さんとのコラボレーションを実現することができた。



江津中学校



グループホーム アンジュ



イオン松江店

【おはなしレストランライブラリー】

おはなしレストランライブラリーは、平成 23 年度に学内・学外に向けて開館し、3 年が経過した。学内の学生はもとより、学外からの一般来館者も徐々に増え、平成 25 年度は、月ごとの

来館者が約 1200 名、貸出冊数が 3000 冊を超えた。

平成 25 年度は、書架や絵本を大幅に充実させることができ、大型絵本専用の書架を設置したり、絵本の複本をそろえることができた。

また、大学正門にライブラリーの看板を設置して、開館・閉館を利用者に知らせることができるようになった。



【講演会・ボランティア活動】

おはなしレストランでは、平成 25 年 10 月 26 日（土）27 日（日）の両日、児童文学作家富安陽子さんをお招きし、初日はおはなしゼミのスタッフ・学生との交流会、2 日目は学生、一般を対象とした講演会「妖怪とのつきあい方、おしえます」を開催した。

これまでおはなしレストランでは震災支援のボランティア活動を行ってきたが、平成 25 年度からは、松江市民によるカンボジア支援に協力している。月に 1 回、おはなしレストランライブラリーを利用して、カンボジアの子どもたちに送る文具や衣類の梱包を市民と学生が協力して行っている。



児童文学作家 富安陽子さん講演会



ライブラリーでのボランティア活動

島根県立大学短期大学部松江キャンパス公開講座「椿の道アカデミー」開催状況

開催日時	時間	講座名	講師	会場	受講者			
6月19日	14:00~15:20	01. 総合文化講座： 「文化とことば」について考える (全9回)	人は何をことばにするか？	高橋純	体育館研修室	70		
6月26日			祝福とともに生きる-『出雲国風土記』の地名伝承-	村上桃子		66		
7月17日			政治家はなぜ言葉を磨くのか -文化・政治・レトリカ（修辞学）-	村井洋 (浜田キャンパス)		67		
8月21日				心象文法の可能性を探る	河原修一		54	
8月28日			(水)		旅する現代アートと文学～造形美術展「オープン・マインド・オブ・ラフカディオ・ハーン」の軌跡～	小泉凡	大講義室	58
9月18日					宮沢賢治と日本の近代文学	岩田英作		60
9月19日					翻訳作品で学ぶ英語の言語と文化	田中芳文 (出雲キャンパス)	体育館研修室	37
10月16日					旅と信じること：インドネシアからの メッカ巡礼を例として	塩谷もも		51
11月13日					朝鮮半島の文化を「理解する」？	福原裕二 (浜田キャンパス)		52
5月22日	14:00~15:30	02. 源氏物語を読む-恋に殉じた青年の話- (全8回)	三保サト子 (本学名誉教授)	体育館研修室	81			
5月29日	14:00~15:30				76			
6月5日	14:00~15:30				68			
6月19日	15:30~17:00				60			
6月26日	15:30~17:00				71			
7月10日	14:00~15:30				71			
7月17日	15:30~17:00				66			
7月24日	14:00~15:30				60			
6月21日	15:00~17:00	03. 出雲神話翻訳研究会	藤岡大拙 (本学元学長・名誉教授)	体育館研修室	41			
6月28日					現代語訳解説その2	37		
7月19日					現代語訳解説その3	41		
7月26日					現代語訳解説その4	34		
9月27日			英語翻訳解説その1	松浦雄二	16			
10月4日			英語翻訳解説その2	小玉容子	13			
10月11日			英語翻訳解説まとめ	藤岡大拙、松浦雄二、 小玉容子、ラングクリス	大講義室	10		
7月29日	10:40~12:10	04. 英語絵本の音読と「読み聞かせ」に挑戦 (全5回)	小玉容子	図書館 グループ閲覧室	10			
7月30日					10			
7月31日					(月)~ (金)	11		
8月1日					11			
8月2日					10			
5月20日	14:00~16:00	05. 椿の道読書会 (全8回)	北井由香	図書館 グループ閲覧室	14			
6月17日					13			
7月22日					9			
9月9日					(月)	9		
10月21日					4			
11月18日					9			
12月16日					9			
3月17日					7			
10月15日	14:00~15:30	06. 子育て・孫育て世代のための子ども 理解講座 (全3回)	矢島毅昌	図書館 グループ閲覧室	14			
10月22日				(火)	子ども向けの文化財	大講義室	12	
10月29日				子どもをとりまく社会現象	大講義室	8		

開催日時		時間	講座名	講師	会場	受講者
8月20日	(火)	19:00~20:30	07. 健康栄養講座：島根の食と健康 (全5回)	島根県における健康づくりへの取り組み	臨床栄養実習室	18
8月27日				健康寿命の生物学：加齢と老化		18
9月3日				糖尿病予防のメカニズムと地域食材の利用		17
9月10日				島根県の食材を利用した機能性食品について		17
9月17日		18:00~20:30	島根県の食材を使った調理実習	小柏道子、坂根千津恵、水珠子	調理実習室	15
7月10日	(水)	19:00~21:00	08. 栄養士のためのステップアップ講座 (通常講義全12回)	健康栄養学科教員ほか	臨床栄養実習室	12
7月24日						12
8月7日						10
8月28日						12
9月11日						14
9月25日						12
10月9日						14
10月23日						12
11月13日						11
11月27日						10
12月11日						12
12月25日						7
8月31日	(水)	10:00~16:30	08. 栄養士のためのステップアップ講座 (集中講義全4回)	健康栄養学科教員ほか	臨床栄養実習室	13
9月1日						14
9月21日						15
9月22日						12
8月24日	(土)	10:00~13:00	09. 食育講座：(続) 和食の基本調理実習 (全2回)	海の幸・魚料理「煮魚」+豆腐料理	調理実習室	14
9月7日				山の幸・野菜料理「天ぷら」+卵料理		14
7月6日	(土)	13:00~15:00	10. 山陰民俗学会連携講座：民俗の行方 (全4回)	護符文化の変遷	体育館研修室	21
7月20日				年中行事・祭りの変化と継承		17
8月10日				民俗芸能の伝承と学校教育		15
8月24日				出雲・石見の年中行事のいま		17
6月1日	(土)	14:00~16:00	11. 民族音楽の楽しみ：ガムラン教室 (全10回)	瀬古康雄	体育館研修室	18
6月15日					秋奥 ガムラン音楽堂	17
7月13日						11
7月27日						10
8月3日						14
9月21日					体育館研修室	10
10月5日					秋奥 ガムラン音楽堂	8
10月19日						12
11月2日						11
11月16日						11
10月14日	(月・祝)	9:30~17:30	12. 文化資源探求講座：出雲神話を歩く-Part2-	岡部康幸、小泉凡		学外(松江市周辺)
						1968

平成25年度 地域連携（貢献）活動の取組状況

1 講演会講師等

NO.	教員氏名	依頼者	内容(テーマ等)	日付
1	名和田清子（健康栄養学科教授）	私設図書館 曾田文庫	食育研修会 「食と健康」	平成25年5月11日
2	名和田清子（健康栄養学科教授）	島根県食生活改善推進協 議会	総会における研修 「食と健康」	平成25年5月14日
3	名和田清子（健康栄養学科教授）	公益社団法人島根県栄養 士会	勤労者支援事業部研修会 「新しい生涯教育制度について」「第7版糖尿病食品 交換表について」	平成26年2月9日
4	名和田清子（健康栄養学科教授）	出雲保健所	平成25年度炎症性腸炎患者・家族学習会 炎症性腸炎の食事について「いかに食べるか」	平成26年1月19日
5	名和田清子（健康栄養学科教授）	いずも糖尿病合同カン ファレンス	第20回いずも糖尿病合同カンファレンス 「糖尿病食事療法の現状と課題 ー糖尿病食品交換表 の改定を踏まえてー」	平成25年12月11日
6	名和田清子（健康栄養学科教授）	浜田保健所	はなみずきの会（浜田地区、炎症性腸炎の患者家族の 会） 食事学習会 「炎症性腸炎の食事療法について」	平成25年11月10日
7	名和田清子（健康栄養学科教授）	美都地域の農と食を語り 合う会	益田市美都総合支所・益田市市民活動推進協議会 講演 及び意見交換会「「地産地消で元気なまちづくり」	平成25年10月28日
8	名和田清子（健康栄養学科教授）	炎症性腸炎患者会 陽だまりの会	炎症性腸炎の食事学習会「「秋の味覚を楽しむ」	平成25年10月19日
9	名和田清子（健康栄養学科教授）	子どもの発達を考える会	食と心の講演会 「食と心の健康 ー今、子どもが危 ない！ー」	平成25年9月29日
10	名和田清子（健康栄養学科教授）	奥出雲町	いきいき元気教室 公開講座 「食生活の最新情報」	平成25年8月28日
11	名和田清子（健康栄養学科教授）	安来市	食の連絡会議研修会「食育の推進と連携について」 「食育の推進と食の現状について」	平成25年8月27日
12	名和田清子（健康栄養学科教授）	本の学校今井ブックセン ター	サイエンスカフェ「こどもの健康とごはんのはなし」	平成25年7月27日
13	名和田清子（健康栄養学科教授）	島根県住宅供給公社	家づくりセミナー「子育てと食育」	平成25年6月2日
14	名和田清子（健康栄養学科教授）	出雲ロータリークラブ	出雲ロータリークラブ例会「食とアンチエイジング」	平成25年5月21日
15	直良博之（健康栄養学科教授）	公益社団法人島根県栄養 士会	H25年度公益社団法人島根県栄養士会生涯学習 「管理栄養士・栄養士のための解剖・生理学講座」	平成25年12月1日
16	籠橋有紀子（健康栄養学科准教授）	中国地域産学官連携コン ソーシアム	1型糖尿病の予防および治療に寄与する脂質栄養とは？ ～ライフステージを通じて脂質栄養をコントロールす るためのツールの開発～	平成25年9月6日
17	山下由紀恵(保育学科教授)	島根県保育協議会	第59回中国地区保育研究大会分科会助言者「保育者の資 質向上を図る」	平成25年7月4日
18	山下由紀恵(保育学科教授)	島根県健康福祉部	島根県市町村職員等専門研修会講師(児童福祉司任用資 格認定講習会)「母子関係理論と発達心理学」浜田・松江	平成25年8月22日 ・8月23日
19	山下由紀恵(保育学科教授)	安来市教育委員会	第2回特別支援教育コーディネーター会講師「保育所・幼 稚園から小中学校へつなぐ支援のあり方について」	平成25年8月27日
20	山下由紀恵(保育学科教授)	日本音楽療法学会	第13回全国大会講習会C-1講師「親子の発達ー個別相談 の役割と課題ー」	平成25年9月6日
21	山下由紀恵(保育学科教授)	日本音楽療法学会	大会企画シンポジウム話題提供者「音楽療法における新た なつながりー地域活動の立場から」	平成25年9月8日

平成25年度 地域連携（貢献）活動の取組状況

22	山下由紀恵(保育学科教授)	松江市健康福祉部子育て課	第2回幼稚園・保育所職員スキルアップ講座講師「松江市保幼小接続カリキュラム説明」	平成25年11月19日
23	岸本 強 (保育学科教授)	出雲市保育協議会	「今、幼児期に経験して欲しい運動と遊び」	平成25年8月29日
24	小山優子 (保育学科准教授)	島根大学教育学部	島根大学教員免許更新講習・講師	平成25年7月28日
25	小山優子 (保育学科准教授)	松江市健康福祉部子育て課	「松江市幼稚園・保育所職員スキルアップ講座」講師	平成26年1月16日
26	福井一尊 (保育学科准教授)	雲南市子育てを考える会	「幼児の絵画表現の観方、受け止め方」	平成25年9月26日
27	福井一尊 (保育学科准教授)	島根県社会福祉協議会	平成25年度しまね県民福祉大会 コーディネーター：シンポジウム「障がい者アートの魅力と可能性」	平成25年11月2日
28	福井一尊 (保育学科准教授)	島根県保育所(園)・幼稚園造形教育研究会	「描画表現指導研修会」	平成25年11月25日
29	福井一尊 (保育学科准教授)	島根県保育所(園)・幼稚園造形教育研究会	島根県保育所(園)・幼稚園造形教育研究会 作品展審査委員	平成25年11月25日
30	福井一尊 (保育学科准教授)	島根県社会福祉協議会	島根県障がい者アート作品展 作品審査委員長	平成25年12月4日
31	福井一尊 (保育学科准教授)	松江市保育研究会	「造形活動の援助と、立体作品の展示」	平成25年12月5日
32	岩田英作 (総合文化学科教授)	宍道子育て支援センター	育児講座「心に残る大切な絵本」	平成25年5月16日
33	岩田英作 (総合文化学科教授)	吉賀町双葉保育所	吉賀町双葉保育所講演会「絵本の読み聞かせ」	平成25年6月8日
34	岩田英作 (総合文化学科教授)	弥生の森おはなし広場	講演「読書と子ども～読み聞かせの意義と育つもの～」	平成25年6月15日
35	岩田英作 (総合文化学科教授)	NPOてんとう虫	平成25年度子どもゆめ基金助成活動「親子で読み聞かせを楽しもう」でのおはなし(てんとう虫の森)	平成25年6月30日
36	岩田英作 (総合文化学科教授)	弥生の森おはなし広場	講演「絵本の楽しさ～読み継がれてきたものから～」	平成25年7月20日
37	岩田英作 (総合文化学科教授)	邑南町立図書館	しまね子ども読書フェスティバルin邑南講演「読み聞かせを楽しむ」	平成25年7月26日
38	岩田英作 (総合文化学科教授)	邑南町立図書館	しまね子ども読書フェスティバルin邑南講演「すきとおった心のごちそうを子どもたちと」	平成25年7月27日
39	岩田英作 (総合文化学科教授)	しまね子どもの読書等推進の会出雲支部(ブックネットいずも)	「おはなしレストランいずもー絵本だよ、全員集合！！」での読み聞かせに関するおはなし	平成25年8月24日
40	岩田英作 (総合文化学科教授)	鹿島子育て支援センター	「おはなしレストランがやってくるよ！」読み聞かせについてのおはなし	平成25年9月3日
41	岩田英作 (総合文化学科教授)	円建創	子育てワークショップ「絵本ってすばらしいー読みメン講座ー」	平成25年9月14日
42	岩田英作 (総合文化学科教授)	浜田市立金城図書館ミッケの会	さざんか祭り「でまえとしょかん」おはなしレストランでのおはなし	平成25年11月3日
43	岩田英作 (総合文化学科教授)	出雲市立東幼稚園	講演「絵本は親子のかすがい」	平成25年11月21日

平成25年度 地域連携（貢献）活動の取組状況

44	岩田英作（総合文化学科教授）	しまね子どもの読書等推進の会浜田支部	研修会講演「えーさくおじさんの絵本ばなし」	平成25年12月7日
45	岩田英作（総合文化学科教授）	川本町健康福祉課	育児講座「えーさくおじさんのほっこり絵本ばなし」	平成26年1月17日
46	岩田英作（総合文化学科教授）	雲南市立田井小学校	人権・童話教育に関する研修会講演「えーさくおじさんのほっこり絵本ばなし」	平成26年1月23日
47	岩田英作（総合文化学科教授）	益田市市民学習課	益田市民学習センター講座講演「子どもの育ちを支える講座」	平成26年3月1日
48	岩田英作（総合文化学科教授）	出雲市大津めめの会	講演「いのちと絵本」	平成26年3月12日
49	小泉 凡（総合文化学科教授）	和鋼博物館友の会	「山陰の文化資源として生かす小泉八雲」	平成25年4月14日
50	小泉 凡（総合文化学科教授）	商船三井客船株式会社（にっぽん丸）	「小泉八雲と出雲神話」	平成25年5月8日
51	小泉 凡（総合文化学科教授）	鳥取短期大学・倉吉市教育委員会	第1回公開講座「感性の人、『小泉八雲』を現代に生かす喜び」	平成25年5月25日
52	小泉 凡（総合文化学科教授）	島根大学	出雲文化学「小泉八雲と出雲神話—世界からのまなざし—」	平成25年6月21日
53	小泉 凡（総合文化学科教授）	第23回日米草の根交流サミット実行委員会（島根）	「ハーンが遺した日米の絆—ボナー・フェラーズと戦後の日本—」 “Lafcadio Hearn-His Spirit from the West to the East”	平成25年7月2日 平成25年7月3日
54	小泉 凡（総合文化学科教授）	朝日カルチャーセンター湘南	「異界に生きるものたちへのまなざし—ユーラシアの両極から考える—」	平成25年8月31日
55	小泉 凡（総合文化学科教授）	全国敬神婦人会	「小泉八雲と日本—出雲神話との出会いから現代の日本へ—」	平成25年9月2日
56	小泉 凡（総合文化学科教授）	シャムロック会	「文化資源としての小泉八雲と異界のフォークロア—アイルランドと日本をつなぐもの—」	平成25年10月18日
57	小泉 凡（総合文化学科教授）	公益財団法人ごうぎん島根文化振興財団	尚風館「小泉八雲の追い求めたもの」	平成25年11月9日
58	小泉 凡（総合文化学科教授）	熊本八雲会・熊本アイルランド協会	「ギリシャへの誘い—オープン・マインド・オブ・ラフカディオ・ハーン—」	平成25年11月10日
59	小泉 凡（総合文化学科教授）	尾道ライオンズクラブ	「文化資源として生かす小泉八雲」	平成25年11月19日
60	小泉 凡（総合文化学科教授）	島根県立石見高等看護学院	「五感を開いて生きる！」	平成25年12月5日
61	小泉 凡（総合文化学科教授）	島根大学	島大ミュージアム学「出雲の護符文化とピット・リヴァーズ博物館」	平成25年12月13日
62	小泉 凡（総合文化学科教授）	近江屋ツアーセンター、滋賀大学経済学部	彦根ゴーストツアー「天狗現るの章」 「天狗を考える」	平成25年12月15日
63	小泉 凡（総合文化学科教授）	松江市立中央図書館	定期講座「小泉八雲に学び親しむ」 「ラフカディオ・ハーンと出雲神話」	平成25年12月27日
64	小泉 凡（総合文化学科教授）	朝原振興会（出雲市佐田町）	「文化資源として生かす小泉八雲と怪談」	平成26年2月2日
65	渡部周子（総合文化学科講師）	男女共同参画推進会議とっとり	男女共同参画推進会議とっとり講演会「少女の誕生 ジェンダーの視点から」（よりん彩活動支援事業公開講座）	平成25年11月9日

平成25年度 地域連携（貢献）活動の取組状況

2 審議会委員等

NO.	教員氏名	委嘱(依頼)者	役職名	期間
1	名和田清子 (健康栄養学科)	島根県	松江圏域健康長寿しまね推進会議委員	平成16年4月～
2	名和田清子 (健康栄養学科)	島根県	島根県食育・食の安全推進協議会委員	平成19年4月～
3	名和田清子 (健康栄養学科)	島根県	島根県健康長寿しまね推進会議委員	平成17年4月～
4	名和田清子 (健康栄養学科)	島根県	島根県環境農業推進協議会副委員長	平成19年4月～
5	名和田清子 (健康栄養学科)	島根県	島根県糖尿病専門委員会委員	平成19年4月～
6	名和田清子 (健康栄養学科)	島根県教育委員会	学校給食表彰の推薦に係る審査会審査員	平成19年4月～
7	名和田清子 (健康栄養学科)	島根県	「わが家の一流シェフin島根」料理コンクール審査員	平成19年度～
8	名和田清子 (健康栄養学科)	島根県	島根県中山間地域等進行対策検討委員会委員	平成22年4月～
9	名和田清子 (健康栄養学科)	雲南市	雲南市学校給食調理業務等委託評価委員会委員長	平成24年4月～
10	名和田清子 (健康栄養学科)	公益社団法人島根県栄養士会	公益社団法人島根県栄養士会理事	平成24年5月～
11	名和田清子 (健康栄養学科)	公益社団法人島根県栄養士会	公益社団法人島根県栄養士会生涯学習委員長	平成24年5月～
12	名和田清子 (健康栄養学科)	公益社団法人島根県栄養士会	公益社団法人島根県栄養士会糖尿病対策委員会委員	平成24年5月～
13	名和田清子 (健康栄養学科)	公益社団法人島根県栄養士会	公益社団法人島根県栄養士会管理栄養士紹介委員会副委員長	平成24年5月～
14	名和田清子 (健康栄養学科)	公益社団法人島根県学校給食会	公益社団法人島根県学校給食会評議員	平成24年6月～
15	名和田清子 (健康栄養学科)	公益社団法人日本栄養士会	公益社団法人日本栄養士会 研究教育事業部企画運営委委員	平成24年8月～
16	名和田清子 (健康栄養学科)	まつえ市民大学運営協議会	まつえ市民大学運営協議会委員	平成25年4月～
17	名和田清子 (健康栄養学科)	島根県教育委員会	「栄養教諭を中核とした食育推進事業」食育推進検討委員会委員	平成25年度
18	名和田清子 (健康栄養学科)	雲南市	雲南市学校給食調理業務等委託候補者選定委員会委員長	平成25年7月～12月
19	名和田清子 (健康栄養学科)	奥出雲町	奥出雲町食育推進委員会委員長	平成25年8月～平成27年7月
20	名和田清子 (健康栄養学科)	島根県牛乳普及協会	平成25年度牛乳・乳製品料理コンクール島根県大会審査委員長	平成25年9月～10月
21	名和田清子 (健康栄養学科)	公益財団法人 大学基準協会	公益財団法人大学基準協会 短期大学評価委員会短期大学評価分科会第2群委員	平成25年4月～平成26年3月
22	籠橋有紀子 (健康栄養学科准教授)	中国地域産学官連携コンソーシアム	中国地域産学官連携コンソーシアム連絡会議委員	平成25年4月1日～平成26年3月31日

平成25年度 地域連携（貢献）活動の取組状況

23	山下由紀恵（保育学科教授）	島根県	島根県障がい者自立支援協議会委員	平成23年4月 ～平成26年3月
24	山下由紀恵（保育学科教授）	島根県	島根県障がい者施策審議会委員	平成23年4月 ～平成26年3月
25	山下由紀恵（保育学科教授）	松江市	松江市子育て支援ネットワーク会議委員	平成19年5月 ～平成26年3月
26	山下由紀恵（保育学科教授）	松江市	松江市心身障害児小規模療育事業検討委員	平成19年5月 ～平成26年3月
27	山下由紀恵（保育学科教授）	松江市	松江市教育委員会専門巡回相談事業相談員	平成23年8月 ～平成26年3月
28	山下由紀恵（保育学科教授）	松江市	松江市教育委員会の点検評価有識者委員	平成23年8月 ～平成26年3月
29	山下由紀恵（保育学科教授）	松江市	松江市保幼小連携推進委員会委員長	平成25年7月 ～平成26年3月
30	山下由紀恵（保育学科教授）	内閣府	内閣府男女共同参画推進連駅会議委員	平成25年9月 ～平成26年3月
31	山下由紀恵（保育学科教授）	島根県教育委員会	島根県しまねのふるまい推進連絡協議会会長	平成25年7月 ～平成26年3月
32	山下由紀恵（保育学科教授）	島根県	島根県子ども・子育て支援推進会議委員	平成25年10月 ～平成26年3月
33	岸本 強（保育学科教授）	島根県教育委員会	島根県スポーツ推進審議会委員 副会長	平成22年8月 ～平成26年8月
34	岸本 強（保育学科教授）	島根県教育委員会	文科省委託事業地域を活用した学校丸ごと子どもの体力向上 支援事業実施委員会委員	平成25年6月 ～平成26年5月
35	岸本 強（保育学科教授）	島根県健康福祉部	福祉・介護人材確保対策ネットワーク会議委員	平成25年6月 ～平成26年5月
36	岸本 強（保育学科教授）	島根県障害者スポーツ協会	障害者スポーツ支援助成金審査委員	平成23年7月 ～平成26年6月
37	岸本 強（保育学科教授）	雲南市教育委員会	幼児期運動指針実践調査研究委員会委員	平成24年4月 ～平成27年3月
38	岸本 強（保育学科教授）	雲南市教育委員会	雲南市立保育所保育業務委託事業者選考委員会委員長	平成25年8月12日 ～平成26年8月11日
39	岸本 強（保育学科教授）	島根県体育協会	しまね広域スポーツセンター企画運営委員会 副会長	平成17年10月 ～平成26年9月
40	岸本 強（保育学科教授）	島根県体育協会	医科学サポート委員会委員	平成18年5月 ～平成27年4月
41	岸本 強（保育学科教授）	島根県体育協会	普及委員会副会長	平成24年5月 ～平成26年4月
42	岸本 強（保育学科教授）	公益財団法人松江市 スポーツ振興財団	理事	平成25年5月 ～平成26年4月
43	岸本 強（保育学科教授）	公益財団法人ごうぎん 島根文化振興財団	評議員	平成23年5月 ～平成26年4月
44	岸本 強（保育学科教授）	島根県バレーボール 協会	統括アドバイザー	平成23年5月 ～平成25年4月
45	岸本 強（保育学科教授）	中国大学バレーボール 連盟	理事	平成13年5月 ～平成27年4月

平成25年度 地域連携（貢献）活動の取組状況

46	小山優子（保育学科准教授）	大田市	大田市子ども・子育て支援推進会議委員長	平成25年11月 ～平成26年3月
47	福井一尊（保育学科准教授）	島根県保育所 （園）・幼稚園造形 教育研究会	顧問	平成19年度 ～平成25年度現在
48	福井一尊（保育学科准教授）	しまね文化振興財団	島根県民会館名画劇場運営委員	平成21年度 ～平成25年度現在
49	福井一尊（保育学科准教授）	島根県社会福祉協議 会	障がい者アートを活用した商取引に係る著作権等保護に関する検討委員会 委員長	平成25年9月 ～現在
50	福井一尊（保育学科准教授）	益田市	益田市子ども子育て会議委員	平成26年1月 ～現在
51	岩田英作（総合文化学科）	島根県	島根県子ども読書推進会議委員長	平成24年6月2日 ～平成26年6月1日
52	岩田英作（総合文化学科）	島根県	文部科学省委託事業「平成25年度確かな学力の育成に係る実践的調査研究②学校図書館担当職員の効果的な活用方策と求められる資質・能力に関する調査研究」事業委員会委員	平成25年7月1日 ～平成26年3月31日
53	岩田英作（総合文化学科）	松江市	「小泉八雲を読む」感想文、作詞・詩の審査員	平成26年2月1日 ～3月31日
54	岩田英作（総合文化学科）	島根県	島根県民文化祭文芸部門審査員	平成25年10月1日 ～10月31日
55	岩田英作（総合文化学科）	島根県	平成25年度「しまね調べ学習プレゼンテーションコンテスト」審査員	平成25年11月15日
56	岩田英作（総合文化学科）	雲南市	男女共同参画絵本「はしのうんどうかい」「びかりん」アドバイザー	平成23年10月1日 ～平成26年3月31日
57	岩田英作（総合文化学科）	浜田市、島根県立大 学読み聞かせサーク ル「ゆるりの会」	白砂公民館絵本「西条柿右衛門」アドバイザー	平成25年10月1日 ～平成26年1月31日
58	小泉 凡（総合文化学科教授）	島根県教育委員会	島根県立美術館協議会委員	平成25年5月27日 ～平成26年5月26日
59	小泉 凡（総合文化学科教授）	島根日日新聞社	山陰文学賞選考委員	平成20年4月～
60	小泉 凡（総合文化学科教授）	松江市	小泉八雲記念館再整備基本構想・基本計画策定委員会 委員長	平成25年11月 ～平成26年3月
61	藤居由香（総合文化学科准教授）	島根県	しまね景観賞審査委員会委員	平成25年4月1日 ～平成26年3月31日
62	藤居由香（総合文化学科准教授）	松江市	松江市都市計画審議会委員	平成25年4月1日 ～平成26年3月31日
63	藤居由香（総合文化学科准教授）	松江市	松江市緑地及び自然環境保全審議会委員	平成26年3月14日 ～平成26年3月31日
64	藤居由香（総合文化学科准教授）	松江市	松江市歴史まちづくり協議会委員	平成25年4月1日 ～平成26年3月31日
65	藤居由香（総合文化学科准教授）	安来市	新安来庁舎建設基本設計プロポーザル審査委員会委員	平成26年2月6日 ～平成26年3月31日
66	藤居由香（総合文化学科准教授）	島根県建築住宅セン ター	一般財団法人島根県建築住宅センター評議員	平成25年4月1日 ～平成26年3月31日

3 その他地域連携（貢献）活動等

NO.	教員氏名	相手方	内容	日付(期間)
1	福井一尊（保育学科准教授）	島根県社会福祉協議 会	島根県立美術館において開催した島根県障がい者アート作品展オープニングセレモニー及び授賞式にて、障がい者アートの魅力と、作品審査会の講評について言及する。	平成25年12月5日

V. その他の地域活動

1. 地域貢献プロジェクト助成事業

本学では、中期目標に掲げる「地域活性化に対する支援」を推進するため、平成20年度から北東アジア地域学術交流研究助成金に「地域貢献プロジェクト助成事業」を創設している。

包括協力協定を締結した浜田市、松江市、出雲市及び益田市との共同事業のほか、本学教員が地域協力者（自治体、NPO、自治会、郷土研究者等）とともに行う、大学の地域貢献活動（調査・研究等）に対して助成するものである。年間6件程度のプロジェクトを採択し、各種事業の実施や成果の還元等を通じて、地域振興への取組を支援している。

平成25年度の地域貢献プロジェクト助成事業 交付決定状況

代表者氏名 所属キャンパス	プロジェクト 協力者氏名	研究課題名	交付決定金額
石橋 照子 (出雲)	高橋 恵美子 松谷 ひろみ	園芸アクティビティを通して 地域一障がい者一学びの場をつなぐプロジェクト	760千円
高橋 恵美子 (出雲)	小村 智子 石原 香織 山下 一也	発達障害をもつ子どものためのサマープログラムのシステムの構築	720千円
伊藤 智子 (出雲)	加藤 真紀 林 健司 山中 知子	地域を基盤とする老年看護教育プログラムからの教材作成	720千円
小泉 凡 (松江)	松浦 雄二 小玉 容子 竹森 徹士 ラング・クリス	「古事記」出雲神話の新しい翻訳(現代語訳・英語訳)をめざす開発的研究	570千円
赤浦 和之 (松江)	—	西条ガキ熟柿ピューレ商業化生産のための温度管理技術の開発	560千円
岩田 英作 (松江)	高橋 純	島根県の民話資料の保存と整理	650千円
名和田 清子 (松江)	小柏 道子 坂根 千津恵 水 球子 川谷 真由美 飛田 香 手島 由美子	大学、行政、地域の連携による、青年層への食育プログラムの開発	570千円
村井 洋 (浜田)	李 暁東 渡辺 望 飯田 泰三 井上 厚史 岡本 寛 石田 徹	分かち合う西周の意義	640千円

2. 島根県との連携

島根県立大学と島根県は、地域の振興に貢献するため、これまでも様々な連携事業を実施してきたが、情報の共有化・連携のより一層の推進のため、平成24年から連携企画会議及び連携調整会議の開催により、定期的に意見交換を行うこととした。

1. 第2回島根県・島根県立大学連携調整会議

(1) 日時 平成25年5月28日(火)14:00～15:30

(2) 場所 島根県職員会館多目的ホール

(3) 概要

- ① 平成24年度の連携状況の報告
- ② 平成25年度の連携計画の報告
- ③ 「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に対する県立大学の申請内容の説明
- ④ 県立大学の地域連携活動に関する意見交換

2. 第3回島根県・島根県立大学連携調整会議

(1) 日時 平成25年10月25日(金)10:00～11:30

(2) 場所 島根県職員会館多目的ホール

(3) 概要

- ① 連携現状の報告
- ② 「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に対する県立大学の計画内容の説明
- ③ 連携の可能性のある事項についての提案
 - ・ 県立大学からの提案・・・交通政策に関する調査研究、専門職「学び直し」研修、古事記1300年記念事業、特許の活用
 - ・ 県からの提案・・・・・・統計学習の基礎講座、看護職員実習指導者養成講習会、看護教員継続研修、島根の将来を支える商品づくりと有機農業推進のための技術開発
- ④ 美容院局・県立大学看護学部間の看護職員人事交流検討に関する意見交換

島根県と公立大学法人島根県立大学との連携に関する確認事項

島根県と公立大学法人島根県立大学（以下「県立大学」という。）は、双方が有する人的・物的資源を活用し、個性豊かな地域社会の形成及び地域課題の解決を図り、地域社会の振興と発展に寄与することを目的とし、次のとおり確認する。

（連携企画会議及び連携調整会議の設置）

第 1 島根県（県教育委員会及び警察本部を含む。）と県立大学との一層の連携を推進するために、連携企画会議及び連携調整会議（以下「連携会議等」という。）を設置する。

（連携・協力事項）

第 2 島根県と県立大学は、次に掲げる事項について、相互に連携・協力するものとする。

- 一 地域振興・産業振興に関すること
- 二 人材育成に関すること
- 三 保健・医療・福祉の向上に関すること
- 四 教育・文化の振興に関すること
- 五 その他連携推進の目的を達成するために必要な事項

（連携企画会議）

第 3 事業の進め方、意見交換など包括的な協議の場として、連携企画会議を設置する。

2 連携企画会議は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- 一 島根県
副知事、政策企画局長
- 二 県立大学
学長、副理事長、各キャンパスの副学長

3 連携企画会議は、必要に応じて開催する。

4 連携企画会議は、副知事が主宰する。

5 副知事は、委員以外の者を連携企画会議に出席させて意見を求めることができる。

（連携調整会議）

第 4 連携のための具体的な調整、進行管理の場として、連携調整会議を設置する。

2 連携調整会議は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- 一 島根県
統括政策企画監、総務部次長、総務部参事（地域防災）、地域振興部次長、
環境生活部次長、健康福祉部次長、農林水産部次長、商工労働部次長、土木部次長、
教育次長、警察本部警務部参事官、企業局次長、病院局県立病院課長、
出納局会計課長
- 二 県立大学
地域連携推進センター長、事務局長、事務局次長

3 連携調整会議は、原則として年 2 回開催するものとする。

4 連携調整会議は、統括政策企画監が主宰する。

5 統括政策企画監は、委員以外の者を連携調整会議に出席させて意見を求めることができる。

（事務局）

第 5 連携会議等の事務局は、島根県政策企画局政策企画監室に置く。

2 事務局長は、島根県政策企画局政策企画監をもって充てる。

（その他）

第 6 本確認事項に定めのない事項については、島根県と県立大学が協議の上、決定するものとする。

今後の連携会議等の運営について

- 柔軟かつ機動的な運用を確保するため、基本的には連携調整会議において、議論・意見交換などを行う。
- 連携調整会議の開催時期は、概ね5月と9月とする。
- 連携調整会議の内容については次のとおり
 - 5月：前年度実績及び当該年度計画の確認など
 - 9月：当該年度計画の進行状況の確認と翌年度以降の連携事業の検討など

おわりに

本学は、地域に開かれた大学として地域連携活動には積極的に取り組んできたが、平成 20 年度からは、浜田・出雲・松江キャンパスの活動を『地域連携活動報告書』にとりまとめた。このたび、文部科学省の平成 25 年度地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）の採択を受け、『地域連携活動報告書』はその事業報告書に統合するかたちで再出発することとなった。

島根県内には、場所は違えども共通した地域課題があり、そのような課題には、それぞれ個別に対応していくよりも、同じ課題をかかえた地域が知恵を合わせて取り組んだほうが効率的であろう。例えば、観光振興による交流人口の拡大など、基礎自治体の枠を超えて、広域的に対応していくべき課題もあろう。また、少なからぬ課題が異なる専門分野からの複合的な接近が有効であったり、それが求められていたりするであろう。こうした課題の解決のために本学ができることがあったら、それは、島根県の自治体や企業、団体等（仮に、これらを地域主体と呼ぶことにする。そこには大学も含まれると考えることもできる）が集う場を提供し、課題を共有し、ともに課題解決のための取組を展開して、そしてその成果を共有していく、そのために本学の 3 つのキャンパスは連携・協力していく、そのようなことではないか。本学の大学 COC 事業「地域と大学の共育・共創・共生に向けた縁結びプラットフォーム」はそのような発想から出発している。

平成 25 年度の本学の大学 COC 事業は、その形式的な仕組みづくりを行ったことになる。それを機能させていくことは次年度以降の大きな仕事になっていこう。そのためには、本学としては、これまで以上に 3 つのキャンパスが連携・協力してこの事業にあたっていくことが必要になる。そして、地域に有為な人材を育てていくための教育改革を進めていくこと、少しでも地域の課題解決に資する研究を推進していくこと、取組の成果を地域に還元していくこと、こうした地道な努力を積み重ねていくことで、地域主体との連携関係も深まり、縁結びプラットフォームが当初構想したように機能していくのであろう。

上に「形式的な仕組みづくり」と記したが、平成 25 年度には、活動期間は短かったものの、「しまね地域共育・共創研究助成金」による 10 件の研究活動が行われた。また、5 月 27 日には益田市との包括連携協定が締結され、研究費の提供を受けて 4 件の共同研究が行われた。従来より実施されてきた浜田市との共同研究は 2 件、北東アジア地域学術交流研究助成金「地域貢献プロジェクト事業」による研究活動は 8 件が行われるなど、研究に限っても、多くの実質的な活動が行われた。教育における地域との連携や公開講座の開催、学生の地域ボランティア活動支援なども、従来どおり、あるいは、それ以上の地域連携活動が行われた。

次年度以降も、地域の知の拠点として、縁結びプラットフォームという構想の理念を見失うことなく、地道な取組を積み重ねていきたいものである。

地域連携推進センター

センター長 林 秀司

【参 考】

島根県立大学は、21世紀をになうべき創造性豊かで実践力ある人材を育成し、教育研究を通して地域の発展に資するため、2007年4月、既存の島根県立大学（浜田）、島根県立島根女子短期大学（松江）、島根県立看護短期大学（出雲）の3つの大学を統合して開学した。

ここに島根県立大学は、従来3キャンパスがそれぞれ歴史的に蓄積してきた成果を継承し、21世紀における新たな飛翔をめざす大学の姿勢を内外に示すため、島根県立大学憲章を定めることとした。

島根県立大学憲章

島根県立大学は、地域の先人である西周が標榜した“「純理の学」から「実践の学」にわたる諸科学の統合”をめざし、各専門領域における研究活動を深め、それにもとづく創造的な教育活動によって、現代社会の諸課題に国際的な視野からアプローチし、また、地域社会の活性化と発展に寄与する人材を養成することを使命とする。あわせて、これまで培った学問的蓄積と学際的ネットワークを活かしながら、「地域のニーズに応え、地域と協働し、地域に信頼される大学」を実現するとともに、北東アジアをはじめとする国際社会の発展に寄与する大学づくりを目標とする。

1. 市民的教養を高め、主体的に学び、実践する人材を養成する

島根県立大学は、幅広い市民的教養と高度の専門知識、豊かな人間性と高い倫理観を有し、主体的に問題を発見・整理・解決し、現代社会の諸分野において着実に貢献できる人材を養成する教育の府となることをめざす。

2. 現代社会の諸課題に対応した“諸科学の統合”を実践する

島根県立大学は、複雑化する現代社会の諸課題に対処するため、人間と社会に関する専門諸科学を総合的に研究する学問の府となることをめざす。

3. 地域の課題を多角的に研究し、市民や学生の地域活動を積極的に支援して、地域に貢献する

島根県立大学は、地域に開かれた大学として、その保有する豊かな知的資源を活かし、個性的で実践的な地域研究を市民や学生と連携しながら推進し、また、地域活動に積極的に参加することによって、地域に貢献する大学となることをめざす。

4. 北東アジア地域をはじめとする国際的な研究教育の拠点を構築する

島根県立大学は、今後ますます重要度を増す北東アジア地域、および世界の諸地域との教育的・学術的ネットワークの展開を通じ、国際的視野と豊かな研究蓄積を集約した北東アジアの知の拠点となることをめざす。

5. 自律と協同、透明性が高く機能性に優れた大学運営を行う

島根県立大学は、3キャンパスがそれぞれ学生と教職員一体となって独自性を発揮し、かつ、有機的結合を図り、たえず自己検証と改善に努めながら、情報を積極的に公開し、社会や時代の変化に即応できる大学運営を行う。

公立大学法人島根県立大学と浜田市との連携協力に関する協定書

(目的)

第1条 この協定は、公立大学法人島根県立大学と浜田市とが包括的な連携のもと、人材育成、共同研究、知識基盤社会の形成などの諸分野において相互の協力関係を一層深化させ、もって地域社会の発展に寄与することを目的とする。

(協力事項)

第2条 両者は、次の事項について協力する。

- (1) まちづくりのための連携
- (2) 国際交流推進のための連携
- (3) 人材育成のための連携
- (4) 産業振興のための連携
- (5) 保健・医療・福祉の向上のための連携
- (6) 教育・文化の振興のための連携
- (7) 学術研究のための連携
- (8) その他両者が協議して必要と認める連携

(協議)

第3条 この協定書の実施に関し、連携協力の細目等の具体的な事項については、両者が協議して別に定めるものとする。又、この協定に定めのない事項については、両者が協議して定めるものとする。

(有効期間)

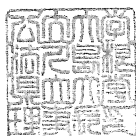
第4条 この協定の有効期間は、協定締結の日から平成20年3月31日までとする。ただし、この協定の有効期間満了日の1月前までに、両者いずれからも改廃の申し入れがないときは、さらに1年間更新するものとし、その後も同様とする。

この協定締結の証として本書2通を作成し、各自1通を保有する。

平成19年5月18日

公立大学法人島根県立大学
理事長

宇野重昭



浜田市
浜田市長

宇津徹男



松江市と公立大学法人島根県立大学との連携協力に関する協定書

(目的)

第1条 この協定は、松江市と公立大学法人島根県立大学とが包括的な連携のもと、人材育成、共同研究、知識基盤社会の形成などの分野において相互の協力関係を一層深化させ、もって地域社会の発展に寄与することを目的とする。

(協力事項)

第2条 両者は、次の事項について協力する。

- (1) まちづくりのための連携
- (2) 国際交流推進のための連携
- (3) 人材育成のための連携
- (4) 産業振興のための連携
- (5) 保健・医療・福祉の向上のための連携
- (6) 教育・文化の振興のための連携
- (7) 学術研究のための連携
- (8) その他両者が協議して必要と認める連携

(協議)

第3条 この協定書の実施に関し、連携協力の細目等の具体的な事項については、両者が協議して定めるものとする。また、この協定に定めのない事項については、両者が協議して定めるものとする。

(有効期間)

第4条 この協定の有効期間は、協定締結の日から平成21年3月31日までとする。ただし、この協定の有効期間満了の日の1月前までに、両者いずれからも改廃の申し入れがないときは、さらに1年間更新するものとし、その後も同様とする。

この協定の証として本書2通を作成し、各自1通保有する。

平成19年10月30日

松江市

松江市長

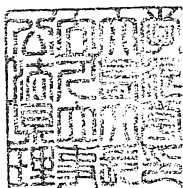
松浦正敬



公立大学法人島根県立大学

理事長

宇野重昭



出雲市と公立大学法人島根県立大学との連携協力に関する協定書

(目的)

第1条 この協定は、出雲市と公立大学法人島根県立大学とが包括的な連携のもと、人材育成、共同研究、知識基盤社会の形成などの諸分野において相互の協力関係を一層深化させ、もって地域社会の発展に寄与することを目的とする。

(協力事項)

第2条 両者は、次の事項について協力する

- (1) まちづくりのための連携
- (2) 国際交流推進のための連携
- (3) 人材育成のための連携
- (4) 産業振興のための連携
- (5) 保健・医療・福祉の向上のための連携
- (6) 教育・文化の振興のための連携
- (7) 学術研究のための連携
- (8) その他両者が協議して必要と認める連携

(協議)

第3条 この協定書の実施に関し、連携協力の細目等の具体的な事項については、両者が協議して定めるものとする。

(有効期間)

第4条 この協定の有効期間は、協定締結の日から平成22年3月31日までとする。ただし、この協定の有効期間満了の日の1月前までに、両者いずれからも改廃の申し入れがないときは、さらに1年間更新するものとし、その後も同様とする。

この協定の証として本書2通を作成し、各自1通保有する。

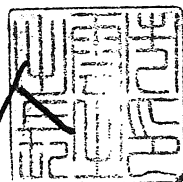
平成21年10月8日

出雲市

公立大学法人島根県立大学

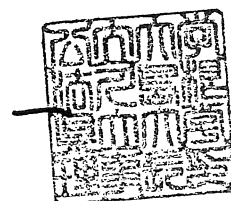
出雲市長

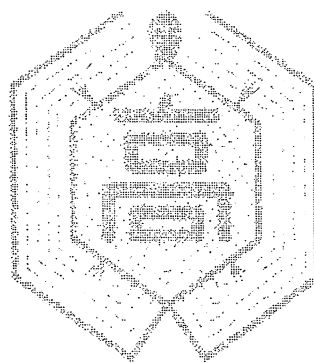
長岡秀人



理事長

本田 雄





島根県立大学と島根県立浜田高等学校との高大連携に関する協定

島根県立大学と島根県立浜田高等学校とは、次のとおり合意する。

- 1 島根県立大学と島根県立浜田高等学校とは、相互の教員・職員・学生・生徒が連携して「魅力ある大学・高等学校づくり」を推進することを目的とする高大連携事業を実施する。
- 2 この協定に基づく具体的な連携事業は、島根県立大学と島根県立浜田高等学校の協議を経て決定する。
- 3 本協定は、島根県立大学学長及び島根県立浜田高等学校校長による調印の後その効力を生じ、3年間の有効期間を持つものとする。本協定は、有効期間が終了する6ヶ月前までに、島根県立大学、島根県立浜田高等学校のいずれか一方が、相手方に終了または改正を希望する旨を書面により意思表示しない限り、更に3年間有効期間が更新されるものとする。

平成16年11月18日

島根県立大学

学 長

宇野重昭

宇 野 重 昭

島根県立浜田高等学校

校 長

三浦正樹

三 浦 正 樹

島根県立大学と島根県立江津高等学校との高大連携に関する協定

島根県立大学と島根県立江津高等学校とは、次のとおり合意する。

- 1 島根県立大学と島根県立江津高等学校とは、相互教員・職員・学生・生徒が連携して「魅力ある大学・高等学校づくり」を推進することを目的とする高大連携事業を実施する。
- 2 この協定に基づく具体的な連携事業は、島根県立大学と島根県立江津高等学校の協議を経て決定する。
- 3 本協定は、島根県立大学学長及び島根県立江津高等学校校長による調印の後その効力を生じ、3年間の有効期限を持つものとする。本協定は有効期間が終了する6ヶ月前までに、島根県立大学、島根県立江津高等学校のいずれか一方が、相手方に終了または改正を希望する旨を書面により意思表示しない限り、更に3年間有効期間が更新されるものとする。

平成19年6月1日

島根県立大学

学長 宇野重昭



島根県立江津高等学校

校長 尾村幸行



島根女子短期大学・松江商業高等学校・湖南中学校の 三者連携に関する協定書

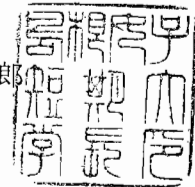
島根県立島根女子短期大学、島根県立松江商業高等学校及び松江市立湖南中学校の三者は、次のとおり合意する。

- 第1 島根県立島根女子短期大学、島根県立松江商業高等学校及び松江市立湖南中学校は、相互の教員・職員・学生・生徒が連携し、「より魅力あるキャンパスづくり」を推進することを目的とする三者連携事業を実施する。
- 第2 この協定に基づく具体的な連携事業は、三者で協議して決定する。
- 第3 この協定は、島根県立島根女子短期大学長、島根県立松江商業高等学校長及び松江市立湖南中学校長の調印の後その効力を生じ、その有効期間は3年間とする。
- 2 この協定は、有効期間が満了する日の6か月前までに、三者のいずれもが更新しない旨を他の二者に書面により通知しない場合は、さらに3年間有効期間が更新されるものとし、以後も同様とする。

平成18年11月 1日

島根県立島根女子短期大学

学 長 有 馬 毅 一 郎



島根県立松江商業高等学校

校 長 月 森



松江市立湖南中学校

校 長 曾 田 秀 雄



島根女子短期大学・乃木小学校・幼保園のぎの 三者連携に関する協定書

島根県立島根女子短期大学、松江市立乃木小学校及び松江市立幼保園のぎの三者は、次のとおり合意する。

第1 島根県立島根女子短期大学、松江市立乃木小学校及び松江市立幼保園のぎは、相互の教員・職員・学生・児童・園児が連携し、地域の教育力を高め、より良い教育環境づくりを推進することを目的として、三者連携事業を実施する。

第2 この協定に基づく具体的な連携事業は、三者で協議して決定する。

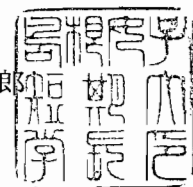
第3 この協定は、島根県立島根女子短期大学長、松江市立乃木小学校長及び松江市立幼保園のぎ園長の調印の後その効力を生じ、その有効期間は3年間とする。

2 この協定は、有効期間が満了する日の6か月前までに、三者のいずれもが更新しない旨を他の二者に書面により通知しない場合は、さらに3年間有効期間が更新されるものとし、以後も同様とする。

平成19年 3月 7日

島根県立島根女子短期大学

学 長 有 馬 毅 一 郎



松江市立乃木小学校

校 長 山 崎



松江市立幼保園のぎ

園 長 狩 野 由 美 子



島根県立大学短期大学部（出雲キャンパス）出前講座の

収録・放送に関する覚書

公立大学法人島根県立大学（以下「甲」という。）と石見銀山テレビ放送株式会社（以下「乙」という。）とは、乙が島根県立大学短期大学部（出雲キャンパス）の出前講座の収録、放送を実施するにあたり、次のとおり覚書を締結するものとする。

（事業内容の分担）

第1条 事業内容の分担は以下のとおりとする。

- （1）甲に所属する職員は、出前講座の台本及び資料を作成する。
- （2）乙は甲に所属する職員が作成した台本をもとに番組を収録し放送する。
- （3）乙は番組収録に係る著作権使用許可等の必要な諸手続をすべて行う。
- （4）乙は作成した番組をDVDに出力し、甲へ受け渡す。

（本覚書における出前講座の定義）

第2条 本覚書における出前講座とは、甲乙協議の上で定めた主題について、甲に所属する職員が企画構成する講座とする。

（事業に関する経費）

第3条 事業に関する経費については以下のとおりとする。

- （1）出前講座経費 出前講座に関する経費はすべて甲が負担する。
- （2）収録放送経費 収録・放送に関する経費はすべて乙が負担する。

（著作権の取扱い）

第4条 作成した番組に関する著作権は甲乙が共有する。

- 2 作成した番組を甲乙が非営利目的で使用する場合は相互の許可は不要とする。

（協議）

第5条 この覚書に定めのない事項については、甲乙協議の上これを定めるものとする。

(有効期間)

第6条 この覚書の有効期間は、覚書締結の日から平成22年3月31日までとする。ただし、この覚書の有効期間満了の日の1月前までに、両者いずれからも改廃の申し入れがないときは、さらに1年間更新するものとし、その後も同様とする。

この覚書の締結を証するため、本覚書を2通作成し、それぞれ記名押印の上、各自1通を保有するものとする。

平成22年2月4日

甲 島根県浜田市野原町2433番地2
公立大学法人島根県立大学

理事長

本田 雄



乙 島根県大田市大田町大田口1089-4
石見銀山テレビ放送株式会社

代表取締役

杉谷 雅禎



看護連携型ユニフィケーション事業 基本協定書

島根県病院局（以下「甲」という。）と公立大学法人島根県立大学（以下「乙」という。）とは、看護連携型ユニフィケーション事業（以下「ユニフィケーション事業」という。）の実施に関し、次のとおり基本協定を締結する。

（趣旨）

第1条 この基本協定書は、甲及び乙が協働で実施するユニフィケーション事業に関して、必要な事項を定めるものとする。

（目的）

第2条 ユニフィケーション事業は、甲が設置運営する臨床の場である「島根県立中央病院」「島根県立こころの医療センター」と、乙が設置運営する教育の場である「島根県立大学短期大学部出雲キャンパス」が協働して実施することにより、看護ケアの質の向上及び看護教育の向上並びに両施設の機能を向上させることを目的とする。

（事業の範囲）

第3条 ユニフィケーション事業の範囲は以下のとおりとする。

- 1) 看護の学習会に関する事
- 2) 患者や家族のケアに関する事
- 3) 看護教育に関する事
- 4) 看護研究に関する事

（実施場所）

第4条 ユニフィケーション事業の実施場所は、甲が設置運営する「島根県立中央病院」「島根県立こころの医療センター」及び乙が設置運営する「島根県立大学短期大学部出雲キャンパス」とする。

（協議会の設置）

第5条 ユニフィケーション事業を運営する機関として、甲及び乙の職員を構成員とする「看護連携型ユニフィケーション事業協議会」（以下「協議会」という。）を設置する。

（実施要領）

第6条 ユニフィケーション事業の実施および協議会の構成、運営に係る細目等は、「実施要領」として別に定めるものとする。

(実施計画の策定)

第7条 ユニフィケーション事業の実施に当たっては、協議会においてユニフィケーション事業に係る事項を明記した「看護連携型ユニフィケーション事業実施計画」を策定し、事業実施2か月前に甲及び乙に提出し、承認を得るものとする。

(活動企画書の作成)

第8条 主担当者は、前条の実施計画に基づき、活動内容、実施場所、従事者、日時等を記載する「看護連携型ユニフィケーション活動企画書」を協議会に提出し、承認を得るものとする。

(個人情報の保護)

第9条 ユニフィケーション事業の実施に当たっての個人情報の取り扱いについては、別記「個人情報取扱特記事項」を遵守するものとする。

(基本協定の変更)

第10条 この基本協定書及び第6条の実施要領に関して、疑義又は定めのない事項が生じた場合は、甲乙協議して定めるものとする。

(有効期限)

第11条 この協定は、締結の日からその効力を発揮するものとし、甲又は乙が文書を持って協定の終了を通知しない限りその効力を持続するものとする。

本協定の証として本書2通を作成し、甲乙記名押印のうえ、各自その1通を保有する。

平成23年1月6日

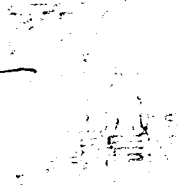
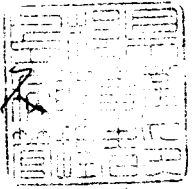
甲 島根県出雲市姫原4-1-1

島根県病院事業管理者

乙 島根県浜田市野原町2433番地2

公立大学法人島根県立大学理事長

中川正
本田雄一



公立大学法人島根県立大学と益田市との連携協力に関する協定書

(目的)

第1条 この協定は、公立大学法人島根県立大学と益田市とが包括的な連携のもと、人材育成、共同研究、知識基盤社会の形成などの諸分野において相互の協力関係を一層深化させ、もって地域社会の発展に寄与することを目的とする。

(協力事項)

第2条 両者は、次の事項について協力する。

- (1) まちづくりのための連携
- (2) 国際交流推進のための連携
- (3) 人材育成のための連携
- (4) 産業振興のための連携
- (5) 保健・医療・福祉の向上のための連携
- (6) 教育・文化の振興のための連携
- (7) 学術研究のための連携
- (8) その他両者が協議して必要と認める連携

(協議)

第3条 この協定書の実施に関し、連携協力の細目等の具体的な事項については、両者が協議して別に定めるものとする。又、この協定に定めのない事項については、両者が協議して定めるものとする。

(有効期間)

第4条 この協定の有効期間は、協定締結の日から平成26年3月31日までとする。ただし、この協定の有効期間満了日の1月前までに、両者いずれからも改廃の申し入れがないときは、さらに1年間更新するものとし、その後も同様とする。

この協定締結の証として本書2通を作成し、各自1通を保有する。

平成25年5月27日

公立大学法人島根県立大学
理事長

本田 雄一



益田市
益田市長

山本 浩



公立大学法人島根県立大学と学校法人大多和学園との連携協力に関する協定書

(目的)

第1条 この協定は、公立大学法人島根県立大学と学校法人大多和学園（以下「学園」という。）が連携し、生徒・学生の科学的思考と発表力の段階的育成を行い、もって創造性豊かな国際的に通用する人材の育成を図ることを目的とする。

(協力事項)

第2条 両者は、次の事項について協力する。

- (1) 学園の実施するスーパーサイエンスハイスクール事業（以下「SSH事業」という。）における連携
- (2) 教育についての情報交換及び交流
- (3) その他両者が協議して必要と認める連携

(協議)

第3条 この協定書の実施に関し、連携協力の細目等の具体的な実施については、両者が協議して定めるものとする。

(有効期間)

第4条 この協定の有効期間は、平成26年4月1日からSSH事業が終了する平成30年3月31日までとする。ただし、SSH事業の指定期間が延長された場合、その終了日までとする。

この協定の証として本書2通を作成し、各自1通保有する。

平成26年3月27日

公立大学法人島根県立大学

学校法人大多和学園

理事長

本田 雄一



理事長

大多和 聡宏



お問い合わせ先

浜田キャンパス

〒697-0016 島根県浜田市野原町2433-2
TEL : 0855-24-2396 FAX : 0855-24-2208
E-mail : tiiki@admin.u-shimane.ac.jp

出雲キャンパス

〒693-8550 島根県出雲市西林木町151
TEL : 0853-20-0220 FAX : 0853-20-0227
E-mail : kango@izm.u-shimane.ac.jp

松江キャンパス

〒690-0044 島根県松江市浜乃木7-24-2
TEL : 0852-28-8322 FAX : 0852-28-8366
E-mail : kyousei@matsue.u-shimane.ac.jp

平成25年度 地(知)の拠点整備事業
成果報告書
(地域連携活動報告書)

編集・発行

島根県立大学地域連携推進センター
〒697-0016 島根県浜田市野原町2433-2
TEL : 0855-24-2396 FAX : 0855-24-2208
E-mail : tiiki@admin.u-shimane.ac.jp



マスコットキャラクター
「オロリン」